

大学教育研究開発センター年報

第 7 号



平成15年 3 月

茨 城 大 学
大学教育研究開発センター

表紙中央の図案は、茨城大学の校章であるノイバラ (*Rose multiflora*) の若芽をイメージして、教育学部の島田裕之先生にデザインしていただいた大学教育研究開発センターのロゴマークです。センターの刊行物(ニュースレター等)で使用しています。

目 次

巻 頭 言	曾我 日出夫（大学教育研究開発センター長）	1
茨城大学教養教育シンポジウム報告		3
教養教育に関する論文・研究ノート		
○Classroom Management Techniques	ベッツ ロバート ジョセフ（人文学部）	23
○A Subjective Needs Analysis Pilot Study	熊澤 孝昭（人文学部）	29
○一般教養としてのコンピュータリテラシーと情報リテラシーの調和	速水 智子（工 学 部）	41
教養教育に関する授業の実践報告		
○教養教育に対する私見 ―講義「変体仮名を読む」を通じて―	櫻井 豪人（人文学部）	51
○私的授業論	橋浦 洋志（教育学部）	57
○大学1年生のための数学の教え方	岡 裕和（工 学 部）	65
○推奨授業実践：数学	榊原 暢久（工 学 部）	69
○推奨授業実践の実践報告		
―健康・スポーツ科目・バスケットの場合―	木村 元子（教育学部）	73
○平成13年度推奨授業 身体活動「バドミントン」	勝本 真（教育学部）	77
○「自己」に対する多面的アプローチ		
―主題別ゼミナールの実践から―	伊藤 哲司（人文学部）	81
教養教育に関する茨城大学の取組みの現状と将来		
○教養教育の改善に向けての努力	横山 功一（副センター長）	91
○教養英語教育の改革：習熟度別カリキュラムの導入	永井 典子（副センター長）	98
○情報教育における習熟度別授業の導入について	鶴田 浩一（工 学 部）	104
○大学評価・学位授与機構「教養教育」点検評価について	田切美智雄（副 学 長）・横山 功一	110
○「教養ある人間」と「よき職業人」の育成		
―今後の教養教育のあり方について―	池谷 文夫（副 学 長）	127
ニュースレター「ローザ・ブルムラ」の軌跡：No.8～No.12		135
平成14年度大学教育研究開発センター活動内容		
大学教育研究開発センター活動の経過		187
大学教育研究開発センター関係委員名簿		190

巻 頭 言

教養教育をどのように設定するか。実は、この議論はまだ決着していないように思われる。そもそも教養があるとはどういうことを意味するのであろうか。専攻分野に限定されない幅広い知識があり、幅広い見方と考え方ができるということであらうか。一時期教養教育は建前的に置かれ、専門教育が優先される傾向が強かったが、最近教養教育なくしては大学教育はありえないとの考えが強くなってきている。全国の多くの大学で、学長自らが教養教育の整備に乗り出しているというのもその現れといえるだろう。

しかし、「教養教育とは何か」という議論は確かに必要であらうが、今最も必要とされることはもう少し具体的な議論ではなからうか。すなわち、科目群ごとにどういうことを目標とし、具体的にどんな科目を置くかというもっと具体的な検討が積極的に行われる必要があるように思われる。理念的な議論は、むしろ、このような検討の中で収束していくものではないかと考えている。さらに、もうひとつ、われわれが積極的に取り組まなければならないものとして、実際に実施された授業が当初の目的をどの程度果たしているかという検証の作業がある。いわゆる点検評価の作業である。これには、もともとのカリキュラム設計がよかったのかどうかということから、個々の授業がよかったのかどうかまでを含んでいる。従来、理念的な議論の収束が困難なこともあったか、あまりにもこのような具体的作業が軽んぜられてきたように思われる。

点検評価周辺の作業をどこまで厳格にやるかは考えねばならないところではあるが、少なくとも、科目区分ごとにある程度のガイドラインがあり、それに沿った授業科目編成と点検評価が行われ、評価結果に基づく改善が行われるというサイクルを早く確立する必要があるだろう。理念的議論が定まってからこのサイクルをつくるというのでは遅いのであって、ともかく授業改善までのサイクルが実行される運営システムを早くつくることである。昨年度の教養教育等小委員会答申（「大学教育研究開発センターに関する改革」平成14年12月24日）はそのような趣旨であったと理解している。当センター長になっての2年目は、このシステムづくりに多少なりとも寄与したいと考えている。

大学教育研究開発センター年報が、上記で言うカリキュラム設計から点検評価及び授業改善までのさまざまな議論を紹介する場となればと願っている。このような願いもあって、今年号は教養教育シンポジウムの内容紹介や推奨授業に関する実践報告などを掲載している。この年報を、教養教育の充実に活用していただくことを切にお願いしたい。

平成15年 3 月

大学教育研究開発センター長

曾 我 日出夫

茨城大学教養教育シンポジウム報告

平成14年度 茨城大学教養教育シンポジウム

- 目的 平成16年度からの大学法人化が具体化されてきており、また、本学では全学的学部改革を目指して総合計画委員会等で検討されるなど教養教育を巡る状況が激変する様相を呈している。そのような状況下で本学における教養教育の現状を見ると、質の高い教育を求めて習熟度別授業、接続教育の導入が検討されるなど教養教育をしっかりしたものにする必要性が強く求められている。

このような動きについて全学的に理解を深め、新しい教養教育の仕組みを構築していく第一ステップとなることを目的とする。

- 開催日時 平成15年1月29日（水）13時～17時

- 実施内容 （司会進行）大学教育研究開発センター副センター長 横山 功一
主催者挨拶 大学教育研究開発センター長 曾我 日出夫
学長挨拶 茨城大学長 宮田 武雄
講演テーマ・講師

【教養教育の改革】

「総合計画委員会教養教育等分科会答申に見る教養教育改革の方向」 曾我 日出夫
「習熟度別授業による英語教養教育の充実」

大学教育研究開発センター副センター長 永井 典子

【次世代の教養教育に向けて】

「点検評価『教養教育』による課題と改善の方向」 副学長 田切 美智雄
「企業から見た、これからの教養教育に望まれること」

(株)日立製作所情報制御システム事業部大甕事業所長 森田 憲一

総括 副学長 池谷 文夫

横山 功一（司会進行、大学教育研究開発センター副センター長）

教養教育シンポジウムは平成8年度から開催しています。今年度は教養改革をテーマとして、教育の質を高め、教育システムの改善することを目指して開催します。

主催者挨拶

曾我日出夫（大学教育研究開発センター長）

今回のシンポジウムのねらいは、一貫カリキュラムの中で教養教育を、どのように位置づけるかを具体的に論議することです。有意義なシンポジウムとなることを期待します。

学長挨拶（要旨）

茨城大学長 宮田 武雄

本日は単なる挨拶ではなく、少し踏み込んで茨城大学の将来について三つの視点からお話します。

1. 長期的な視点から見た将来像

茨城大学は「専門家として自立できる人材を育成する高等教育機関であると共に、学術研究を推進しつつ社会貢献活動を展開する学術文化の拠点であり、地域性と総合性を特色とする大学」を目指すべきであろうと考えております。

また、目指す大学像を実現するため、次のような基本的方策が考えられます。

教育面では、学士課程及び修士課程の教育で、それぞれ職業人として自立できる専門家を育成することを本学第一の任務とし、その任務を全うするため、教養教育と専門教育の双方において、絶えず教育の質的向上に努めること。

研究面では、大学としての学術水準を維持するため研究を継続すると共に、世界最高水準の研究を重点的に推進し、特色ある研究拠点を形成することと併せて、近隣の大学や研究機関との連携を進め、博士課程を充実整備すること。

そして、社会貢献の面では、地域貢献を重点施策として継続的に推進すると共に、国際交流、生涯教育、産学連携を含め教育研究による社会貢献事業を展開すること、…などです。

将来像を具現化するため、このような方策を基本として、多面的に諸施策を熟成させ、根気よく実施する必要があります。

2. 教育の魅力増進と学生サービスの向上

減少傾向を基調とする18才人口はここ数年足踏み状態にありましたが、今年から再び減少期に入り、数年後には大学過剰時代が到来します。その結果学生の確保について大学間競争が激化するのは必至です。学生の居ない大学はありません。学生の確保は大学が存続するための絶対条件であると言えます。

従って、教育の魅力増進と学生サービスの向上は本学が発展を継続するための基盤的重要施策です。

日頃から授業や学生サービスの改善にお取り組みいただいていることに加えて、ファカルティ・デベロップメントが各部局でも全学的にも実施されており、推奨授業表彰制度、GPAの導入とそれに伴う成績評価基準の明示、オフィスアワーの設定なども実施され、茨大なんでも相談室や学生就職支援センターが設置されるなど、学生の視点に立った施策への取り組みが着実に推進されております。

今後さらに、授業科目の精選による授業内容の充実など、教育の量から質への転換に着手する時期に来ているように思います。

また、志願者側及び社会側、いわゆる大学の入口側と出口側の双方から見て、より魅力的な大学となるために、教育組織の改編を含む総体的な施策の実施に、全学の知恵と力を結集して取り組まなければなりません。

3. 法人化への対応

平成16年4月に国立大学の法人化が予定されており、国立大学協会や各大学がその準備を進めております。本学においても、関係委員会や各部局のご協力とご尽力をいただき、万般の準備を進めております。

法人化により様々な制度が変化しますが、内容的には「連続性のある変化」を基本にしたいと考えております。教育や研究の特性の一つに、連続性があります。大学は時代とともに変化しなければなりません。変化の様態を時間の関数として描いたとき、果敢に変化する連続関数となるのが良いと考えます。

18才人口は、国立大学法人の第一期6年間にわたり減少を続けますが、その後10年間は微減微増のさざ波状態になります。従って、大学間競争により第一期末に高等教育の新たな需給バランスが形成され、その後10年間は比較的安定すると思われます。この第一期の競争に勝ち残らなければなりません。

大学教育は、時代を超えて社会の重要な機能であり、資源小国日本の生命線であると言っても過言ではないでしょう。基本的に大学は社会ニーズの高い事業でありますし、幸いに本学は、質的にも量的にも国立大学

として独立存続するのに必要な実力を内在しております。自信を持って変革に取り組み、新しい時代の新しい大学として継続的な発展を期したいと思います。

最後にこのシンポジウムが、本学の教養教育の質的向上のために実り多きものとなることを祈りつつ、ごあいさついたします。

【教養教育の改革】

「総合計画委員会教養教育分科会答申にみる教養教育改革の方向」

曾我日出夫

表題にある「教養教育等分科会答申」は、2002年3月に出たものであり、教養教育について後に述べる5項目の提言をしている。その後いくつか出ている教養教育の改革案は、基本的にはこの提言を出発点としている。ここではこの答申の背後にある思いについてまとめてみたい。この分科会の一委員であった私の思いを述べるという方が適当かもしれない。

1. 教養教育とは？

「教養教育とは何か」と問えば、いろいろな考えがあって議論が尽きないところであろう。そのさまざまな考えの中で共通的なイメージは何であろうか。これもいろいろであるかも知れないが、「基礎的なもの」「幅広いもの」「永く役立つもの」というようなところではないだろうか。このような理念の議論から出発して、「教養教育の中味は何であるべきか」を考えてみることは、一度はやってみるべきかもしれない。しかし、今考えたいことは、もう少し具体的にこの茨城大学ではどういうことを教養教育（科目）の中で行うかということである。

実は、このことについては、毎年3月に出る「教養教育の基本方針」の中になかなか具体的に述べられている。すなわち、「豊かな人間性を涵養し、人間や自然との共生および学問と社会との開かれた関係を築きうる能力を育成することにある」と書かれている。さらに、具体的に次の5項目が掲げられている。

- 1) 専攻する学問と異なる専門分野の学問に触れることにより、多種多様な文化と価値観を理解し、幅広い視野を身につける。
- 2) 学際・複合的学問分野に触れることにより、総合的・全体的に物事を捉える態度を養う。
- 3) 物事を主体的に判断し、実証的な態度や批判的能力を身につける。
- 4) 専攻する学問の基礎を修得することによりその学問を基本を理解する能力を培う。
- 5) 国際化・情報化の社会に主体的に対応できる能力

を培う。

茨城大学ではこの5項目の実現のためにさまざまな教養科目が用意されていることになっている。

2. なぜ改革か？

ではなぜ今改革なのか。それは上記の5項目にさかのぼって考え直そうというのではない。大学を取り巻くさまざまな状況の変化により、実際に実施する段階でいろいろな問題が生じて来ているということである。その状況の変化とは、次の(a)～(d)を意味している。

(a) 学生の変化

多くの人が指摘しているように、われわれ教員が学生だった頃とくらべると、学生のレベルや意識は著しく多様化している。それは、学生自身に原因があるものもあるし、未履修科目問題のように制度上の問題からくるものもある。また、全体的に自分でやろうとする意欲や自主性が近年低くなっているというのも事実であろう。進学率が大幅に高くなっていることを考えればこれらはある面では当然と言えるだろう。

(b) 社会の変化

バブル経済崩壊後、日本は経済的に厳しい状況が続いており、恐らくは今後もゼロ成長に近い状況が続くものと思われる。さらに、大学にとって見過ごせないことは著しい少子化現象である。また、国際化グローバル化により、共通的な尺度で大学の内容を評価していこうという圧力も高くなっている。

(c) 学問の発展

IT、遺伝子等々、以前には考えられなかったような新しい学問分野が生まれてきている。また、環境科学に代表されるように、学問領域における学際化総合化の傾向も最近の大きな特徴である。

(d) 大学への不信

それから忘れてはならないのは、大学への不信感の増大である。科学技術の進歩とともに大学への期待がある一方、「本当に実のある教育をやっているのか？」という疑いの目が大学に向けられているようにも思え

る。

このような外的状況に対して、わが茨城大学は十分対応を終えているのであろうか。残念ながらまだまだやるべきことは山積している感じである。現在国立大学は「法人化」への対応に追われている感じであるが、その底流には上記のような社会情勢があるといえるだろう。はっきり形にしなければならない法人化対策はもちろん大切であるが、ここで掲げた内容 (a)～(d) に中味のある形で応えていく必要があるであろう。その応えるべきべきことは、結局、次の2つに集約できるのではないだろうか。

「質の保証」「4年一貫カリキュラムの実質化」

「質の保証」とは、卒業生のレベルの保証、授業内容の保証、等々さまざまな建前に対する中味の保証である。そのためには、何を保証するのか、中味の明示があることが前提である。「一貫カリキュラムの実質化」とは、卒業生のレベルを保証するためのカリキュラムが実効的に実施されるということである。それには、学生の実状に合わせたカリキュラムが編成されなくてはならないし、当然のことながら、そのカリキュラムの中で教養科目をどう設定するかも検討されなくてはならない。この検討のとき、考慮しておかなくてはならないのは、

「教養教育重視」

の視点である。社会の中で生きていく上で、大学教育の効果に長期的な観点を求めるならば、教養教育は重視されなければならない。そして、全国的にもこの傾向が強いことに注意する必要があるだろう。

これらのことをもとに、もっと具体的にはどういうことが要請されているのかと言えば、次の(0)～(5)にまとめ得るであろう。

(0) 教養科目の必要単位数は削減しない。

(1) カリキュラム編成などにおいて学部意向が反映しやすいシステムを構築する。

(2) 学生の能力向上を確実にする工夫やそのためのシステムを構築する。

(3) 成績評価を見直し、厳格なものにする。

(4) フィードバックのある点検評価を実施する。

(5) 教員の教育力向上を目指したFDを推進する。

以下に述べるさまざまな答申や中間報告は、これらの

項目のどれかに関わっているのである。さらに、強調したいことは、その答申や中間報告は一体的なものであり、どれかを選んで実行するという並列的なものではないということである。

3. 具体案について

上に述べたような背景をもって出されている改革案を列挙してみたい。これらは、同一の委員会から提案されたものではないが、相互に関連していることに注意すべきである。

(平13.9.20)「成績評価基準及び授業の改善について (第一次答申)」

(授業の在りに関する実施小委員会)(教務委員会)

これは、教養教育に対するものというより、茨城大学全体に関わるものである。6段階評価、履修上限設定、GPAの導入などを提言したものである。

(平14.3.25)「教養教育の改革について (最終答申)」
(教養教育等分科会)(将来構想委員会)

現在進行している教養教育改革の出発点となっている答申であり、次の5項目(1)～(5)についての提言をしている。

(1) 習熟度別英語教育の実施について

教養英語教育を習熟度別にクラス編成し、積み上げ的なカリキュラムの編成を提案している。

(2) 情報教育(教養教育)の改革について

情報教育(教養教育)を、情報化の進展や学生の習熟度を配慮したものにするを提案している。

(3) 接続教育について

「未履修学生」など学生の多様化に対する対応策を提案している。

(4) 学部専門教育での専門基礎教育重視と教養教育科目区分の見直しについて

専門の基礎教育を重視するとともに、それを教養科目にも反映させ専門教育と教養科目とのつながりを密接にすることを提案している。

(5) 大学教育研究開発センターの組織強化について
前節で述べた要請事項(1)～(5)をより積極的に実行するために、大学教育研究開発センターを中心

とする教養教育の新しい運営体制を提案している。

この答申を受けた将来構想委員会（現総合計画委員会）は、さらにこれらの項目を具体化するために、いくつかの委員会に検討依頼をしている。以下の答申や中間報告は、すべてこの依頼を受けたものである。

（平14. 8. 8）「習熟度別英語教育の実施について（答申）」
（大学教育研究開発センター）（答申先は将来構想委員会）

上記の（平14.3.25）「教養教育の改革について（最終答申）」にある「(1)習熟度別英語教育の実施について」を実施に向けてより詳しい計画案を提案したものである。現在この提案に沿って教養科目の英語教育改革が進められつつある。

（平14. 8. 8）「情報教育（教養教育）の改革について（答申）」
（大学教育研究開発センター）（答申先は将来構想委員会）

上記の（平14.3.25）「教養教育の改革について（最終答申）」にある「(2)情報教育（教養教育）の改革について」を実施に向けてより詳しい計画案を提案したものである。この提案内容は平成15年度から

実施される予定である。

（平14.11.18）「教養教育等分科会答申に基づく検討について（中間報告）」

（授業の在り方に関する実施小委員会）
（教務委員会）

上記の（平14.3.25）「教養教育の改革について（最終答申）」にある「(3)接続教育について」および「(4)学部専門教育での専門基礎教育重視と教養教育科目区分の見直しについて」について、より具体的な検討依頼を教務委員会の下にある授業の在り方に関する実施小委員会は受けた。これはその検討の中間報告である。

（平14.12.24）「大学教育研究開発センターに関する改革（答申）」

（教養教育等小委員会）（総合計画委員会）

上記の（平14.3.25）「教養教育の改革について（最終答申）」にある「(5)大学教育研究開発センターの組織強化について」の内容に沿って、より具体的に大学教育研究開発センター周辺の新しい運営体制を提案している。これは、現在、中期計画案作成の一材料として中期計画策定小委員会の検討に付されている。

「習熟度別授業による英語教養教育の充実」

大学教育研究開発センター副センター長 永井 典子

本日は、平成14年度に行われた教養英語教育の改革内容を以下の3点、1)カリキュラムの構築、2)教育支援運営システムの確立、3)学習支援システムの確立を中心に説明する。

1. カリキュラムの構築

教養英語教育改革では、カリキュラムの構築を行うために、2つの作業、すなわち、1)教養英語教育の現状分析、そして2)教養教育の理念と目標を反映した教養英語教育の理念の構築及び理念を実現するための目標設定を行うことであった。これら2つの作業を重視した理由は、1つには、現状の問題を正確にかつ客観的に分析することではじめて、現在教養英語教育が直面する問題を改善できると考えるからである。さらに、教養英語教育は、茨城大学における教育の一部である。よって、茨城大学における4年一貫の教育を確実なものとするためには、教養教育全体に対する教養英語教育の理念と目標を明確にする必要があると考えたからである。

1-1 現状分析

教養英語教育の現状分析としては、以下の4項目に関して、調査・分析を行った。

- ① 旧カリキュラム(平成8年度から開始)の点検評価
- ② 教養英語教育に関する卒業生調査の分析
- ③ 茨城大学新入生の英語の習熟度調査
- ④ ニーズ分析

第1に、旧カリキュラムの評価点検作業として、旧カリキュラムの長所および短所を明確にした。第2に、平成14年3月に茨城大学卒業生に実施された教養教育に関するアンケート結果より、外国語教育に関する部分を分析した。第3に、平成14年度茨城大学に入学した全ての学生の英語の習熟度をセンター試験の英語のテストの得点を用い、分析した。そして、第4に、平成14年度に実施されている習熟度別教養英語の受講者である人文学部社会科学1年生、230名を対象に教養英語教育に関するニーズ分析を行った。

1-2 教養英語教育の理念と目標

茨城大学での4年一貫教育を確実に実行するために、教養英語カリキュラムの理念と目標は、教養教育の理念、目標を反映し、以下のように設定した。

教養英語教育の理念

「英語を学ぶことによって、地域社会に生きると同時に、地球規模の視野を持ち、考え、行動できる人間を育成することである。」

この理念を実現させるために、以下の5つの目標を設定した。

- 1) 英語を通じて、多種多様な文化と価値観を理解し、幅広い視野を身につける。
- 2) 英語を通じて、さまざまな情報やものの考え方に触れ、より総合的・全体的に物事を捉える態度を養う。
- 3) 英語で広く情報を得ることによって、さまざまな立場の情報をもとに、物事を主体的に判断し、実証的な態度や批判的な能力を身につける。
- 4) 専攻する学問と自然、社会および人間のかかわりについての考えを養うための基礎的なスキルを身につける。
- 5) 国際化・情報化の社会に主体的に対応できる言語的・社会的能力を培う。

1-3 新カリキュラムの提案

教養教育の現状分析の結果、教養教育が直面する問題点が明確になった。この問題を解決し、さらに、教養英語教育の理念と目的を反映した新カリキュラムの教育内容は、5レベルに分かれた4技能習得型の習熟度別授業である。各レベルの詳しい授業内容の例としてレベル3(準中級)の授業内容を提示した。来年度からは、新たに特定の技能を集中的に教えるEnglish for Academic Purposes(学術英語)が導入される。これらの授業を体系的に示した新カリキュラム構造を提示した。

2. 教育運営支援

提案した新カリキュラムに従い、効果的に授業を

運営するためには、新カリキュラムを実践しやすい教育方法及び教材を調査研究し、これらの調査・研究で得た知識を担当教官で共有するためのFDを恒常化させる教育支援システムを確立する必要がある。さらに、効果的に教育が行える教育担当体制を確立する必要がある。また、外国語教育に適した教室を整備していく必要がある。よって、教育運営支援システムとして、以下の2つのシステムの構築を目指し、改革を行ってきた。

- ① 教育支援システムの確立
- ② 教育運営システム確立

3. 学習支援システム

18歳人口の50%が大学へ入学してくる今日、学生の大学での勉学に対する意欲や動機は以前に比べかなり希薄になっている。そこで、学生になぜ英語を勉強するのかという明確な動機付けと、どのように勉強するのかという勉強方法を支援するシステムを確立する必要がある。

また、英語のような技術獲得を目標とする授業では、英語の学習を頻繁に行う必要がある。週2回の対面授業だけでは、英語学習に必要な頻度を十分確保で

きない。そこで、自習を支援する設備の充実とともに、効果の上がる自習を目指し、学習ソフトの見直し、自習と授業の連携の仕方などを考えなければならない。

これらの理由から、学習支援システムに関する改革は、以下の2点を中心に行った。

- ① 学習方法の学習の支援
- ② 自習の支援

4. 最後に

14年度は、英語改革小委員会を組織し、上記のような教養英語改革を推進してきた。14年度にパイロット授業を実施し、新たな改善点も見えている。これらは、15年度に教養英語教育の更なる充実を求めて、挑戦していきたい。

14年度は、各学部から供出された流動定員3ポストを使用し、教養英語教育の改革に専念できる教官を3名用意していただいた。このようなポストがなかったら、この改革をここまで進めることはできなかったであろう。教養教育の改革に熱心に取り組んでくださった任期付き3教官、ならびに教養英語改革小委員会のメンバーには、心から感謝したい。

＜前半の質疑応答＞

増 澤：「教養教育の基本方針」の 2 と 5 は矛盾してはいないか。両者を含みこむのであろうが、混乱はしないか？

曾 我：5 の基礎はユニバーサルなニュアンスのものと理解すれば、混乱はしないであろう。

増 澤：接続教育のなかに、専門科目への接続は不要ではないか？

曾 我：接続教育については「授業のあり方委員会」で議論しているところである。

池 谷：「授業のあり方委員会」の委員長としては、議論が進行中なので公式発言は控えたい。

増 澤：接続教育の問題は教養教育と専門教育をどこで線を引きかではないか。今後も情報をより以上に提供してほしい。

曾 我：接続教育は専門科目でも教養科目でも組み込むことはできる。社会は教養教育重視の方向なので、その点を視野に入れて設定したらいいのではないか。

横 山：トータルでの質の確保が大事。教養と専門を対にして考えなくてもいいのではないか。

池 谷：教養教育は 4 年一貫であり、スキルの取得、社会人の生涯学習、文理融合など、教養教育充実の方向のなかで専門科目との融合を考えていく必要がある。幅広い様々な提言を入れてまとめたい。

木村競：センター長の報告にあった「学部意向が反映しやすいカリキュラム編成」は、専門教育からの発想で教養科目が左右される危険性がある。センターは各学部をたばねるだけの存

在になってしまう。大学全体としての教養教育のあり方が重視すべきではないか。

曾 我：同感である。コアは大教センターが中心となって考えていきたい。大学全体のガイドラインは必要である。

中曽根：個人的ではあるが、理念を実現しているか疑問。質の保証が社会から要望されている。JA-BEE を取得しないと職が狭まる。このため質の保証が重要。成績評価をきちんとしているだろうか。実践するためには退学勧告などができないと難しいのではないか。

横 山：永井先生の報告についてはいかがですか？

中曽根：習熟度別はどの分野でもできるわけではない。とりわけ専門は各担当分野の教官が少ないのだから。

永 井：考え方次第ではないか。英語でも具体的な場では教官は一人である。大切なのは知の共有、教官同士の協力である。専門科目においても異なる専門の先生が協力できる体制づくりが可能ではないか。

増 澤：成績評価をどうするか？レベル 1 の学生の A とレベル 4 の A では違うのではないか。このコンセンサスがとれていないのではないか。

永 井：教育に関する評価とは、学生がどれだけ努力したかを評価すべきである。ただし、成績評価表のなかで、どの科目を履修したかを明記（例：レベル 4 とか）する必要があるだろう。[Course description (資料 2 - 3 をもとに) の説明が加えられた。]

(休憩)

【次世代の教養教育に向けて】 「点検評価『教養教育による課題と改善の方向』」

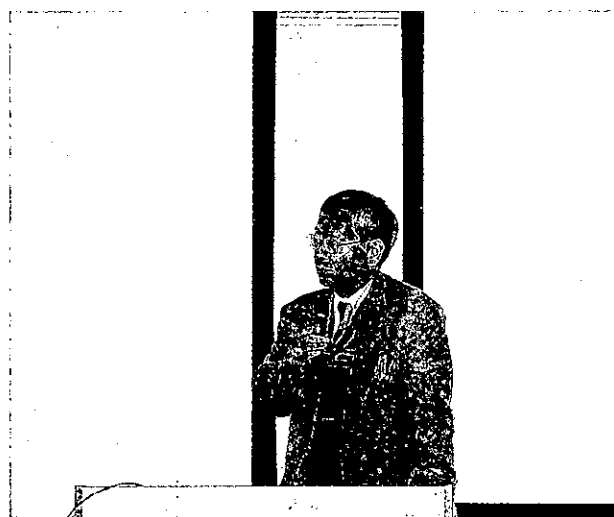
副学長（学術担当） 田切美智雄

点検評価学位授与機構（以下評価機構）により、平成13年度と14年度の2年間にわたり、教養教育について点検評価を受けた。平成14年度の7月に自己点検評価書を提出し、その自己評価を基に暫定的な評価への意見表明と追加説明を求められて、11月にヒアリングを受けた。本年1月末には評価結果が示され、それに対する意見を述べることになっているが、ほぼ点検評価作業は終了した。本シンポジウムでは、ヒアリング時点までの評価結果の概要を報告し、教養教育の方向性を提案したい。

教養教育については、他の評価テーマと異なり、2年間の評価作業が課せられた。このことは、評価機構の教養教育に対する重要性の認識の現れと理解することができる。ヒアリング時点での評価方法にも他のテーマと異なる方法がとられた。それは、5段階の評点によって、各評価項目・要素を段階的に評価する方法である。これは評価される側にとってはインパクトのあることであった。

さて、次にヒアリング時点までの暫定的評価結果とヒアリングの概要を紹介する。ヒアリング時点での評価はかなり厳しいものである。平均的に見れば、5段階評価の下から2番目である。資料不足や評価機構側への説明不足によって分析不能という観点もかなりあるので、それらを含めての暫定的結果であるとの評価機構からの説明がついている。ヒアリングのために、新たにかなりの量の説明資料を準備し、ヒアリング以前に提出した。

ヒアリングは評価機構の委員3名によって行われた。本学からは教養教育点検評価WGの委員と担当事務官が出席した。ヒアリングチーフから冒頭に、以下のような説明があった。「教養教育の評価という作業については、評価機構も経験のないことであり、いろいろ研究しながらより適正な評価方法を求めていきたい。評価機構が法人化した大学の評価を行うことになるので、その準備段階である。大学においても、今後法人として評価を受ける予行演習だと思ってもらいた



いし、同様な評価が中期目標・中期計画の評価期間に行われると思っていただきたい」。この発言は、今後継続される評価への対応を本学としても緊急に検討する必要を強く感じさせた。

評価結果の詳細は別に報告される予定なので、ここでは省略する。全体として、4つの評価項目と10の評価要素、さらに28の観点について点検評価が行われた。特に評価結果として改善の必要性を強く感じたのは、「目的及び目標の周知・公表」と「授業評価のフィードバック」と「授業時間外の学習」と「成績評価の一貫性」である。大学教育研究開発センターとしては、これらの改善を早急に検討する必要がある。

最後に教養教育の課題と改善の方向性について箇条書きする。

1. 本質的課題

- 教育の質の保証
- 学生の理解度の向上

2. 方法論的課題

- 成績評価の一貫性と厳格性の実現
- 点検評価サイクルの円滑な運用

3. 精神論的課題

- 教員の教育に対する向上心の持続

以上が今回の点検評価を受けた後の本学の課題であると思っている。

追記

シンポジウムの直後に最終的評価結果が出た。以外にも評点方式の結果表示ではなかった。本学の評価は全体的にヒアリング時点のものより良くなり、平均す

ると5段階評価の上から2ないし3番目であった。しかし、この結果に満足することなく、点検評価と改善に取り組むべきである。これはあくまで過去に対する評価であることを肝に銘じて置く必要がある。

「企業から見た、これからの教養教育に望まれること」

㈱日立製作所情報制御システム事業部大みか事業所長 森田 憲一

(講演概要)

森田です。本日はお招きいただきありがとうございます。最初は学生相手の講演かと思ってお引き受けしたのですが、後で先生方が聞き手だとわかって少々戸惑っています。「企業から見た」と大きいタイトルになっていますが、一企業の中にいる人間として、以下大学の教養教育について思うところを述べさせていただきます。

(以下、主としてプレゼンテーションとして提示されたものによる。)

1. 自己紹介

昭和22年大阪で生まれました。団塊の世代に属し、日本の成長と共に成長しました。大学・大学院では電子工学を専攻しました。この時代に経験したことは学園紛争、ストライキ、アルバイト、読書です。

昭和47年株式会社日立製作所大みか工場に入社し、以来25年間内外の電力系統監視制御畑で働き、システムの設計を担当しました。この間企画員→主任技師→部長となりました。海外出張は約80回に及び、40カ国を訪問、南極大陸以外の六大大陸に足を踏み入れました。主な仕事としてはエルサルバドル水力制御所、や香港給電システムの設計をいたしました。その後本社事業部（東京）勤務を経て、現在は大みか事業所長をしております。

2. 日立製作所情報制御システム事業部大みか事業所の概要

日立製作所全体の売り上げは連結ベースで約8兆円であり、雇用人員は約32万人です。情報制御システム事業部大みか事業所は日立市大甕駅近くにあり、広さは20万平方メートル、約2,000人が働き、売り上げは1,400億円です。製作している主なものは新幹線などの列車制御システム、自動料金収受システム（ETC）、給電指令システムなどです。



3. 教養時代をふりかえると

この時期は受験の後のゆったりとした踊り場とも言うべきもので、サークル活動、読書、ダンスパーティーなどを楽しみました。ダンスパーティーは自分たちで開いてパーティー券を売ってサークルの活動費にしたのです。自分の人生のキャンパスを俯瞰する時でもあります。工学分野以外への興味ももちろんありました。それは音楽、文学、美術、歴史、旅行などで、京都にいましたから寺社めぐりもいたしました。麻雀やコンパや議論で徹夜をし、怠惰な時の流れを送ったこともあります。また家族から離れて下宿し、金銭感覚を身につけ、自立への助走にもなりました。また学生運動、社会主義、政治、経済、外国など社会への目覚めも始まりました。

世の中は広く、いろいろな人に出会い、面白そうなお話がたくさんありました。また「自分のことは自分で考えて決める」ということを徐々に学んでいきました。記憶にある講義は日本国憲法、論理学、経済学、中国文学、代数学、幾何学などです。有意義と思えなかった講義はドイツ語、英米文学・体育・哲学でした。もっともこれは教える先生によって大きく左右されたと思います。

4. 企業から見た望ましい学生像

次のようなことが挙げられると思います。

- ・積極性、好奇心、やる気、向上心
- ・へこたれない気力／体力、辛抱強さ

・対人能力, 協調性

(仕事はチームワーク。唯我独尊はダメ。)

- ・表現力, 自己主張 (大きな声, ロジカル)
- ・ITリテラシー (読み書きパソコンの時代)
- ・語学力 (英語は世界の共通言語)
- ・基礎学力, 専門知識
- ・独創性, 問題発見能力, 問題解決能力
- ・判断力, 決断力, リーダーシップ

全部できたらまるでスーパーマンみたいですが。

5. 企業に入ってわかること

エンジニアとして一人前になるには約5年かかります。仕事ではプロを目指さなくてはなりません。担当分野での勉強は大学の3倍の密度は必要です。仕事が好きになると、楽しくて無我夢中で寝食を忘れて仕事をすることがあります。仕事はチームワークで、ルールに従ってするものです。例えばあるシステムを設置し、稼働するには80~90人の部隊が必要で、その間一ヶ月当たり約1,000万円の経費がかかることを考えていただければ、ご理解いただけると思います。仕事は製品性能、品質、開発期間、売上、利益として成果が明確に出ます。その成果により、地位、ボーナスが上下することになります。

与えられた仕事、人間関係、周囲状況により人生設計が変わります。周囲はよく見ていて、対応力、地道な努力を評価します。また企業には文化があります。例えば大みか事業所ではGO (Greater Omika) 綱領を定めて活動を行っております。これは

- ① より高い技術に挑戦しよう。
- ② 信頼に値する仕事をしよう。
- ③ 相手の立場に立って行動しよう。
- ④ 清新にして活力のある職場を作ろう。
- ⑤ 自戒と感謝の気持ちをもとう。

です。

学生時代の経験、勉強、専門分野の研究はごく一部で世の中にはもっと面白いことがたくさんあります。会社に入った直後ではまだ納得できない社員も中にはいますが、そんな人でも一年も経てば、わかってきます。自分がやってきた専門分野以外でも面白い分野や面白い仕事がたくさんあります。

6. もっと面白いこと

学校では原理学習、理論構築、実証、試作といったものがあるでしょう。

それが企業になりますと、例えば製品企画、開発があります。その際大事なのは：

- ・ユーザーの求めているものは何か
- ・何が売れるのか？ (マーケティング)
- ・いくらで作れば売れるか？ (コスト、販売量予測)
- ・何が強みなのか？ (他社と差別化のキー)

をしっかりと考えることです。

製品を製作したときのおもしろさは：

- ・自分の作った物が世に出る。
- ・知恵と工夫で利益を生み出す (「プロジェクトX」ミニ版はいたる所にある)。
- ・特許で他社を圧倒する。

といった点です。

製品売り込みでおもしろいのは：

- ・プレゼンテーションによって技術力を証明する (うまくいけば一件数億円の商談がまとまる)。
- ・技術と価格で競争し、契約をまとめる
- ・顧客との信頼関係を構築する。
- ・対話から次の製品のアイデアを獲得

などでしょう。

7. 教養教育に望むこと

教養教育に期待していることは次のようなことです。

①積極性, やる気の醸成

気力・体力・持続力の育成

②対人能力, 協調性の育成, 表現力向上

(挨拶, 目を見て話す/聴く, 笑顔)

プレゼンテーション (論理の組立, 説得力, 熟意)

③IT講座, 実習 (パソコン, インターネット)

④語学力の向上 (英会話は必須)

⑤幅広い文化への啓蒙 (国際人には教養)

⑥企業との交流

⑦モラル, 思いやり, 多様な価値観の受入

⑧独創性, 問題解決力

もう少し具体的に言うと、

①魅力ある講義とサークル活動

(世の中は面白いことがたくさん),

(面白くなるには我慢も必要)

②ビジネス・マナー講座(論理に基づくストーリー展開)→企業講師(OBも含む)による教育

③IT講座, 実習(海外で戦うためにも, ドキュメントを纏め発表する能力が不可欠),

④第二外国語:英会話を認定しては?

⑤専門分野以外の単位必須化, たとえば

工学部——音楽, 文学, 絵画, 歴史

文学部——科学技術史, バイオ, 数学

⑥企業講師による講座, 双方向人材交流

⑦??(大学より家庭の問題か?)

⑧??(皆が田中さんになれるわけではない)

ということになるでしょう。

8. おわりに(大学教育全般について)

最後にいくつか提言をさせていただきます。

①グローバル時代ふさわしい人材育成

日本国, 日本人に対するプライド

教育は100年の大計

日本の国際社会における役割の認識

②生涯教育への門戸開放

年代を問わず異分野を学びたい人への教育提供, シニアクラスによる実学講座

③学校と企業間の連携強化

企業講師による講座, 双方向人材交流,

産学協同開発・ベンチャー起業協力

フランクな意見交換の場の設定

などです。

近頃, 日本人はだめという風潮が蔓延しておりますが, そんなことはないのです。日本人の能力は低くはありません。「もっと自信を持て」と是非教育していただきたい, と申し上げて本日の講演を締めくくらせていただきます。

＜後半の質疑応答＞

曾 我：学位授与機構からは、改善点などの提案が示されたか？

田 切：ヒアリングの段階で、内容によっては様々な提案をいただいた。ただし評価の報告書類に記されるかは不明。

曾 我：どのような提案があったかなどをまとめてほしい。

横 山：センターの年報のなかに、この点もとりまとめる予定である。

田 村：教養教育に対して点数で評価されたのは初めてである。学位授与機構がこの方式に切り替えた理由を教えてほしい。

田 中：学位授与機構からはとくに説明がなかった。実情調査を提出した後にまとめられた12年度の報告書が基準にされているのではないか。

曾 我：外国の学生と日本の学生との違いは？教育との関係があれば、お聞かせいただきたい。

森 田：日本人は英会話力が不十分であり、英会話の習得は必須であると思います。論理的思考と

いう点では大差はありませんが、ストーリーをきちんとまとめてロジカルに発表する訓練が必要であると思います。また遠慮しないで堂々と主張をすることも重要であると思います。

佐 藤：採用の仕方について教えていただきたい。

森 田：理系と文系とを大別しています。理科系ではジョブマッチング方式を取っています。理科系では仕事をしたい分野を特定してもらって、工場や研究所を見学してもらいます。各工場の部長クラスが面接して相思相愛になれば、大学の推薦をもらって正式採用となります。採用数は700～800名くらいです。文科系は本社一括採用で、大学の推薦は特に必要としません。面接の倍率は10から20倍くらいです。採用数は150名程度です。入社後、文科系の社員は3～4年で部署を移動しますが、理科系の人は一カ所に5～10年とどまることが多い。

総 括：学生中心の大学への改革と教養教育

副学長（教育担当） 池谷 文夫

本日は長時間にわたって、教養教育に関わる諸問題及び今後の展望について、各講演者から基本的な柱を立てられた上で具体的なお話がなされました。

総括というのは大げさですが、本学の教養教育の改革への志向を大きく取り巻く社会の状況、あるいは潮流とでもいいでしょうか、それらについて、政府の審議会等の幾つかの報告を踏まえて、あらためて学生中心の大学という観点から考えてみたいと思います。

現在、大学に求められているのは、地域と社会のニーズに応じて、新しい時代をリードする創造力豊かな人間を育成することです。そのことは必ずしも18歳人口だけに対応するものではありません。生涯学習とも緊密に関連する大学教育とは何かを考察しつつ、社会人職業人を含む国民全体に対応するために、大学教育の本質に基づいた一層の取り組みが求められています。

近年指摘されているのが大学における「教養教育の軽視」の傾向です。平成3（1991）年に改正された大学設置基準は、それまで一般教養科目、外国語科目、専門科目に分けていた教育課程の編成方法を、分けをせずに、必修科目、選択科目、自由科目に分けました。それ以前から一般教養とは何かについては議論がなされてきましたが、共通の理解は得られているとは言い難い状況でした。

各大学の「教養部」の位置づけや教育内容の吟味については個別的な取り組みに終始していました。大学設置基準の改正に対して、大学側からは教養科目を軽視するものだという議論がありましたが、結局は専門科目の充実、教養部教員の専門学部への分属、教養教育の実施体制の見直し（例えば全学出動体制）、卒業要件となる単位として認められる教養科目の単位の減少など、教養部の改組にともなう教養カリキュラムの改編という、かなり後退し限定されたものとなったことは明らかでした。「教養軽視・専門重視」は、社会生活に役立つ実践的な科目を求める社会の要請及び学生の傾向とも無縁ではありません。

大学設置基準は、昭和23（1948）年に制定されたものが基本となっていますが、今述べたように、平成3

年に大幅な改正が行われました。そこにおいて教育課程の編成替えと共に画期的だったのは、教育研究活動について自己点検・自己評価制度を義務づけたことです。これまでは外部の目を特には意識することなく、ある意味で、大学が従来、微温的で自己満足的なレベルで考えてきた教育研究活動の状況を、自ら活動状況の点検・評価を行うと同時に、外部に向けて公表しなければならなくなったのです。

とは言うものの、大学が始めた自己点検・自己評価作業は、その結果として自己弁護的かつ身の回りのものになりました。教育については、設置基準の改正に従って、カリキュラムを見直したり、単位の取り方を変えたり、教員の「持ちゴマ負担」の軽減、研究費の増額、教育設備の充実などへの指摘が主たるものでした。授業の実施に関わって重要なFD（ファカルティ・ディベロップメント）への取り組みは、それが各大学でなされてはいても未だ充実しているとは言い難い状況です。

そうした中で、平成12年4月に、大学の客観的評価を行う新しい組織として『大学評価・学位授与機構』が発足しました。評価項目は、教育研究内容、施設・設備環境、研究業績など、大学の業務全般にわたるものであり、法人化を機に大学が本当の意味で社会的評価を得るためには、第三者機関の評価に耐えうる内容の充実と「個性」の発揮を継続して心がけ、実践していくことが今後求められます。

平成12（2000）年6月に、文部省（当時）の調査研究協力者会議から『大学における学生生活の充実方策について』という報告書が出されました。それによると、「最近のキャンパスは、様々なタイプの学生であふれている。しかし、将来の職業や具体的な学習内容について、明確な自覚を持っている学生は、以前と比べると減っているように思われる。むしろ、そのような自覚を持たないまま、いわば自分探しをするために大学に入学してくる学生が増えていると考えられる」のであり、「インターネットや電子メールなどの情報手段

が日常化し、(中略)、所属する大学や地域を越え、国内はもとより諸外国の学生と幅広く交流をしたり、相互のコミュニケーションを深めることも可能になっている。その一方で、学生が大学で直接、教員や他の学生とふれあう必要性が薄れてきている」という分析です。

同報告書は更に、その2年前の平成10(1998)年に大学審議会が答申した『21世紀の大学像と今後の改革方策について』を引用しつつ、「これからの大学は学生が在学中に身につけた能力や、自立心ある人間としての成長が大学の評価基準の一つとなっていく」といい、従って、「研究に重点を多く教員中心の大学から、多様な学生に対するきめ細かな教育・指導に重点をおく学生中心の大学へと、視点の転換を図ることが重要である」としています。

平成10(1998)年に大学審議会は今申し上げた答申『21世紀の大学像と今後の改革方策について一競争的環境の中で個性が輝く大学一』を、そして2年後の平成12(2000)年11月には答申『グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について』を出しました。

前者は、21世紀初頭の社会状況を展望し、新世紀にふさわしい高等教育の役割とその改革要点を指摘したものです。とりわけ、『知』の再構築を目指し、「個性が輝く大学」づくりを強調している点が重要です。すなわち、展望された社会状況においては

- ①一層流動的で複雑化した不透明な時代
- ②地球規模での協調・共生と国際競争力が求められる時代
- ③少子高齢化の進行による生産年齢人口の大幅減少と産業構造や雇用形態の変化
- ④生涯学習需要の増大
- ⑤学術研究の進歩が加速し、学際化、総合化の必要性

というような事態でありまして、これらを踏まえつつ、大学改革の方策として次の4つの具体的項目を挙げています。

- i 課題探求能力の育成を目指した教育研究の質の向上
- ii 教育研究システムの柔構造化による大学の自律性の確保

- iii 責任ある意志決定と実行をめざした組織運営体制の整備
- iv 多元的な評価システムの確立による大学の個性化と教育研究の不断の改善

要するに、大学は(1)教育研究の質を高め、教育研究の成果が上がるよう弾力的にカリキュラムを編成し、(2)自らの意志に基づいて大学を管理運営することをめざし、(3)自己点検や自己評価によって絶えず改善を加えながら、最終的には(4)教養教育を重視する大学、専門的な職業能力養成大学、地域社会への生涯学習提供大学、最先端の研究志向大学、大学院中心の大学など、それぞれめざす方向の中で多様化し、個性化を図りながら発展することが重要だということです。

後者の方の答申『グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について』は、上の「答申の基本理念を踏まえつつ」、「グローバリズム」を念頭に置いて、国際的な通用性・共通性の向上と国際競争力の強化を図るための視点の下での改革を提言しています。それらは次の事柄です。

- ①グローバル化時代を担う人材の質の向上に向けた教育の充実
- ②科学技術の革新と社会、経済の変化に対応した高度で多様な教育研究の展開
- ③情報通信技術の活用
- ④学生、教員等の国際的流動性の向上
- ⑤最先端の教育研究の推進に向けた高等教育機関の組織運営体制の改善と財政基盤の確保

ここにおいては

- (1) グローバル化時代に求められる教養を重視しながら
- (2) 広い視野を持った人材の育成をめざす柔軟な教育システムを構築すると共に
- (3) ファカルティ・ディベロップメントの実際効果を図り
- (4) 国際的に優れた教育研究を推進して
- (5) 生涯学習のニーズにも対応すること

を挙げています。

ところで、総理大臣の諮問機関として設置された『教育改革国民会議』は、平成12(2000)年12月に教育改革するための17の提案を行いました(『新しい大学・

大学院システム』)。その中では次の10項目が大学・大学院における教育研究にかかわる重要性を持っています。それらは

- ①大学の18歳の入学年齢制限を撤廃する。
- ②大学の9月入学を推進する。
- ③大学の学部では、教養教育と専門基礎を中心に教育する。
- ④ダブルメジャー（複数の分野を専攻する）制度を導入する。
- ⑤成績評価の厳格化を図るための制度の導入など、学習を促す取組を進める。
- ⑥大学院へは優秀な学生が学部の3年修了から進学することを大幅に促進し、このようなことがごく普通に見られるようにする。
- ⑦学部で卒業する者は、4年でさらに専門的な教育を行う。
- ⑧大学院の入学試験は完全に開かれたものにする。
- ⑨プロフェッショナル・スクールでは、経営管理、法律実務、金融、教育、公共政策など多様な分野の専門家を養成する。
- ⑩社会人が大学・大学院に入学して学ぶ機会を拡大する。

というものであり、こうした提言は極めて重要なものと受け止められるべきです。

その他にも社会からは大学の改革への提言も相次いでなされています（増栄論『これまでの大学これからの大学』大学教育研究所、2002年、98-102頁参照）。

そうした数多くの提言の中では

- (1) カリキュラムに対しては、多様化・個性化に対応する「多くの峰を持つ」体系の構築、編入枠や単位互換制度の拡充
- (2) 入学試験制度の改革、入試成績評価に関しては、学生の思考力を含めた学力・関心・素質などの複眼的評価
- (3) 授業シラバスの厳密な作成充実
- (4) 学生による授業評価制度の導入

などが要請されています。

更に加えて大学に対して

- (5) 産業界との連携が益々大きく求められ
- (6) 学部における高度職業人養成のための実践的教

育の推進

- (7) 国際社会に通用する人格を備えた人材育成のために、一層の「リベラル・アーツ」教育に取り組むこと

の要請も強いのです。

1999年のドイツのケルン・サミットでは、サミット史上初めて、教育が主要テーマとして取り上げられました。

採択されたケルン憲章は、前文で次のように述べています。「すべての国が直面する課題は、どのようにして学習する社会となり、来世紀に必要とされる知識、技能、資格を市民が身につけることを確保するかである。経済や社会はますます知識に基づくものとなっている。教育と技能は、経済的成功、社会における責任、社会的一体感を実現するうえで必要不可欠である。来世紀は柔軟性と変化の世紀と定義されるであろう。すなわち、流動性への要請がかつてないほどに高まるだろう。今日パスポートとチケットにより人々は世界中どこへでも旅することができる。将来には、流動性のためのパスポートは、教育と生涯学習となるであろう。この流動性のためのパスポートは、すべての人々に提供されなければならない。」

まさに、金と人と時間を必要とし、遠大で遠回りに思えますが、「知の再構築」や「教育内容の真の確立」こそが、次代を担う人材の育成への確実な近道だと宣言しているのです。

ところで、大学で学ぶ上で基礎となるはずの学力は、低下しつつあるのでしょうか。2001年8～9月に、読売新聞社が、全国の国公私立670大学の学長宛にアンケート調査を行いました（読売新聞大阪本社編『潰れる大学、潰れない大学』中公新書ラクレ、2002年；以下の数値は同書に拠る）。

学長もしくは副学長が記入したアンケートの回答（有効回答479大学、71.5%の回収率、国立93大学93.9%、公立65大学87.8%、私立331大学64.6%）によりますと、学生の学力低下については、全大学の半数余りが運営上最大の課題ととらえ、事態が一段と深刻化していることが明らかになりました。250校(52%)が「学力低下」を挙げ、次いで深刻とされたのは「コミュ

ニケーション能力の低い学生が多い」(27%) ことでした。

学力のどんな点が低下しているのかという具体的内容は、「積極的に課題を見つけ、解決しようとする意欲が乏しい」(66%)「物事を論理的に考え、表現する能力が低い」(66%)「読解力や記述力など日本語の能力が低い」(62%)「社会や理科の未履修科目が増えた」(31%)との指摘が多かったのです。

中学や高校で学ぶ教科内容が更に削減された新学習指導要領で学んだ世代が大学に入学する平成18(2006)年度以降は、学力への更なる影響が心配され、「2006年度問題」と呼ばれています。これには、75校(19%)が「非常に深刻な影響がある」と予想し、「少し悪い影響がある」も235校(60%)で、将来を憂慮する声が八割を占めています。

学力向上の対策で最も多かったのは、「各教員が工夫し、わかりやすく教える」(78%)「少人数クラスの授業を増やす」(62%)「大学院生をティーチング・アシスタントとし、きめ細かく教える」(43%)等であり、改革のうちで今後最も重視したいものは「授業の方法・内容の改革」がトップでした(39%)。ただし、教員の教育能力(34%)や教員の改革に対する消極性(33%)を問題視する学長らも多かったのです。

特に私立大学については、学生の確保のためにどんな対策をとろうとしているかという点、「入学後のきめ細かな教育と生活指導」です(281大学88%)。教育面では「カリキュラムの多様化」(61%)、学生への経済面での対策として「成績優秀な学生への学費免除などの優遇措置の導入」が62%にのぼっています。

つまり、教育指導を柱とするきめ細かな学生支援が、今後の大学の未来を決めることとなるでしょう。教養教育にしっかりとした理念を確立し、全学で確認しつつ、どれだけ手当をできるかが、問われているのです。

このように21世紀の我が国の教育を取り巻く状況は、大学教育も含めて、生涯学習、リベラル・アーツの一層の充実が要請されています。知識や技術の上に、更に学問知識を身につけた心の豊かさを築くことが、教養のめざすものでしょう。大学における教養教育は多様な面を持っています。学生にとって、それが分かりやすく、身につけやすく、一生かけて充実し、身についたものを的確に適用し評価されることが、重要です。学生中心の大学とはそういうものをめざすのです。

学生サービスはもはやサービスではなく、当たり前のことなのです。それから、教養教育を考えるということは、大学教育を考えることであり、それは大学と社会を含む生涯学習を考えることです。大学の都合や自己満足による教養教育でもないということです。

本日はそれぞれの講演者におかれましては、実践に関わるご経験からの状況分析と御提言を頂き有り難うございました。また、フロアからも貴重なご意見やご質問が出されました。教養教育の改革は、まさに大学の力量と、見識が問われる大きな課題です。今後も本学と致しましては、前進してゆく覚悟であります。どうぞ皆様方にはご協力をお願いいたしまして、本シンポジウムの閉会の辞と致します。長時間ご苦勞様でした。



平成14年度

茨城大学教養教育シンポジウム

平成16年度からの大学法人化が具体化されてきており、また本学では全学的学部改革を目指して総合計画委員会等で検討されるなど教養教育を巡る状況が激変する様相を呈している。そのような状況下で本学における教養教育の現状を見ると質の高い教育を求めて習熟度別授業、接続教育の導入が検討されるなど教養教育をしっかりとしたものにする必要性が強く求められています。

このような動きについて全学的に理解を深め、新しい教養教育の仕組みを構築していく第一ステップとなることを目的とします。

日時 平成15年1月29日(水) 13時~17時

場 所 水戸キャンパス 共通教育棟2号館11番教室
日立キャンパス 工学部第2・3会議室
阿見キャンパス 農学部第1会議室
※テレビ会議システム(VCS)を利用する。

参加対象者 全教職員並びに学外教育関係者

実施内容

主催者挨拶 大学教育研究開発センター長 曾 我 日出夫
学長挨拶 茨城大学長 宮 田 武 雄
講演 (司会進行)大学教育研究開発センター副センター長 横 山 功 一

【教養教育の改革】

「総合計画委員会教養教育等分科会答申に見る教養教育改革の方向」

大学教育研究開発センター長 曾 我 日出夫

「習熟度別授業による英語教養教育の充実」

大学教育研究開発センター副センター長 永 井 典 子

【次世代の教養教育に向けて】

「点検評価『教養教育』による課題と改善の方向」 副学長 田 切 美智雄

「企業から見た、これからの教養教育に望まれること」

(株)日立製作所情報制御システム事業部大要事業所長
森 田 憲 一

総 括 副学長 池 谷 文 夫

主 催：茨城大学大学教育研究開発センター

★お問い合わせ先★

水戸市文京2-1-1 茨城大学大学教育研究開発センター内 教養管理係

TEL 029-228-8414 FAX 029-228-8499

教養教育に関する論文・研究ノート

Classroom Management Techniques

授業運営テクニック

Robert J. Betts, Ph.D. (College of Humanities)

ベッツ ロバート ジョセフ (人文学部)

Introduction

This paper is a brief discussion of activities and classroom management ideas to make classes where reading, writing, listening and speaking skills are taught, easier to manage as well as motivate students to actively participate in learning. Many of these elements have been mentioned in other publications related to this field (Lewis & Hill, 1985; Shrum & Glisan, 2000), however, this article allows the reader to see them together in a simplified form for quick review and practical usage. This short paper is by no means an extensive review of all of the activities or classroom management ideas available to a practicing teacher, but is designed to be a starting point for those instructors who are interested in these two areas.

Classroom management is an important aspect of teaching in (Hughes, 1981; Lewis & Hill, 1985) situations where there are large student populations, assorted materials and diverse abilities among learners. Common complaints by many teachers about the attitude or lack of interest of their students can be easily solved if basic principles are set forward and followed at early stages of learning. Students in Japan may develop ineffective learning behavior from many years of experiencing unhealthy classroom management models in previous institutions. Well-planned classroom management policies will help eliminate past inappropriate behaviors that do not support learning. This writer's experience has led him to believe that

strictly enforcing policies at the beginning of a course is a much more successful policy than trying to implement new guidelines or adjust lax procedures at a later date. Learners will invariably test a "new" teacher to determine their resolve for enforcing "class rules," but in the end will generally accept them if an instructor is determined to implement practical rules to assist in learning. Classroom "rules" or "policies" are only as good as the instructor's resolve to enforce them and the learners' willingness to accept them as a practical means for learning English. Policies unrelated or disconnected from the learning process, fail to satisfy the needs of the learners and are easily recognized by them as so. A good example of this is the case when instructors focus on appearance and behavior unrelated to the learning process. Nothing can be more demotivating than having to meticulously follow "rules" that do nothing to help a learner reach their learning goals (Dornyei, 2001). Unfortunately, this continues to be the policy of many instructors. That is why this paper is designed to make suggestions to improve classroom management policy and to create an effective learning atmosphere in the classroom (Ruggiero, 1998). Also, it gives the novice and the experienced teacher suggestions in areas that are rarely discussed in academic papers in the field of language teaching.

Two Classroom Management Techniques

There are several publications available that deal

with successful classroom management techniques in the field of EFL (Lewis & Hill, 1985; Shrum & Glisan, 2000; Dornyei, 2001). Some of these ideas came in full or in part from many of those publications. Other ideas were gathered from interviewing students taking language classes at Ibaraki University over the past two years.

One of the most important concepts to consider in good classroom management is the type of seating that is available in classrooms in institutions. Over the years, this writer has tried different types of classrooms and until recently was a strong believer in having mobile desks and chairs in all classrooms where foreign languages were taught. Unfortunately, this inflexible attitude had to be drastically reconsidered when this writer discovered that his current teaching assignment was in a building where almost all of the desks and chairs were fixed to the floor with screws. How can pair work be conducted in a classroom where the desks cannot be moved so that learners are facing each other? The solution was not to move the desks and chairs, but rather to move the learners. Learners could turn and face each other across the aisle instead of having the desks between them. This presented some interesting observations never seen before by this writer. Learners no longer had desks blocking their view. Learners were able to utilize the "body language" they had studied when conducting pair-work exercises. Learners also stopped looking down at their books as often as before, in a sense, opening up to "total" communication without physical obstructions rather than simulated communication taking place in an unreal situation obstructed by furniture usually only found in the school classroom. Finding or changing partners frequently also ceased to be a problem. Learners scattered throughout the room, sometimes makes it difficult to form partnerships. Since, learners are sitting on an aisle, it is easy enough to soon locate those learn-

ers without partners and assign suitable ones. Learners in one row can move up one seat, with the learner in front moving to the very back of a row. This way a learner can change partners quickly and receive a variety of information on the same topic being discussed as a part of the lesson.

Another invaluable tool this writer has utilized in classes within the past few years has been the use of seating charts. The current grade software employed by this author has a tool available for making seating charts and changing them randomly at will. Each student is assigned to a seat for each class. One point of interest that came out of this writer's interviews with students in his classes is the desire by many of them to talk to many different members of their class throughout the year. Seating charts allow the instructor to accomplish this task relatively easily by assigning seats and reassigning them again every two or three classes. They are also useful when assigning participation points to learners, taking attendance and learning students' names.

Learners who speak out in class and actively participate are motivated when they learn that they will receive credit for their contribution to the learning process. Seating charts allow teachers to add participation to the grading matrix. Teachers can also use seating charts to take attendance, usually a time consuming event in classes with large numbers of learners. With seating charts the instructor only has to take a few minutes out during class to see which chairs are empty without making a major issue of attendance as it sometimes becomes when each student's name is called out orally and a response is expected. This writer has found seating charts to be a time saving tool for better classroom management.

Pair Work Management

Pair work activities are a common activity in

many textbooks designed to practice language skills. Frequently, instructors complain that the learners in their classroom do not perform up to expectations when participating in pair work activities. Some of the axioms for pair work this writer has developed are as follows:

1. Give clear and detailed instructions on what is to be done during a pair work activity when learners first begin them. Later, as students get used to these types of activities, this step can be shortened or paraphrased somewhat.
2. Make it clear why they are doing the activity and what their goal should be. In classes where Communicative Language Teaching (Littlewood, 1981) is utilized, this may involve eliciting information from your partner. In other cases, the activity may be designed to practice a particular expression or expressions. Sometimes pair work activities are designed to practice a communicative functions (shopping, asking directions, etc.).
3. Ask the learners to focus on one communication strategy during the pair work activity. Example: 1) Today let's try not to use any Japanese. 2) Today let's try to use as many follow-up questions as we can. Do not give the learners too many conversation strategies to focus on at one time. Giving them too many things to focus on can overwhelm them and as a result they may fail to accomplish the task successfully. A good book for conversation strategies is written by, Kehe and Kehe, "Conversation Strategies: Pair and Group Activities for Developing Communicative Competence," published by Pro Lingua Associates.
4. Change partners often. Give learners an opportunity to talk to many different classmates about the same topic. Give them a chance to practice with different partners several times. It's a lot more interesting to practice the same

conversation with three different partners than to practice the same conversation three times with same partner.

5. Allow learners to take notes of what their partner says when gathering information and take those notes with them to report in part what they heard from their first partner to their second partner. More information generates more interest on the topic being discussed.
6. Give the learners a chance to ask you how to express certain ideas and opinions in English that came up during their pair work. This will help build vocabulary and the instructor has the opportunity to teach what the students do not know more directly, rather than teaching them something many of them may already know.
7. Give learners a chance to report their findings to the class or a group of classmates after pair work activities are completed. This further expands their knowledge base on the topic and allows them to gather information that may not have come out in their pair work.

Pair work activities are one of the most effective ways to practice language in classrooms with a large number of learners. It allows the learners more opportunities to speak, which should be the goal of courses that practice language skills.

Group Work Management

Group activities are another way to practice language skills in EFL classes. Group activities will only be successful if the following principles are adhered to:

1. Teach and practice common phrases utilized in discussions by native speakers of the target language. This may include teaching some facts about the culture of the people in the target language country. One good book for this is David Kehe's book, "Discussion Strategies," published

by Pro Lingua Associates.

2. Demonstrate or show the students a video of people having discussions in English. The style of discussion in English speaking countries may be much different from the learners' country.
3. Introduce activities that practice group cooperation and the exchange of information. "Jigsaw listening" or "jigsaw reading" are two kinds of activities that aid students in learning about discussion and collaboration. Do not expect them to know how to participate at first. Social interaction is not always easy in one's first language (L1) or a foreign language (L2). Retelling stories or passing on information are also skills that need to be practiced if your ultimate goals is to develop discussion skills.
4. Discussions are more successful if a topic is chosen closely related to the students' everyday life. Discussing the Japanese trade deficit with the U.S. or Japanese politics with university students will not result in a lively discussion for the most part. Topics like; fashion, cell telephones, entertainers, current national and international events are likely to stimulate the exchange of information. The instructor needs to give careful consideration to the topics discussed in class. Polling the learners early in the year is one way to determine their interest, but periodically this practice must be repeated because of the speed at which things change in Japan.
5. Provide the learners with adequate information on the topic. Bring newspaper, magazine, and online articles to class to introduce a topic.
6. Instructors need to "sit in" on group discussions with their learners. Many of the learners in this writer's classes expressed a desire for the instructor to participate in group activities periodically. The instructor needs to make

sure he/she does not dominate the discussion or dogmatically insist on their way of thinking toward the discussion topic. This writer participated in some group discussions with his learners where the group members were in consensus on the issue presented, by arguing the opposite point of view from the group. As a result, the ensuing discussion became very challenging and continued several class periods. Learners, tried to convince the instructor his position was wrong on the issue.

7. Follow-up a discussion activity with a writing activity. Give the learners an opportunity to express their opinion or report what they have discussed in an individual (Griffiths & Keohane, 2000) manner at the end of a group discussion activity. Reading about an issue then orally discussing the issue allows the learner to gather information before they write about the topic. This way the instructor has covered the practice of all four skills; reading, listening, speaking and writing (Shrum & Glisan, 2000).

Group discussions are one of the most effective ways to practice language skills, provided the learners are adequately prepared and are given the opportunity to develop those skills gradually as the learning process takes place. This writer's colleague introduced a discussion topic by using a "jigsaw listening" activity. Learners in four different groups listened to four different speakers' opinions recorded on tape and then separated into groups of four (each having listened to a different speaker) and reported what they had heard, followed by a discussion of whose opinion was "morally" sound for Japanese society. Similar kinds of activities are successful because they give the learner the opportunity to practice skills they can utilize when interacting with peers from many different foreign countries.

Conclusion

As was stated at the beginning of this short paper, it is not the intention of this writer to present a comprehensive summary of all of the classroom management techniques and activity guidelines recorded in language teaching publications throughout the world. Hopefully, what has been written here will stimulate an interest in further research and publication in this important area for the practicing teacher. Classroom management techniques are often overlooked in the theoretical academic world of language teaching and learning, but are still of significant importance to the classroom instructor.

References

- Dornyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Griffiths, G. and Keohane, K. (2000). *Personalizing language learning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hughes, G. (1981). *A handbook of classroom English*. Oxford: Oxford University Press.
- Kehe, D. and Kehe, P.D. (1994). *Conversation strategies: Pair and group activities for developing communicative competence*. Brattleboro, Vermont: Pro Lingua Associates.
- Kehe, D. (1998). *Discussion strategies*. Brattleboro, Vermont: Pro Lingua Associates.
- Lewis, M. and Hill, J. (1985). *Practical techniques; For language teaching*. Hove, England: Language Teaching Publications.
- Ruggiero, V.R. (1998). *Changing attitudes: A strategy for motivating students to learn*. Boston: Allyn and Bacon Publishers.
- Shrum, J. and Glisan, Eileen (2000). *Teacher's handbook: Contextualized language instruction*. Boston: Heinle & Heinle, Thomson Publishing.

A Subjective Needs Analysis Pilot Study

大学生の英語学習ニーズについての予備的研究

KUMAZAWA Takaaki (College of Humanities)

熊澤 孝昭 (人文学部)

1. Abstract:

The purposes of this study are as follows: 1) to introduce a self-inventory 5-point Likert-scale questionnaire targeting Japanese university students, 2) to display the result of descriptive statistics of the pilot study in order to reveal my students' needs of learning English, 3) to calculate the reliability of the questionnaire, and 4) to validate the questionnaire by implementing component principle analysis. As for the research method, the participants are 118 first-to third-year university students. I conducted this questionnaire in three different universities in the Kanto area. The students' proficiency differs from false-beginners to intermediates. The material for this needs analysis is a 5-point Likert-scale subjective needs analysis survey. As for the procedure, I instructed the purpose of this survey and conducted this survey at the end of second semester in the year of 2002. To analyze the result of the survey, descriptive statistics is used to display the participants' learning needs. Then, Cronbach alpha is calculated to measure the internal-consistency reliability of the questionnaire. Finally, component principle analysis is implemented to validate the questionnaire.

2. Introduction

2.1. Literature Review on Needs Analysis (NA):

2.1.1. Historical background:

a) Communicative Movement:

NA becomes a necessary step in syllabus design

and specifying behavioral objectives (Yalden, 1983; White, 1988).

b) English for Specific Purposes:

NA is used to assess kinds of activities, the language functions, the situations, and language skills that learners might need for their specific purposes (Richards, 2001).

Munby model (1978) advocates a systematic approach to analyze learners' communicative needs in the following components: 1) personal information 2) purpose/expected outcomes 3) target settings 4) interactional variables 5) medium, mode (receptive or productive), and channel (written or oral) 6) dialects 7) target level 8) anticipated communicative events (macro- and micro activities) 9) key or specific manner (see also Nunan, 1988; Richards 2001 for more details).

c) Learner-centered curriculum:

In learner-centered curriculum development, "the curriculum is a collaborative effort between teachers and learners, since learners are closely involved in the decision-making process regarding the content of the curriculum and how it is taught" (Nunan, 1988' p. 2). As a means to reveal learners' needs, NA is conducted to collect various types of information on learners as an initial starting point. Nunan not only considers objective needs but also subjective or process-oriented needs to be a crucial role in determining methodological choices (Tudor, 1996).

d) The AAA (Awareness, Autonomy, and Authenticity) Curriculum:

In this curriculum, there is no such procedure as NA, but each individual has to be constantly aware of one's learning process (Awareness), has to take one's responsibility in one's learning process (Autonomy), and has to take actions that one believes to be right about one's learning (Authenticity). In other words, subjective needs are the crucial component in this curriculum development (van Lier, 1996).

2.2. Definition of Needs Analysis:

Needs Analysis refers to "systematic collection and analysis of all subjective and objective information necessary to define and validate defensible curriculum purposes that satisfy the language learning requirements of students within the context of particular institutions that influence the learning and teaching situation" (Brown, 1995, p. 36).

2.3. Types of needs:

a) Product-oriented and process-oriented interpretation of needs:

Widdowson distinguishes two types of interpretation of needs: narrow or product-oriented, and broad or process-oriented interpretation of needs. In the narrow sense, "the learners' needs are seen solely in terms of the language they will have to use in a particular communication situation." In broad sense, it is interpreted "primarily in terms of the needs of the learner as an individual in the learning situation" (see also Brindley, 1989, p. 63; Brown, 1995, p. 41; Nunan, 1988, p.44)

b) Felt and perceived needs:

Berwick (1989, p. 55) makes a distinction: felt and perceived needs. "Felt needs are those which learners have." Perceived needs refer to "judgments of certified experts about the educational gaps in other people's experience."

c) Objective and subjective needs:

Brindley (1989, p. 70) makes a distinction: objective and subjective needs (see also Brown, 1995). Objective needs refer to "different kinds of factual information about learners, their use of language in real-life communication situations as well as their current language proficiency and language difficulties".

Subjective needs refer to "the cognitive and affective needs of the learner in the learning situation, derivable from information about affective and cognitive factors such as personality, confidence, attitude, learners' wants and expectations with regard to the learning of English and their individual cognitive style and learning strategies."

d) Situation and language needs:

Situation needs relate to "any administrative, financial, logistical, manpower, pedagogical, religious, cultural, personal, or other factors that might have an impact on the program." Language needs "include details about the circumstances in which the language will be used, the dimensions of language competence involved, the learners' reasons for studying the language, their present abilities with respect to those reasons and so forth" (Brown, 1995, p. 40).

2.4. Types of Needs Analysis

Product-oriented Objective needs analysis	Process-oriented Subjective needs analysis
Communicative needs analysis (Munby, 1978)	Beliefs About Language Learning Inventory (Horwitz, 1987)
Means analysis (see Tudor, 1996' pp. 132-141)	Perceptual Learning Style Preference Questionnaire (Reid, 1995)
Proficiency Tests	Attitude/Motivation Test Battery (Gardner & Smythe, 1981)
	Strategy Inventory for Language Learning (Oxford, 1990)

2.5. Purpose:

"Needs can be stated in terms of goals and objectives which, in turn, can serve as the basis for developing tests, materials, teaching activities, and evaluation strategies, as well as for reevaluating the precision and accuracy of the original needs assessment. Thus needs assessment is an integral part of systematic curriculum building" (Iwai, Kondo, Lim, Ray, Shimizu, & Brown, 1998-1999, p. 6).

"In language curriculum development, needs analysis serves the purpose of: 1) providing a mechanism for obtaining a wider range of input into the content, design, and implementation of a language program through involving such people as learners, teachers, administrators, and employers in the planning process 2) identifying general or specific language needs that can be addressed in developing goals, objectives, and content for a language program 3) providing data that can be serve as the basis for reviewing and evaluating an existing program" (Richards, 1990, pp. 1-2).

2.6. Studies:

Matsuura, Chiba and Hilderbrandt (2001) administered a 36-item questionnaire to investigate 300 EFL Japanese students and the 82 teachers' beliefs about learning and teaching communicative English. Five sections in the instrument include their beliefs about 1) important instructional areas, 2) goals and objectives, 3) instructional styles and methods, 4) teaching materials, and 5) cultural matters. For the procedure of the study the researchers calculated frequency of responses for each item.

2.7. Statement of Purpose of this pilot Needs Analysis:

1. To find out my students' needs and preferences for my reference to come up with goals and objectives that reflect my students' needs and preferences (pedagogical purpose)

2. To reflect my teaching methods and adjust my teaching where necessary for the coming semester (pedagogical purpose)
3. To pilot the Needs Analysis instrument to be able to revise it for the future study in order to develop a more reliable and valid Needs Analysis instrument
4. To calculate the reliability of the Needs Analysis instrument using Cronbach alpha
5. To Validate the Needs Analysis by running Principal Component Analysis (construct validity)

3. Methods

3.1. Participants:

The participants in this study were 118 first to third year Japanese university students in EFL contexts. 26.27% were intermediate high first year university students majoring Law at one of the top 6 universities in Tokyo taking Listening course (Lis) which is the highest level of the general education course in the program. 19.49% were intermediate first year students majoring Literature at the same school taking lower level writing course (PWC) in the program. 16% were low-intermediate to intermediate second year university students majoring Agriculture at a national university in Ibaraki taking English Communication course (EC II). 4% were intermediate to high-intermediate third year university students majoring Agriculture at the same school taking English Communication (EC III). The last 33.90% were basic to beginner level first year university students coming from all the departments at a private school in Tokyo taking lowest level of the English Communication course (Basics).

Insert Table 1 here.

3.2. Needs Analysis Instrument:

All the survey items used for this study are adopted and developed for this study. The instru-

ment consists of 44 items using 5-point Likert scale divided into 4 parts:

- 1) Instrumentality/determination (Dornyei, 2001; Schmidt, Boraie, & Kassabgy, 1996)
- 2) Beliefs about important instructional areas (Matsuura, Chiba, Hilderbrandt, 2001)
- 3) Preference of classroom instructional activities (Schmidt, Boraie, & Kassabgy, 1996; Kimura, Nakata & Okumura, 2001)
- 4) Preference of methods (Matsuura, Chiba, & Hilderbrandt, 2001)

3.3. Procedures:

The questionnaire written in Japanese was administered in July 2001 at the end of the courses under the supervision of the teacher. To analyze the result of the survey, descriptive statistics is used to display the participants' learning needs. Then, Cronbach alpha is calculated to measure the internal-consistency reliability of the questionnaire. Finally, principle component analysis is implemented to validate the questionnaire using SPSS 9.00.

4. Results

Insert Table 2 here.

Insert Table 3 here.

Insert Table 4 here.

Insert Table 5 here.

Insert Figure 1 here.

Insert Table 6 here.

5. Discussions:

1. Most students prefer practicing communication skills to reading and writing.
2. The instrument may need more items and sections:
 - a. to make a more reliable and valid instrument
 - b. to find out more depth of students' needs
3. the instrument may need reverse-coded items
4. some of the wordings were not well-written

and may have to be re-written to clarify the meaning. For example use of double-barreled questions such as "studying/working abroad" should be avoided (Brown, 2001).

5. The reliability of the instrument was moderately high ($\alpha=.86$).
6. A new-developed instrument may need to be administered to target groups in the next study to pilot the instrument in order to validate the instrument before the actual study.
7. The number of the participants in this study is not sufficient to validate the scale and it requires a larger number of participants for another piloting study.

References:

- Berwick, R. (1989). Needs Assessment in language programming: From theory to practice. In R. Johnson (Ed.). *The second language curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brindley, G. (1989). The role of needs analysis in adult ESL program design. In R. Johnson (Ed.). *The second language curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, J. D. (1995). *The elements of language curriculum: A systematic approach to program development*. New York: Heinle & Heinle Publishers.
- Brown, J. D. (2001). *Using surveys in language program*. New York: Cambridge University Press.
- Iwai, T., Kondo, K., Lim, D., Ray, G., Shimizu, H., & Brown, J. D. (1999). Japanese language needs analysis 1998-1999. *Second Language Teaching & Curriculum Center*.
<http://nflrc.hawaii.edu/NetWorks/NW13/NW13.pdf>
- Dornyei, Z. (2001). *Teaching and researching motivation*. Essex, England: Pearson Education Limited.
- Gardner, R. & Smythe, P. (1981). On the develop-

- ment of the attitude/motivation test battery. *The Canadian Modern Language Review*, 37, 510-525.
- Horwitz, E. (1987). Surveying student beliefs about language learning. In A. Wenden & J. Rubin (Ed.), *Learner strategies in language learning*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 119-129.
- Munby, J. (1978). *Communicative syllabus design*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Matsuura, H., Chiba, R., & Hilderbrandt, P. (2001). Beliefs about learning and teaching communicative English in Japan. *JALT Journal* 23 (1), 69-89.
- Nunan, D. (1988). *The learner-centered curriculum*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Oxford, R. (1990). *Language learning strategies: What every teacher should know*. New York: Newbury House/Harper & Row.
- Reid, J. (Ed.). (1995). *Learning styles in ESL/EFL classroom*. New York: Heinle & Heinle.
- Richards, J. (2001). *Curriculum development in language teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Schmidt, R., Boraie, D., & Kassabgy, O. (1996). Foreign language motivation: Internal structure and external connections. In R. L. Oxford, R. (Ed.), *Language Learning Motivation: Pathways to the New Century* (pp. 9-70). Honolulu: Language Teaching & Curriculum Center Technical Report No. 11.
- SPSS. (1999). *SPSS for Windows (Release 9.0)*. Chicago: SPSS.
- Tudor, I. (1996). *Learner-centredness as language education*. Cambridge: Cambridge University Press.
- White, R. (1988). *The ELT curriculum: Design, innovation and Management*. Oxford: Blackwell.
- Yalden, J. (1983). *The communicative syllabus: Evolution, design, and implementation*. Oxford: Pergamon, 101-118.
- Lier, van L. (1996). *Interaction in the language curriculum: Awareness, autonomy & Authenticity*. New York: Longman.

Appendix:

NEEDS ANALYSIS

1. Why do you think English is necessary for you now and in the future? Circle one that applies to you; 1 being not important and 5 being very important.

English is necessary for me because of...

- | | 1 (not important) | 2 | 3 | 4 | 5 (very important) |
|---------------------------------------|-------------------|---|---|---|--------------------|
| a. TOEIC/TOEFL/STEP Test | | | | | |
| b. Communicating with native speakers | | | | | 1 2 3 4 5 |
| c. Promotion in the future job | | | | | 1 2 3 4 5 |
| d. Traveling abroad | | | | | 1 2 3 4 5 |
| e. Studying/working abroad | | | | | 1 2 3 4 5 |
| f. Working for foreign companies | | | | | 1 2 3 4 5 |

Else: _____

2. What skills do you want to improve in your English classes? Circle one that applied to you; 1 being least interested and 5 being most interested.

I am interested in learning...

- | | 1 (least interested) | 2 | 3 | 4 | 5 (most interested) |
|------------|----------------------|---|---|---|---------------------|
| a. Reading | | | | | |

b. Listening	1	2	3	4	5
c. Writing	1	2	3	4	5
d. Speaking	1	2	3	4	5

3. Inside and outside of class what kinds of activities are you interested in to acquire English? Circle one that applies to you; 1 being least interested and 5 being most interested.

I am interested in

	1 (least interested)	2	3	4	5 (most interested)
a. Reading technical reports					
b. Reading newspapers				1	2 3 4 5
c. Reading novels				1	2 3 4 5
d. Reading quantity of materials you like				1	2 3 4 5
e. Learning grammar				1	2 3 4 5
f. Intensive reading				1	2 3 4 5
g. Practicing TOEIC/TOEFL questions				1	2 3 4 5
h. Watching dramas and movies				1	2 3 4 5
i. Listening to tape materials				1	2 3 4 5
j. Listening to songs				1	2 3 4 5
k. Listening to speeches presented by students				1	2 3 4 5
l. Writing letters and mails				1	2 3 4 5
m. Writing journals				1	2 3 4 5
n. Writing reports				1	2 3 4 5
o. Writing curriculum vitae				1	2 3 4 5
p. Practice presenting				1	2 3 4 5
q. Practice debating				1	2 3 4 5
r. Practice discussions				1	2 3 4 5
s. Pair talk				1	2 3 4 5
t. Free talk				1	2 3 4 5
u. Others					

4. What kinds of class do you like in terms of classroom management? Circle one that applies to you; 1 being disagreed; and 5 being agreed.

I like a class that is...

a. Using one or two commercial texts	1	(disagreed)	2	3	4	5	(agreed)	
b. Using authentic materials (videos and newspapers)				1	2	3	4	5
c. Using test-practice text				1	2	3	4	5
d. Following strict guideline based on syllabus				1	2	3	4	5
e. Flexible to learners' needs				1	2	3	4	5
f. grammar focused lessons				1	2	3	4	5
g. Linguistic function (apologizing & greeting) focused lessons				1	2	3	4	5
h. Situation (being in restaurant & at work) based lessons				1	2	3	4	5

g. Topic based lessons	1	2	3	4	5
h. Skill based lessons	1	2	3	4	5
i. Task based lessons	1	2	3	4	5
j. Attendance being part of final evaluation	1	2	3	4	5
k. Paper tests being part of final evaluation	1	2	3	4	5
l. Performance tests being part of final evaluation	1	2	3	4	5

Table 1 . Descriptive statistics for the participants

	Frequency	Percent	Valid Percent	Cumulative Percent
Lis	31	26.27	26.27	26.27
PWC	23	19.49	19.49	45.76
ECII	19	16.10	16.10	61.86
ECIII	5	4.24	4.24	66.10
Basic	19	16.10	16.10	82.20
Basic	21	17.80	17.80	100.00
Total	118.00	100.00	100.00	

Table 2 . Descriptive statistics for the results of the survey

	N	Mean	Std. De- viation	Skewness	Std. Error	Kurtosis	Std. Error
TOEIC/TOEFL/STEP Test	113	3.73	0.96	-0.54	0.23	0.23	0.45
Communicating with native speakers	118	4.47	0.80	-1.75	0.22	3.42	0.44
Promotion in the future job	118	3.58	0.94	-0.22	0.22	-0.24	0.44
Traveling abroad	118	4.27	0.87	-1.11	0.22	0.91	0.44
Studying/working abroad	117	3.99	1.14	-0.94	0.22	-0.05	0.44
Working for foreign companies	116	3.44	1.16	-0.34	0.22	-0.56	0.45
Reading	116	3.62	0.97	-0.23	0.22	-0.37	0.45
Listening	118	4.45	0.85	-1.85	0.22	3.83	0.44
Writing	118	3.63	1.04	-0.53	0.22	-0.23	0.44
Speaking	118	4.48	0.90	-2.25	0.22	5.24	0.44
Reading technical reports	114	2.54	1.06	0.48	0.23	-0.20	0.45
Reading newspapers	118	3.23	1.10	-0.35	0.22	-0.77	0.44
Reading novels	117	3.59	1.15	-0.51	0.22	-0.56	0.44
Reading quantity of materials you like	118	3.56	1.11	-0.30	0.22	-0.73	0.44
Learning grammar	118	2.81	1.10	0.07	0.22	-0.71	0.44
Intensive reading	118	2.90	1.14	0.06	0.22	-0.72	0.44
Practicing TOEIC/TOEFL questions	118	3.49	1.11	-0.65	0.22	-0.06	0.44
Watching dramas and movies	118	4.38	0.89	-1.51	0.22	1.92	0.44
Listening to tape materials	118	3.47	1.12	-0.38	0.22	-0.46	0.44
Listening to songs	118	4.25	1.01	-1.37	0.22	1.37	0.44

	N	Mean	Std. De- viation	Skewness	Std. Error	Kurtosis	Std. Error
Listening to speeches presented by students	118	2.85	1.18	0.11	0.22	-0.69	0.44
Writing letters and mails	118	3.65	1.21	-0.48	0.22	-0.77	0.44
Writing journals	118	3.22	1.13	-0.02	0.22	-0.75	0.44
Writing reports	118	2.85	1.11	0.15	0.22	-0.65	0.44
Writing curriculum vitae	118	2.56	1.09	0.35	0.22	-0.46	0.44
Practice presenting	118	3.26	1.20	-0.19	0.22	-0.73	0.44
Practice debating	118	3.35	1.22	-0.26	0.22	-0.89	0.44
Practice discussions	118	3.63	1.12	-0.66	0.22	-0.17	0.44
Pair talk	118	3.78	1.01	-0.69	0.22	0.03	0.44
Free talk	116	3.98	0.94	-0.66	0.22	-0.13	0.45
Using one or two commercial texts	113	3.14	1.20	-0.06	0.23	-0.72	0.45
Using authentic materials (videos and newspapers)	118	4.47	0.71	-1.57	0.22	3.74	0.44
Using test-practice text	118	3.09	1.04	-0.10	0.22	-0.43	0.44
Following strict guideline based on syllabus	118	2.82	1.14	0.25	0.22	-0.49	0.44
Flexible to learners' needs	118	4.10	0.83	-0.38	0.22	-0.98	0.44
grammar focused lessons	118	2.70	1.06	0.36	0.22	-0.25	0.44
Linguistic function (apologizing & greeting) focused lessons	118	4.14	0.81	-0.57	0.22	-0.45	0.44
Situation (being in restaurant & at work) based lessons	118	4.03	0.94	-0.68	0.22	-0.13	0.44
Topic based lessons	118	3.95	0.96	-0.67	0.22	-0.18	0.44
Skill based lessons	118	3.25	0.88	0.09	0.22	-0.07	0.44
Task based lessons	118	4.18	0.90	-0.79	0.22	-0.36	0.44
Attendance being part of final evaluation	118	3.97	1.13	-0.89	0.22	0.06	0.44
Paper tests being part of final evaluation	118	3.25	1.10	-0.13	0.22	-0.63	0.44
Performance tests being part of final evaluation	118	3.61	1.08	-0.58	0.22	-0.10	0.44

Table 3. Result of internal-consistency Cronbach alpha for each section

Section	Cronbach alpha
Section 1 (k= 6)	alpha=.53
Section 2 (k= 4)	alpha=.69
Section 3 (k=20)	alpha=.85
Section 4 (k=14)	alpha=.67
All sections(k=44)	alpha=.86

Figure 1. Scree plot

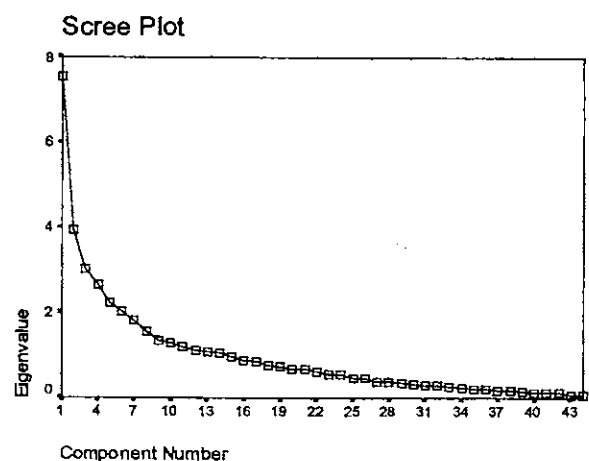


Table 4. Most and least agreed with statements

Most agreed items	N	Mean	Std. De- viation	Skewness	Std. Error	Kurtosis	Std. Error
Speaking	118	4.48	0.90	-2.25	0.22	5.24	0.44
Using authentic materials (videos and newspapers)	118	4.47	0.71	-1.57	0.22	3.74	0.44
Communicating with native speakers	118	4.47	0.80	-1.75	0.22	3.42	0.44
Listening	118	4.45	0.85	-1.85	0.22	3.83	0.44
Watching dramas and movies	118	4.38	0.89	-1.51	0.22	1.92	0.44

Least agreed items	N	Mean	Std. De- viation	Skewness	Std. Error	Kurtosis	Std. Error
Reading technical reports	114	2.54	1.06	0.48	0.23	-0.20	0.45
Writing curriculum vitae	118	2.56	1.09	0.35	0.22	-0.46	0.44
grammar focused lessons	118	2.70	1.06	0.36	0.22	-0.25	0.44
Learning grammar	118	2.81	1.10	0.07	0.22	-0.71	0.44
Following strict guideline based on syllabus	118	2.82	1.14	0.25	0.22	-0.49	0.44

Table 5. Eigenvalue of the survey items (N=118)

Component	Eigenvalue	% of Variance	Cumulative %
1	7.52	17.09	17.09
2	3.95	8.99	26.08
3	3.03	6.89	32.97
4	2.66	6.04	39.01
5	2.22	5.05	44.06
6	2.03	4.62	48.68
7	1.82	4.14	52.82
8	1.55	3.52	56.34
9	1.34	3.05	59.38
10	1.30	2.96	62.34
11	1.21	2.75	65.09
12	1.13	2.56	67.65
13	1.09	2.48	70.13
14	1.05	2.39	72.53

Table 6 . Factor loadings after Varimax rotation

	authentic com- munication	practical use of language	test prepa- ration	4 skills	h ²
TOEIC/TOEFL/STEP Test	0.14	0.06	0.48*	0.26	0.32
Communicating with native speakers	0.27	-0.16	0.07	0.53*	0.38
Promotion in the future job	-0.08	0.07	0.31*	0.15	0.13
Traveling abroad	0.40*	0.02	0.22	0.29	0.30
Studying/working abroad	-0.05	0.02	-0.13	0.47*	0.24
Working for foreign companies	-0.05	-0.11	-0.18	0.32*	0.15
Reading	-0.01	0.17	0.39*	0.39*	0.33
Listening	0.46*	0.10	0.13	0.55	0.53
Writing	0.03	0.28	0.38	0.63*	0.62
Speaking	0.52	0.14	0.05	0.55*	0.60
Reading technical reports	-0.15	0.68*	0.20	0.01	0.52
Reading newspapers	-0.06	0.56*	-0.08	0.34	0.43
Reading novels	0.01	0.65*	-0.04	0.50*	0.68
Reading quantity of materials you like	-0.05	0.52*	0.08	0.25	0.34
Learning grammar	-0.11	0.49*	0.57*	-0.02	0.57
Intensive reading	-0.11	0.27	0.56*	-0.07	0.40
Practicing TOEIC/TOEFL questions	0.21	0.05	0.49*	0.19	0.32
Watching dramas and movies	0.59*	0.05	-0.05	0.28	0.43
Listening to tape materials	0.35*	0.01	0.36	0.26	0.32
Listening to songs	0.54*	-0.03	-0.06	0.33	0.41
Listening to speeches presented by students	0.51*	0.37	-0.02	-0.07	0.40
Writing letters and mails	0.36*	0.32	0.20	0.04	0.28
Writing journals	0.32*	0.32*	0.29	0.00	0.29
Writing reports	0.01	0.62*	0.24	-0.09	0.44
Writing curriculum vitae	0.24	0.47*	-0.11	-0.04	0.29
Practice presenting	0.37	0.64*	-0.09	-0.09	0.56
Practice debating	0.41	0.70*	0.02	-0.15	0.69
Practice discussions	0.57*	0.63*	0.03	-0.15	0.75
Pair talk	0.69*	0.31	0.14	-0.12	0.61
Free talk	0.62*	0.31	0.14	-0.06	0.50
Using one or two commercial texts	-0.06	0.05	0.52*	-0.26	0.35
Using authentic materials (videos and newspapers)	0.34*	0.06	0.04	0.08	0.13
Using test-practice text	0.14	0.00	0.73*	-0.06	0.56
Following strict guideline based on syllabus	0.02	-0.02	0.44*	-0.08	0.20
Flexible to learners' needs	0.34*	0.07	-0.03	-0.04	0.13
grammar focused lessons	-0.15	0.10	0.68*	0.04	0.49
Linguistic function (apologizing & greeting) fo- cused lessons	0.54*	-0.18	0.19	-0.17	0.39

	authentic com- munication	practical use of language	test prepa- ration	4 skills	h^2
Situation (being in restaurant & at work) based lessons	0.53*	-0.12	0.04	-0.26	0.37
Topic based lessons	0.60*	-0.08	-0.08	0.15	0.40
Skill based lessons	0.15	0.18	0.15	0.07	0.08
Task based lessons	0.68*	-0.04	-0.05	0.10	0.47
Attendance being part of final evaluation	0.05	-0.10	0.29	-0.12	0.11
Paper tests being part of final evaluation	0.15	-0.08	0.61*	0.02	0.40
Performance tests being part of final evaluation	0.48*	0.12	0.01	0.08	0.25

一般教養としてのコンピュータリテラシーと情報リテラシーの調和

Harmony of computer and information literacy as a new liberal art

速水 智子 (工学部)

Satoko HAYAMIZU (College of Engineering)

1. はじめに

知ることを目標とする学芸だけが「自由学芸」と呼ばれ、実践を通じて到達される実益をもたらす学芸が「実用的学芸」と呼ばれたのはアリストテレスにさかのぼると言われている。今日、IT社会の到来により、私たちにとって実践的コンピュータの使いこなしの能力が求められるようになった。Literacyという言葉は、通常は読み書きの能力または教養があると訳される。現在ではコンピュータリテラシーとはコンピュータの基本的な操作能力と考えられている。

今、世界中の至る所で「情報教育」が進められている。子供から大人までパソコンに向かう姿は不思議でもある。そんな現状の中「情報教育」を考えた時にコンピュータリテラシーという実践面にだけ特化して良いのであろうか。そんな疑問が沸き立つ。

本稿では、情報教育を2つの側面があると考えてそれぞれの特徴を述べてみる。

1つは、コンピュータの操作実践である「コンピュータリテラシー Computer Literacy」。2つ目は情報の意味付けや関連付けなどの情報自体に関する能力を求める「情報リテラシー」である。

特に知の拠点である大学教育における「情報教育」はこの2つの側面を調和させる事によりいっそうの効果と知識の共有化が進むのではないかと考える。

2. IT社会

2-1 IT社会の到来

20世紀の後半に登場した新しいテクノロジーにより私達はこれまでに見たことも聞いた事もないような世界を経験している。人類はこれまでの歴史の中でいくつかの技術革新による変化を経てきた。15世紀のグー

テンベルクの活版印刷の発明による変化、また19世紀の産業革命による大量生産時代への転換等。しかし始まったばかりのITの潮流は私たちの生活や制度を根底から変えるほどのかつて無い大変化である。

いまや政治、経済、産業、教育といった私たちを取り囲むあらゆる要素がこの高度情報社会の中で組み替えられ再編、統合を迫られている状況にある。

この変化は3つの大きな要因による。1つ目はITによる変化つまり高度情報社会を核とした変化である。

2つ目はこれまでの社会の枠組みや制度が現在の社会に適応しなくなったという変化である。3つ目は人々の価値観や志向が多様化し多彩になったという変化である。これらはそれぞれが関係しており全く独立して考えることができないものである。複雑かつ多様なパラダイム変化である。

IT社会の2つの原動力である一つはコンピュータである。コンピュータは1940年半ばに生まれた。その後、様々なアーキテクチャーとソフトウェアの進歩があった。いまやコンピュータの性能のパロメーターであるCPUの演算速度は、18ヶ月で2倍の処理スピードで向上していると言われている。1980年代のPersonal Computerの進化によりパソコンは一般にも広がった。

一方もう一つの原動力であるネットワークの力つまり、通信のスピードは10年で千倍とも言われている。1990年代に世界的なネットワーク網のインターネットが普及した。政府のIT戦略会議により2005年までに3,000万世帯が高速ネットに常時接続し、1000万世帯が100Mbpsの超高速ネットに接続される計画である。

2002年は広域帯通信つまりブロードバンド元年とも言われた。このような高速のネットワークの基盤整備により今後様々なコンテンツが登場するであろう。

2-2 IT社会における価値観の変化

ITによる大きな社会変化は、時間と距離を意識しないことであり、私たちはいつでもどこでも情報にアクセスできる環境を手にいれたのである。第二には、大や小といった規模概念がさほど重要でなくなる。つまり量から質へ価値がシフトしていくという事である。第三は、組織の在り方が階層構造からフラットな構造へ移行していくということである。

このような3つの価値観の変化はコミュニケーションのあり方を根底から変える。

いまや情報の取得にかかるコストは限りなく安価になっている。情報をあまねく広く伝播させ、市場への参入を容易にし、調達にかかるコストを限りなく安くすることも可能となった。

一方、技術革新は道具にも及ぶ。産業革命以来の生産手段としての道具は工場の中で高価で大型の機械として存在していた。しかしデジタル化された道具の登場は、安価で小型化していった。そのことは物の生産に関わるコストを低下させる点と個人が物を生産するということが容易になった事を意味する。これまで刊行物や出版物は個人が生産する事は不可能だった。このような産業構造のみならず、ビジネス、生活の中で個人の能力へのパワーシフトが起こっている。IT社会は個人の多様な能力を純粋に表舞台に登場させることのできる社会ともいえる。

3. 情報教育の2つの側面…コンピュータリテラシーと情報リテラシー

情報教育には2つの側面があると考える。1つはコ

ンピュータリテラシーであり、2つ目は情報リテラシーである。

3-1 コンピュータリテラシーについて

コンピュータリテラシーとはコンピュータについての読み書きそろばんにあたる基本的な使い方の能力の事である。この言葉は、1960年代に思想家のPeter・F・Druckerが考えたものだ⁽⁴⁾。パソコンの浸透とインターネットの広がりにより、私たちは時間や距離を意識せずに世界中から思いのままに情報を集めることができるようになった。

しかし、それは便利な生活をもたらしてくれると同時に新しい道具としての「パソコン」を習得しなくてはならないと言うやっかいな問題ももたらされた。中高年世代のみならず若者であっても、一定期間をパソコンの習得に費やさなければデジタルデバイド（情報格差）に陥ってしまうというものである。パソコンは歩み寄った者にだけ親和性を開示する。

では、コンピュータリテラシーを身につけるためにはどのような段階を踏んでいくのだろうかと考えてみる。

次の表（表1 一般的なコンピュータソフトの分類）は、現在のパーソナルコンピュータ上で必要とされる基幹ソフトのOS（Operating System）とアプリケーションソフトについて用途別に分類したものである。ソフトウェアはこれ以外にも様々なものが存在するが例として挙げてある。

コンピュータの好みや用途によりMachintosh系のパソコンも広く浸透しているが本稿ではWINDOWSに関して述べる。

表1 一般的なコンピュータソフトの分類（Winodowsパソコンの場合）

分類		ソフト名	内容	目的効果	段階
OS	基本操作	WINDOWS	パソコンの基礎	パソコンとの親和力	A
	ファイル管理	エクスプローラ	ファイル操作	ソフトの体系的管理能力	A
	通信	ネットワーク接続	通信の設定	通信設定の基礎力	A
日本語・辞書		MS-IME	文字入力・辞書	日本語入力の技術	A
ワープロ		WORD	ドキュメント作成・管理	文章力と構造化	A
メーラー		Outlook Express	メール操作	コミュニケーション	A

分類	ソフト名	内容	目的効果	段階
ブラウザ	Internet Explorer	ホームページを閲覧他	情報検索・収集	A
プレゼンテーション	Powerpoint	表現・説明・合意形成	表現力	A
表計算	EXCEL	作表・グラフ・データ分析	データ分析力	A
ウイルス対策	ウイルスバスター アンチウイルス	ウイルスを防御する	セキュリティ対策	A
WEB作成	ホームページビルダー フロントページ	ホームページ作成	情報発信・表現力	
データベース	ACCESS	データ分析・管理	データ分析力	
ファイルリーダー	Acrobat Reader	ファイルを凡用的に読む	ファイルの表示・印刷	
電子会議	MESSENGER	テキスト・動画・音声を紹介したコミュニケーション	コミュニケーション	
DTP	PUBLISHER	本やチラシなどの編集	刊行物に対する表現力	
CG	PHOTOSHOP ILLUSTRATOR	グラフィックを扱う	芸術的感性の表現力	
グループウェア	Lotus Notes	共同作業・他	コラボレーション	

今日の情報教育においては、「コンピュータリテラシー」として段階「A」の操作方法を身に着けることが望ましい。ただし、それぞれのアプリケーションソ

フトの習得には、自立的な訓練が必要である。各ソフトはそれぞれ目的が異なる。操作方法には、共通性があるのでコツをつかんでいくことが大切である。

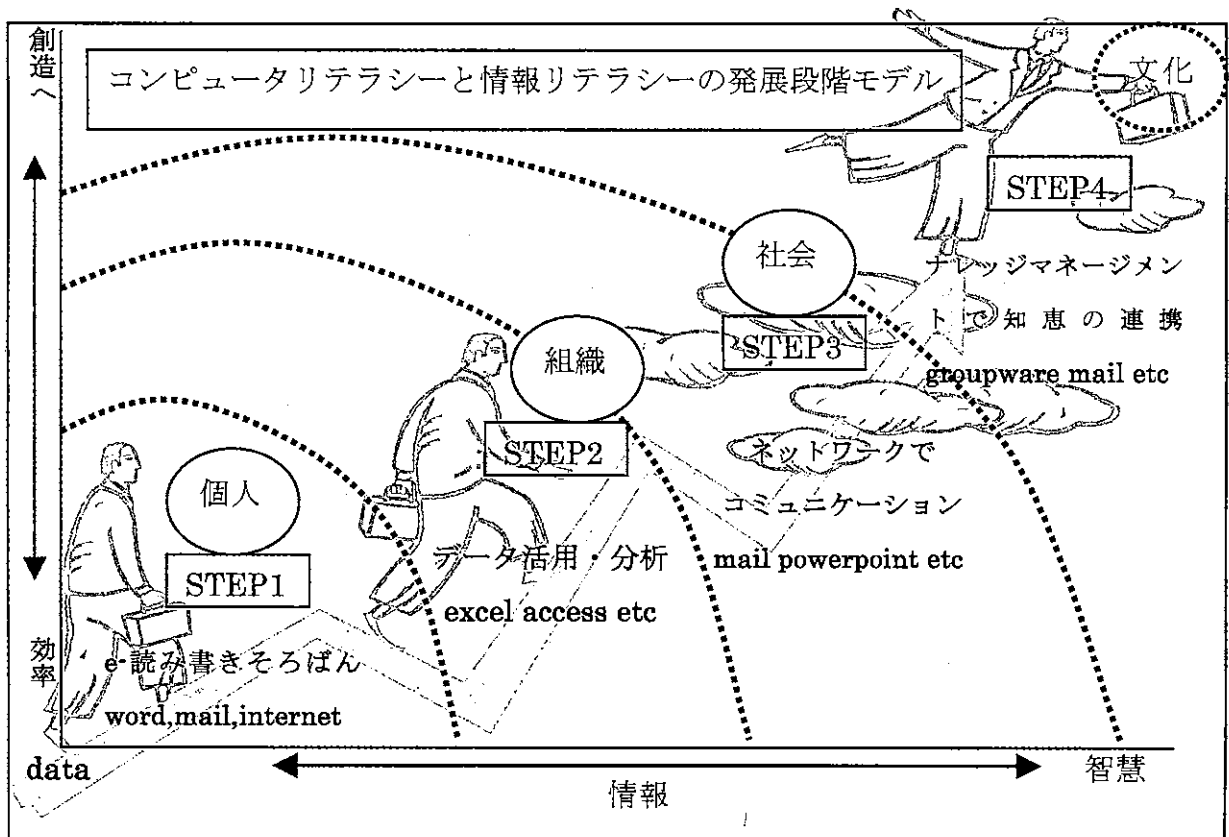


図1 コンピュータリテラシーと情報リテラシーについての発展段階

図1はコンピュータリテラシーと情報リテラシーの習得スキルの発展段階を社会との関わりもあわせて図に表したものである。

STEP1とSTEP2が本稿で述べる情報教育の領域となる。ただし、アプリケーションソフトの種類や技能については厳密な区分けはされていない。行きつ戻りつといった状況がある。

STEP1は、現在必要と思われるスキルでありコンピュータの可能性や情報社会の展望についての感覚はまだろんでいるといった状態である。しかもコンピュータに振り回されているといった思いが強い時期である。習得時間としては20時間程度を必要とする。STEP2はコンピュータとのインターフェースにも慣れ文字入力やコンピュータの持つ固有の癖にも慣れてくる。道具としての役割を感じる頃である。表計算ソフトの自動計算や定型作業による時間の効率などを実感する時期である。STEP3では他のコンピュータとのつながりや人との新しい交流を実感し始める頃である。コンピュータとの親和性が増すことにより電子メールも速やかに楽しむことが可能となる。

また自分の頭の中にあるイメージをコンピュータで表現することの楽しみを知る時期である。この段階か

ら効率的な使い方から表現手段としての使い方への可能性を知る事になる。コンピュータが楽しくなってくるのである。STEP4はコンピュータはコミュニケーションのチャンネルを多様化することに気づく時期である。電子メールやメーリングリスト、掲示板による交流やインターネットのWeb探索により、他者とのふれあいの楽しさや膨大な情報交流空間を体験する。この段階でネットによる他者との共感の妙味や情報量や情報の種類に対するセンサーが高まると思われる。

3-2 情報リテラシー

コンピュータリテラシーはこれまでみてきたように技術であり訓練を必要とする。

ヨゼフ・ピーパーは、「職能人は訓練によって作りだされ、訓練の特徴は人間の特殊な一面だけに目をむける事で、同時にまた世界の一断片だけに注目する。真の教養は全体に向かう」と「余暇と祭日」の中で述べている⁽⁹⁾。つまり「情報教育」を実用的学芸と考えたとしたら方向性を誤るであろう。むしろこれから大きく変わる社会の有様や人々の意識の中心に位置するような全体に目をむけさせる“深みのある学問”という事もいえよう。そこで情報教育の根幹を成す「情報

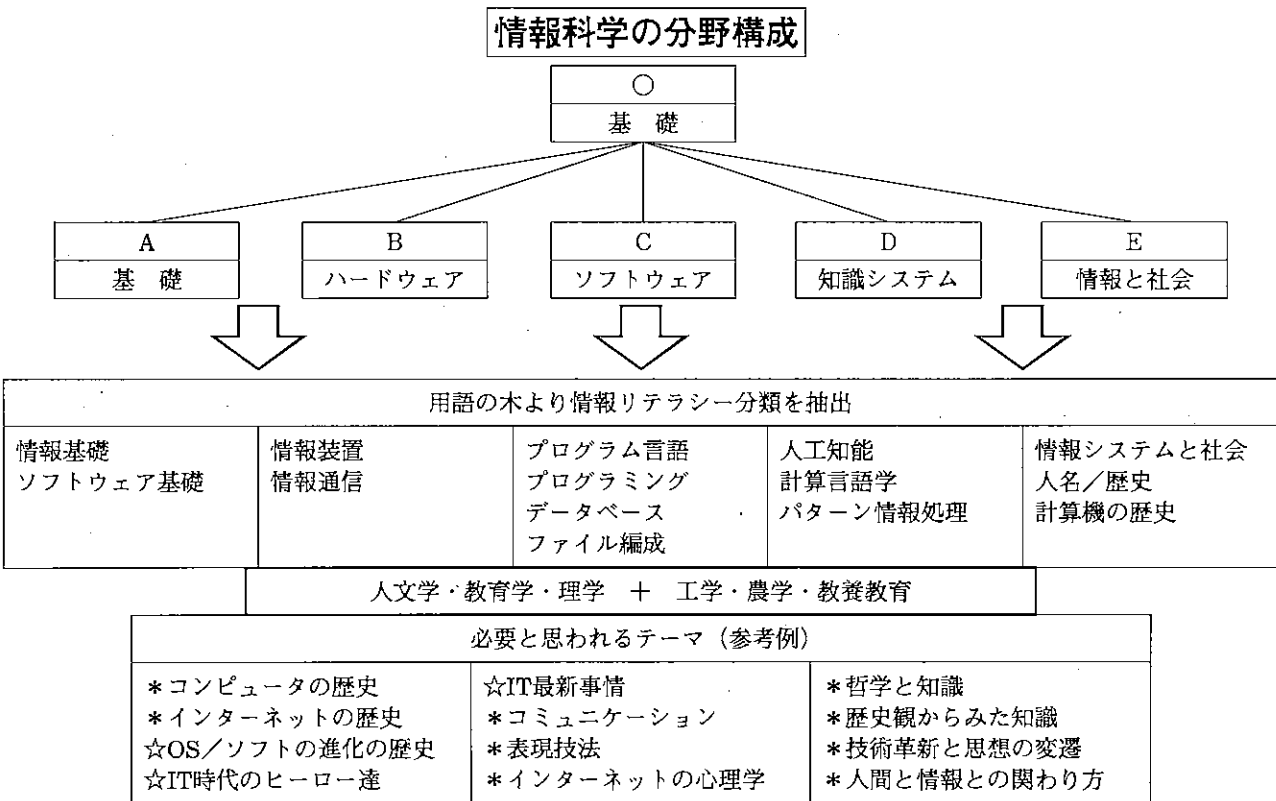


図2 情報リテラシーの領域 (立花隆 新世紀デジタル講義(岩波情報科学辞典)用語の木より参考とする。)

リテラシー」というもう一つの側面が必要となってくる。情報教育とは「どのような情報を身につけるか。それをどんな手段で手に入れるか。またどのような情報をどこにどんなタイミングで与えるか。」という事を自分で判断できるようにすることである。この基本的発想があってこそ、苦勞して身につけたコンピュータの力は真価を果たすのである。

ここで大学教育における情報教育の領域について参考までに表してみる。これは岩波情報科学辞典の「情報科学辞典の用語の木」⁽⁴⁾を参考にした。その中から情報教育に必要と思われる科目を抽出してみる。また*印で表示したテーマについては情報の意味やスピードの激しい情報化時代の最新トピックス等も含めてみた。☆印については、ビルゲイツやスティーブジョブスのヒーロー達の若い時の話など、学生が身近に感じるテーマを取り入れてみた。以下の表を見る限り情報教育の学際が広範に渡っていることが感じられる。

3-3 情報の進化

私たちの周りには様々な次元の膨大な量のデータ、情報、知識が存在している。

知識資本主義の著者Alan Burton-Jonesによると「人間や機械がやりとりする信号や合図をすべて包括して、『データ』と呼び、データのうち、受け手が理解できるものを『情報』として区別する。情報の受け手は

それを利用して別の情報を得たり技能を身に付けたりする。この2次的に得た情報や技能の集合体に『知識』という呼称をあてる。」と定義している⁽³⁾。

このようにデータは組み合わせることによって意味を持ち、次第に価値を高めながら進化していく。情報処理（パソコン）の力とネットワークのつながりにより、私達はかつて経験したことの無いような多様な質と大容量の情報を扱うことになる。

情報の質には、データレベルの段階からイノベーションにつながるような高次な知識まで様々な形態がある。マイケル・ポランニーは、「暗黙知」と「形式知」の概念を示した。暗黙知は主観的であり言語化や形式化することが困難で経験や、イメージ、職人的な技能で表される。個人に埋め込まれている知識で通常の方法では伝達がむずかしいものである。形式知は客観的にとらえることが可能で言語化して伝達することが可能である。「知識創造企業」中では知識は、暗黙知と形式知の社会的な相互作用を通じて4つの知識変換モード（共同化、表出化、連結化、内面化）のスパイラルを経て知識は高次に変換されると示している。

今日知識創造の理論はナレッジマネジメントの手法として様々な企業で取り組まれている。私たちは、いまや簡単に取得できる一時情報から付加価値のある高次の情報に価値がうつってきたことを認識するのである。

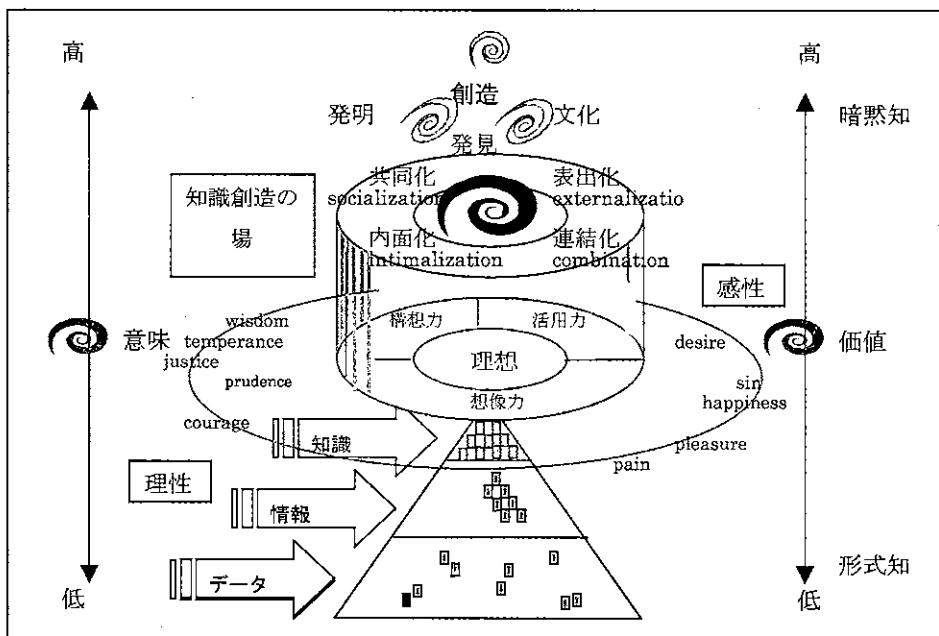


図3 知識創造の場（知識創造企業「組織的知識創造の理論」⁽⁶⁾を参考に加筆）

3-4 情報に対するまなざし

情報を選択したり、比較したり、関係性を見つけたりとといった事をふだん私たちは無意識に行っている。知識変換のプロセスの理論は多くの示唆を与えてくれる。知識に高める主役はほかならぬ我々である。価値ある知識に変換するためには、知覚する私たちの理性や感性のあり方など、人間的な側面が深くかかわっている。私たちの志向や想い、直感によって知識は多くの姿を開示するからである。

ここで情報にまつわる2つのエピソードがある。

マサチューセッツ工科大学メディアラボの創設者のNicholas Negroponteによると、ブロードバンドの定義において、「例えば2メガビットの通信速度がある。1秒間に2メガビットのデータを送れる。同じ事は1,000分の1秒で2キロビットのデータを送れるとも言える。」と述べている⁹⁾。つまりこの意味することはブロードバンドというものは、前者が大容量回線であり、後者はコミュニケーションの応答時間を大幅に向上させるものである。ブロードバンドをデータ量でとらえるか応答時間の短縮でとらえるかで定義が変わるということだ。

もう一つのエピソードは送信するデータの形態である。「書籍の場合、通常人が1時間に読むデータ量はおおむね3メガビット。一方テレビの場合、1秒間に同じく3メガビットの量のデータを見ていることになる。すなわち人間は、同じ3メガビットのデータを1時間かけて消費する場合もあるのだ。」

情報を量的に見るか、情報の質を見るのかということである。ここで情報の品質を我々は生活の中で意識する必要があるのである。

情報そのものを「知識」や「叡智」といった高度な経験軸に高めることをドイツの美術史家アビ・ヴァールブルグ (Aby Warburg, 1866-1929) は「記憶の地図」という概念で提示した。記憶の地図という概念は、「アトラス・ムネモシュネー (ATLAS MNEMOSYNE)」と呼ばれ、情報と意味、記号と画像との連鎖反応による知識創造の多様な可能性を示す概念」と言われている。個人の精神世界が土壌となり、情報を選択、統合し、その醸成した情報の連鎖で知恵の地図を作りあげる。そんなイメージが湧き上がってくる。

さて、これまでface to faceの対面交流に慣れてきた我々であった。

しかしいまやインターネット上での情報交流は加速度的に普及している。しかしWEBからの情報は、文字や数値で表現できる形式知の集合体であり体系づけられたものではない。現代社会に生きる私たちに期待される能力はこれまでのように一次情報の所有に価値を持つ事ではなくなってきた。情報を利用して流通させて移転が難しい暗黙知まで変換させる「教養」が必要なのではないだろうか。まさに、これまでとは異なる「情報に対するまなざし」が求められていると感じる。

そこには、洞察力や、直観、本質をつかむ視点、真理を目指す思考などを持つことが要求される。例えば、同じ情報でもそこに埋め込まれた見えない文脈を読み取り、知識に変換する感のよさは人により千差万別である。知識はその源泉である理性へ立ち戻って哲学になることもできるとも言われる。あらゆる学問の基礎となるような物の見方や考え方を養う一般教養はこの力を多に啓発してくれる。そこに一般教養における情報教育の必要性が生まれてくるのではないかと感じる。

4. コンピュータリテラシーと情報リテラシーの調和

これまで、コンピュータリテラシーと情報リテラシーのもつ異なる視点について述べてきた。それぞれが必要不可欠なものでありまた互いが網の目のように複雑にかかわっている。

両方がうまく連動して始めて情報社会での力を発揮すると考える。「コンピュータリテラシー」と「情報リテラシー」による調和については例えてみるとコンピュータリテラシーは料理を作るための「調理道具」のようなものである。

切れの良い包丁として使えるように毎日研磨をしているのだろうか、包丁さばきはどうなのだろうか。またどんな道具を使えば、素材を生かすことができるのだろうかなど、目的に対して、磨き抜かれた道具の選定や使い方ができるといったことが重要となる。

一方、情報リテラシーは「素材を集める方法」である。素材はいつも目の前を通り過ぎていく。必要であれば世界にも手を伸ばして調達することも可能だ。

しかし何を、どのような方法で、どこから、いつ、

集めてくれば良いのかわからなければ素材とは一生出会えないのである。「素材の収集法」を知っていることが必要である。

そして、「調理道具」と「素材の収集法」を調和させるということはつまり「料理をする」ということである。

一方が欠けていたりしては決して料理はできないのである。ただし情報という素材もピンからキリまである。目利きできる調理人であることが教養と深く関わってくると考える。つまり素材である知識の本質を見抜く深い洞察と感性が必要である。また、素材と素材を組み合わせる力や予見的な能力も欠かせないのである。

この出来上がった料理が知識になり智慧となるのである。表出表現は発言や文章化、芸術化、発見、発明など様々である。コンピュータを使った情報の収集方法を考えたり、目の前に羅列する中から必要な情報を選択したりその情報を価値あるものに高めるための洞察力や直感などの深い知性が必要ではあるが、全く新しい料理を生み出すのは創造力である。料理をする主体はもちろん私たちである。味わい深い料理を作れるか。新しい創造的な料理を作れるかは本人の腕しだいである。

つまり、「情報教育」における、コンピュータリテラシーを身につけるためには一定の実践的な習得時間が必要である。一方、情報リテラシーを身につけるためには基本的な教養が欠かせない。全体を俯瞰できる視点を

持つ思考が必要となる。つまり情報リテラシーは即座に身につくものではないのである。また一定の時間をかければ身につくというものでもない。これまでの経験や日々の生活の営みが問われるものなのである。

豊富な知識を備えているということは、将来役立ちそうなケイパビリティやコンピテンシーを持っているということになる。自分にとっての、知的基盤を作ることが大切である。

4-1 2つの調和を意識した授業要素について

さて、実際の大学教育における「情報教育」の授業概要については、2つの側面を調和させることが必要と考える。情報教育の要素をA教科カリキュラム、B授業ストーリー、C教材・課題、D共感を感じる場づくり、E学生ニーズの対応、F授業形態の6つのカテゴリに分類して考えてみる。この6つのカテゴリの関係は1つの舞台を作り上げるための要素と考えていただきたい。

A 教科カリキュラムの組立…芝居の演目のようなもの
教科カリキュラムの組み立て方に2つの視点（コンピュータリテラシーと情報リテラシー）を調和させるための大切なプログラムである。コンピュータリテラシーのAランクのソフト操作と3-2情報リテラシー

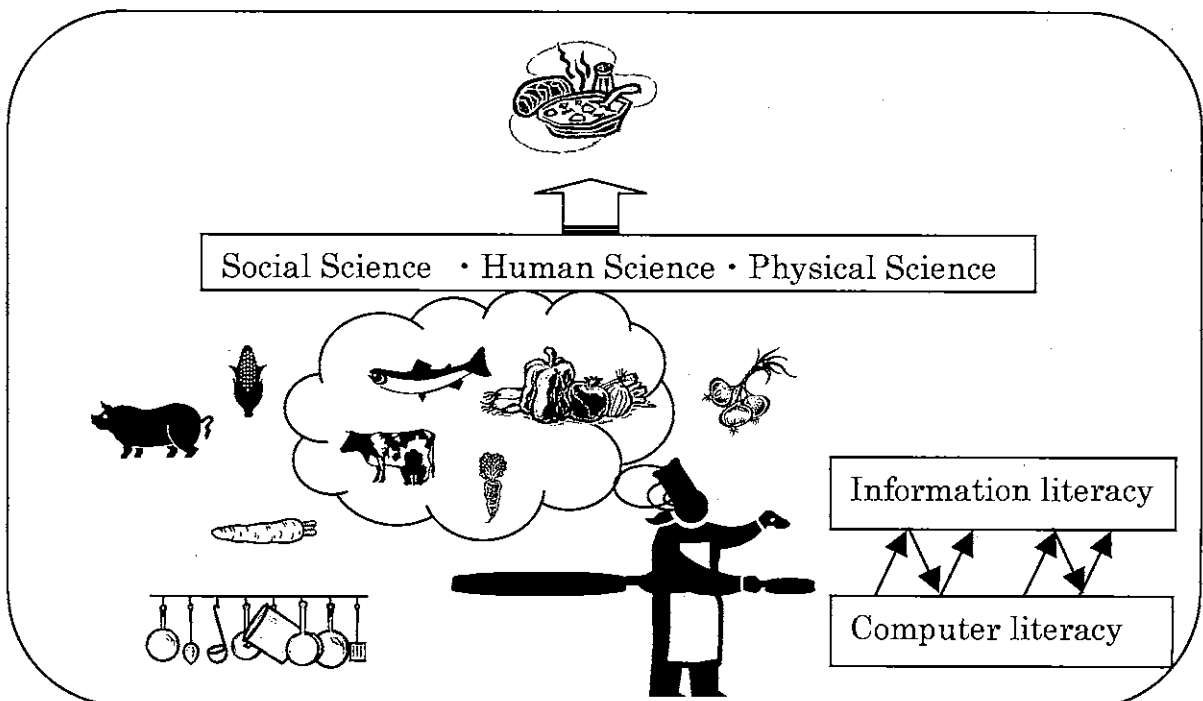


図4 Harmony of computer and information literacy as a new liberal art

の領域の各テーマを組み合わせる。カリキュラムの練り合わせによって、学生たちに生き生きとテーマが伝わるように構成することが目的である。また、情報科学の分野を超えた他の学際専門教師による「情報論、知識論」などのオムニバス形式の講座も情報教育の魅力を深める一つの形と考える。

情報教育の講義の目的をプラクティカルな操作に終始するだけでなく、現代社会の最先端の動向と関連づけ、結び付けて教科科目に興味を持てるようにする。

具体的な方法)

- ① IT関連の社会動向と本教科科目との位置づけを明確にする。
- ② カリキュラムの内容を秩序化して全体を俯瞰できるような仕掛け作り
- ③ 最近のITトピックスを関連付ける。

B 授業ストーリーの組立…芝居の脚本のようなもの

授業ストーリーは1つのリズムである。教師は学生に到達点を示す指標と道順を示すことにより一連のテーマの流れを分節化する。そのことにより全カリキュラムがつながりを持っていることを意識させる。また静的な説明と動的な実践により自分にフィードバックされるものは何かを主体的に考えるような展開方法が重要である。なお図1のSTEP4に志向する段階で、例えばMortimer J. Adlerによって提唱されるグレートブックセミナー②のような質問形式授業をおこない、学生達が自然に議論をしてお互いを高めあっていくようなスタイルも一つの試みと考える。

インターネットやコンピュータのソフトを使い情報探索能力、情報発信センスを磨くことを目的にする。またネット上での交流技法も身につける。

- ① 前後の授業を関連付ける。
 - ② 当日の授業のメニューと目的を明示する。
 - ③ ストーリーとして進捗の段階を明確化する。
 - ④ 合間にIT関連の最新の話題の提供と解説を行う。
- C 教材と課題の組立…芝居の小道具である。

教材についてはコンピュータの実践的な操作方法の教科書も必要である。しかし情報リテラシーにかかわるものとしては「知識」というキーワードにより古典的な本や最新の社会動向に目をむけるような本を使う

ことも必要である。課題については「オリジナルな発想」という事をめざしコンピュータのスキルと情報リテラシーの効果が確認できるものが望ましい。

インタラクティブな教材作りは、授業を活性化する効果がある。最新のITに関する切り抜きや本の紹介など広範囲の話題は生きた授業と考える。

- ① 双方向を感じさせる資料の作成
- ② 教材以外の資料（スクラップ、雑誌、専門書、ITセミナー等）の収集
- ③ 視覚に訴えたり比喩を使った資料の作成
- ④ 課題の設問内容や評価のやりとりは双方向性をもたせる

D 共感を感じる場の組み立て…芝居の雰囲気作りである。

魅力的な授業は授業ストーリーや教材が荒削りであっても「共感の場」ができれば補いうる事ができる。話し手、聞き手、空間、時間、人数、集団の想いや知的好奇心がうまく調和した時に共鳴できる授業となるのである。それは難しいものである。時には間の採り方やユーモアを交えることも必要である。

知的空間の中で授業を繰り広げられるために、信頼に基づく、教師と学生の間の人間レベルの相互交流をめざすことが必要と考える。

- ① 教壇上がる時は舞台に立つような緊張ある空間にする。
- ② 一人一人の視線を意識し、語りかけるように説明をする。
- ③ アイスブレイキングを充分に行い授業を通じて心の交流を目指す。
- ④ 学生から発せられる場の空気を感じとるセンサーを持つ。

E 学生ニーズとの対応…もてなしの心とケア

信頼関係に基づく授業は学生たちに多くの啓発や知的好奇心をもたらす。しかし、場は壊れやすい。そのために学生を継続的に支援していくケアの体制が必要と考える。eメール等による双方向のコミュニケーションはそのために大きな力を担う。

授業の場は教師と学生で作るものである。自立した集団によって初めて授業は知識創造に向かう。その手助けをする教師はホスピタリティと寛容の心で学生をケアする必要がある。

- ① 授業をナレッジマネジメントの実践の場として位置づける
- ② 学生が能動的に自分の知恵を使って授業に参加しているという意識の醸成。
- ③ 授業がうまくかみ合わなかった理由の分析
- ④ 場が出来たときの理由の分析
- ⑤ 時には、エンターテイメント的な要素を取り入れる

F 授業のスタイル…舞台装置である。

ITにより今後多くの授業スタイルが生まれてくる。これらのスタイルの多様化は大学が今後諸問題を抱えながらも大学のユニバーサル化に貢献すると考える。

ITを利用した新しい授業スタイルやeラーニングの展開

- ① 対面一斉授業
- ② 遠隔いつでもどこでも授業
- ③ ゼミによる少人数授業

5. 知恵の連携への可能性

今後、高速ネットワークの普及により大学においても多様な情報交流のしくみや様々なコンテンツが生まれてくるだろう。このような環境の元、コンピュータリテラシーと情報リテラシーの調和は以下のような効果をもたらすと考える。

- A IT社会への理解度と価値観の変化に基づく行動原理の取得。
- B IT社会の動向を把握し、全体と部分の位置づけが意識できる思考。
- C 情報空間における交流センスを磨くことを可能とする。
- D 情報交流社会において必要とされる個人の自立、寛容、利他意識の醸成を高める。

今後、学生たちが大学における知のコミュニティーの一員として自立していく時、コンピュータリテラ

シーと情報リテラシーの調和が一般教養として重要な役割を担うと信じる。

一方、創造性を生み出すための知恵の連携作りには一人一人の創造力の発揮が鍵を握る事になる。そのためには教師と学生が本音でディスカッションできるようなフォーラムやくるま座になって語り合えるようなコミュニケーションの場作りが大きなテーマであろう。

そのためにITを活用することは大きな可能性をもたらす。

寛容や信頼を前提としたひらめきを生み出すユニバーサルナレッジコミュニティは21世紀の新しい価値観や可能性を秘め進化していくであろう。

引用文献：

- (1) Mortimer J. Adler 外山滋比古訳『本を読む本』講談社学術文庫 (1997)
- (2) 阿久津聡, 野中郁次郎『知識創造のケイパビリティ』Harvard Business Review (2001, 8)
- (3) Alan Burton-Jones 野中郁次郎監訳『知識資本主義』日本経済新聞社 (2001)
- (4) Peter・F・Drucker 上田惇生訳『ネクストソサエティ』ダイヤモンド社 (2002)
- (5) Abraham H. Maslow 金井壽宏 監訳『完全なる経営』日本経済新聞社 (2002)
- (6) 阿部謹也『学問と世間』岩波新書 (2001)
- (7) Nicholas Negroponte『Being Wireless』Harvard Business Review (2001, 12)
- (8) 野中郁次郎, 竹内弘高『知識創造企業』東洋経済 (1996)
- (9) Josef Pieper 稲垣良典訳『余暇と祝祭』講談社学術文庫 (1988)
- (10) 立花隆『新世紀デジタル講義』新潮社 (2000)
- (11) Martin Trow, 喜多村和之編訳『高度情報社会の大学教育』玉川大学出版部 (2000)
- (12) 松田義幸『グレート・ブックスとの対話』(財) かなざわ学術研究交流財団 (1999)
- (13) Mary Modahl 村田春代訳『既存企業vsドットコム企業』ソフトバンクパブリッシング (2000)
- (14) 岩波情報科学辞典

教養教育に関する授業の実践報告

教養教育に対する私見 ―講義「変体仮名を読む」を通じて―

An Opinion of Liberal Education

櫻井 豪人（人文学部）

SAKURAI Takehito (College of Humanities)

私が平成13年度後学期に行なった共通教育科目（文学）の講義は、光栄にも本センターの推奨授業に選定されました。しかし、このことは私の講義を受講した学生が皆真面目で向学心のある学生であったことによるところが大きいと思っておりますし、また私の他にも素晴らしい講義をされている先生方がたくさんいらっしゃると思います。よって、ここで私のような若輩者が教養教育について物を申し上げるのは甚だ僭越なことに思えますが、表彰された者としてここに何かを書くのは当然の義務でしょうし、確かに何かを書かねば表彰制度の意義を半減させることにもなりかねないと思われまふ。従って、憚りながら講義に際して考えた事などを少し書こうと思ひます。これを読まれる方にとって多少なりとも御参考になれば幸いです。

1. 講義の概要

私の講義は「変体仮名を読む」と題し、受講生が江戸時代頃の変体仮名で書かれた文章を読めるようになることを第一目標に行なっているものです。

ここで、私の講義の内容をご理解頂くために「変体仮名」なるものについてご説明せねばなりません。

変体仮名とは、明治時代頃まで一般に用いられていた、主に毛筆で書かれた平仮名のことで、楷書のように角張った書体ではなく、もっと流麗な、草書体に近い平仮名の文字を想像していただければ結構です。現代でも、箸袋の「おてもと」の文字ですとか、「うなぎ」「きそば」などの看板などに時折使われているのを見ますが、「変体仮名」とは特にそういった読みにくい平仮名（というか、知らない人には読めない平仮名）と申し上げればお分かり頂けるかと思ひます。

なぜあのような文字が現代の我々に読めないのかと申しますと、その理由は楷書や草書などという書体の相違にあるとは限りません。その最大の理由は、発音と文字の対応関係が「一対一」となっておらず、「一対多」の対応になっているところにあります。

平仮名が漢字をくずして作られたものであるということは、一般にもよく知られていると思ひます。例えば「あ」は「安」から、「か」は「加」からというように、平仮名にはそれぞれ元になった漢字（「字源」と呼びます）があります。ところが明治時代以前では、例えば「あ」に対して、「安」をくずした文字の他に「阿」をくずした文字が使われたり、「か」に対して、「加」をくずした文字の他に「可」をくずした文字が使われたりします。すなわち、一つの音節に対して複数の字源の文字が存在していたわけです。「け」の文字などは、現行の「計」を字源とする文字の他、「遣」「个」「希」「氣」を字源とする文字も使われていました。「きそば」の看板が我々にとって読みにくいのは、「そ」（現行字体の字源は「曾」）の字が「楚」をくずした文字で書かれていたり、「は」（現行字体の字源は「波」）の字が「者」をくずした文字で書かれていたりするためです。これが、今日このような平仮名を「変体仮名」と呼ぶゆえんです。

よってこの講義では、変体仮名の字源を一つ一つ覚えていくことが主な作業となりますが、実はそれを知るだけでは変体仮名の文章を読めるようにはなりません。毛筆の変体仮名で書かれた文章は、文字を続けて書くためその切れ目がわかりにくく、また必ずしも句読点や濁点を記したりしませんので、現在の平仮名ほど読むのが容易ではありません。よって、古語の知識や古典文法の知識などを総動員して、文脈を考えつ

つ判読していくことになります。

さて、前置きが長くなりましたが、平成13年度後学期の講義は、概ね以下のような日程で行なわれました。

第1回 インTRODクシヨン（現行の平仮名の字源を解説する）

第2回 「きそば」等看板の変体仮名の解説および変体仮名で書かれた小倉百人一首の判読

第3回～第6回 古活字版『伊曾保物語』の判読

第7回・第8回 小テストとその答え合わせ

第9回～第12回 御伽草子『浦島太郎』の判読

第13回 『竹取物語』『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』など平安朝古典文学作品の冒頭の判読

第14回 「なぜ一つの音節に複数の字源の仮名が対応しているのか」についての講義（万葉仮名など）

第15回 試験

受講生は約30名。文系から理系まで、様々な学部（主に1・2年生）が受講しました。

2. 教育技術及び教育方法の特徴等

講義に際し特に心がけた点について、以下に箇条書きにして述べて行きます。

・半年間で誰でも必ず変体仮名が読めるようになることを強調する。

この講義は過去に2回ほど行なっていたのですが、その時の経験から言えば、たとえ理系の学生であってもしっかり講義を聴いていれば必ず読めるようになりました。逆に、文系の学生でもただ毎回講義に出て座っているだけでは読めるようにはなりません。読めるようになるか否かは、ひとえに本人の努力次第である、ということを最初に強調しておきました。

・宿題は課さない。

宿題は、課してもやって来ない学生が多くいると思われましたので、極力課さないようにしました。ただし、講義時間以外にも復習しないとなかなか読めるようにならない、と釘をさしておきました。

・たとえ毎回出席していても、最終試験の時に読めていない者には単位を与えない、と宣言する。

出席を評価に加味すると、どうしても甘えが生ま

す。また、やる気のない学生までもが受講することとなり、講義全体の質が下がります。「出席しないと単位がもらえない」という発想とは逆に、「毎回の講義に出て来ないと有益な情報が得られないので自分が損をする」とか、「楽しい講義に出ないのは損だ」などという感覚を各受講生に植付けたいと考えました。

・毎時間、全員に当てて読ませる。

「全員に」当てることが重要だと考えました。これにより、自分の読解技術が他の受講生に比べてどの程度劣っているのか、あるいは優れているのかを実感することができます。もし、あまりに劣っていると思われる学生がいたら、全員の前で優しく警告するようにしました。（ただし、恥をかかせるような警告のしかたは絶対にしないよう心がけました。）

また、最初にこの講義を行なった際、一部の理系学生から「理系の学生に当てて読ませるのは酷だ」との意見が出ました。しかし、文理の差別をしては却って理系学生に不利になります。また、後ろの方の席に座っている学生にも、後ろに座ればラクできるという印象を与えてはならないと考えました。よって、必ず同一時間中に担当が一巡するよう工夫しました。

・時折、講義時間内に自習時間を設け、その間に教室中を歩き回り、質問を受ける。

読めない字・苦手な字は各受講生によって異なります。とはいえ、一斉授業で質問を受けようとしても受講生はなかなか質問しません。そこで時々自習時間を設けて、こちらから教室中を歩き回って各受講生の質問に答えるようにしました。これを1～2回行なえば、熱心な学生たちは自主的に質問に来るようになるように感じました。

・小テストは解いて面白いものにする。

2ヶ月ぐらい過ぎると各受講生の判読能力に差が出てきます。そこで、読めなくなってきた学生を読めるようにするため、小テストを行なうようにしています。その際、ただ文字の判読をさせるだけではなく、パズル的な要素を取り入れて出題しました。当該年度の小テストでは、全ての文字が読めると出題者からのメッセージが浮かび上がるように問題を

作成しました。

この小テストは成績をつけるためのものではなく、自習してもらうことが目的なので、抜き打ちでテストをしても意味がありません。よって、事前に小テストの予告しておき、なおかつ過去の問題を人数分印刷・配布して予習させたりしました。また、採点した答案は返却し、間違えた箇所を気付かせるようにしました。

・小テストの裏には質問・意見・手紙などを書いてもらい、次の講義で口頭で答える。

これは講義の反応を知るといのが表向きの目的ですが、実は単純に受講生からの手紙を読むのが楽しいから行っていることでもあります。その内容は、講義内容の質問等はもとより、世間話やサークルやアルバイトの話、大学教師の日常生活についての質問など、本当に何でも良いことにしています。これらに対して、一つ一つ丁寧に回答することも時には必要だと考えています。結局のところ、講義内容に関する意見交換を活発にするためには、講義内容以外の意見交換を行なうことが一番の近道なのではないでしょうか。これにより、「どんなに低次元でくだらない質問でも、この先生ならきちんと答えてくれる」という信頼を得られるのではないかと思います。

ちなみに、第13回目に行なった『竹取物語』『伊勢物語』『枕草子』『源氏物語』の冒頭の判読は、この小テストの裏に書かれたリクエストに応じて行なった講義です。

3. 教育効果等

先にも書きましたが、たった15回程度の講義でも、真面目に講義を受けた者は誰でも概ね読めるようになります。これは一見驚くべきことのように思えますが、冷静に考えれば、たかだか百年前ならどんな子供も読み書きできた文字を読めるようになったただけなので、半年で読めるようになるのは当然と言えば当然のことです。

しかし、受講生にとってみれば、受講前には全く読めなかったものがたった半年の努力で読めるようになったのですから、驚きも喜びも大きいことでしょう。

なおかつそのような驚きや喜びは、講義時間中のみならず、日常生活においても時折感じるはずです。例えば、街中でふと見た料亭の看板が知らぬ間に読めるようになっていて少し感動したとか、歴史博物館・美術館等で古文書等を見たら少し読めるようになっていて嬉しかった、などという類です。その意味で、一般教養科目として適切な講義と言えるかもしれません。

その一方で、国文学・国語学・国史学など各専門分野の立場からすれば、この講義は資料（史料）判読の基礎を培うという側面も担っており、その意味で専門教育につながる講義とも言えるでしょう。各専門の講義・演習においてこの講義で身に付けた判読能力が役立ったという声も実際によく聞きます。

受講を終えた学生からは、漢字のくずし字についても読めるようになりたいとの意見も聞かれます。そのような要望にどう応えて行くのかが、今後の大きな課題であると考えています。

4. 雑 感

以上が推奨授業に選定された私の講義の概要ですが、まだ紙幅に余裕があるようなので、蛇足ながら「講義」や「教養教育」について思っていることを書いてみようと思います。

4-1 講義について

私は、「講義とはこうあるべきだ」とか、「教養教育とはこうあるべきだ」と画一的に規定するのが好きではありません。色々な意味で、様々な講義があるのが良いと思いますし、講義のスタイルは教える内容や各教官の個性などと密接に関わると思うからです。また、学生に人気のある講義が必ずしも良い講義であるとも言えないでしょうし、「面白い」とか「役に立つ」となどと形容されない講義の中にも良い講義は存在すると思っています。

ただ、自分が行なう講義については、それなりのポリシーを持っています。究極的には、各受講生が最後に「勉強になった」とか「受講してよかった」と思える講義をしたいと考えており、そのためにはどうすればよいかとあれこれ考えをめぐらせて、講義の内容や方法を決めて行きます。

私の場合、どのような話をするにせよ、聞き手がどのような知識の持ち主なのか、そしてどういう事柄に興味を持っているのかについて、常に考慮せずにはいられません。よって教養教育なら、高校卒業程度の学力でそれ以上の専門的知識を必要とせず、文系理系双方を対象にした内容にします。そのため、あまり専門に走りすぎず、できるだけ日常生活とのかかわりが持てるもの、と考えるこの講義の内容に決めました。

講義の方法も、大して試行錯誤を重ねたものではなく、あれこれ頭の中で考えた結果こうなっただけです。

この「変体仮名を読む」という講義は、教官が最初から最後までと話をするという、いわゆる「講義」という形態を取っていません。それは、講義の内容が「知識の伝達」というより「技術の習得」を目指すものであることと密接な関係があります。恐らく大半の先生方の講義は、いわゆる「講義」の形式を取られるのではないかと思います。私はそれが悪いことだとは少しも思っていません。実際、私が人文学部で行っている専門の講義はそのような形態にならざるを得ませんし、私が学生だった頃の講義を思い起こしてみても、そのような講義でありながら全く飽きさせない、魅力のある講義がいくつもありました。ただそのような形態の講義は、よほど内容に魅力があるか、あるいはよほど話し手に魅力がなければ、学生にとって「つまらない」「眠い」「難しい」と感じる講義になってしまう確率が高くなるように思います。

正直なところ、私は聞き手を惹きつけて離さないような「話術」の持ち主ではありません。また、学問を情熱的に論じるタイプでもありませんし、ユーモアを交えて愉快地に講義ができるタイプでもありません。(そのような先生の講義を拝聴すると、非常に羨ましく思います。)ただ、他愛もないことについて「会話する」ことについては好きな方ですし、誰に対してでも話を合わせられるという能力には多少の自信があります。

そのような私がよく用いる手段は、出席をとるのを兼ねて毎授業各受講生に葉書サイズの白紙を渡し、何でも良いから書いてもらって講義の終わりに提出してもらうことです。(「お手紙」と呼んでいます。)

平成13年度の「変体仮名を読む」の講義ではたまにしか実践しませんでした。平成14年度の講義では毎

回それを出してもらいました。これは、学部の専門の講義では必ずやっていることですが、翌週の講義の最初にはその一部を全員の前で読み上げて、「お返事」を述べます。それが毎回の講義の「枕」にもなりますし、何より学生にとって毎回の講義での励みになるのではないかと思います。それはあたかも、ラジオ番組へ投書したリクエストが読まれて嬉しいようなもので、自分が書いたものに対して教官側から何らかの反応があれば嬉しいでしょうし、自分が疑問に思ったことの答えを教官から引き出すチャンスにもなります。教官側にとっても、学生の様々な内面を知るよいチャンスになり、交流が深まります。(ただし、「お返事」する場合には慎重に考えてから発言しないと、却って学生との間に溝を作ってしまうことがあります。)

今回推奨授業に選ばれた講義はやや特殊な内容の講義なので、なかなか応用のきかない部分が多いと思いますが、この「お手紙」については様々な講義に活用することができ、大いに意義があると感じています。

4-2 教養教育について

上述の「お手紙」の中で、ある理系の成績優秀な学生が、「大学に入ってから数式と外国語ばかり相手にしているの、この変体仮名の講義に出るとホッとすると書いていました。私はこの「お手紙」の言葉に、教養教育の意外な側面を見たような気がしました。変体仮名の講義は、通常の「講義」よりも多くの学習時間が必要となるため、決してラクな講義ではないと思います。もし本当に息抜きしたいのであればわざわざ毎週出席しないでしょうし、そもそも上のような感想は書かないと思います。しかし、彼女は(意外にも)この講義をリラックスして楽しんでいるようでした。

教養教育が何のためにあるのかということをマジメな言葉で論じれば、「幅広い人間性を養う」とか「様々な視点から物事を捉えられる人間を育てる」というようなことになるのですが、それはやや教える側の立場に偏った表現であって、履修中の学生には飲み込みにくい理由ではないかと思います。実際の学生は、「おもしろそうだから」「興味があるから」あるいは「単位がラクに取れそうだから」「必修だから」受講しているのに過ぎないものと思われます。

そのような学生に何を伝えれば良いのか。それは各教官の考え次第だと思いますが、私の場合は「知的な楽しみ」を伝えたいと思っています。多くの学生は（私も少なからずそうでしたが）、勉強を強要されて育ってきました。大学は、学生をそのような受身の学習姿勢から、自発的な学習（あるいは研究）姿勢へと向わせる場でなければならないと思います。

それを本当の意味で実践できるのが教養教育ではないでしょうか。自分の専門の勉強にはどうしても「義務」がつきまとい、「ここまでは知っていなければならない（できなければならない）」というラインが引かれてしまいます。しかし教養科目ではそのような束縛からある程度解放されて、楽しみながら学ぶ（あるいは教える）ことができます。もし教養教育が全く廃止されてしまったら、偏った精神の人間が形成されると同時に、本当の意味での「学ぶことの喜び」を知らずに卒業する学生も増えるのではないかと危惧します。

私的授業論

An essay on my classes

橋浦 洋志 (教育学部)

Hiroshi HASHIURA (College of Education)

1.

講義型の授業とは基本的に教室に学生が集まり、そこに教師がいるというかたちをとる。別の言い方をすれば、何人かの学生を無理に教室に来させて話を聞かせるのである。たとえ学生が進んで学びにくるのだとしても、教室に充満したエネルギーはたんに人数の問題ではなく、教室まで足を運んだその労力と気力とに満ちたものと考えてしかるべきであり、授業はこのエネルギーに立ち向かっていくこととしてある。

内容が分かればそれでよいとするならば、必ずしも「授業」のかたちをとる必要はない。ものによっては自学自習で十分であるし、あるいは、プリントを配り読ませればことは足りる。なのになぜ「授業」が必要なのであるか。「授業」には文字を読むことから学べない何ものかがあるはずである。

ひとえにこれは授業者の「声」の問題としてとらえることができる。「授業」の中心を担うのは「文字」ではなく「声」であることをはっきりと自覚すること、これが授業をする者として弁えるべき基本である。換言すれば、「声ことば」の教育力とは何かを考えることが「授業」を充実させるためには不可欠である。

いま「声ことばの教育力」といったが、これはどういうものかそう簡単にいえるものではない。しかしこの「力」を前提にせずしては「授業」は成立しないことも確かである。「声ことば」は多様な「力」をもつが、ここではその冒険的側面について述べておきたい。

授業において大切なことは、話し手と聞き手の間に相互の緊張関係が成立しているかどうかである。緊張関係にもいろいろあるが、過剰な緊張はもちろんあってはならない。たとえば、指名されてでなければある種の懲罰が加えられる、あるいは授業者からの不当

な軽蔑的言辭が浴びせられる、などである。このような緊張はまったく不要な緊張でありかえって授業を阻害する。必要なのは「冒険的緊張」である。

授業者はもちろんこれから話そうとすることについて自分なりに「熟知」しておかなければならない。これはなにもすべてについて完璧に知っていなければならないということではない。そうではなく、話そうとする事柄がどのような意義をもち、どのような問題点を抱えているかという見通しのよさを、授業者は保持していなければならないということである。この意味で、これから話すことは当たり前の分かり切ったことでは必ずしもないのだ、という不確定性をみずから抱え込むことで、授業者自身が事柄との間に緊張関係をつくりあげることになる。この授業者の抱えた緊張が聞き手に感染し、聞き手を緊張させることになる。

最悪なのは、さも当たり前のように知識を投げ与えるような授業であろう。プリントをなぞり読みをする授業にはこのようなものが多い。書かれてあることを当然のこのように「解説」する授業には、冒険的な緊張感はない。

緊張感とは、話し手の論理展開の質に関わっている。こちら岸から向こう岸まで、どのようにして渡り切るかという論理展開の道筋がこの緊張を担うのであり、聞き手はこの論理展開を追うことで内的な冒険をしつつ内容を理解していくのである。話し手と聞き手をつなぐものはこのような意味での論理以外にはない。どう転んでも失敗がないような話は冒険的でもないし、また論理的でもないのである。授業は「熟知」を基底にした生き生きとした緊張と冒険を共有することで、はじめて意味をもつといえる。

2.

話をするときには気遣わなければならないことの一つに用語の問題がある。いわゆる「学術用語」というものであるが、これを使うときには噛み砕いて説明する必要がある。私の専門の分野であれば、「主人公」「主題」「構造」「～主義文学」「詩的言語」「文学的世界」とかいう類のものであるが、このような固定された言葉をはじめて聞く側にあつては、学問的雰囲気は感じるものの実は何も理解していないことが多い。もちろん話し手も「学術用語」を振りますことが学問的だと思っているふしもないわけではない。現在の問題としてはさしずめ「外来語」であろうか。カタカナ語を使えばなんとなくものをいっている感じになるのは、日本の学問水準を顕著に表しているが、ここには言葉に対する批評精神がなく、したがって、へたをすると「学術用語」は高尚な流行語に近づくおそれがある。簡単に採ることができまいとも容易く棄てられる。

噛み砕くという行為は、決してレベルを下げることではない。むしろ噛み砕いて説明することはとても難しいし、しかし、できなければならないことである。難しいことを難しいままでよいとするならば、むしろ「文字」に任せた方がよい。「声」はあくまでも「柔らかな」思考を担うのであり、言い切れずに問いの前に佇むこともまた「声」のもつ魅力なのである。思想的問いの前に話し手と聞き手とがともに佇むことこそが、学問の世界ならではの光景であるともいえる。

思考するということは、いくつかの概念を使って連想的に展開していくことと、ある概念の中身を検討してみようとするものと、同時的な行為である。どちらが欠けても思考は停止する。授業で大切なのはこの両者をしばしば往還することであり、論理が走ることは概念的連想が加速することであるが、ときおり立ち止まって使われた概念を碎き検証してみることが必要である。「学術用語」の不安定さを通して、ここにはじめて論理の面白さが開陳されるのであり、聞き手は一筋縄ではいけない学問の世界に触れることができる。

それにしても、これらのことが十分に果たされるためにはそれなりの条件がある。聞き手の質、すなわち聞き手が思考の手掛かりをもっていることである。必ずしもそれが直結する知識である必要はない。連想的

に当の思考に参加できる何らかの受け皿を、たとえそのかけらでも保持していることが、最低の条件である。わかりやすく語ったとしても、聞き手にあつて連想的にとらえる手掛かりが用意されていなければ、イメージネーションは働かない。

実はこの受け皿がどの程度のものかを見極めるのが、授業者にとっては難しい。受け皿がない場合、文字通り「箴に水」状態になりかねない。数学、理科の知識不足を嘆く声は大きいですが、どこまでやって来たかを見極めるのは比較的容易ではなかろうか。これに対して、「文学」となると、どこまでという問いさえも成り立たない。かつては「教養」として触れてきたものが今や壊滅状態に近く、文学を教える場合まさに土作りからということになる。もちろんこれはこれでいいのだが、話の飛躍度をかなり抑制しないとついてこれないということになる。したがって、聞き手がどのような手掛かりをもっていて、それと話をどのように出合わせるかということが「授業」における肝要な事柄となる。

一言でいえば、学問をできるだけ日常的な言葉に近い言葉で展開しようとする姿勢が求められるということになる。

3.

「授業を聞く」意味は何よりも「話し手の考え方」を聞くことにあり、そうでなければ、その人である必要はないし、「文字」に任せてもいっこうに差し支えない。学問における客観性とはたんに知識を並べ解説することではないであろう。客観性とは知識から等距離に身を置くことではなく、様々な考え方を肯定しつつ自分の立場からの議論に載せることでなければならない。さらにいえば、学問においても「中立的立場」ということはあり得ないのであり、何かしらの立場の選択なくして思考は展開しない。学問の客観性ということによって話し手自身の足場まではずしてしまうわけにはいけないのである。

話し手の考えが、他の論者の考えによって覆い尽くされてはならず、他の様々な考えの向こうに話し手の判断がはっきり見えていなければ、わざわざ「話し」を聞かせる意味はほとんどない。

もちろん狭隘な論断は警戒すべきである。そのためには、まず他者の考え方を肯定するところからはじめなければならない。肯定しつつ、それとは違う道筋を提示することによって独断的な考え方は回避できるであろうし、何よりも、その提示された事柄の是非を聞き手は他と比較しながら見極めることができる。「私はこう考える」ということを差し出し、聞き手に判断を迫ることを繰り返すことで、聞き手の思考は鍛えられ、聞き手の思想的な立場がゆっくりと形成されていくであろう。

学生から出る不満の一つに「高校の延長のような授業」ということがある。「高校の延長のような」とはどういうことかという、レベルの低さをいっているというよりも、解説で終わってしまい「思想的な判断が見えない授業」ということではなかろうか。たとえば材料は高校の教科書に載っているものだとしても、判断力を働かせて意味を生み出そうとすると、言い難く興味深い課題が頭をもたげてくるはずである。解説を無理矢理すべてのみこませるような授業は、受験勉強がその役を務めている。

もちろん、聞き手が真に自己の思想性を鍛えようとするならば、聞き手が話し手に廻り、「声」を出してものをいってみなければならない。たとえ「質問」であっても立派な判断力の行使なのであり、自分の判断がどのような意味をもって受け取られるかを経験することで、考える姿勢は鍛錬されるであろう。

考えるとは判断することであり、そのことは、曖昧な考えは語尾が濁ることによく現れている。日本語の場合最終的な判断は文末にあるが、考えがうやむやだと語尾が消えてしまう。そしてこの語尾を明確にすることは、本人にとっては相当努力しなければならないことなのである。言いかえれば、一つの判断を自己の責任において下すことによって、このことを起点にしてもの事を考えはじめるのである。

4.

授業は聞き終わった後にくっきりとした印象が残らねばならない。そのためにはいくつかの条件があるであろう。話し手自身が面白いと思うこと、論理的であること、細々とした議論にはつき合わず大きな流れの

なかで話を組み立てること、授業者自身が自ら考えながら話すこと。

話し手自身が面白味を感じない話を聞き手が面白く聞くはずがない。したがって、授業の前には自分が面白く話せるようなプログラムを組み立てる必要がある。このプログラムの面白さに自ら引っ張られるようにして授業は進行していくのである。プログラムの組み立てに失敗すると、気の進まない従って楽しさが損なわれた授業となってしまう。

このことは意外におろそかにされているのではなかろうか。「何が面白くてこのような話をするのか」と思われても仕方がないような、「必要なこと」という名の下の義務的な授業にしばしば陥ってしまっているのではないだろうか。もちろん自戒をも込めていうのだが、このことはその場でどうにかできるものではない。それまでの問題意識の広さと深さがものいうであろうし、日々の研鑽が問われるところである。

前にも述べたように、聞き手は話のなかに流れている「論理」を通して話を理解する。したがって論理的であることは授業の最低の条件ともいえる。おそらく「余談」もこの論理にどこかで参加していなければならない、そうでないものは「余談」ではなく「雑談」である。「雑談」は論理の緊張をゆるめるのではなく混乱させる。ここでいう「論理」とは、筋道の流れのようなものである。この流れ方は話し手それぞれに多様であっていいし、むしろ話し手の特徴がこの流れの作り方に発揮されるであろう。聞き手はこの流れを話し手とともに「冒険的」に下るのである。

細かい議論を黒板を背にしてやっているとこの流れが止まってしまう。もちろん立ち止まって詳しく話すべきことは話さなければならない。しかし、それは必要不可欠な事柄に止めておくべきであり、つねに全体の流れを意識していることが大切であろう。細かい議論は所詮大勢を対象にした「講義型授業」には向かないのであり、それはごく少人数の「対話型授業」にあってこそ可能だからである。

これが最も大切なことだと思うが、授業者はいかなる場合にあって考えながら話さなければならない。そのとき頭のなかでは大変複雑な状況が展開されているのであり、この複雑な内的状況を背景にして、簡明

な話が組み立てられることになる。たとえば、このことについては今は話さないでおこう、実はこういう問題もあるな、別にこう考えることもできるだろう、本当にこう言い切ってしまうていいのかな、等々。これらの咬きを抱えながら話を選択しつつ進めていくのであり、これは話し手にあつての「冒険的」状況に他ならない。この状況こそが聞き手に緊張感をもたらすものなのである。したがって、考えずに話すということは、「冒険性」とともに緊張関係をも捨て去る結果となる。なぜ「私語」はいけないか、その最大の理由は「授業者が自分の咬きを聞き取れないから」である。

「声ことば」はそもそも細かい議論には向いていない。大筋の、ダイナミックな展開こそが「声ことば」が担うべきものであり、「授業者」はこの特徴を活かすように心がけるべきであろう。精密で緻密な論理展開は「文字ことば」のものであり、だからこそ、「声ことば」にはのり切らない「文字ことば」の部分を意識的に捨象しながら話を進めて行くことになる。

5.

聞くことの重要性をきちんと教えることはすべての授業にわたって徹底されなければならない。話に耳を澄ますことができれば学ぶことの半分はできているといっても良いだろう。この点に関して、「何故今の学生は人の話を聞かないのだろうか」ということが、中学校、高等学校の先生方との談話のなかで話題になったことがある。いろいろと理由は挙がったが、結局行き着いた結論めいたものは、「学校でろくな話を聞かせられてこないのではないか」ということになった。「何々しなさい」「何々してはいけない」という命令口調に晒されている生徒達は、聞くべき話に出会うことなく生活しているのではなからうか。ゆっくりと落ち着いて耳を傾け、耳を澄まして聞くという行為を十分に身につけないままに、授業を受け続けてくるのではないか。そして何よりも、これにふさわしい話をしていないという教師側の問題がより重要なものではなからうかと。

聞くにふさわしい話を用意することは「授業」の基本である。しかしこれが危ういことから「シラバス」が問題になるのであろう。しかしまた、「シラバス」をあまり丁寧に書きすぎることにも問題がある。

これは文化系と理科系との違いと思われるが、文化系においてはシラバス通りにはいかないということがままあるように思う。「シラバス」は授業者にとっては覚え書きのようなものであるが、覚え書きは大まかな方がいいし、「あらまし」程度の方が実効的であることがある。

前に述べたが、話し手は考えながら話すのであって、決して決められたルールの上を走るものではない。したがって、話の途中で思わぬ問題に突き当たることもあるし、予定していなかった問題に連想的に触れ、発展していく場合もある。つまり、「予定は未定」であることを含んだ「シラバス」ということになる。原則をいえば、「予定は破られることを前提にして成り立っている」のである。この点からして、あまり細かいシラバスは話し手を規制し、連想的な思考を失わせてしまう。

知識を与えるのではなく考えることを中心におく。「授業」にあつては、予定通り進むことよりも、充実した思考の時間を生み出すことの方が重要である。おそらく、聞き手もこのことをいちばん望んでいるのであり、シラバスを最優先することには少しブレーキをかけておくべきだろうと思う。予定通りはつまらないとしておくのが「シラバス」を作成するときの心得と思う。したがって、「シラバス」は「あらまし」程度とすべきである。

理科系ではどうなのであろうか。文化系よりも学問のシステムが明快のように見えるのでシラバスもシステムテックに実践されていくべきなのかもしれない。しかし本当にそうなのだろうか。知識がなければ先へ進まないという傾向は理科系に強いが、問題は、知識の与え方にあるように思う。

これまでの知識的構図を理の当然として語る語り口に問題はないのであろうか。当然とした知的構図に懐疑的姿勢は入る余地はないのであろうか。知的な構図は常に揺れているものであり、揺れを感じないとすれば、それは一つの構図のなかに閉じられ相対化できていないということになる。必要なことは構図自体が成立する根拠を、「噛み砕いて」様々な連想的思考とともに語ることでないかと思うのだが。教養教育における理科系科目のわかりにくさは、たんに専門非専門

の問題ではなく、授業者の「声ことば」の問題としてとらえ直すことも必要だろう。

6.

以下、思いつくままに述べていくことにする。まず評価の問題であるが、どのようにして評価にたどり着くかは授業の質によって決まるのであり、画一的な評価の仕方は避けるべきである。大切なことは受講者が納得する評価であること、これに尽きる。

私の耳に入ってくる不満は、どのような基準で評価しているのか見当がつかない、なぜこちらが「A」でそちらが「B」なのか根拠が見えない、というものである。よく聞いてみると、それは評価の問題というよりも授業内容そのものに問題があることがわかる。つまり、何をしている授業なのかよくわからない、したがって、問題の意味がよくわからない、ということである。

私のこれまでの遣り方をここで述べるしかないが、講義型授業にあっては筆記試験を中心に評価してきた。レポートも課したが、これは参考程度に止め、講義内容をどれほど理解したかについて判断してきた。試験の時には何を持ち込んでも良いとし、その代わり、参考書をみてもそのままでは答えられないような問題を工夫して出した。ノートを中心に私の話を整理し文章化できれば良いのであるが、他人のノートをコピーして持ち込み、その場で体裁を繕っても文章自体が支離滅裂、誤解も甚だしい文章となって、勉強不足を露呈するということになる。まじめに出ていた学生でも、書き始めるまでには相当な時間を使って頭のなかで整理する必要がある、そのような問題を出してきたつもりである。

これにはカンニングを防ぐという意味もある。今の教室の状態ではカンニングを防ぐのは不可能に近い。したがってカンニングをできないような問題を出すことも授業者が工夫すべき事だろう。本に書いてあることをそのまま写せば事足りるようなものは、大学の試験としてはいかなものか。

4段階評価の場合、たとえば「A」と「B」との境目をどうするかに苦労した。これが「C」と「D」の場合ことは深刻である。はじめは厳密でなければなら

ないと思う故にだいたい悩みながらつけていたが、近頃は「迷ったら上のランクに」を鉄則にしている。要するに「甘い」のである。ここには、授業への自己反省も含めている。評価はおおむね的確であればいいのであって、あまり神経質になると評価それ自体が実行不可能となりかねない。

より問題なのは、極端な話ではあるが、ほぼ全員が落ちるというような授業だろう。これは授業のでたらめさを授業者自ら告白していると、まずはとらえるべきである。その上で、学生側の問題を検証し補助していく必要がある。あるいは「はじめて聞いた学生は大体落ちます」などといって、「落とす」ことで授業を妙に権威づけるなど、評価をめぐる問題は、それ以前の幼稚な問題にまで遡らなければならない様相をも呈している。

私は「主題別ゼミナール」を担当しているが、ここでは「話す」ことを中心に授業を展開している。ここでの評価はやるべき事をやれば「A」としている。話のうまい下手は問わず、与えられた課題を確実にこなすことだけが評価の対象となっている。

私のこの授業は「声の豊かさを実感する」ということをテーマにして、一人一人が前に出て話をするというもので、他はひたすら話に耳を傾けて聴き、質問し、批評するというものである。「うまい・へた」は確かにあるが、必ずしもうまく話すことを求めているのではなく、今もっている話の能力をできるだけ発揮することを求めている。受講者ほとんどがはじめての経験であり戸惑うことも多いが、やがて「声ことば」を聞くことの楽しさに引き込まれていくように見える。「声ことば」に対する意識も急激に高まっていく。

私がこの授業でかたく思っていることは「声ことばは評価できない」ということである。もちろん外国語の場合は事情が違う。だがアナウンサーをつくらうとしているのではない。母語としての「声ことばを」を誰がいったい評価できるのだろうか。「母語」は誰にも介入することのできない、その人の「持ち味」としてすでに十分に機能しているのである。「声ことば」には、その人が生まれてからこれまでのあらゆるものが詰め込まれているのであり、これは「うまい・へた」のような単純な概念でとらえられるものではない。「声こと

ば」は評価の対象にはならない、というのが私の考えである。

全員が「A」というのは奇妙に見えるであろう。しかし今述べたような事情からそうなっているのであり、評価に差がついていないのはおかしいとするのであれば、まず、「声ことば」とはどういうものかについてよく考えていただきたい。前にも述べたように、評価のあり方は授業内容、その目的によるのである。

7.

学生達に授業でものをいわせることは難しい。質問の時間を設けても、促されてやっと声を出すといった状況である。仕方がないので私は質問用紙を配りこれに書かせることにした。そうするとまともな質問がいくつも出てきたし、なかには相当高度な質問も含まれていた。一時間では説明しきれないほどの量と質の質問が寄せられたのである。三回ほど行ったが、真剣に考えさせられるものはいくつもあり勉強になった。

彼等は質問がないわけではないのである。たくさんわからないところがあるし、聞いてみたい事柄や疑問を内に抱えているとみるべきである。ただ、これを率直に表に出せないのである。このことをどうするかは私としても今後の大きな課題である。どうすれば彼等の堅いガードを崩せるか。試みたことは、はじめから声を出させるのではなく、質問用紙に書かせた上でこれを声で表現し、質問するという方法である。こうすると、内容のある質問を自信をもってこちらにぶつけてくることができた。しばらくはこの方法で行こうと思っているが、できるだけ早く直接「声ことば」で質問できるようにさせたいものである。

やってはならないことは、質問をさせておいてその質問をけなすことである。これは学生から聞かされたことであるが、「何でもいいから質問しなさい」と促されたので質問したところ、「そんなこともわかんないのか」という返事が返ってきたというのである。「わからないから質問をする」のであるから、当然丁寧に答えなければならない。

「質問をしない」第一の理由が、実はこのことにある。「馬鹿にされるのではないかと臆病になってしまうことが、彼等の口を重くしているのである。おそらく、

高校の授業でもそのような雰囲気が強かったのであろう。「わからない」ということがいかに恥であるか、その消極的な側面だけが強調され、「わからない」ことを共有してこそ思考が前に進む喜びがあることを知らされずに来ているのである。せめて大学という場にあっては、「わからない」ことを正面から見つめ考える習慣をつけたい。もしかしたら「わからないこと」は授業者にとっても意外に重要な問題を隠しもっているかもしれないのである。

付け加えれば、「感想」よりも「質問」をさせるべきだと思う。「感想」から知ること多いであろうが「感想」から対話は生まれにくいし、ましてや内容に関わることであれば「質問」の方が有効である。「質問」を通して、こちらの抜け落ちや、説明不足を気づかされるし、何よりも考え込まなければならない重要な「質問」が出てくる場合がある。こちらも勉強になる。ここが「質問」の意義深いところである。それに「感想」は書く方にとっても多少の気兼ねがいる。とくに受講者がそう多くない場合には「感想」は書きにくいし、率直に書いてもいいというところまで双方が大人になれるとは今のところ思わない。その証拠に「感想」の場合は「匿名」とすることが多い。一方「質問」はもちろん記名であり、そうでなければならない。

もちろん感想もそれなりの意義がある。かつて私の授業が終わると研究室に来て一言二言、質問まじりの感想をいう学生がいた。「面白かった」とか「あれはどう意味で言ったのですか」とか「今日の授業はわかりにくかった」とか、とにかく思ったことをいってくれるのである。私はうれしかったし、励みになった。現在留学生がいるが、彼女は授業が終わるとやって来て、「授業面白かったです」とにこにこしながらいってくれる。が、もう一つの授業に出ていてもこちらの授業については何も言ってくれない。おそらく興味の焦点がずれているのかもしれないし、授業の内容に問題があるのであろう。私は後者だと思っている。私としても新しい授業なので何をどうすべきか迷いがあるからである。この迷いが伝わっているのに違いない。

質問や感想を聞くことは授業を活性化させるにはとても有効である。なかには不適当なものもあろうが、とにかく受講者がどんなことを思い、考えながら受講

しているのかを見極めることは次への励みになるし、よりよい授業をつくっていかなければならないという、捨て身の勇気をもらえることでもある。授業はどこまで行っても未完であり、またそこが授業の遣り甲斐のあるところでもある。授業を固定的に考えず、様々な試みをしながら、より充実した時間を聞き手とともに共有することができればよいのである。大いに授業に対する批評はなされるべきであるし、それを受けて立つ柔軟な姿勢は、事をなす者誰にでも求められているはずである。

8.

「授業」は経験的な要素がきわめて重要である。授業そのものの経験はもとより、授業を聞いた経験、考えた経験、人間関係における経験など、少なくとも小手先の技術で処理できるものではない。これらの経験を基礎的財産とし言葉によって話し手と聞き手との関係をつくっていくのが授業である。もちろん様々な経験があってもいい。「こうでなければならない」ということはない。問題は、自分の経験をいかに教育的に他者に向けて提出するかにある。いわば経験の組織化である。

知識というものは目の前に均等に並んでいるかに見える。辞書はその典型であるが、しかし、これを扱おうとすると均等には扱うことができない。比重の掛け方が違うし、取捨選択が当然のこととして行われる。何ごとかについて話をするということは、知識を変容させることであって、この変容のさせ方、知識と知識との鎖のつなぎ方に、話し手による経験の組織化への意志が反映されることになる。「教養がある」というのは、何も「知識」が豊富であることを意味しない。「知識」が豊富でもきわめて幼稚であり得るし、非論理的でもあり得る。大切なことは、知識がその人となりのもとまりをもって、組織化されているかどうかである。バラバラな知識をわけしり顔に振り回す人は数多くいるが、それは教養とは関係がない。場に即してきちんと制御でき、思想的に組織化された知識、言葉こそが真の教養といえる。

したがって、「授業」もまた「教養」を育むのであれば、むしろこの組織化こそが大切だという事は自明であろう。組織化がいかに行われるか、その現場を授業

のかたちで展開することで、聞き手はそれを目の当たりにし、学び、やがて各自の真の「教養」を育む術を見いだしていくであろう。

(注)

「授業」そのもののあり方についてとくに参考にしたものはないが、発想の基礎となっている書物は、A. シーグフリート著・河野與一・河盛好蔵訳『現代弁論術』(岩波新書、昭和31年4月)である。原題は*Savoir Parler en Public* (1950) である。この書物は名著の名が高いがなかなか手に入らなかった。ところが、6年前、茨城大学の大学祭の時に積まれていた古本の中にこれを見つけた。定価の半額の50円で手に入れた。この書物からは、生きることと話すこととの強い関連性を教えられたし、とくに「冒険性」についてはこの書物から学んだ。

大学1年生のための数学の教え方

How to teach Mathematics for college freshmen

岡 裕和 (工学部)

Hirokazu OKA (College of Engineering)

1. はじめに

工学部学科指定の教養科目の1つである、数学(微分積分)の授業を継続して担当して今年度で丸7年になる。その間、どのようにすれば工学部1年生に数学を理解してもらえるか、講義の進め方や説明の方法、成績の付け方などについて試行錯誤の末たどりついた現時点での私のやり方を紹介する。

2. 入学時点での学生の状況

教え始めてすぐに気がついたことは、高校の数学がわかっていないことだった。一見トリビアルに思えることがなぜ数学の定理になるのか、などと呑気に話していたら、いざ演習をさせたとき、高校レベルの合成関数の微分の計算ができない学生が多数いることが判明したのである。「大学生の学力低下」は今ではよく話題になるが、本学の場合も、ご多分にもれずその程度はかなり深刻である。授業をするたびに「こんなところでつまづくのか」という驚きとためいきが続き、6年が経過した。その間、定期的にレポートを提出させるなどして学生の状況をつかむよう努力し、その結果、履修状況にばらつきがあること、そして講義が始まる時点でかなりの内容を忘れてしまっていることがわかった。入試が終わって1ヶ月、2ヶ月、その間何も勉強しないので苦労するらしい。問題の解き方とか公式とかを覚えてそれをひたすら適用するのが数学の勉強だと思っている学生が多いから、一度リセットして最初からやり直すぶんには忘れていたほうが都合かもしれない。ただ、微分の定義すらいえないのは問題だろう。

そこで、今年度前学期に、数Ⅲと数Cの履修状況およびその理解度を学生の自己申告によって調査してみ

た。数Ⅲは1割弱、数Cは1割強が未履修だった。履修はしたけれどもよくわかっていないという学生も多かった。

3. 授業に対する方針

上記の諸事情を考慮して、「高校数学が身についていないことを前提として、学生にわかる」授業をする方針を立てた。ただし、高校でやったことをそのまま復習するのでは学生は退屈してしまう。高校までの微積分に対する彼らのイメージはおそらく「微分は接線、積分は面積」であろう。大学生になってもそれだけでは困るから、「微分、積分とは何か」という話から始めることにした。ただし、上述のように微積分の計算でつまづく学生も多いので、計算力も養いながら同時に意味にもこだわった講義を実行した。そのためには授業でとりあげる項目は厳選しなければならない。さらに工学に携わる者にとって数学は道具である(と言われている)から、ここで学ぶ数学が専門科目を学ぶための基礎になることを具体的に実感できるよう配慮した。

4. 授業の方法

授業の初めに講義内容、言いたいことを簡潔にまとめたレジュメと自作の演習問題のプリントを配布する。概念の導入にあたっては天下り式はできるだけ避ける。どうしてこういうことを考えるのかとか、抽象的な概念に対する直観的なイメージや本質的な意味を強調する。物理例を示すのも1つの方法である。ただし懲りすぎには気をつけなければならない。あまりくどくど教えると学生はかえってわからなくなる。それから、学生がつまづきやすい点や間違えやすい点は明

確に説明する。このような注意はなぜか、市販の教科書には触れられていないことが多い。レジュメにはこうしたことも盛り込まれている。レジュメがあれば板書の手間を省くことができる。板書の仕方工夫が必要だ。何も考えずにそのまま写す学生がほとんどだからだ。色のチョークを使うたびにパターンパターンという筆記具を持ちかえる音が聞こえてくる。色まで同じにしているのだろうか？板書があっちこっちへ飛ぶのも避けなければならない。

説明時間が長すぎないように十分注意して（学生の反応をみていると30分くらいがベストで、60分は長すぎるようだ）、説明しては演習問題をやらせる、を繰り返す。学生には必然的に集中力が要求される。ときには教える内容も問題にしまい、その問題を学生自らが解きながら新しい概念を学んでいくという場合もある。

授業終了時には、演習問題の解答のプリントを配布しレポート課題を出す。解答のプリントを配布する理由は学生は答えまできちんと示さないと不安になるからである。中途半端に授業が終わったとき（できるだけそうならないように注意すべきなのだが）、「続きは来週に」とか「あとは各自、やっておくように」は最悪である。予習復習をする学生ならともかく、一週間たったら忘れてしまう学生が多いし、「やっておけ」と言われても成績に関係なければやらないのが普通である。レポート課題を出すのは授業内容を理解できているかどうかを確認することが主な目的である。したがって、たいいてい、課題は簡単な問題が1, 2題、ただし、毎回である。レポートをチェックしていると、例年、間違えるところは間違え方も同じであることに気がつく。そしてこちらが全く予期し得ない、想像がつかないところでつまづくことも多い。レポートをみる手間はかかるが（じつは慣れるとそうでもなくなる）、教え方の工夫を考えるよいきっかけになる。学生のほうも「レポートは復習になってよい」という声が多い。嫌がる学生は少なく、むしろ「出してくれ」という学生までいる（嫌なのは教官だけ？）。たまに、「こういう問題はできるのだろうか」というこちらの好奇心から、一風変わった問題も出したりもする。結果は惨憺たるものだが…。

レポートの提出期限は次回の授業の開始時点としてゐる。遅れて出したときはレポートの評価を一段階下げることになっている。このルールによって、提出者のほぼ全員がきちんと最初に提出するようになる。学生は成績にはきわめて敏感である。レポートは提出時の次の授業時に解答とともに返却する。

5. 授業の前後で行っていること

授業前は、講義のレジュメおよび演習問題のプリントを作成する。授業後には、説明にはどれだけ時間がかかったか、演習の時間配分は適当だったか、など詳細な授業の進行記録をまとめておく。これが次年度の参考になる。学生にとっては長い90分も教えるほうにとってはあっという間である。何をしゃべって何を削るかには細心の注意を払っている。したがって、雑談というひまがなくそれが不満だという学生もいる。

6. 授業の到達目標および成績の付け方

講義では本質的なことをしゃべるが、それがわかっているかどうかを試験では期待しない。授業の方法で述べたことと矛盾するのではないと言われるかもしれないが、「やったことのある問題しかできない」、「ちょっとでもひねられるとできない」状態から脱皮させるのは容易ではない。試験問題は、原則的に授業でとり上げた演習問題、レポート問題の類題で、しかも非常に基礎的なものに限って出題することになっている。100点満点の試験を学期末に1度行い、50点以上を合格と判定し、40～49点の者はレポートの提出状況およびその評価をみて救済措置を講じる。

7. 学生の反応および試験結果

最後のレポート問題で授業の感想文を書いてもらう。センター主催の授業アンケートでは時間の制約上、一言、書いてくれる学生は少ない。レポート問題なので、ほぼ全員が提出する。名前も書かせるので、本音を語ってくれているかどうかは判断できない。好意的な意見が多かったが、テイラー展開などの難所は、例年、難所であることにかわりなくわかりづらいようだ。いろいろ工夫したつもりだったが…。話を高校レベルから始めたことについては賛否両論で、「高校の

復習が多すぎてつまらなかった」という意見もあれば「やってくれて助かった」という意見もあった。授業のレベルをどこに設定するかは難しいところだ。定期試験の結果は受験者総数72人中、50点以上59点以下が8人、60点以上69点以下が14人、70点以上79点以下が14人、80点以上89点以下が12人、90点以上が9人（うち2人が満点）だった。授業内容、レベルなどが年度によって一定していないので、一概にはいえないがこれまでの7年間で最も良い結果だった。なお、49点以下の15人のうち10人はレポートで救済した。感想文の内容と試験結果が必ずしも一致しないのは毎度のことである。

8. 最後に

「先生の授業は塾や予備校の授業みたいだ」と学生に言われることがある。勉学に手厚い指導がある高校までのスタイルに似ているのだろう。だからこそ、学生に受け入れられやすいのかもしれない。だが、大学は自分で勉強するところである。これをどうやって学生に悟らせればよいのか。高学年になっても、本（専門書）の読み方を知らない、つまり勉強の仕方を知らない学生が多い。この点については、昨年度のセンター年報で工学部の小林先生も触れられている。数学の場合も同じだ。すなわち、数学を理解するためには紙と鉛筆をもって1行1行をていねいに、ある程度の緊張感をもって自分なりにフォローしていく訓練が必要である。ゆっくりじっくり勉強してこそ面白さがわかるのである。このようなことを授業でしゃべったことはあるが、ほとんど素通りで効果はなかった。個別指導ができれば一番いいのだが、全員を対象とするのは不可能だろう。そこで最後に提案、「1年次から研究室に入れる」。「1年から専門バカにするのか」という反論はあるだろう。しかし、今までに「大学生ってひまだね」という声を4月の水戸キャンパスで何度も耳にしてきた。大多数の学生は「興味のあることをみつけて自分で勉強しろ」などと言われても、何をしたいのかわからないのが現実だろう。ならば、1年次から最先端の研究にふれながら、教養科目を学んでいくことも可能なのではないだろうか。大学生へ入学して放置されたままの状態が続けば、学生がどうなっていくか

は言うまでもない。いきいきと、意欲のある1年次を逃す手はないと思うのだが、どうだろうか？

推奨授業実践報告：数学

Class report by teaching award recipient : Mathematics

榊原 暢久 (工学部)

Nobuhisa SAKAKIBARA (College of Engineering)

1. はじめに

この報告は、2001年度後期に本センター推奨授業として表彰された自然系科目「数学」の実践報告である。私は、平成8年に本学に赴任して以来7年間、この講義を担当している。また、後期に限って言えば、この講義を工学部都市システム工学科向けと電気電子工学科向けの2つ担当しているの、結果的には14回の講義経験があるといってもいいだろう。大学での数学教育という学問が真に存在するかは議論のある所だろうが、論文・研究ノートというからには、「科学」として報告されるべきである。一方、実際の教育現場で、授業観・授業技術に類したものがあっても「職人芸」のように伝えられているように感じることがある。無論、私の講義は「科学」・「職人芸」どちらの域にも達していないし、特に目新しいことをやっているわけでもない。しかし、大学教育の質的向上の一助になればということで、講義の内容は「積分・重積分」であるが、講義において留意している点などを一般論として述べさせていただく。

2. 講義の準備として

講義をする前にまず教科書を決め、いわゆる教材研究をしなくてはならない。適当な教科書がない場合、自作のプリントなどがこれにかわる。私の場合、本学に赴任してすぐ、この講義のための教科書〔1〕を執筆した。また、工学部の数学ミニマムの教材〔2〕作成に参加していたので、その経験が大いに役立っている。それゆえ、教科書の内容や講義の進め方は十分把握されていた。しかしながら、そんな教科書でさえ万能とはいえず、演習用のプリントとその解答を作成し、配布している。

教科書を決める時期と前後してシラバスを作らなければいけない。毎年やっている講義だから変更なしでよいかという、必ずしもそうではない。前年の講義時に、講義をするごとに進度をシラバスに控えておき、時間配分や内容がそれでよいかを検討する。そのことによって、自分で内容や進度の再確認が出来るし、学生の質的变化にもこまめに対応することが出来る。

次にすることは、クラス名簿を入手することである。この講義は学科指定されているので、名簿は簡単に手に入る。工学部キャンパスでの、学科は限定されているが学年が限定されていないという講義では、その学科の全学年分の名簿を用意する。それらの名簿に含まれない受講生はわずかであるので、その分は開講時に加えればよい。名簿を用意したら、出欠をとるときに「君」「さん」の区別ができるように男女の把握をし、同じ姓の人を区別できるようにその部分は名前まで呼べるようにチェックする。くだらないと感じる方がいるかもしれないが、出欠をとられるときに名前を間違えられたり、他の人と取り違えられたりするの、私の経験からも不快なことである。サービスを提供する側は、サービスを受ける側がそんな簡単なことで最初に不快感・抵抗感をもつことを、その後の講義を進める上で避けるほうが賢明ではないだろうか。出欠をとること自体に、いろいろな理由で異議がある方もいるだろう。私も、以前は出欠に関して厳格ではなかった。しかしながら、数年講義をしてみて、講義に出席せずに合格点に達する学生は、ほとんど皆無に等しかった。それゆえ、学生の学習機会の増加を励行する意味でも、出欠を厳格につけている。

3. 開講時に

第1回目の講義のときに教科書の案内をし、講義を進めていく上での方針を伝え、単位を認定する基準を明確にする。まず、出欠は毎回必ずとるということ。欠席は1回、遅刻は0.5回の欠席とみなし、欠席が5回以上になると試験の受験資格を失う。これは、3分の2以上の出席を求めている学則に従ったものである。次に、講義の進め方を説明し、2回の試験の合計点で評価することを伝える。具体的には、平均50点以上なら合格とし、おおむね10点刻みの評価となる。得点が境界上にある場合や、平均40点から49点の間にあるときには、出席状況や演習問題の解いている状況を考慮する。質問は講義の終了時にするか、電子メールを使うことを推奨する。水戸地区に教官室があればいつでも対応ができるが、私の教官室が日立地区にあることもあって、この方法を採用している。学生にはおおむね好評である。

4. 講義の序盤

講義の最初の15分程度は課題をやってもらうことから始める。5～18人程度の学生に、指定した演習問題を黒板にやっておくように既に指示してある。もちろん、第1回目の講義や1回目の試験直後など、この部分がない場合もある。最初に解答を書いてもらうのは最大9人までの学生で、黒板のスペースを人数分に分けておく。残りの学生がいれば、後にとる演習の時間にやってもらう。この「スペースを分ける」ことは、最近になって学生のアンケートにこたえて始めた。長い間、何人がどこに書いてもよろしいということで進めてきたが、字が小さいとか、読みにくいとか、アンケートに要望として訴える学生が激増してきた。1回に解答してもらう学生の人数を減らすと、講義時間のやり繰りが苦しくなったが、その分、解答をしながら、ここまでの復習や誤りやすい点を、具体的に学生に見せることが出来る。

近年、特に学生の解答の書き方が、不正確・不適切になってきている。入学時までに適切な指導がされていなかったと考えられるが、それをここで言っても仕方がないので、演習問題を解く段階から、うるさいくらいに細かく指摘する。また、論理的な思考や説明もますます苦手になってきている。解答の流れに違和感

があり、時間に余裕があれば、論理的な説明を求める。数学は論理的な記述や説明を練習する格好の科目である。ここで少しでもそれらの事が改善されればと思う。

5. 講義の本題

課題をみた後、講義の本題である。新たに学習する内容を説明し、例題を解いてみせる。その後に、関連問題を解く時間を与える。ここで演習問題のあてられた学生が残っていればやってもらい、出欠をとり、次回に演習問題を黒板でやってもらう学生を指定する。半期で学生一人あたり2回程度は黒板で解答することになる。指定された学生が、理由なく次回の講義に欠席して解かなかった場合は、評価時に負の考慮の対象となる。この後、解くように指示していた関連問題の解説をして講義が終わる。講義が終わっても、すぐに退室はしない。学生がまだ板書を写していないかを確認しながら板書をゆっくり消す。この時間的な余裕が、質問をしやすい雰囲気を作る。事実、クラスの雰囲気が徐々に良くなっていくにつれて、質問の量も増えてくる。

新たに学習する内容を説明するときに留意しているのは、論理的な証明と具体例での説明を使い分けることである。数学という学問の性質上、本来は、論理的に一つ一つ証明をしながら事実を積み上げることが要求される。しかし、証明をしてみせることが内容を理解することに必ずしも役立つとは限らないし、時間的な余裕もない。簡単な証明をすることで理解が促進されるのであれば説明するが、具体的にどんなことを言っているのかを具体例で説明したほうが理解しやすいなら、その方法を選択する。始めから難しいと感じてしまうと、その抵抗感を払拭するのは並大抵のことではない。最初の説明と例題の解説では「なんだ簡単じゃないか。わかったような気がする」と思ってもらうのが一番である。演習問題を解いてみて、新たな疑問点にぶつかり、もう一度考えてみて問題点を乗り越え、他の問題を解いてみると次の疑問点にぶつかり…ということを繰り返すことが出来れば自ずと学習は進むはずである。そのためにも演習の時間は欠かせない。また、高校から大学への接続教育が課題としてあげられることからわかるが、必ずしも高等学校の数学(特に数学Ⅲと数学C)が理解されているとはいえない。

これらのことを始めから「そんなこと知らないのか」とか、「既に復習したじゃないか」と言っても始まらない。理解するうえで必要なことは、その都度、時間の許す限り何度でも復習する。もちろん、これらの科目をまったく履修してこなかった学生に対して、この講義内で完全にケアすることは難しい。その意味では、受験科目を見直すか、合格決定後のケアを充実させるか、補習用の講義を用意するか、何らかの対策が急務だろう。

6. アンケート

半期に1回、おおむね3～4回目の講義時、大学が行うマークシート方式のアンケートとは別に、無記名・自由記述方式のアンケートを行っている。この内容は千差万別で、表情や話し方、黒板への書き方や演習問題のあて方・説明の仕方、出欠や試験、講義の進度、演習用プリントや解答への要望・意見といったものが多く見られる。これらの意見に対しては、次の講義時に自分の意見を伝え、改善できる点については改善することを約束する。大学の教官にとって、自分の講義に関する意見を言ってもらう機会は殆ど皆無である。どうしても、自分が受けた大学での講義のイメージを引きずりやすくなるのではないだろうか。しかしながら、少なくとも私が講義を受けたころとは、学生や社会の要求する講義のあり方が大きく様変わりしている。あらゆる要望に応えることは出来ないが、学生へのアンケートに書かれる要望には、多くの対応すべき改善点が含まれている。この中の幾つかに対して誠実に対応するだけで、講義は各段に雰囲気の良いものになる。

7. 試験

既に、試験は2回行くと書いた。1回目の試験は8回目の講義あたりで行われる。2回目の試験は15回目である。試験は座席をこちらで指定し、なるべく隣りあわせに座らないように配慮する。机上には、筆記用具（シャープペンシルの芯を含む）・消しゴム・定規・時計を置くことを認め、下敷・筆箱・眼鏡ケース・携帯電話などを置くことは認めていない。途中退室は認めるが、トイレなどの一時退室は認めていない。試験用紙はA3版の表裏印刷で、問題文と解答を書く空欄が順に6～8個並んでいる。A3版という大きな用紙

にしたのは、計算用紙を配らないかわりに、計算のスペースを確保するためである。学生1人あたり1枚の用紙であるので、不正行為などに用いられかねない余計な用紙が試験中に教室に存在しない。学生に余計な誘惑を与えかねない環境は、極力排除すべきである。

採点は1点刻みで基準を設けてつけている。1回目の試験の解答は、その次の講義時に各自の解答を一時的に返却した上で説明する。もちろん、配点や平均点・最高点・得点分布なども簡単に説明する。このときに、解答の書き方や典型的な誤りの例についても説明する。2回目の試験の解答は出来ないが、希望する学生には自分の答案の採点結果を見せ、どこがどのように間違っていたかを説明する。以前は半期に試験を1回だけ行い、教科書の中の問題を自分で提出したい数だけ無制限に解いて提出するレポートを出していた。しかし、1回の試験では、すべての内容を学習して試験にのぞむことが年々難しくなっているようだと感じ、2回の試験のみに変更した。

8. おわりに

半期の講義が新たに始まる時、私は多少の不安とともに、一種ワクワクとした気持ちになる。そして、教室に入る直前、これから一舞台始まるという意識になり、一気にテンションが上がっていく。前任校（旭川工業高等専門学校）でも時折感じるがあったが、小学校での5週間の教育実習の折、指導していただいた先生が指導記録の中で、「子供をひきつけるのは指導する力だけでなく、若さや人柄も大きな力となるのですね」と書いていたことを思い出す。もはや、私に若さはなくなりつつあるが、意欲や楽しさは学生にぶつけることが出来る。書いてしまえばあたり前のことであるが、指導する力の向上とともに、意欲や楽しさを含めた人間性の向上が必要なかもしれない。

9. 参考文献

- [1] 荷見守助 編著、岡裕和・榊原暢久・中井英一 共著、「解析入門 微分積分の基礎を学ぶ」、内田老鶴圃、1998.
- [2] 工学基礎ミニマム研究会 編、工学基礎ミニマムシリーズ 数学ミニマム、学術図書出版社、2002.

推奨授業実践報告——健康・スポーツ科目 バスケットボールの場合

Class report by teaching award recipient: Health and physical Education “basketball”

木村 元子 (教育学部)

Motoko KIMURA (College of Education)

はじめに

私が担当した健康・スポーツ科目 身体活動 バスケットボールという授業が、平成13年度の推奨授業に選ばれた。それを機会に、私が授業で工夫しているいくつかのポイントについて報告する運びとなった。当授業で学生からの満足度評価が高かったのは、その時その時の学生の状態にうまく呼応してリードすることに成功できたところが大きいと思う。紙面でそのやり取りを表現するのは所詮限界があるし、今年の授業ではまた少し違う方法を取り入れて進めてもいる。今でも試行錯誤のくり返しで改善していくべきことはたくさんあると思うので、この報告がまた新たな批判を受けてよりよい授業が実践できるようになればと願っている。

授業のねらい

私は文化としてのスポーツを生涯にわたって享受していくために必要な能力を養っていくことを授業のねらいとしている。人間の生(生命)・生活・人生(生涯)をよりゆたかに充実させるスポーツは、決して体力や身体能力の高い者たちだけが占有的に楽しむものでもないし、ましてや他人から強制されてやらされるものでもない。受講者全員が仲間たちとのかかわりの中で自分の能力を存分に発揮し伸ばしながら積極的・自主的に参画してスポーツを楽しむこと、自分に合った生涯スポーツのあり方を探っていくことを、バスケットボールを通して学べる時間にしたいと思っている。

具体的には次の4つにポイントを置いて指導している。

1. コンディショニング能力の向上

——自己管理にむけて

学生の体力はまちまちで、当初、自分のコンディショニングを整え高めていこうとすることに対して消極的である。そこで、自分の体調に対する感受性を高め、コンディショニングを継続的にこなえるように意欲、態度、実践の変容の可能性を高める。

2. コミュニケーションの向上

——自他共にOKに向けて

当初、学生はお互いに面識もなく、一緒に授業を受ける人たちがどのような人たちで自分がどのように関わっていけばいいのか、不安な状態である。そこで、自分をのびのびと表現し、他の人たちのことも受け入れていけるような場をつくり、言語的・非言語的コミュニケーションを豊かに実践できるようにする。

3. バスケットボール技術の向上

——スポーツ文化の享受能力の高まりに向けて

バスケットボールは高校までの授業で全員が経験しているものの、その技術格差ははなはだしい。各自が自分の課題を設定し、その課題に取り組むことの楽しさ、できたときのよろこびを体験すると同時に、仲間と共感しあいながら協力してスポーツを楽しむ姿勢を養う。

4. 自己充足感の向上 ——自己実現に向けて

いま、ここにいることに喜びを感じて、一部分に偏ることなく全員が、今ある能力を十分に発揮して充実した一時間半を過ごせることをめざす。それを繰り返し成功体験として積み重ねていくことによってセルフ・エスティームを高めていく。

授業での工夫

では、次に授業の流れにそって私が工夫している点

について紹介する。

1. 導入 ころとからだの緊張をほぐそう

授業の導入のときに、ころとからだのほぐれていく心地よい感覚を共に感じ、共に楽しめるようになるための工夫として、以下のようなことをしている。

(1) 三人組ストレッチ体操

これは、コンディショニングとコミュニケーションのアップのために行っているものである。まず、前もって準備してあったストレッチ体操のテキストを学生に配る。最初は私が丁寧に説明をしながら、2限目以降は学生が自分たちで担当する箇所を互いに教えあいながら三人組でストレッチ体操を行うよう指導する。体操の仕方のみならず、教科書を用いてウォーミング・アップやクーリング・ダウン、ストレッチ体操の効果について科学的な説明を並行して行い、それに関する簡単なレポート課題を1限目の段階で出した。そのことでクラス全員にストレッチ体操についての共通認識ができ、互いの情報交換をスムーズにおこなえるようにした。毎授業のはじめにストレッチ体操を学生同士おしゃべりしながら友好的に行うことは、緊張しているからだところを徐々にほぐし、これから始まるバスケットボールの準備として有効である。

(2) 名前シール貼り

前もってひとりひとりの名前を書いたラベルシールを準備しておき、それを学生の胸に貼っていく。私自身が学生の名前を早く覚えること、学生が互いに名前呼び合えるようにすることをねらったものである。当初のねらい以上にこの名前シールは効果があり、学生は照れながらも実にうれしそうにしてシールを貼っていく。特に姓ではなく名前をひらがなで手書きにしたシールだと、お互いに自分のシールを見せ合いながら笑う声があちこちで起こり、それまで緊張していた空気が一気にほぐれていく。

(3) 1対1のボディ・コミュニケーションと声かけ

場の雰囲気が楽しげになると同時に、バスケットボールのごく簡単な基本練習（ボール・ハンドリング、ドリブル・シュート、パス・ワークなど）に入る。その際に私自身がひとりずつ全員の名前を呼びながら、1対1で相手をする機会をもつ。ひとりひとりの学生と直に顔合わせをすることで、学生のその日の表情、

コンディショニング、技術レベルをボディ・コミュニケーションしながら捉えていく。同時にこれは、私自身のこれから始まる授業をリードしていくためのコンセンストレーションを高める儀式のようなものでもある。そして、学生が基本練習を進めていくうちにますます「やってみたい」「やってみよう」「楽しそう」という気分が高まって不安が解消されていくよう、技術レベルに関係なくどんな学生に対しても肯定的な声かけをする。特に自信のない学生に対しては、ここにいることを楽しめればいいんだというメッセージを伝えることもある。

2. 展開 学習課題への取り組み

授業の中心的内容であるバスケットボールのスキル・アップ・メニューやミニ・ゲーム、5対5を行うにあたって、工夫している点は、以下の通りである。

(1) 学習カードの活用

体力的にも技術的にも格差のあるクラスであったため、各自が自分の課題を設定して目標を意識化できるように、学習カードを利用した。学習カードの項目には、バスケットボールの技術に関することだけではなく、心拍数や自分の体に対する感覚、授業以外の時間でのトレーニングなどを目安にしたコンディショニングの項目、また、どのような言葉や体の動きで自分を表現できたか、あるいは相手からのメッセージを感じ応答することができたかを目安にしたコミュニケーションの項目も入れた。この学習カードによって学生は今まで気がつかなかったことに気づいたり、改めて驚いたりすることがあったようである。

(2) ナイス・トライの声かけと拍手の励行

バスケットボールがチーム・スポーツであるので当然、互いの信頼関係がバスケットボールの質に大きく関わってくる。私の授業で強調することは、競技に勝つというよりも、ここにいるみんなが個性的に参加してバスケットボールのゲームを楽しむということである。そのため、体力・技術に格差があろうとも、たとえ技術に自信がない学生でも誰に遠慮することなく、今自分の持っている力を存分に発揮することが大切であるとたびたび伝える。そしてそのための仕掛けとして行っているのが、お互いの声かけと拍手の励行である。

シュートを決めた時やいいプレイが出たときの声かけや拍手はもちろんのこと、たとえばパスが通らなかったとしても、そこにパスを出そうとしたイメージーションに拍手、走ってボールを追いかけた意気に拍手、たとえ失敗したとしてもそこでシュートを放った思い切りに拍手などなど、賞賛、励まし、共感の拍手が体育館中にいつも起こっているようにしかけている。私も率先して行うが、拍手を受ける側の学生も拍手を送る側の学生も実に晴れ晴れとした表情になってくる。拍手を送るような場面はいつくるかわからないので、ほかの人のプレイをわりあい注意深く関心を持って見るようになる。自分が見ているよ、自分は見られているんだなということが全員の参加意識を高めることに役立つようである。また、学生によっては憧れのプレイスタイルを模倣して、偶然にもトリッキーでファンタジックなパフォーマンスを見せてくれることがある。その演劇的な瞬間に共感する者の拍手はまたひと味ちがうものである。

どの学生も拍手を受ける側にも送る側にもなって授業を進めていくと、ひとりひとりが積極的にチャレンジする場面が増える。そしてたとえそれが失敗したとしても受け入れてもらえる喜び、熱中する楽しさを何度も経験していくことにつながるように指導する。そして学生間の技術格差によって学生のバスケットボールを楽しむ権利が阻まれるということがなくなるように、また、体力・技術・経験によらず、どの学生も発言力が平等に持てるように指導する。このことは、授業の後半に行う5対5のゲームで、一部の学生だけがボールを支配してワンマンプレイに興じるばかりといった事態を防ぎ、みんなにボールがわたるようになるし、作戦を練るなどの話し合いがスムーズに進むために大いに役立つ。

(3) 学生によるルールや作戦・メンバー構成の工夫

学生の間に信頼関係が育ってくると互いに協力してバスケットボールを楽しもうという意識が高まるので、ルールや作戦、メンバー構成について学生が話し合いをして決めていくように指導し、私はその過程を見守る。

3. 授業のまとめ

毎回の授業の終わりにはクーリング・ダウンをしな

がらその時間をふり返る時間をもつ。その際に利用しているふり返りカードを紹介する。

(1) ふり返りカード

これは毎回、この授業で自分がどのくらい充足することができたかを自己評価すると同時に、授業の感想を書くものである。自分の設定した課題に対する感想、他のメンバーとのやり取りについての感想、ゲーム運びや作戦の反省、自分の今日のコンディションについての感想、私に対する要望など、自己充足に関わることを自由に簡単に書かせている。このカードを書くことによって自分の充足感を高めていくために何が必要であるかに改めて気づくこともできるし、チームメイトに対する配慮も深まる。これは次回の授業のための資料として用いている。

以上、私が授業で工夫しているところである。つぎに、教育効果がどの程度みられたかについて報告したい。

教育効果

1. 自主的トレーニングの実践

バスケットボールは実に持久力を必要とするスポーツである。初期の授業ではすぐにスタミナが切れて動けなくなっていた学生も、徐々にその日の自分のからだの調子を見ながらゲームに出たりメンバー交代したりといった調整を自分の判断で行えるようになった。また、もっと長い時間ゲームを楽しみたいという強い動機付けもあって、授業以外の時間にも自主的にストレッチ体操や走り込みなどのトレーニングをする学生が7割に達した。学生同士トレーニング方法や効果についての情報交換もなされ、コンディションの自己管理に対する興味の高まりが確認された。

2. コミュニケーションの充実

名前シールをきっかけにして早い時期からお互い名前を呼び合い、スムーズに親しくなった学生は、くり返しの声かけと拍手などでお互いを認め合い、信頼合って授業に参加するようになっていった。バスケットボールの技術を互いに学び合い、自分の気持ちや考えを表現してチームの作戦を練る活動を楽しく行えるようになり、言語的・非言語的コミュニケーションが充実していった。

3. 自主サークル活動を結成して運動を継続

運動部や運動系の同好会に所属していない学生は半期の授業を終えた後は定期的に運動する機会が極端に減るケースがほとんどである。しかし、授業で知り合った仲間と一緒に新しいサークルを結成し、市内の体育館を借りるなどしてその後も定期的にバスケットボールや他のスポーツを楽しんでいるグループがあることは、当授業が生涯スポーツへの足がかりとなり得たとして喜ばしいことである。

4. セルフ・エスティームの高まり

体力・技術などのひけ目から自分に自信の持てなかった学生も、お互いを受け入れる活動をくり返していくうちに自分自身を肯定的に捉えるようになっていった。たとえばバスケットボールの技術に秀でていなくても自分がチームの役に立っている、必要とされている、自分自身が伸びているし、楽しんでいるという感じを味わっていくうちに、自尊感情を素直に表現できるようになり、積極的にほかの人にも肯定的な働きかけをするようになった。

おわりに

健康・スポーツ科目は、競技力を高めるための専門的な知識や高度な技術を伝授する場ではない。人間の生(いのち)を共に感じ、考え、より豊かにしていくために大学生が身につけておくべきこと、まさに教養としての健康スポーツというものを実践的に学ぶ場である。私が特にコミュニケーションの充実に力をいれて授業を進めていったことで、授業のねらいがほぼ達成することができたばかりか、私自身も生の喜びを共有することができた。

感謝をもって本稿を終わります。

平成13年度推奨授業 身体活動「バドミントン」

Class report by teaching award recipient: Health and physical Education “Badminton”

勝本 真 (教育学部)

Makoto KATSUMOTO (College of Education)

1. はじめに

健康・スポーツ科目は、教養科目の中で必修2単位として位置づけられ、学生の健康的な生活の身体的基盤を養うことを主たる目的として科学的理論も含めて行われている実技科目である。年々スポーツ種目に偏っていた授業題目の傾向を少しずつ是正し、また学生のニーズに合わせて授業題目も増やし改善してきた。これは、ひとえに常勤・非常勤を含め指導体制のバックアップがなければできないことであり、今回の推奨授業表彰授業は、その成果の一部だと理解してもらいたい。

平成13年度推奨授業表彰授業として、身体活動「バドミントン」が選ばれ、平成14年度FD研究会において授業の概要を発表した。表彰の対象となったのは、学生によるアンケート調査の結果の評価だけでなく、授業内容・方法の独自性なども評価の対象となったようであった。そこで、今回は授業内容を再構成したものと、今後の課題や新たにチャレンジしている事例などをまとめてみたい。

2. 授業の特徴

授業を構成するに当たって、最も気を付けた点は、

1. 身体のコントロール
2. コミュニケーション (情報交換)

であった。

そこで具体的には、まず自分の身体を道具と協調しながら、コントロールできるようにするために、身体を柔らかく使えるようにするために準備運動を工夫した。準備運動は、単純なジョギングや柔軟体操になりがちであるが、すぐにラケットを持った状態で、できるだけ身体全体を使って、様々な動きができるよう

な運動を考案し、実践してもらった。それが、実技テストの一部にもつながるように想定して練習も行ってもらった。

次にコミュニケーションのために、学習カードの導入や学生との会話をできるだけ積極的に行うなど、情報収集に工夫を凝らした。現在の学生の運動技能レベルは、運動が苦手な学生も含め、かなりばらつきが大きい。そのために、こちらからの一方的な授業内容では、大きな問題が生じてしまう恐れがあるため、絶えず学生との情報交換が必要であると考えた。そこで、学習カードを作成し、簡単な授業記録を取りながら、毎時間学生の意見を集めるような方法をとった。毎週学習カードをやり取りする中で、次回の授業の新たな目標になるように、学習カードにできるだけコメントを書き加えた。

3. 授業の概要

身体活動「バドミントン」のシラバスでは、「ラケットスポーツであるバドミントンを通して、自分の身体と道具を調和させながら、運動を行うことを学習する。色々な道具を使い、スポーツを楽しむことを体験してもらう。」を授業のねらいとした。バドミントンの基礎技術や専門技術、ルールなどを学習することも大きな柱である。しかし、バドミントンの用具を使って、色々な動きにチャレンジすることも授業の大切な要素とした。

準備運動は、表1に示すような内容を、基本として色々と組み合わせて行った。この運動に、反転させたり、ジャンプさせたり、使っている腕を代えたりして準備運動を構成した。この運動のイメージは、道具を手と同じような感覚で操作することができるようにと考え、新しく考案したもので、このような運動がバト

ミントンの基本練習にあるわけではない。従って、まだまだ改良の余地がある段階であり、今後の課題だと思っている。

この準備運動を30～40分ぐらい行った後に、その日の授業課題であるバトミントンの基礎・応用技術の練習やミニゲームに展開していくのが、授業の基本的な流れである。

表1 準備運動の基本形

シャトルキャッチ	飛んでくるシャトルをシャトルでキャッチ
ラケットキャッチ	飛んでくるシャトルをラケットでキャッチ
逆手ストローク	利き腕でない腕を使ったストローク
筒ミントン	ラケットの代わりに、シャトルの入った筒を使う

4. 授業におけるコミュニケーション

コミュニケーションに関しては、出席の確認の段階からできるだけ、学生の名前と顔が一致するように努力すると共に、授業中にできるだけ多くの学生に声をかけるようにした。話題は、授業の内容だけに限らず、学生生活全般にわたり、健康や学業の事までも話題に取り上げてコミュニケーションを取った。その会話の中から、学生の満足度や運動に対する意識など様々な情報を収集し、授業の中に生かした。

図1は、授業中に使用した学習カードである。記入項目は、以下の項目に上げたものである。

- ① 学籍番号、氏名
- ② 内容（自分自身を見つめ疑問・課題・工夫・反省・希望を記入）
- ③ 評価コメント
- ④ からのアドバイス
- ⑤ 評価による自己評価と授業評価

個人の反省に対して、できるだけ毎回アドバイスを記入した。良かった点を多く指摘することを心がけ、欠点をあからさまに指摘することはあまりしなかった。能力をできるだけ伸ばすようなアドバイスから、課題をできるだけ明確にするようにして、次回の授業につなぐよう心がけた。

5. 新しい試み

1) マークカードの利用

図2は授業評価を行うために、今年度作成したマークカードである。表面は、学生番号、氏名、日時、5問分の回答欄が、5日間（5回分）使えるようになっている。裏面は、自由記述ができるように5回分の日付と欄を設けた。これを使用し今年度の授業で、毎回授業評価を試みた。5問分の回答欄しかなかったのが、質問項目としてはまだ不十分な点があるが、今回は以下に示した4項目を5段階評価で記入してもらった。

- ① 運動量
- ② 技能の向上
- ③ コミュニケーション
- ④ 知的探求

評価を集計した結果の一部が、図3である。これらの結果をもとに、次の授業を再構成した。また、自由記述の中で、記載されている内容については検討し、授業で活かせるものについては、導入しながら行った。そのために今回問題になったのは、シラバスの授業計画と異なる部分が生じてしまったことである。学生も反省の中でそこを指摘しているものが見られ、これについては、今後十分検討を加える必要があるであろう。

2) デジタルカメラの利用

学生の出席管理、健康チェックなどを目的として、今回授業の中でデジタルカメラの導入を試みた。一台のデジタルカメラを回覧して、自分の顔を自分で撮影し、マークカードに撮影カ所（何枚目）を記入してもらい集計した。講義形式の約50名の授業では、カメラが回覧して戻ってくるまでに、約30分であった。処理は、マークカードと画像を一致させるために、約40分の作業時間を必要とした。授業評価と出席管理に関しては、使えるめどは立ったが、その後の処理結果をどのように生かしていくかが、今後の課題になる。

3) 今後の展開

来年度は、学生証に記載されている附属図書館登録番号を使った出席管理を試みようと考えている。

成績のキャップ制、GAPの導入など、これから評価の厳密性が問われることになり、それを見越した改善を図る必要がある。

個人学習カード

授業科目		金曜日 4 講時		勝本 教官	学籍番号	グループ
人文学部社会科学部		専攻等		2 年次	氏 名	
回数	月 日	学習内容	自己評価コメント(友人からのアドバイス) 自分自身を見つめ疑問・課題・工夫・反省・希望を記入			自己 授業
1	5/18	試合結果 自分得点 相手得点 相手名前 5 2 新島田 賢一 5 0 佐野 賢一 感想 試合の前半は自分の方が優勢だったが、後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。	3 5			
2	5/25	試合結果 自分得点 相手得点 相手名前 4 1 佐野 賢一 4 0 佐野 賢一 感想 試合の前半は自分の方が優勢だったが、後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。	4 5			
3	6/1	試合結果 自分得点 相手得点 相手名前 3 0 佐野 賢一 3 0 佐野 賢一 感想 試合の前半は自分の方が優勢だったが、後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。	4 5			
4	6/12	試合結果 自分得点 相手得点 相手名前 4 0 佐野 賢一 4 0 佐野 賢一 感想 試合の前半は自分の方が優勢だったが、後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。	3 4			
5	6/29	試合結果 自分得点 相手得点 相手名前 5 0 佐野 賢一 5 1 佐野 賢一 6 2 佐野 賢一 感想 試合の前半は自分の方が優勢だったが、後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。	4 5			
6	7/6	試合結果 自分得点 相手得点 相手名前 6 0 佐野 賢一 6 1 佐野 賢一 6 3 佐野 賢一 感想 試合の前半は自分の方が優勢だったが、後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。後半は相手のペースにハマってしまった。				

- ・()に友人からのアドバイスをもらいその友人の名前を[]に記入する。
- ・自己欄に今日の学習に対する自己評価、授業欄に今日の授業に対する評価を5段階で記入する。

図1 個人学習カード

「自己」に対する多面的アプローチ ―主題別ゼミナールでの実践から―

Multidisciplinary Approaches to "Self": On a Practice of Basic Seminar

伊藤 哲司 (人文学部)

ITO Tetsuji (College of Humanities)

「心の時代」という時代性

「心の時代」という言葉を耳にするようになって、それなりに年月が過ぎつつある。いわゆるバブルが崩壊した1990年代以降、人々の関心はますます「物」から「心」へと移ったようである。1995年1月に起きた阪神淡路大震災、それに同年3月に起きた地下鉄サリン事件の被害者を巡って、「心のケア」「トラウマ」「PTSD (心的外傷後ストレス症候群)」といった言葉がマスコミで普通に流れるようになり、それらは一般の人たちにとっても耳慣れた言葉となった。「不登校」や「ひきこもり」などの「心」に関わる社会問題はますます顕在化し、それらはもはや日常の光景と化している。

そういった時代の流れと軌を一にして、若者たちの「心」への関心は、ますます高まっているように見える。人文学部人文学科には毎年約120人ほどの学生が入学してくるが、入学時に半数近くの学生が心理学専攻を考えているというのが実情である。人文学科では1年生の秋から冬にかけて、2年次からの専攻を決める。その時点での心理学専攻希望者は若干減るのであるが、それでも心理学専攻の収容数(24人)をはるかに上回ることが毎年途切れることなく続いている。

心理学専攻を希望する学生の大半は、大学入学以前から心理学に興味を持ち始めている。高校時代から関心を持ったという人はもとより、中学時代から大学での専攻として心理学を考えていたという人もおり、なかには小学生のときにすでに心理学に興味を持ったという人もいるほどである。心理学に関心を抱いたきっかけは、自分自身が「心」の問題を抱いた経験であったり、巷に流れるカウンセリングや異常心理といった情報に接したことであったりする。また、自分自身が誰かに相談に乗ってもらって救われた、あるいは自分

自身が相談に乗ってあげて役に立てたといった経験がもとになっていることもある。それらのきっかけが悪いということではないのだが、心理学に対する「虚像」を抱いて入学してくる学生が少なくない。必然的にというべきか彼らの多くは、将来は心理学を学んでカウンセリング的な仕事をしたいと考えている。

ところで私は、社会心理学を主たる専門分野としながらベトナムをフィールドとしている研究者であり、ベトナムに実際に足をよく運ぶ。経済的には発展途上のベトナムでも、もちろん大学で心理学専攻というのはあるのだが、学生の心理学への関心はさほどではない。あれだけ悲惨な戦争経験をしたベトナムでは「心の時代」を迎えてはいない。日本の学生が心理学に関心が高いのは、日本における「心の時代」という時代性のためであるという面が強く、それは「心」についての問題がたくさん日本で発生していることの裏返しでもある。

このようなことから私は、日本の大学で心理学志望が多いということを、必ずしも好ましい状況だとは考えていない。心理学に上述のようなことから関心を持つということは、必然的に内へ内へと籠もっていく指向性を自ずと有することになる。「心」は「心」だけで存在しているわけではなく、「心の問題」は、それ自体で解くことは難しい。むしろ「心」は、他者など様々な者・物とのつながりや関係性のなかに存在していると捉える方が妥当であり、「心の問題」は他との関係を変えることからむしろアプローチされねばならない。しかし「心」がクローズアップされれば、どうしても内へという指向性が顕在化せざるをえない。

実はこれは、心理学に興味を持つ学生が示す指向性だけではなく、アカデミックな心理学が含有してきた

指向性でもある。「心の時代」を強調し、「トラウマ」や「PTSD」について説き、「心のケア」の必要性を訴え、大学院のカリキュラムにまで介入して「心の専門家」を養成し、「スクールカウンセラー」などの需要を開拓してきたのは、一部の心理学者たちである。彼らの指向性がまさに、外の関係性に向かうというよりは、内に籠もっていくものであるということに気づいている人は、まださほど多くはないのかもしれない¹⁾。

「僕って誰？」

私の指導生にあたる心理学専攻のある男子学生（当時3年生）が、「自己」という問題に強く関心を抱いていた。もちろん心理学では、「自己」に関連する研究はたくさんあり、学生が自分の研究テーマとする上では、十分考えられるテーマのひとつである。その学生があるときのゼミで発表に用いたレジュメのタイトルは、「僕って誰？」というものであった。

若い学生の声として「自分のことがワケわからなくなって……」ということを知ることがある。その学生がそのようなことを当時感じていたのかどうかは定かではないのだが、彼が自分の研究テーマとして「自己」を選ぼうとした背景には、「自分はいったい何者なのだろう？」という問題が横たわっているようであった。ちなみに次の発表時の彼のレジュメのタイトルは、「自分が好きですか？」というものであった。

もちろん自分自身について感じている問題意識から研究が始まることがあってもよい。しかし研究をするためには、見たい事象に接近すると同時に、それから距離をとって対象化することも必要である。「僕って誰？」というタイトルは、「自己」というテーマについての対象化がなされることなく、自分自身が抱える問題がそのまま垂れ流しになっているという印象を免れない。「心の時代」のなかで成長してきた学生の一面を垣間見た思いがする。（ただし本人の名誉のために言い添えれば、4年生になって彼は的確な方法を編み出しつつ、卒業論文を「自己」のテーマで書き上げた。卒業論文としては十分なレベルに達していると評価できるものであった。）

「自己」に対する関心の強さは、青年期である若者には概して強い。青年期の発達課題のひとつはアイデン

ティティの確立であるとよく言われるが、確かにこれから「大人」として生きていく上で「自分とは？」という疑問に対する答えを見いだしていくことは重要であろう。しかしながら、「自己」へ関心が集中することは、逆に「自己」を見えづらくしてしまう可能性がある。「心」が「心」だけで存在しているのではないのと同じ意味で、「自己」もまた「自己」だけで存在しているわけではない。私たちはみな、社会的・文化的・歴史的な様々な関係性のなかを生きる存在である。それゆえ「自己」の理解は、自分自身の「自己」を探究するだけでは不可能であろうし、心理学的なアプローチだけで十分とも思えない。「自己」には、人文諸科学を活かした様々なアプローチが考えられてしかるべきであろう。

主題別ゼミナールの担当：共通テーマ「自己」

ところで2002年度私は、持ち回りで数年に1回役割がまわってくる主題別ゼミナール（1年生向け前期）の担当をすることになった。私にとってこれが2回目の担当であった。

人文学科における主題別ゼミナールは、「学生が大学での勉学および生活に「軟着陸」できるようにガイドし、人文諸科学を学んでいくための基本的なスキル（資料の探し方、レジュメやレポートの書き方等）を身につけさせること」を主たる目的としている。前回私が担当したときは、専攻がまだ決まっておらず志向も様々である学生を相手に何をしたらいいのかよくわからないまま進めてしまい、学生の反応もあまり芳しくなく、少々苦い経験をしたことを記憶している。今回はそのときの反省を踏まえて、ぜひ学生たちが大いに興味を持ち、これからの大学生活で学問をしようという気になるような内容にしたいと考えた。

2002年度私が担当することになったのは、名簿順で単純に割り当てられた20人（男子5人・女子15人：過年度生の男子学生1人を含む）。最初の授業のときに自己紹介をかねて希望専攻を尋ねたところ、1年生19人のうち11人が心理学専攻を考えていると答えた。

この主題別ゼミナールで私は、共通テーマとしてあえて「自己」を設定した。そして、もっとも心理学的なテーマにも見える「自己」について、あえて心理学

的な観点からのアプローチをする班を設けず、哲学班・歴史班・文学班・国際関係班という4つのグループを構成することにした。これらは、人文学科の専攻構成を意識しての設定である。心理学以外からの人文諸科学からのアプローチで「自己」というテーマにそれぞれどう迫れるのか、それについて学生たちに考え実践してみてもらいたいというわけである。

20人の学生それぞれを、上記の4つの班のうち1つに割り当てた。学生の好みで選ばせたのではなく、私のほうで男女比を考慮して機械的に班分けをした。自分の関心の如何に拘わらず、割り当てられたアプローチで最大限の努力をしてみることを学生に求めた。当初、内心不満に思った学生もいたことであろうが、そこは授業担当者として押しとおした。

授業の構成と学生の反応

今回の授業シラバスを図1に示す。実際の授業日程と内容構成は、表1に示したとおりである。2回目の授業の際にはすでに班分けを行い、班ごとにディスカッションしたりする時間を十分取れるようにした。もちろん全体に向かって私が話をしたり、あるいは全員の前で発表する機会なども設けた。また毎度最初に

出席を取る際に、一人ひとりの名前を呼ぶだけでなく、「今日の一言」と題して近況について何でもよいので話してもらおうようにもした。また全学生が電子メール(携帯電話のものがほとんど)を利用していることが確認できたので、私のメールアドレスも含めてメーリングリストを作成した。これによって随時私から、あるいは各学生から全員に向けてメールを流し、情報を共有できるようにした。

初回のオリエンテーションは、とくに重視した。最初の雰囲気があとあとまで引きずってしまうことが、往々にしてあるからである。そこでは各自に少し詳しく自己紹介をしてもらったことに加えて、大学では「勉強(強いて勉める)」ではなく「学問(問うて学ぶ)」をすることをぜひ実践してほしいということを、熱く私から語りかけた。

2回目のときには、初回の自己紹介に加えて「互いにもっと知り合う」ことを試みた。これは人間関係トレーニング²⁾と呼ばれる心理学的技法のなかで用いられるものでもあり、アイスブレイキング(氷を溶かす: 当初の堅い雰囲気を柔らかくする)の一種である。具体的には2列に向かい合って座らせて、私の合図で正面の人とまず握手を交わし、あらかじめ紙に書いた「自

授業科目	コード	授 業 題 目		担当教官(所属)	開講時期	単位	曜日・講時	指定学部 クラス																
主 題 別 ゼミナール	K1701	和文	人文学入門	伊 藤 哲 司 (人文学部)	前学期	2	月曜日 5 講時	1 年 L (人文)																
		英文	Introduction to Humanities																					
【ねらい】大学で学問をするということはどういうことなのか、高校時代までの「勉強」を脱却していく過程を実感し、今後の大学生活でよりよい学びができる道筋を見いだすことを目指したいと思います。																								
【概 要】資料や論文を読むこと、人の話に耳を傾けること、街を自分の足で歩いてみること、考えたことを文章などで表現すること、こうした学問の基本的な営みの基礎となる部分を、半ば楽しみながら進めてみたいと思います。グループ作業も取り入れ、受講生同士の良き人間関係の構築ということも視野に入れた授業を展開していきます。																								
【授業計画】 <table border="0"> <tr> <td>(1) イントロダクション</td> <td>(9) ～ (13) 各自のテーマに従って研究の展開を図る</td> </tr> <tr> <td>(2) 自己紹介をする</td> <td>(14) ～ (15) 最終報告会</td> </tr> <tr> <td>(3) 自分なりのテーマを持つ</td> <td></td> </tr> <tr> <td>(4) 資料を探して読む</td> <td></td> </tr> <tr> <td>(5) 人の話に耳を傾ける</td> <td></td> </tr> <tr> <td>(6) 街を歩いてみる</td> <td></td> </tr> <tr> <td>(7) 文章で表現する</td> <td></td> </tr> <tr> <td>(8) 写真で表現する</td> <td></td> </tr> </table>									(1) イントロダクション	(9) ～ (13) 各自のテーマに従って研究の展開を図る	(2) 自己紹介をする	(14) ～ (15) 最終報告会	(3) 自分なりのテーマを持つ		(4) 資料を探して読む		(5) 人の話に耳を傾ける		(6) 街を歩いてみる		(7) 文章で表現する		(8) 写真で表現する	
(1) イントロダクション	(9) ～ (13) 各自のテーマに従って研究の展開を図る																							
(2) 自己紹介をする	(14) ～ (15) 最終報告会																							
(3) 自分なりのテーマを持つ																								
(4) 資料を探して読む																								
(5) 人の話に耳を傾ける																								
(6) 街を歩いてみる																								
(7) 文章で表現する																								
(8) 写真で表現する																								
【履修上の注意】当然毎回出席して授業に積極的に参加することを求めます。授業時間以外にも、質問などをぶつけてくることは大いに歓迎。ただし授業時間以外は多忙ですぐ対応できないこともありますので、その場合は原則としてメールでアポイントメントをとってください。(tetsuji@mito.ipc.ibaraki.ac.jp)																								
【成績評価の方法】出席と平常点と最終報告を1：1：1の割合で勘案し評価をします。																								

図1 今回の主題別ゼミナールのシラバス

表1 今回の主題別ゼミナールの授業日程と内容構成

4月15日	オリエンテーション それぞれによる自己紹介
4月22日	互いにもっと知りあう(総当たりで話してみる) 班分け
5月13日	各自が収拾した記事 ¹⁾ を持ち寄りスピーチで発表(班内で)
5月20日	収拾した記事について班代表発表と全体ディスカッション
5月27日	図書館ガイダンス ²⁾
6月3日	班内でそれぞれのアプローチでの進め方についてディスカッション
6月10日	論文講読「生成する自己はどのように物語るのか」 ³⁾
6月17日	写真と文章で「自己」を表現する ⁴⁾ 班ごとにディスカッション
6月24日	日本語の作文技術 ⁵⁾ 班ごとにディスカッション
7月1日	「写真と文章で「自己」を表現する」合評会
7月8日	班ごとのアプローチの中間報告会
7月15日	心理学専攻4年生の研究の紹介 ⁶⁾
7月22日	最終報告会準備
7月29日	最終報告会

- 1) 全体テーマとは必ずしも関係なく、各自が選んできた好みの新聞記事・雑誌記事
- 2) 中央図書館で担当職員によって行われるもの。人文学科主題別ゼミナールの共通メニュー
- 3) やまだようこ編『自己を物語る』(ミネルヴァ書房)にある読み応えのある論文
- 4) 写真と文章で自己を表現してみる試み。7月1日にその作品を持ち寄り、合評会を行った。
- 5) 本多勝一著『日本語の作文技術』(朝日新聞社)を使った、わかりやすい日本語を書くための講義
- 6) 「親の若かったころの話を聞くことの意味」についての研究発表を当の学生自身にお願いした。

分の得意なこと」「自分にとって居心地のいい場所」「もう一度行ってみたいと思うこと」などを見せあいながら、互いに自分のことを話しはじめる。3分時間がたつとまた私が合図をし、また別の人と同じことを繰り返す。これを19回繰り返すと、全員の人と短い時間ながら握手をして話ができるというわけである。この試みがひとつのきっかけとなり、主題別ゼミナール全体の雰囲気や和らぎ、互いの友達関係ができるようになっていった。

全体としては、それぞれ割り当てられた班ごとに授業外の時間も必要に応じて使い、「自己」へのアプローチを進めていくことがメインである。ただし、そのほかにもいくつか課題を設けている。表1に示したとおり、それぞれが目にとまった新聞記事や雑誌記事にもとづいて行うスピーチ(5月13日・5月20日)、「自己」に関わる読み応えのある学術論文の購読(6月10日)、写真と文章による「自己」の表現とその発表(6月17日・7月1日、図2はその作品例)、4年生の先輩の研究発表の聴講(7月15日)などである。なお今回の主題別ゼミナールには、その発表をしてくれた4年生の心理学専攻女子学生のほかにも、同じく4年生の心理学専攻男子学生、さらに国文学専攻の女性の大学院生が、



図2 「写真と文章で「自己」を表現する」女子学生による作品例(部分的にぼかして掲載。元作品はカラー)

時間がとれるときにオブザーバーとして随時参加をしてくれた。

班ごとの4つのアプローチについては、私自身も専門ではないため、十分フォローできないところがある。そのためもあり各班には、人文学部などの専門の教官にアポイントメントを取って相談に行くことも推奨した。もちろんそこには、他の教官とどう接触したらアドバイスが受けられるのかということを経験させる意味合いもあった。その結果どの班も、最低1人の教官を訪ね、相談することができたようである。

以上の様々な工夫を凝らした結果、全体的を通しておおむね良い雰囲気を維持し、比較的活発なディスカッションを行うことができた。ただ、どうしても他の学生に馴染むことに困難さを感じる学生もいたように見える。無断で欠席しないようにということの注意は十分喚起したつもりだが、そういうことをしてしまう学生も若干いた。最終的に1人がレポート作成に加わることをせず、残念ながらその学生については単位の認定ができなかった。

最終発表会と最終レポート

班ごとによってまとめ具合などには差異があり、全員が協力的な関係を築けたところもあれば、必ずしもそうとは言えないところもあった。しかしどの班をとってみても、1年生の前期の段階であるということ consideringすれば、最終的にはそれなりに深めたアプローチをすることができたと言える。

哲学班は、人文学部の哲学専攻の先生のアドバイスを受け参考書を紹介してもらいながら、ロック・ヒューム・デカルト・和辻哲郎という4人の哲学者が論じている「自己」について考察しまとめた。最初はなかなか手がかりが見いだせないようであったが、哲学の先生のところへ行って示唆を受けたことが大きなきっかけになった。

歴史班は、人間がそもそも歴史的な存在であるということであらためて認識し、日本の戦前と戦後、それに現代で「自己」の捉え方がどのように変遷したのかについて考察をした。この観点に凝りやすい学生がたまたま1人いて、彼が結果としてリーダー的役割を果たすことで、どうにか形になっていった。

文学班は、「日本小説」「外国小説」「エッセー」「詩集」「絵本」の5つのジャンルを設定し、それぞれから基本的に1冊(順に『こころ』『데미안』『ぼななブレイク』『すみれの花の砂糖づけ』『ピートとポロのぶくぶく うみのぼうけん』等)を選定し、5人の班員がひとつのジャンルを担当。それぞれの作品を読み込んで考察をまとめた。人文学部の文学の先生のほか、教育学部で絵本研究をしている先生にもアドバイスをもらった。

国際関係班は、方針を決めるのに一番時間がかかった班であった。なかなか「国際関係」と「自己」という問題を結びつけられないようであったため、私が「自己のアイデンティティには、ときに国籍が何であるかということが重大な影響を及ぼす」ということを指摘し、日本人と在日韓国・朝鮮人の若者のアイデンティティについて論じた『在日韓国・朝鮮人―若い世代のアイデンティティ』という本を紹介した。何か調査を試みるという案も浮かんできたのだが、結局はその本の各章を分担して読み込み、まとめることになった。

最終授業となる最終発表会では、最初に発表した班が大幅に発表時間を超過し、また質疑応答も比較的活発にであったため、後の発表班にしわ寄せがいつてしまった。そのため十分に時間をとって発表してもらうことができない班が発生してしまった。これについては担当者の私の責任である。しかしながら、時間が足りないぐらいの発表経験ができたということは、学生にとっても有意義なことであつたろうと考える。

図3には、最終発表会後に各班のメンバーで共同執筆したレポートの書き出し部分を載せた。そこでは削除してあるのだが、どの部分を誰が書いたのかという「文責」がところどころ明示してある。これによって、レポート執筆で楽をする学生が出ることを防いだ。

レポートの書き方としては、まだまだ改善の余地があるのだが、それぞれがそれなりに充実感をもってレポートを仕上げたということが窺えるだろう。なおこの最終レポートは人数分印刷し、簡易製本をして、記念に残すことにした。

レポートのなかで各学生は、それぞれ試みたアプローチを通して考えた「自己とは何か?」というテーマについて自分なりの考えを書いている。表2には、

『自己』とは何か、哲学的に考える

はじめに

『自己』とは何か。それは今日まで多くの哲学者の間で論議的となってきた問題である。哲学者はそれぞれの考えの中で『自己』のあり方を表してきた。今般に主眼としてミナールの哲学者は、ロック・ヒューム・デカルト・和辻哲郎という代表的な哲学者の『自己』の考えをたんに採り、それらを論議することにした。

さらに自ら考えることが哲学の本質であると考え、各員それぞれが『自己』について自問し、おのおの『自己』の考えをあらわすべく紹介することにした。

哲学者たちの『自己』の考えをた

<ロック John Locke 1632～1704 イギリス>

『タブラ・ラサ』心は白紙である

心は、書かれてある文字をまったく欠いた白紙で、概念はすこしもないと想定しよう。

どのようにして心は概念を蓄えるようになるか。人間の心は決して心算が心にとどまり、心算が多量に集まって、あの膨大な概念を心にとどめられる。どこから心は概念的な知識と知識のすべての材料をわがものにできるか。これに對して、私は一語で答える。この経験に私たちの心は知識の源泉をもち、この経験から知識は究極的に形成される。(岩波)

上記は、ロックの『人間知性論』の序文である。

後に出てくるデカルトは「理性はすべての人がもっている」と説いたが、ロックは「人間が生れながら持っている概念はない」といい、量や正誤などのあらゆる生得概念を否定した。また、ロックはその原理をいかに主張した。つまり、人間の心は白紙で、経験によって概念は成り立つと説いたのである。

人間の心が生れながら白紙で、経験によって概念が蓄わっていくのなら、私たちの『自己』は育った環境によって左右されることになる。意では、兄弟姉妹からの影響を受け、学校では友人や教師から影響を受ける。もっと広い社会に出れば様々な経験をし、そして次第に自己は確立されていくと考えられる。

<語句解説>

『人間知性論』

ロックは、デカルトの影響を受けて知性(理解)能力を吟味し、ペーコン以来の経験論に従って、

1. はじめに

私たちは今この地に立っているわけだが、この地は今ここにありだけではない。はるか昔からあり、そしてこの先もここにあり続ける。だが私たちは今この地を踏みしめることしかできない。私たちは限られた「現在」という時間の中を生きているわけだ。

しかし私たちにも「過去」「未来」というものが存在する。「過去」があるからこそ「現在」の私たちがあり、「未来」があるからこそ私たちは前進しようとするのである。「過去」を記憶することは「未来」を準備することであり、それらによって「現在」の私たちがさまざまな変化していくのだ。つまり、現代を生きている私たちが自分自身、すなわち「自己」を考えると、過去・未来を準備するのは不可欠ともいえるほど重要なことなのである。

これまでの日本でも、もっとも著しい変化があったのはいつか。それは明治維新による急激な近代化と、第二次世界大戦を境とした戦前・戦後の分断ではないだろうか。今般は戦前・戦後・現代というようにカテゴリーを分け、それぞれの時代背景や社会構造、そして何よりも人々がどのような自己を持ち(あるいは持たず) 自分いかなる存在だと認識していたのかを論じた。

「戦後が経過しているとき、ひとつはつねに歴史を振り返る」

戦後論の序文である。現代の戦後論として考えの出しにくい現代であるからこそ、歴史を振り返る、自分自身を振り返るという作業は価値あるものであろう。むしろ、現代日本の歴史を支えてきた先人達の時代を見ていくことは、ごく自然なことなのかもしれない。そうした「戦後」が「戦前」から来ているからこそ、私たちは過去を振り返ることの意義を感得しなければならない。そうして新たな視点から私たち自身を見つめる姿勢を確立することが、現代の戦後論を切り開くために必要なことだと考えるだろう。

1. 研究目的

『自己』とは何か。

いかに哲学者が何かに出てきそうだが、そしてなかなか考えの出し難い問題でもある。「こうかな」と思い付いた途端に「いや待てよ」と再び考えてしまうような、そんな感じがする。改めて思い詰めてみると「??」のオンパレードに見舞われる問題はこの世に数多くあるが、これもその一つ。「自己」とは果たしてその人だけの物なのだろうか。一つしか存在しないものなのだろうか。「この『自己』とは何か」という問いを見つめていくと、様々な疑問が湧いてくる。「自己」とはそれだけ奥深く、不思議なものであるようだ。我々文学者は、「文学」という観点から『自己』を考え、この問いに対する答えとしての文学的認識を導くことを目的としてこの研究を進めていくことにした。

2. 研究方法

我々は「文学」という分野を通して『自己』を考えていく。しかし「文学」と一言で言ってもその中には様々な観点から書かれたものが多くある。そこで私たちはまず、文学の中でも代表的な5つのジャンルからそれぞれ個別に『自己』を追求していくことにした。

その3つとは

「日本小説」「外国小説」「エッセー」「詩歌」「戯作」

である。

始めに、1人1ジャンルの中から一冊の本を選んで読み、読者でその本から読み取れる『自己』を考える。その後それぞれの考察を定しながら個人の考察を皆で共有し、全てを踏まえて何らかの一つの結論を出していくという方法をとることにした。元々『自己』をテーマにして書かれていない本からそれを読み取るのは難しいことではないし、ジャンルも選べば、評者も書かれた時代も違う5冊の本から『自己』についての結論を導くのは難しいことだとは思ったが、一人では出来ない多角的な目を持って色んなところから『自己』を考えるのは適切な方法だと考えた。

下記に記すものは5人それぞれの個人の研究内容である。

はじめに

私たちの本では「国策論」という観点から『自己』を考えていく。そのひとつの方法として、国策論者『在日韓裔・朝鮮人一帯のアイデンティティ』という一冊の本をたよりに『自己』について考えることにした。本書の目的は、在日韓裔・朝鮮人の二重・三重と呼ばれる人々の歴史を取り囲み、民族問題とそのアイデンティティを考えること、としている。そこで、本のメンバーがそれぞれの意見を述べて、本書で取り上げられている「在日韓裔・朝鮮人の若い世代のアイデンティティ」とその「国策」から見てくる彼ら/彼女らの自己を通して、私たちそれぞれの自己について考えてみたいと思う。

国策論者『在日韓裔・朝鮮人一帯のアイデンティティ』より

序章 「日本人」と「非日本人」

《国策論者としての「日本人」》

一般に自明視されている「単一民族社会」「単一文化社会」の前提である「日本人」という概念は、ほんとうに自明のものだろうか。法律による規定では、「日本国民」と「外国人」という区別のみで、「日本国民」たる要件は、「日本の国籍」を有すること、とされている。「日本国民」の定義は、血統主義に基づいて、原則として「日本国民」の親からの「出生」もしくは「帰化」によってなされる。

とにかく、「日本の国籍」を有する者として、法律で規定された「日本国民」という概念は、日本社会の一般的な構成要素だが、「他者」として描かれている「日本人」という概念とは、かなりのズレがある。

『日本人』から「非日本人」までの8類型

では、「日本人」とは何か。

日本社会の一般的な構成要素が「日本人」という概念でもって思い浮かべるイメージは、どのように捉えられるだろうか。

民族の要素を「血統」と「文化」に分けて取り出し、「国策」と合わせて3つの要素をもって、「日本人」から「非日本人」までの概念類型を整理して構成することから問題を考える。

類型	1	2	3	4	5	6	7	8
血統	+	+	+	+	+	+	+	+
文化	+	+	+	+	+	+	+	+
国策	+	+	+	+	+	+	+	+

図1 「日本人」から「非日本人」までの概念類型

図1「日本人」から「非日本人」までの概念類型(表)での「+」「-」の記号の意味は、次のとおり。

「血統」の欄での「+」は、その人が、血統的にいわれる「日本民族の血」を

図3 各班の最終レポートの書き出し部分

左上：哲学版、右上：歴史班、左下：文学班、右下：国際関係班

学生の個人名を消去し、また誤字を一部修正して掲載

表2 学生が考察した「自己とは何か?」(最終レポートから抜粋)

今回様々な哲学者の思想を調べ、皆と話し合い、言うなれば自己のイメージはこう、といった感じに考えてみた。私の場合、自己をひとつの物体と考え、その外核においては様々な面を持ち、型を持ち、絶えず変容しうるものだとイメージしている。つまり社会生活や人と交わることによって影響され、その経験によって日々形成されていくと思うのである。しかしまた、時々自分の性格をよく考えて、ごく普通の家庭で育ったにしてはおかしな考え方(心の声?)をするな、と自分で思うことがある。それは多分、言葉を交わすことのない本や映画、はたまた音楽から得た感情だろう。これらを生み出すのは人間だが、入と交わらなくても、自分が再形成されるほどの影響力を受けることはある。以上の考えは『経験論』を唱えるロックに共通し、また和辻哲郎の『人間論』にも通ずるところがある。しかし同時に、ロックの対極にあるともいえるデカルトの『神の存在を第一原理とする合理論』も(神の存在についてここではなんとも言えないが)なるほどと思うところがある。彼は『思考する自分の存在』について強く説いている。『思考する自分』は確かに偽りもごまかしも無い『自分』であり、変容する外核に比べたら少しは確固とした内核であり、そう簡単には変わることのない『自分』であろう。だからといって建前的な外核は「本当の自分」じゃナイ!とは言わない。要領よく付き合えるならそれも自分の本質だと思う。最後に、いまここに居る自分が、約20年間積み上げてきた集成だということに、少しだけ「価値」のようなものを感じた。(哲学班・女子学生)

今回私は戦前から戦時を担当し、特に学校教育に関して研究した。そして思ったことは、教育というものは非常に利用されやすいということだ。なぜそのような考えに至ったかという、いつの時代にも戦前戦後に関係なく、その時の政府が必要とする国民性があった。そして政府はそれを作るために、教育制度や教科書を変えていった。するとそれは見事に成功するのであった。このように教育は利用されてきたのである。このことから、いかに教育というものが「自己」の形成に影響を与えるのかがわかる。次に、「自己」というものは弱いということだ。日本では戦前戦後、さらに高度成長期までは、「自分はどうかあるべきか。」という現代の若者たちが悩んでいる問いの答えは与えられていたと思う。勿論、その時代によって答えは違う。例えば、戦時であれば「お国のために」であり、高度成長期であれば「自分も社会で活躍したい」などである。しかし、現代にはそれが無い。つまり、「自己」とは型を与えられれば簡単に形ができてしまうのだ。しかし、型が無ければ簡単には形を作ることができない。たとえるならば、溶けたチョコレートのようなものである。(歴史班・男子学生)

私たちは幼少の頃は親と一緒に「明るい世界」に従属しているが、『自己』を知るためにはまず、その世界から出て「暗い世界」、すなわち逆境にとびこむことが必要である。『自己』とは自分の中に秘められているものであり、逆境の中で孤独を味わうことこそが自分の内を見つめるための最高の機会となるからである。つまり、この孤独は親の属する「明るい世界」にいるうちには味わえないものである。そしてそれを乗り越えた時、私たちは自分自身の手で新しい「明るい世界」を築くことが出来るようになる。この新しい「世界」は、誰のものでもない自分だけのものであり、自己と呼ばれるものの一つであるだろう。

また、『自己』を見つけるには周りの人の助けが必要である。それは他人の存在が、私の中にある『自己』の存在を気づかせ、それを表に出すための刺激となるからである。けれども結局のところ、最後に『自己』を見つめられるのは、他の誰でもなく自分なのである、というのがヘッセの至った結論である。

『自己』とは自分の内にありながら、この世で一番遠い存在なのかもしれない。その遠い存在を求める道こそが人間の最もすばらしい営みであり、私たちに課せられた唯一の義務なのだと彼は考える。(文学班・女子学生)

完全な韓国・朝鮮人とも、完全な日本人とも認められない在日韓国・朝鮮人。若い世代の在日韓国・朝鮮人の、日本人化が進んでいる。それは、やはり、日本の社会がそのほうが生きていきやすい環境だからなのだろう。序章にもあるように、日本の社会は、異質な存在を“日本人”へ同化させて“見えない”存在にするか、“日本人ではないもの”として区別する。「日本人」と、「非日本人」の二種類の人間しか存在しないものとしている。そして、異質なものを受け入れない。これが、在日韓国・朝鮮人への差別につながっていく。この差別を避けたいために日本人化していく。しかし、彼ら日本人化することはできても、完全な日本人にはなれない。彼らは、日本人とは違うのである。もちろん、完全な韓国・朝鮮人でもない。そこで、葛藤が生まれる。そんな在日韓国・朝鮮人に対して、私たち日本人がどう対応していけばよいのか。ここで、最初に出てくる言葉が「平等」だろう。しかし、日本人と在日韓国・朝鮮人は、異なる存在である。この二つの存在を同じく扱うのが正しいわけではない。違いを認めなければならない。在日韓国・朝鮮人を日本人とするのではなく、在日韓国・朝鮮人という存在を認めていかなければならない。ここから、自己について考えてみると、自己というのは自分と異なる存在を通して認識できるものだと思う。「自分は、〇〇だ。」と言う場合、その〇〇以外のものが存在しているから言える。もし、自分以外は何も存在しない、自分のみしか存在しないという状況では、自分がどんな存在なのか分からないのではないのか。例えると、自分以外のもの、周囲の人や環境などが鏡で、その鏡に映る自分、それが自己なのではないか。そして、鏡がないと、自分がどういう姿なのか分からない。そのまわりに認められて自己が存在する。つまり、自己とは、自分以外のもの、周囲の人や環境などがあって、成立するものだと思う。(国際関係班・女子学生)

その抜粋を載せた。それぞれの分野の専門家からみたらもちろん不十分な点が多々ある考察内容であろうが、1年生のレポートにしてはまずまずの出来であると評価して差し支えないのではないと思われる。

学生による授業評価

大学教育研究開発センターが教養科目に関して一斉に実施している学生による授業評価のアンケートがある。今回の主題別ゼミナールに参加した学生の受けとめ方を知るひとつの手がかりとするために、アンケートの結果の一部を表3にまとめた。

この結果を見る限り、学生はおおむね好意的にこの授業を評価していると言ってよいだろう。明らかに否定的な評価があったのは「シラバスへの忠実度」である。実際のシラバス(図1)は、たしかに授業内容と合致していない部分があることは否めない。しかしながら、シラバスは授業が始まる半年ぐらい前に書くものであり、なかなかそれどおりに授業を進めるのが難しいという側面がある。近年シラバスの充実が言われ、それが学生との「契約関係」に準ずるものの元になる

という考え方もある。どのようにシラバスの内容と実際の授業内容をより噛みあわせるかは、今後の課題としたい。

他の項目では、「授業の理解度」で「やや理解できなかった」に2人、「知識や技能の向上」で「あまり向上しなかった」に3人いることが表3からわかる。またそれらに含まれると思われる学生の1人は、「授業の全体的満足度」で「やや良くなかった」という評価をしている。その理由は明らかではないが、自由記述回答にある「グループ活動が苦手」という学生であったかもしれない。(どの学生の自由回答かまではわからないので、特定することができない。)いかなる授業でも、すべての学生を満足させることは困難であるが、このような学生の声にも耳を傾ける必要はある。

自由記述回答にある「レポートの書き方をやって欲しかった」という点に関しては、たしかに不十分であったかもしれない。「日本語の作文技術」についてと、論文の書き方のルール(たとえば参考文献の書き方など)ぐらいには触れたのだが、それ以上のことはやれていない。ただし「レポートの書き方」と一言でいっても、

表3 学生による授業評価

授業の解りやすさ		授業の準備度		学生の主体的参加の機会	
大変解りやすい	8人	大変良く準備されていた	6人	大変満足	14人
やや解りやすい	5人	良く準備されていた	7人	やや満足	3人
普通	6人	普通	6人	普通	2人
やや解りにくい	0人	やや準備不足	0人	やや不満	0人
大変解りにくい	0人	準備不足	0人	全く不満	0人
シラバスへの忠実度		授業の進捗		授業の理解度	
大変満足	8人	ちょうど良い	14人	大変良く理解できた	2人
やや満足	3人	少し遅い	0人	良く理解できた	10人
普通	2人	少し早い	5人	普通	5人
やや不満	0人	かなり遅い	0人	やや理解できなかった	2人
全く不満	6人	かなり早い	0人	全く理解できなかった	0人
知識や技能の向上		成績評価の適切度		授業の全体的満足度	
大変向上した	1人	適切であった	8人	大変良かった	8人
向上した	8人	ほぼ適切であった	5人	やや良かった	7人
やや向上した	7人	普通	6人	普通	3人
あまり向上しなかった	3人	やや不適切であった	0人	やや良くなかった	1人
全く向上しなかった	0人	不適切であった	0人	大変良くなかった	0人

自由記述回答

「レポートの書き方をやって欲しかったです」

「グループ活動は個人的には理不尽なほど苦手で、また苦痛な点もあったが、それを否定する理由が見つからない」

「暑いときはクーラーのある部屋で授業してほしいです」

注) 1人がアンケート未提出のため、19人による結果となっている。

それにもまたいろいろな側面があるし、包括的に取り上げようと考えれば、時間もかなり要する。さらにはレポートは自分で書いてみなければ書き方も身に付いていかないという側面もある。それでも、短時間でのやり方はあるかもしれない。これについても次回同じような機会があれば、工夫をしたいと思う。

まとめ

「自己」をテーマに、哲学・歴史学・文学・国際関係論のそれぞれからアプローチせよと言われれば、私自身でも正直言って戸惑う。しかしそれは不可能ではないはずという直感があった。実際学生たちがどんなアプローチをし、どんな成果を出してくれるかはなかなか予想できなかったのだが、提出されたレポートを見ると、なるほどと思わせるような表現にいくつもぶつかる。人文諸科学は、人間の探求ということでどれも共通している。それを実証してくれたのが、今回の学生たちの実践ではなかったかと思う。今回の試みがある知り合いの心理学者に話したところ、その内容にとっても共感してくれて、「これこそ真の教養だ」という評価をしてくれた。

今回の試みが、「心の時代」の内向き志向を少しでも打破するようなものとして学生たちに影響を及ぼすことができたとしたら、それが私の一番狙いどおりだったと言える。その点については学生による授業評価からも定かにはならないのだが、少なくとも「自己」という心理学が扱うのがふさわしいように見えるテーマでさえ、他の人文諸科学からもアプローチ可能であるということは、学生たちも理解してくれたことであろう。私自身も、そういうアプローチの実際を知ることを通して、学生たちに多くのことを教えてもらった気がする。その点、今回の学生たちに感謝したい。

「自己」に対する多面的なアプローチ——その営みを通して、1年生にとって新たな環境である大学において新しい人間関係のきり結びがなされ、それぞれの学生が自分自身の「自己」への関心を、必ずしも内向き志向ではなく高めてくれたのなら、主題別ゼミナールの目的に限らない意義を今回の授業に見いだすことができるだろう。ややすぎた言い方なのかもしれないが、その一端は少なくとも達成できたという実感はあ

る。今回の経験を私自身、これからの授業実践につなげていきたいと考えている。

- 1) 「心の時代」の諸問題については、小沢牧子『「心の専門家」はいらない』(洋泉社、2002年)に詳しい。なおこのあたりの記述は、本書を参考にして
- いる。
- 2) 人間関係トレーニングについては、(株)プレスタイムが開発し販売している『Creative Human Relations』にその実例がたくさん載せられている。それにもとづいた私の実践については、拙論(伊藤哲司 1998 茨城大生を対象にした人間関係セミナー実施の試み 茨城大学教育研究開発センター年報、2、31-40)に報告しており、最近でもしばしばそれを人文学部の授業のなかで応用している。

教養教育に関する茨城大学の取組みの現状と将来

教養教育の改善に向けての努力

Some efforts on the Improvement of the General Education in Ibaraki University

横山 功一 (大学教育研究開発センター副センター長)

Koichi YOKOYAMA (Vice Director of the Center for Research and Development in University Education)

1. はじめに

茨城大学における教養教育改善の努力は、以前より続けられてきており、その折々で改善が実施に移されてきている。ここでは、センターの改善に向けての最近の取り組みを広く参考としていただくために紹介する。

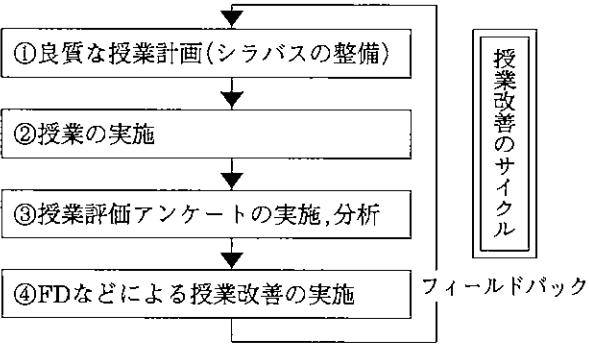
まず、継続して改善を進めるために必要な基本的事項を整理すると

- ・教養教育を良くするためには、学生・教官&事務局の丸となった対応が必要。
- ・大切なのは、関係者全員が方向性を確認することであり、そのためには情報を公表して、情報を共有する。
- ・学生・教官&事務局からのフィードバック機能が働くようにして、改善を継続させる。

plan→do→check→action

- ・できるところから始めるが、これらは一式で効果が発揮できる。

これを模式的に示すと、



この様な理解のもとで、H14年度にセンターで取り組んだ具体的な項目は、

- (1) シラバスの整備
- (2) 授業評価アンケートの実施

(3) 推奨授業表彰を受けた授業の公開

- (4) 教養教育シンポジウム, 教養教育FD研究会の開催である。以下に具体的に説明する。

2. シラバスの整備

シラバスについては、昨年度 (H14年度版), シラバスの様式を見直し、記入要領を整備した。今年度は、これを踏襲し、更に充実させるために、改定点としては、授業における到達目標を明確にすることとした。

平成15年度シラバスについて下記により、シラバスの整備充実を図った。

- (1) シラバスには、授業のねらい、達成目標、授業の計画予定、成績評価の方法が明示されているものとする。
- (2) シラバス原稿は、作成要領に基づきテキストファイルで作成し、Eメールまたはフロッピーで教養教育係へ提出する。あるいは、センターweb上でMSWordにより作成し、送信する。印刷及びweb登録は提出原稿をそのまま用いて、校正は行わない(経費削減と省力化を図る)。

- ・教養教育係では、提出された原稿の様式チェックを行い、必要な場合には修正・再提出を依頼する。内容についてチェックが必要な場合には専門部会長へ依頼する。
- ・専門部会長は、シラバスの内容に改善が必要と思われる場合には担当教員に必要な指導を行う。

- (3) インターネットで公開するシラバスに、担当者のプロフィールや学生へのメッセージ等を加える。あるいは、教員個人のページや平成15年春から本格運用される予定の教官要覧へのリンクでもよい。

3. 授業評価アンケートの実施と分析

(1) アンケート調査の現状と課題

学生による授業評価アンケートは平成8年より行われており、それらの実施状況と分析結果が毎年「教養教育に関する基本調査報告書」(H8からH13年度)にとりまとめられている。同時に移行期であるH9から

H12では、教員に対するアンケート調査も実施している。特にH10には、新しい教養教育システムを検証するために詳細なアンケート調査を実施した。学生アンケートは、H8～H12は英語クラスで実施した教養科目全体に対するアンケートであり、H13より授業科目毎となっている。

表1 授業評価アンケートの実績

実施時期	学 生 ア ン ケ ー ト		教官アンケート
	回答数／配布数 (比率) 回答数／履修者 (比率)	実施科目数 (比率)	
H8	4,484名／12,259名 (36.58%)	—	
H9前期	1,008名／2,004名 (50.3%)	—	232名 (約40%)
後期	640名 (35.0%)	—	
H10	2,396名 (1～3年生の回収率46%)	—	専任332名 (58%) 非常勤73名 (33%)
H11	834名 (1年生の回収率48%)	—	161名 (31%)
H12	1,139名	—	300名 (58%)
H13前期	18,804名／27,900名 (67.4%)	454科目／510科目 (89.0%)	—
後期	13,815名／21,034名 (65.68%)	398科目／432科目 (92.13%)	—
H14前期	20,609名／28,457名 (72.4%)	474科目／522科目 (90.8%)	—

課題を整理すると

- ・H12までは、教養教育全般に対するアンケートになっているが、H13より個別の教養科目をアンケート対象にしており、学生の記入への負担が重く、労力・経費がかかっている。→アンケート項目の見直し&簡素化。

- ・現在のアンケートの設問は多岐にわたっているが、全ての情報が活用されているわけではない。→目的&活用の方法に応じたアンケートの設計。
- ・全体の授業改善に役立っているが、個別授業の改善に使われていない。→個別授業の改善を可能にする体制を整備する。

表2 授業評価アンケートの課題と改善の方向

1) 目的	A. 個別授業の改善 (短期的feedback)	B. 授業全体としてのレベル改善 (長期的feedback)
2) アンケート結果の活用方法	教官個人に返して個々の授業改善に役立てる。	① 科目群相互の比較に活用する。 ② 教養教育全体の経年的変化を把握しそのレベルの向上・改善に役立てる。
3) アンケート対象	1年生～3年生 全授業科目?	全体に対して学生は1枚のアンケートに回答。(個別科目毎のアンケートは馴染まない。)
4) アンケートのやり方	上記の目的1) & 2) Aに添った設問にする。 ① 学生は授業レベルをどう見ているか? ② どんな面の改善が必要か? Ex. 授業計画, 進め方, 実施方法, 教授法, 教材,	教養教育全体を対象にした設問にする。 ① 教養教育は役に立つか? ② 習熟度別クラスは馴染めるか? ③ 大規模クラスvs. 少人数クラス ④ 自由選択vs. クラス指定 ⑤ 成績評価

5) FD	授業評価をもとにしたFDを科目群あるいは部会単位で開催し、改善方策を検討する。関係者全員参加を原則とする。	教養教育全体の改善になるFDを実施する。科目群あるいは部会単位のFDに注文を付けることにより、個別授業の改善の参考にする。
6) 改善サイクル	特に問題となった授業科目担当教官は、アンケート評価に対する分析を行い改善策をセンター長へ提案する。授業評価アンケートを継続し、改善が図られているかを再点検する。	同じ内容のアンケートを数年続けて経過を把握する。教養教育基本方針、計画などに新しい試みを反映させる。
7) 報告・公表	報告書を作成し、教官へフィードバックするとともに、外部へも公表する。	報告書を作成し、公表する。教官へも参考になるような情報に形にしてフィードバックする。

(2) 基本的な考え方

学生による授業評価アンケートを授業改善に活用することを主目的にして、H13年度のような個別科目に対するアンケート調査を継続する。特に、個別授業の改善に対して活用することを考える。H12年度まで行われてきたような全般的アンケートは、教養教育の質とレベルの長期的動向を把握する上で有効であり、毎年ではなく、数年ごとに定期的に行う。

以下に考え方を整理した。

- ・現在、アンケートは任意で行う形になっているが、実質はほぼ全員が参加している。授業改善の有効な手段であることからアンケートは義務づけて、全授業で実施してもらう。
- ・アンケート結果を報告書だけではなく、webでも公表する。
- ・アンケートの設計の考え方(設問を設定した意図・目的。相互の関係により分かること)を説明する。
- ・成績(教官からの評価)と授業評価アンケート(学生からの評価)を対比・つきあわせる。(専門部会長へデータを送って、追加作業を依頼する?)
- ・授業評価アンケート以外に、学生からの直接意見を聞く場を設けてみる(規模は小さく、必ずしも全学生を代表する声ではないが)。これは、報告書に載せてもよいし、ローザ・プリムラに載せてもよい。
- ・アンケート実施状況に、分野ごとの回収率、授業科目によるばらつきも表記する。授業クラス規模との関係情報も加える。
- ・全データをひとまとめにして、質問項目ごとの分布データを載せる。(質の違うデータが含まれてい

るが、それを明記して、全体像の把握のために必要)

- ・同じく、分野ごとに、質問項目ごとの分布データを載せる。今までの分析では、データの参照なしに議論されているケースがあるので注意が必要である。
- ・専門部会長による分析は、よい点ばかりでなく、改善のための糸口を探し出す努力をお願いする。

(3) H14年度のアンケートの実施

実施方法は、H13年度に実施された授業評価アンケートを踏襲した。なお、設問やとりまとめ方法などに微修正を行った。

平成14年度前期のアンケート実施状況は9月末で取りまとめており以下の通りとなっている。夏期休み中の集中講義などでこの時期までに実施できないものもある。また、回答率を計算する学生母集団は当初の申告者数であり、最終的な単位修得者数ではない。

平成14年9月末日現在の集計

対象科目数	521科目	申告者数	28,546名
実施科目数	485科目	回答学生数	20,997名
未実施科目数	36科目	未回答学生数	7,549名
実施比率	93.1%	回答比率	73.6%

【備考】1. 上記の「申告者数」は、平成14年5月1日現在の人数を示す。
2. 上記科目数には、集中講義も含む。

平成14年度後期分は、現在集計中であり次年度取りまとめられる。

(4) アンケートの分析

アンケートの分析は、H13年度の方法を踏襲することを基本とし、センターで一次処理を行い、専門部会

で詳細な分析を行った。

・センターで実施する分析

回収率、アンケート分布、相関分析、出席状況など、教養教育科目全体、分野毎、更に個別授業科目毎の統計処理を実施し、CD-ROMにより関係者に引き継ぎ詳細な解析を依頼した。

・専門部会、学部での分析

センターが提供するアンケートの一次処理結果をもとに、各専門部会、学部がカバーする科目区分の授業評価を行った。さらに、アンケート情報と追加で提供される情報とを合わせて、学生による授業評価とクラスの成績との相関、クラスサイズとの相関も調べる。評価の低かった授業科目に着目して、アンケートの回答の中からその理由、改善の方向性を探り、FDに繋げる。

(5) アンケート結果

別途、「H14年度基本調査報告書」としてH13年度後期分とH14年度前期分の調査結果が報告書に取りまとめられている。

4. 推奨授業表彰を受けた授業の公開

平成13年度より教養教育を対象に推奨授業表彰が始まっているが、規約により表彰を受けた授業は公開されることになっている。しかし、そのための具体的な手順が決められていなかったり、選定が遅れたために年度当初に授業の公開を依頼できなかった。平成13年度前期表彰分のように前期が終了してしまったり、あ

るいは集中授業として行われるなどのために公開ができないもの、また身体活動科目のように授業公開がそれほど効果的でないと考えられるものもあった。

そこで、平成13年度前期、及び同後期の表彰授業（計10件）については以下のように公開あるいはその代替としての発表を行った。

1) H.14年度後期に公開授業を実施

時期は11月下旬あるいは12月上旬（於：水戸キャンパス）

対象教官及び授業・曜日／講時

- a) ベッツ、ロバート：英語ⅠB・月／2
- b) 熊沢孝昭：英語ⅠB・火／2
- c) 榊原暢久：数学・木／2

2) FD研究会として発表

平成14年11月28日 13：00～15：00

対象教官及び授業

- a) 勝本 真：身体活動（バドミントン）
- b) 木村元子：身体活動（バスケットボール）
- 以上2教官はビデオを中心とした発表
- c) 速水智子：情報処理概論
- d) 橋浦洋志：主題別ゼミナール（日本語文化論）
- e) 岡 裕和：数学（※工学部FDの一環として）

3) 茨城大学（入試課）主催の公開授業で実施

時期は9月29日（日曜日、於：茨城県三の丸庁舎）

対象教官及び授業

櫻井豪人：文学（「変体仮名を読む」、9時～10時30分）

表3 FDの実績 教養教育

実施時期	FD研究会（テーマ：理念、組織論、実施形態、管理運営）	教養教育シンポジウム（教養科目毎に課題を設定・討議）
H 8		招待講演「学生を引きつける授業」、講演「外国語及び総合科目授業の方法」5 110名
H 9		招待講演「課題解決への方策」、講演「健康スポーツ&情報関連科目の教育方法」9 53名
H10	「教養教育の理念目標、現状と課題」講話、招待講演、分科会Ⅰ、Ⅱ 48名 (7.4%)	招待講演「教養教育の授業とFD」、講演「分野別科目・人文の教育方法」3 約50名
H11	「大学が育むべき教養とは」特別講話、パネルディスカッション、分科会Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ 52名	招待講演「フレッシュマン・ゼミナール」、パネル討論会「主題別ゼミナール」 約40名
H12	「茨城大学が目指す大学教育—次世代大学教育システム—」招待講演、パネルディスカッション 72名	招待講演「日本の教養教育と米国のリベラル教育」、レポート「自然の分野」3 約40名
H13		パネル討論会「地域発信型大学における教育」「進化型システム創成」 約80名（学外を含む）

中田 潤：政治学（「政治学」，10時40分～12時10分）

5. 教養教育シンポジウム、教養教育FD研究会の開催

カリキュラムおよび授業改善のためのシンポジウムは平成8年度から、FD研究会はシンポジウムと平行して平成10年度より開催され、多数の教職員が参加している。FD研究会、シンポジウムは、講演、事例報告からグループ別のワークショップなどまで様々なテーマ・形態で、下記のような開催、参加実績となっている。これらは教育の改善改革を考える全学研究会として、教職員の意識啓発に寄与している。

今年度は、以下のようなシンポジウムとFD研究会を企画・開催した。なお、シンポジウムの概要については、この年報で別途取りまとめられている。また、教養教育FD研究会については次年度の年報で報告する。

(1) 教養教育シンポジウム

平成16年度からの大学法人化が具体化されてきており、また茨城大学としては全学的学部改革を目指して総合計画委員会等で検討されるなど、教養教育を巡る状況が激変する様相を呈している。また茨城大学における教養教育の現状を見ると、質の高い教育を求めて習熟度別授業、接続教育の導入などが検討されている。すなわち、教養教育をしっかりとしたものにする必要性が強く要求されている。

このような動きについて全学的に理解を深め、新しい教養教育の仕組みを構築していく第1ステップとして教養教育シンポジウムを計画した。

実施に際しては、テレビ会議システムを利用して3キャンパスで参加できるように配慮した。

<教養教育シンポジウム（プログラム）>

時期：平成15年1月29日（水）午後1時～5時

場所：水戸キャンパス（共通教育棟11番教室）

日立キャンパス（第2,3会議室）

阿見キャンパス（第1会議室）

参加者：教職員

テーマと講師

[I. 教養教育の改革]

挨拶（宮田武雄 学長）

(1) 教養教育等分科会答申に見る教養教育改革の

方向（曾我日出夫 センター長）

- (2) 習熟度別授業による英語教養教育の充実（永井典子 副センター長）

[II. 次世代の教養教育に向けて]

- (3) 点検評価「教養教育」による課題と改善の方向（田切美智雄 副学長）

- (4) 企業から見た、これからの教養教育に望まれること（森田憲一(株)日立製作所）

総括とまとめ（池谷文夫 副学長）

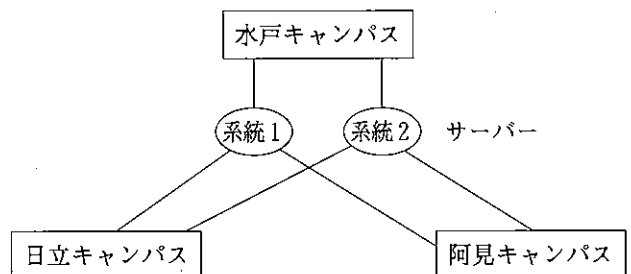
(2) VCS（Virtual Campus System）による教養教育シンポジウムの実施

3キャンパスの接続方式に、従来の講義や会議では各キャンパス間を双方向に常時接続するデルタ方式が採用されていた。この方式ではシンポジウムを運営することから、水戸キャンパスにスクリーンが3つ必要になることから、スター方式に変更した。ただし、この方式では実績がなかったので、つなぎ込みの事前テストが必要であり、もうひとつは通信速度などの心配があった。ここでは、今後の参考のために方式を整理した。

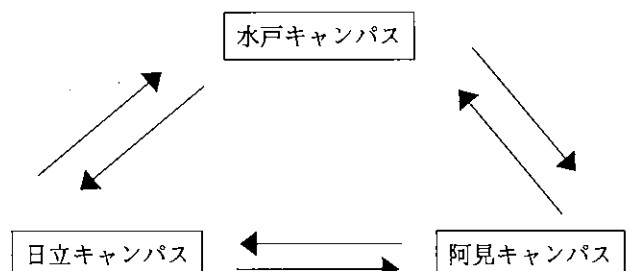
a. 3キャンパスの接続

各キャンパス間を下図のようにサーバーをかませた2系統のスター方式で接続する。

系統1は発表用で、水戸会場の講演資料（スクリーン）と講師を映し出す。系統2は質疑用であり、映像の切り替えは、マイクを使って発言する映像が自動的に選択される（例えば、水戸あるいは日立、阿見の会



<参考>各キャンパス間を双方向に常時接続する（デルタ方式）。



場での質問は、それぞれの映像が切り替わって3キャンパスのスクリーンに映し出される)。

b. 各会場のカメラ

各会場は、固定カメラ2台が設置されており、2台の操作はリモコンにより行うことができる。

水戸会場では、1台(第1カメラ)は部屋の後方から講師とスクリーンを、別の1台(第2カメラ)は前方より参加者を映すことができる。司会者席をスクリーン左に置くことにより、第1カメラで司会者も映せるので、進行や質疑の際に便利である。質問者は、第2カメラで捉えることにした。

日立会場(阿見会場も同様)は第1、第2カメラが固定になっており、これを使う場合には、第1カメラで前方から会場全体を、第2カメラで右前方の司会者及び質問者を映すのが便利になる。(質問者は、司会者の隣りに来てもらい質問をしてもらおうとカメラを大きく振らなくて済み、操作が楽になる。第1カメラは接続するが、通常は使わない。)

c. 講演と質疑の進め方

水戸キャンパスの会場では、会場前方にスクリーンを2基用意する。講演は、会場の前方左のスクリーンにパワーポイントで作成した講演資料をプロジェクターにより映し出す。講師は、スクリーンの近くに立ち、一台のカメラ(第1カメラ)でスクリーンと講師を映し出す。

日立並びに阿見キャンパスの会場でもスクリーンは2基用意し、左側は系統1の水戸からの講演資料と講師、右に質疑用の系統2の映像を映し出す。

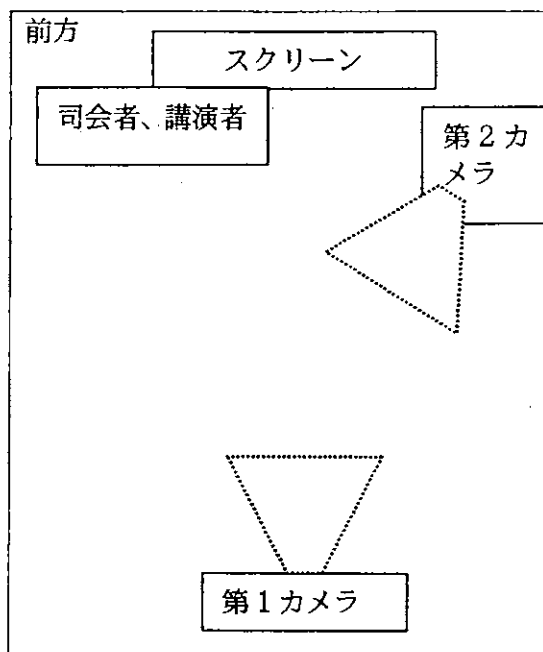
3会場ともに、質問あるいは意見を述べる場合には、第2カメラでそれをとらえ、前方右のスクリーンで映像を映し出す。水戸の講師が回答する場合は、第1カメラとする。

系統1の映像は切り替えを行わず、常時水戸の映像を流す。系統2の映像は3会場間で自動切り替えで行われるが、クローズアップなどの操作は、リモコンで機器操作担当者が行う。担当者は、会場の司会者のそばにいる方が進行を円滑に行う上で都合がよい。

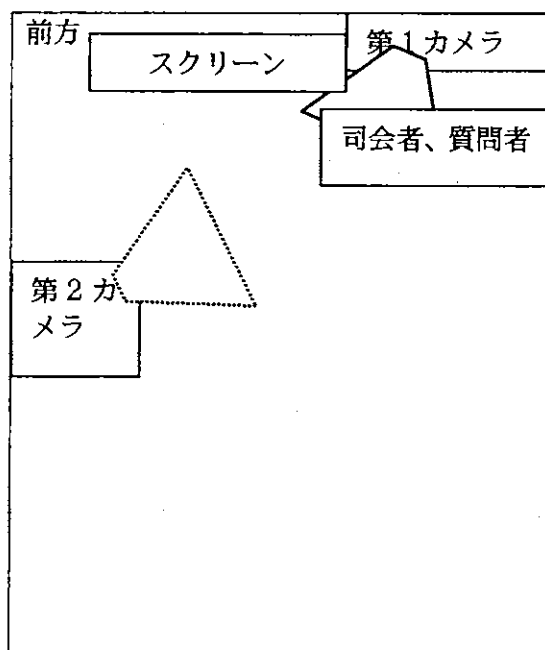
d. 反省

・つなぎ込みに手間取った。事前に確認したが、当日は開会直前まで音声の一部が不調であった。設備の

(部屋の模式図：水戸会場)



(部屋の模式図：日立会場)



使い方になれる必要がある。

- ・会議や講義の場合には音声、画面の切り替えを頻繁に行う必要がない。ところが、シンポジウムのように参加者が多い場合には、カメラの切り替えが必要であり、それにより臨場感が創出される。
- ・司会者は、会場に向いているが、モニターがないためにスクリーンや、他会場の様子が分からない。また、カメラの切り替えは、司会者(あるいは進行役)が行うようにするのが効果的である。モニターが司会者の前面にほしい。

- ・第2カメラの切り替えは音声により自動的に行われるが、マイクを入れ続けると他会場から呼びかけても切り替わらない。このような事態が後半発生した。反省す改善すべき点である。

(3) 教養教育FD研究会

H14のFD活動として、授業改善に焦点を定める。すなわち、教員の意識の向上を図り、教養教育の質を高め、卒業生の品質を確保する。そのために、継続的かつ効果的な授業改善を可能にするシステムの構築が必要であり、それには学部学科FDと専門部会FDが効果的と考えられる。そこで、今回のFD研究会ではそのシステム構築とアプローチを議論することを目的とした。

授業を改善するためには、個々の授業の質を高めることが大切である。現在までに全般に対するFD、あるいは専門部会（授業分野）毎の点検が行われてきているが、継続的な授業改善を可能にするシステムとして授業内容や目的の類似性の高い授業グループ（学部学科単位、あるいは専門部会単位）で問題点&改善の工夫を持ち寄って授業改善に役立てることが有効である。

今後は、それぞれの単位で継続的に授業評価アンケートの分析やFD（授業の計画・設計、シラバスの作成などを含む）を続け、その結果を報告する全体報告会などにより情報を共有することにより全学的なFDを機能させる。

以上のような観点に立ち、継続的な授業改善を可能にするシステムの構築のキーパーソンになる人たちを集めてFD研究会を実施する。期間は2日間、会場は阿見キャンパスとし、参加者50名程度とする。

プログラム

*** 3月6日 ***

<話題提供>

1. FDに期待すること…横山功一副センター長
2. 茨城大学教養教育の現状分析…曾我センター長
3. 専門教育のFD
 - ・教育学部…木村 競 助教授
 - ・工学部…前川 克廣 教授
 - ・農学部…黒田 久雄 教授

<ワークショップ>

4. グループに分かれて、個別テーマ毎に討論
- ・専門部会におけるFDのあり方

授業を改善するためには、個々の授業の質を高めることが大切である。継続的な授業改善を可能にするシステムとして授業内容や目的の類似性の高い授業科目グループ（専門部会単位）で問題点&改善の工夫を持ち寄って授業改善に役立てることが有効である。専門部会は寄り合い所帯でまとまりがないが、どのように進めたらよいか？

- ・授業評価アンケートの効果と教官へのフィードバック

現時点では、授業評価アンケートは教官へフィードバックされてはいるが、改善に役立てられているのか、あるいはどの程度改善されたかが不透明。もう一歩進めるには、どうすればよいか？

- ・成績評価のあり方

到達目標、到達度の測定方法、成績評価方法は、各授業でバラバラ。これでは、GPAの導入などできない。教育の質を高めるためには成績評価の考え方を共有する必要がある。

- ・すばらしい授業とは？

推奨授業表彰を受けた教官は、その授業にいろいろな工夫と努力をされている。今、学生に対して効果的な授業にはどのようなノウハウが必要か？それはどのようにして開発できるのだろうか？授業のためのマニュアルも必要ではないか？

第1日目終了 宿泊

*** 3月7日 ***

<特別講演>

愛媛大学の教養教育改革と今後の展開方向

…西頭 徳三 愛媛大学副学長

<全体討論会>

ワークショップからの報告のあと総合討論

今後のFDの進め方に関する討論

FDの進め方に関する提言 (2003阿見アピール)

とりまとめ、終了

教養英語教育の改革：習熟度別カリキュラムの導入

General Education English ke from: classes based on students' proficiency

永井 典子 (大学教育研究開発センター副センター長)

Noriko NAGAI (Vice Director of the Center for Research and Development in University Education)

1. はじめに

茨城大学では、平成8年度、教養部の解体と同時に、教養英語改革が行われた。この改革では、従来の教官が自由に授業内容を決定するシステムから、教養英語を3つの授業タイプ、EC (English Communication)、IC (Intercultural Communication)、TR (Text Reading) に分け、教養英語の授業内容にある程度制約をつけるものであった。しかし、このプログラムは、1) 学生の英語の習熟度を反映したクラス編成になっていない点、2) 教養英語のそれぞれの授業に関連性がない点、3) 教養英語が一体となった積み上げ式カリキュラムを構築していない点から、効果が上がりにくい、非効率的なシステムであることが、教養教育の現状分析から明らかになった。これらの点を改善するために、茨城大学では平成13年度から、教養英語改革が始まった。そして、平成14年度は、4技能習得型の習熟度別新カリキュラムを試行するため、人文学部社会科学科の1年生を対象に8クラスのパイロット授業を行った。平成15年度からは、人文学部社会科学科、農学部到新カリキュラムの導入が決定した。そして、16年度以降、新カリキュラムを全学へと段階的に実施していく予定である。

本稿では、これまでの茨城大学の教養英語改革の内容を報告する。特に、本改革は、1) 教養英語教育の現状分析の結果に基づく新カリキュラムの構築、2) 新カリキュラムを確実に実践するための教育運営支援システムの構築、3) 新カリキュラムに基づく教育の成果を挙げるための学生への学習支援システムの構築という3つのモジュールを設定した。そして、これらのモジュールが有機的に機能し、より効果的な教養英語のプログラムが確立されるよう配慮した。本稿では、そ

れぞれのモジュールでの改革を詳細に説明したい。

2. カリキュラムの構築

教養英語教育改革では、カリキュラムの構築を行うために、まず、1) 教養英語教育の現状分析を行い、そして2) 教養教育の理念と目標に則した教養英語教育の理念の構築し、理念を実現するための目標設定を行った。これら2つの作業を重視した理由は、現状の問題を正確にかつ客観的に分析することではじめて、現在教養英語教育が直面する問題を改善できると考えるからである。さらに、教養英語教育は、茨城大学における教育の一部である。よって、茨城大学における4年一貫の教育を確実なものとするためには、教養教育全体に対する教養英語教育の理念と目標を明確にする必要があると考えたからである。

以下に、まず、現状分析の結果、次に、教養英語教育の理念と目標を示す。そして、新カリキュラムの概要を説明する。

2-1 現状分析

教養英語教育の現状分析としては、以下の4項目に関して、調査・分析を行った。

- ① 旧カリキュラム (平成8年度から開始) の点検評価
- ② 教養英語教育に関する卒業生調査の分析
- ③ 平成14年度茨城大学入学者の英語習熟度分析
- ④ ニーズ分析

以下に、それぞれの調査分析及びその結果に関して、詳しく述べる。

2-1-1 旧カリキュラムの点検評価

旧カリキュラムの点検評価作業を行い、旧カリキュ

ラムの長所および短所を明確にした。旧カリキュラムの英語教育は2つのタイプに大別される。1つは人文学部、教育学部、理学部の学生を対象としたカリキュラム、もう1つは、工学部、農学部の学生を対象としたカリキュラムである。

前者のカリキュラムでは、1年次生用に、英語Ⅰと英語Ⅱが開講され、2年次生に、英語Ⅲが開講されている。そしてそれぞれの、英語に、EC(English Communication)、IC(Intercultural Communication)、TR(Text Reading)という3つの異なるタイプの授業が用意されている。そして、それぞれのタイプの授業に少なくとも2名の教官が授業を開講している。学生は、各自好きなタイプの授業から、好きな教官の授業を自由に選択できるシステムである。

後者、工学部と農学部の学生を対象としたカリキュラムでは、1年次生に英語Ⅰ、2年次生に、英語Ⅱ、3年次生に英語Ⅲ、と学年進行に伴い、英語が半期1本(通年2本)ずつ開講される形態をとっている。このシステムでも、前者のカリキュラムと同様、各英語に3つのタイプの授業が開講され、それぞれに複数の教官が授業を開講している。

このカリキュラムの長所として、学生が各自の好みに従って自由に授業を選択できることが上げられる。しかし、この自由度が、このカリキュラムの欠点ともなっている。すなわち、クラス編成を行う際に、学生の希望が選択の基準になっており、学生の英語の習熟度は考慮されていない。そのため、1つのクラスに英語の習熟度がかなり異なる学生が混在してしまっている。

また、授業運営上の問題として、習熟度の異なる学生を対象としているため、それぞれの英語の授業の目標を明確に設定しにくく、その結果、適正な評価もしにくいシステムになってしまっている。さらに、それぞれの教官が教えている同一タイプの授業間で、連携をはかっておらず、積み上げ式のカリキュラムになっていない。カリキュラム全体としては、効果の上がりにくい構造に陥ってしまっている。

2-1-2 教養英語教育に関する卒業生調査の分析

旧カリキュラムの問題点としてあげた点は、茨城大学の卒業生にも認識されている。

平成14年3月に茨城大学卒業生に実施され教養教育に関するアンケート結果によると、教養教育が役に立っているのかという問いに対し、英語を含む外国語教育に関して「役に立っていないと思う」と回答した卒業生が41.4%を占めていた。また、卒業生の自由解答欄にも、以下のような厳しい回答が寄せられている。

- ・外国語で、一部には高校レベルの原書購読で、英語の能力が全くつかない授業がある。
- ・英語や情報関係では、受講生のレベルに大きな差がある。能力別のクラスにして欲しい。
- ・検定試験・資格取得を含めて、英語教育を徹底して欲しい。
- ・英語では、英会話に力を入れて欲しい。

すなわち、教養英語教育の受講生であった卒業生も、英語の授業は、学生の習熟度にばらつきがあり、効果があがりにくいシステムであることを認識している。さらに、実際に役立つ実践的な英語教育を実施することを欲していることがわかる。

2-1-3 平成14年度茨城大学入学者の英語習熟度分析

英語を受講している学生の英語の習熟度が異なることは、教えている教官、及び上記の卒業生調査からも分かるように、受講生にも認識されている。しかし、学生の英語の習熟度がどのくらい異なっているのかは、今年度のパイロット授業を準備した平成13年度まで調査されてこなかった。そこで、平成13年度入学者及び平成14年度入学者の英語の習熟度をセンター試験の英語のテストの得点を用い、分析した。その結果、われわれが当初予測した以上に、学生の英語の習熟度には大きな差があることが判明した。特に、工学部は、その差が大きく、今後工学部向けの教養英語プログラムを考える際には、この点を特に考慮しなければならないだろう。

2-1-4 ニーズ分析

学生は、教養英語教育にどのようなことを望んでいるのであろうか。平成14年度に実施された習熟度別授業の受講者である人文学部社会科学1年生、240名を対象に教養英語教育に関するニーズ分析を行った。この分析では、以下の6項目に関して、学生のニーズを確かめるために、88項目からなる質問紙調査を行った¹。

1. 参加者が英語を学習する動機はなにか。
2. 参加者に適した教授法とはなにか。
3. 現行のプロジェクトである総合英語カリキュラムでは4技能育成を目的とするが、どの技能の学習意欲が高いか。
4. 4技能の育成のためにどのような学習法が参加者の動機付けを高めるか。
5. どのような授業運営が参加者には適しているか。
6. 参加者はどのような評価法を望んでいるのか。

教養英語改革小委員会では、このニーズ分析結果を反映し、学生のニーズに即したカリキュラムを構築することを目標とし、かつこのカリキュラムが学生のニーズに即した形で運営されるような体制づくりを目指した。

2-2 教養英語教育の理念と目標

茨城大学での4年一貫教育を確実に実行するために、教養英語カリキュラムの理念と目標は、教養教育の理念、目標を反映させていなければならない。茨城大学の教養教育の理念及び目標は、次の通りである。

教養教育の理念²

「豊かな人間性を涵養し、人類や自然との共生及び学問と社会との開かれた関係を築き得る能力を育成する。」

この理念を教育現場で実践するため、全学的な共通目標として以下の5項目が設定されている。

- 1) 専攻する学問と異なる専門分野の学問に触れることにより、多種多様な文化と価値観を理解し、幅広い視野を身につける。
- 2) 学際的・複合的学問分野に触れることにより、総合的・全体的に物事を捉える態度を養う。
- 3) 物事を主体的に判断し、実証的な態度や批判能

力を身につける。

- 4) 専攻する学問と自然、社会及び人間とのかかわりについての考えを養う。
- 5) 国際化・情報化の社会に主体的に対応できる能力を培う。

このような、教養教育の理念及び目標に則り、教養英語教育の理念を以下のように定めた³。

教養英語教育の理念

「英語を学ぶことによって、地域社会に生きると同時に、地球規模の視野を持ち、考え、行動できる人間を育成することである。」

この理念を実現させるために、以下の5つの目標を設定した。

- 1) 英語を通じて、多種多様な文化と価値観を理解し、幅広い視野を身につける。
- 2) 英語を通じて、さまざまな情報やものの考え方に触れ、より総合的・全体的に物事を捉える態度を養う。
- 3) 英語で広く情報を得ることによって、さまざまな立場の情報をもとに、物事を主体的に判断し、実証的な態度や批判的な能力を身につける。
- 4) 専攻する学問と自然、社会および人間のかかわりについての考えを養うための基礎的なスキルを身につける。
- 5) 国際化・情報化の社会に主体的に対応できる言語的・社会的能力を培う。

この理念の根幹となる教養英語の教育方針は、母語が異なる者どうしがコミュニケーションを図る際に使用する世界共通語としての英語の役割を重視し、多種多様な文化を受容できかつ、日本人としてのアイデンティティーを確立し、自己の意見を、説得的に英語で発信できる学生を養成することである。

また、教養教育の目標には含まれていないが、後述

¹ ニーズ分析は、英語改革小委員会の熊澤孝昭氏によって行われた。詳しい分析結果は、教養英語改革の報告書、『教養英語改革——21世紀の大学英語教育を目指して——』の論文を参照していただきたい。

² 茨城大学の教養教育の理念と目標に関しては、『教養教育の基本方針』を参照していただきたい。

³ 教養英語教育の理念と目標は、英語改革小委員会の福田浩子氏が起案した。詳しい内容は教養英語改革の報告書、『教養英語改革——21世紀の大学英語教育を目指して——』のなかの「教養教育の理念と目標」を参照していただきたい。

するように、大衆化する大学教育の実情に合わせ、学生が自律的に学ぶことができる学習能力を身につけさせることも教養教育の大きな課題の1つである。そこで、教養英語教育の目標では、下記で述べるように、自律的学習を支援することも目標として設定した⁴⁾。

2-3 新カリキュラムの提案

教養英語教育の現状分析を徹底的に行うことによって旧カリキュラムの問題点を明確にし、改善策を考案し、それを実行に移すIntegrated English Program (IEP) を立ち上げた。IEPのカリキュラムは、学生の習熟度を5段階に分けた4技能(話す、聞く、書く、読む)習得型の授業と大学での専門教育と教養英語教育の接続を円滑に行うために、特定の技能を集中的に教えるEnglish for Academic Purposes (学術英語)からなる(図1を参照)。5段階に分けた4技能習得型の授業では、レベルごとに教育内容を提示し、かつレベルごとの明確な到達目標を設定した⁵⁾。また、同一レベル間では、統一教科書を用いる。授業は週2回の同一

教官による対面授業と週1回のコンピュータラボでの
自習からなる。

3. 教育運営支援システム

提案した新カリキュラムを確実に実行に移すためには、新カリキュラムを実践しやすい教育方法及び教材を調査研究し、これらの調査・研究で得た知識を担当教官で共有するためのFDを定期的 to 実施する教育支援システムを確立する必要がある。さらに、効果的に教育が行える教育担当体制を確立しなければならない。

- ① 教育支援システム
- ② 教育運営システム

3-1 教育支援システム

教育支援システムとして、新カリキュラムを効率的かつ最大限の効果が生まれるように授業で実践するために、教育方法、教材調査・開発、評価方法、教育に必要なテクノロジーの調査が急務である。今年度は、特に、習熟度別クラス分けのための、プレースメントテ

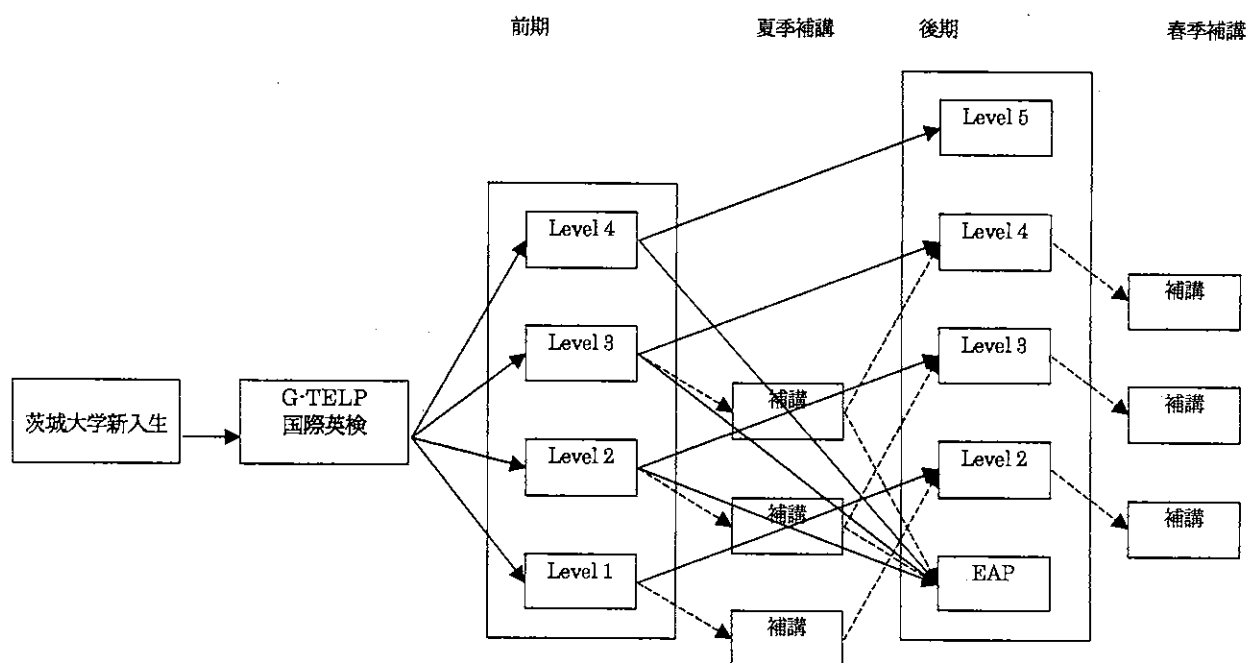


図1 カリキュラム構造図

⁴ 詳しくは、教養英語改革の報告書、『教養英語改革——21世紀の大学英語教育を目指して——』のなかの「教養教育の理念と目標」を参照していただきたい。

⁵ 4技能習得型の各レベルのCourse Descriptions（授業内容）は、英語改革小委員会のロバート・ベッツ氏が担当した。各レベルの詳細な内容は、教養英語改革の報告書、『教養英語改革——21世紀の大学英語教育を目指して——』のなかの「カリキュラム」を参照していただきたい。

ストの調査、評価方法の研究、及び教育方法、教材調査を中心に行った。また、年度始めに、習熟度別パイロット授業を教える新規教官のワークショップを開催し、授業内容の説明、効果的な教授法などの説明を行った。今後は、教育支援のために行っている調査研究結果を多くの英語担当教官と共有するために、定期的にワークショップやセミナーを開催することが望まれる。また、教育支援のための調査研究結果が自由に閲覧できるリソースルーム（資料室）の設置や、ホームページの立ち上げも予定している。

3-2 教育運営システム

14年度に試行された習熟度別授業は、今後全学的に導入される。新カリキュラムでは、同一レベルでは、統一教科書、統一内容で授業が進められるため、レベルごとの教官のコーディネーションが欠かせない。また、プログラム全体として積み上げ式の一貫プログラムなので、各レベル及び学術英語を統括するプログラムコーディネーターも欠かせない。よって、15年度には、4技能のレベル1（基礎）からレベル5（上級）までに一人ずつ、および、学術英語にコーディネーターを一人おき、そのうちの一人がプログラムコーディネーターとなり、プログラム全体を統括する役割を担う予定である。

担当体制の確立のほかに、教育運営を円滑に進めるためには、語学教育に適した教室の整備を行わなければならない。この点は、14年度ほとんど着手されておらず、設備の充実は、15年度への課題である。

4. 学習支援システム

学習支援システムに関する改革は、以下の2点を中心に行った。

- ① 学習方法の学習の支援
- ② 自習の支援

4-1 学習方法の学習の支援

18歳人口の50%が大学へ入学してくる今日、学生の大学での勉学に対する意欲や動機は以前に比べかなり希薄になっている。そこで、学生になぜ英語を勉強するのかという明確な動機付けと、どのように勉強する

のかという勉強方法を支援するシステムを確立する必要がある。

14年度のパイロット授業では、後期の最初の授業で、動機付けセミナーを行い、学生各自に後期の学習目標を立てさせた。そして、その目標を達成するためにどのような自主学習をするのかを明確にさせた。そして、この学習目標カードを教官と学生が保管し、定期的に学生に目標の達成度合いを確認させることにした。

今年度のパイロット授業の点検評価として、学習方法の支援が十分でないことがわかった。これは、学生が英語をどのように勉強すれば良いのか、例えばどのような英英辞典を使用すれば良いのかなどよくわかっていない実情があげられた。今後は、個別の学生に対応するのではなく、学習方法の支援として、前期に1度学くらい学習方法の学習支援をした方がよいだろう。

4-2 自習の支援

英語のような技術獲得を目指す授業では、英語の学習を頻繁に行う必要がある。週2回の対面授業だけでは、英語学習に必要な頻度は十分確保できているとはいえない。そこで、新カリキュラムでは、コンピュータラボでの週1回の自習を義務付けている。今後、自習を支援する設備の充実とともに、効果の上がる自習を目指し、学習ソフトの見直し、自習と授業の連携の仕方などを考えなければならない。

また、コンピュータラボのみならず、学生が英語に浸れる環境作りを目指さなくてはならない。このために、学生の習熟度に応じた英語自習用の教材、たとえば、Graded Readersなどを増やし、学生が自由に各自の能力に合った文献を好きなだけ読めるような環境作りも重要である。

5. 改革の効果

平成14年度に行われたパイロット授業では、後期の初め（10月はじめ）と終わり（1月末）に、受講生にG-TELP（国際英語検定）を受検させた。そして、新カリキュラムの効果を知る判断材料として使用した。受講生による試験結果は、後期30回授業という短期間だったにもかかわらず、英語能力に顕著な向上が測定

された⁶。この結果から、本改革で提案したカリキュラム改革は、効果が上がるカリキュラムであることが、実証された。

6. おわりに

教養英語プログラムを、その時代の要請に応え、かつ学生のニーズに応じたプログラムにするには、カリキュラムを見直し、改善を継続的に行う必要がある。また、担当教官の相互協力、および、知の共有、技術習得も今後継続して行われなければならない。さらに、多様化する学生のニーズに対応し、自律的に学習できる学生を養成するために、学習支援は、今日の大学教育に課せられた重要な役割の一部である。茨城大学の教養英語プログラムは、これら、3つのモジュールでの教養英語教育の改善・見直しを継続的に推進し、進化型のプログラムを目指している。

最後に、14年度は、各学部から供出された流動定員3ポストを使用し、教養英語教育の改革に専念できる教官を3名用意していただいた。このようなポストがなかったら、この改革をここまで進めることはできなかったであろう。教養教育の改革に熱心に取り組んでくださった任期付き3教官、ならびに教養英語改革小委員会のメンバーには、心から感謝したい。

参考文献

『茨城大学教養教育の基本方針』茨城大学教養教育研究開発センター 2002年3月

『教養英語改革——21世紀の大学英語教育を目指して——』茨城大学教養英語改革小委員会 2003年5月

⁶ パイロット授業の効果測定の詳細な分析は、英語改革小委員会の土平泰子氏が行った。詳しい分析結果に関しては、教養英語改革の報告書、『教養英語改革——21世紀の大学英語教育を目指して——』を参照していただきたい。

情報教育における習熟度別授業の導入について

Introduction of Ranked Classes Dependent on the skill in Information Education

鶴田 浩一 (工学部)

Koichi TSURUTA (College of Engineering)

1. はじめに

高度情報化社会と言われる現在、基本的な情報技術は総ての社会人に必須の技術、教養となりつつある。高度職業人の養成を目指す本学では、教養科目としての情報関連科目を全学に渡って必修科目としており、その重要性は十分に認識されている。しかし、教養科目としての情報関連科目の中身については、各教官が困って立つ分野、経験によって異なり、何をどこまで教えるべきかの検討は十分とは言えない。また受講者についても、既に特定の領域で高いスキルを身につけた学生がいる一方、入学まで全く情報機器に触れたことがない者もいる等、多様であり、一部の学生には不満もあると思われる。

そこで、情報関連科目について全学的に検討、改革する必要があるとの認識が高まり、大学教育研究開発センター内の専門部会である情報関連科目専門部会で具体的な改革案を検討することになった。改革には将来を見据えた長期的な展望が必要であるが、今すぐ出来るところから取り掛かると言う視点も重要であり、本報告は平成15年度から実行できる具体的な改革案をまとめたものである。

2. 現況の認識と問題点

現在、情報関連科目のクラスの編成は基本的に各学部とも学科あるいは専攻単位となっており、授業のコンテンツは各学科、各専攻で要求されている内容と大きな乖離はないと思われるが、講義担当者に任されている面もあり、検討の余地が残されている。一方、受講前の学生の習熟度にはかなりの幅があり、学生が学びたいと希望する内容も個々の学生によって異なるため、現在以下のような問題が生じている。

- (1) クラス内で学生の習熟度に差があり、教育効果が上がりにくい。
- (2) 同一の専攻でも学生が関心を持っている内容が異なるため、教育内容を専攻分野に合わせて一律に定めるのは問題がある。
- (3) 上記の理由により、各授業の目標を明確に設定しにくい。

さらに、4年後には次のような問題が生じる。

- (4) 平成18年度より、高校で情報科目が必修となった学生が入学して来るので、それに合わせて従来の授業内容を大幅に改訂する必要がある。

3. 改革の要旨

以上のような現状認識および、上記(4)を考慮すると、平成15年度は小規模の改革を実施し、平成18年度に大幅な見直しをするのが適当と思われる。そこで、平成15年度に行うべき改革のガイドラインを次のように設定し、細部については各学部の事情と自主性を尊重することにした。

- (1) 初等的なりテラシーが習得できていない者(初級クラス)とある程度できている者とは別クラスになるようなクラス分けを導入する。
- (2) 初級クラス以外は、取り扱う内容(コンテンツ)の種類ごとのクラス分けを導入する。その内容については各学部学科の意向を尊重する。

4. その他改革に必要とされること

教育効果を上げるためには、カリキュラム以外に次のような事項の措置が望まれる。

- (1) 総合情報処理センターの夜間使用時間を延長し、学生の自習の便を図る。また、TA予算を増額し、学

生に対するサービスを密にする。

(2) 工学部生および農学部生についても、情報関連科目は1年次から履修するのが望ましい。

(3) 授業担当者からは、成績評価は可否のみとするのが適当との声が多い。スキルの習得の性格が強い科目について、成績の付け方を検討する必要がある。

5. 各学部の改革案

5-1 人文学部

5-1-1 教育理念

人文学部における情報教育の理念は次の通りである。

高度情報化社会において能力を十分に発揮できる人材の育成を目指す。具体的には、「情報社会の賢い市民」、「情報技術の生産的利用者」、「技術開発の担当者」の3つの人材像を念頭に情報教育を行う。

上記目標に沿って、教養教育において学生全員に最低限の情報倫理と情報リテラシーを身につけさせると同時に、コンピュータ操作にある程度習熟している学生にはそのレベルにあった授業を提供するために、平成15年度から習熟度別および内容別クラス編成実施する。

5-1-2 クラス編成

【平成14年度までのクラス編成】

L 1	人文学科	1クラス約75名
L 2	人文学科・社会科学科	1クラス約60名
L 3	社会科学科	1クラス約75名
L 4	社会科学科	1クラス約75名
L 5	社会科学科	1クラス約75名
L 6	コミュニケーション学科	1クラス約50名

計 約395名

【平成15年度からの習熟度別クラス編成】

L 1	人文学科	1クラス約60名
L 2	人文学科	1クラス約60名
L 3	社会科学科	1クラス約80名
L 4	社会科学科	1クラス約80名
L 5	社会科学科	1クラス約80名

L 6 コミュニケーション学科

1クラス約50名

計 約395名

上記のクラス編成のうち、L 1 および L 3 が初級クラスであり、L 2, L 4, L 5 が中級クラス。L 6 は複数の教官が担当し、実質的に習熟度別・内容別クラスを編成する予定である。なお、平成14年度の履修者ならびに授業担当者にアンケートを実施し、それをもとにクラス編成を再検討する。現在、初級2クラス、中級3クラスを考えているが、アンケート結果によっては初級をもう1クラス増やすことも考えている。また、各学科で必要とされる情報教育を検討した上で、平成14年度まで開講されていた人文学科と社会科学科の混成クラスも1クラス程度開講する可能性もある。

5-1-3 習熟度別クラスの内容

(a) 初級者クラス (2クラス)

ほとんどパソコンを使用した経験のない学生向け。パソコンの基本操作から各種アプリケーションソフト (ワープロ、表計算ソフト、webブラウザ、電子メールソフトなど) などの基本的操作法の習得を目指す。

(b) 中級者クラス (4クラス)

ある程度パソコンを使用した経験のある学生向け。各種アプリケーションソフトのより高度な使用法の習得と、ホームページの作成、プレゼンテーション用ソフトの利用法などの技術習得を目指す。

なお、情報倫理とメディアリテラシー教育は(a)、(b)両クラスに共通とする。

(注記)

(c) 上級者クラスが設定されるのが望ましいかもしれないが、平成15年度からの実行を考えると2段階が現実的である。学生へのアンケート結果によっては2年生時の上級クラス開講も今後検討する。

初級クラスでは授業内容は共通。中級クラスではクラスごとに内容の特徴を出す可能性もある (学生のニーズに応じて、あるいは各学科に固有

に必要とされる教育内容に応じて)。これは今後各学科で検討する。学生のクラス分けに関しては入学ガイダンス時に習熟度調査（学生の申告，あるいはプレースメントテストの利用）を予定している。

5-1-4 習熟度別クラス編成実施へむけての問題点

本案は人文学部情報教育検討委員会で検討したものであり，実施にあたっては教授会や各学科でさらに詰める必要がある。特に，各学科で独自に必要とされる教育内容について十分な検討が必要である。

平成15年度から習熟度別クラス編成を実施するに当たっては，コマ数・時間割（バンド）の変更は行わないで，平成14年度までと同じ形態で，内容的に習熟度別クラス，内容別クラスが実施できるように考えたい。学生のニーズや人文学部各学科で必要とされる情報教育の理念が確立された時点でコマ数，時間割編成について再検討する予定である。

5-2 教育学部

5-2-1 重点目標

教育学部の情報関連科目の重点目標は以下の通りである。

情報化社会に対応した情報活動能力を育成する一環として，コンピュータの基本操作，各種アプリケーションソフトの利用法の基礎実習を行う。

この目標は，少なくとも高校で教科「情報」を履修した学生が入学する平成18年度までは変わらないと思われる。教育学部では，上記目標に沿って学生全員に最低限の情報リテラシーを身に付けさせる一方，コンピュータ操作にある程度習熟している学生にはそのレベルに応じた授業を提供するために，平成15年度から習熟度別クラス編成の実施に取り組む。

5-2-2 クラス編成

【現在のクラス編成】

数学・理科・技術	1クラス約60名
国語・社会・英語	1クラス約60名
音楽・美術・家庭・体育	1クラス約60名
養護学校・養護教諭	1クラス約60名

情報文化	1クラス約60名
教育科学・人間環境教育	1クラス約60名

計 約360名

【習熟度別クラス編成】

- (a) 平成15年度は，試験的に学部定員の1/3程度（100～120名：従来の2クラス分）を対象に習熟度別クラス編成を行う。
- (b) クラスは，習熟度別に入門クラス（初・中級レベル：1クラス60名程度），応用クラス（中・上級レベル：60名程度）の2つとする。2クラス編成にすることにより，1時限で分室の2つの演習室を同時利用して授業を行うことが可能になり，時間割編成の際のバンドの縛りを最小限にとどめることができる。
- (c) 入学ガイダンス時にアンケートによる習熟度調査を行い，それをもとにクラス分けを行う。
- (d) 成績評価については，判定基準（入門・応用共通）を明確化した上で6段階（他教科と同じ）で評価する。
- (e) 平成16年度については，15年度の状況を見てクラス編成，実施規模を再検討する。

5-3 理学部

5-3-1 クラス編成

【現在のクラス編成と学習内容】

数理科学科（約80名）

- ①パソコンの操作，電子メールやWWW利用
- ②ホームページ制作実習

自然機能科学科（約80名）

- ①パソコンの操作，各種アプリケーション利用
- ②UNIX操作法やプログラミング入門

地球生命環境科学科（約80名）

- ①ワープロ，各種アプリケーション利用法
- ②ロボットを用いたプログラミング実習

5-3-2 現行カリキュラムの問題点

学科ごとに異なるコンテンツを持っており，それぞれ特色がある。しかし，個々の授業の前半部分は基本的なコンピュータの使い方や，アプリケーションソフトの利用法，電子メールの使い方等に時間を費やしており，ある程度コンピュータ使用法に習熟した学生（パ

ソコン中級者) にとっては、この部分の時間が無駄になっている。また一般家庭や学校等におけるパソコンやインターネット環境の向上に伴って、受講者に占めるパソコン中級者の割合の増加が予想され、こうした基礎部分のスキップが可能となるような習熟度別カリキュラムの構築が望まれる。また現行の体制で既に教室収容人数がオーバーになっている(90名以上のクラスもある)ことから、なんらかの形でクラスを分割する必要がある。しかし、教官側の余裕はほとんどないため、これ以上実質的なクラスの数を増やすことは得策ではない。

5-3-3 習熟度別カリキュラム編成案

実質的なクラス数を増やすことなく、習熟度別に対処し、かつ教室収容人数問題を解決する方法として、初級者講習を含めた4つのコンテンツから2つを選択して履修するアラカルト方式を導入する。4つのコンテンツのうち、1つは初級者講習とする。

初回の授業でアンケート調査を行い、コンピュータ初級者は履修が必要な2つのコンテンツのうち、1つは初級者講習を選択するように指導する。中・上級者は、初級者講習を除いた3つのコンテンツから2つを選択する。

2・3回目の授業では、総てのコンテンツで情報倫理について講義する。4～15回目の授業を前半(4～9回目)および後半(10～15回目)に分け、各コンテンツを平行して講義する。ただし初級者講習は前半で講義する。

2・3回目に講義する情報倫理の内容は次の通りである。

- (a) 情報化社会における倫理学(ネット犯罪の抑止等)
- (b) 情報処理センター利用法

2つを選択履修する4つのコンテンツの内容は次の通りである。

① 初級者向け講習

(前半のみで実施、TAを活用)

- ・パソコン操作法
- ・ワープロ、基本的アプリケーション使用法
- ・電子メール、WWWの利用法

② Web page作成実習

③ Unix上での科学計算実習

④ ロボットを用いたプログラミング実習

5-3-4 予想される問題点

実施に当たっては次のような問題点が予想される。

- (a) 初級者講習は前半にしか行えないため、なるべく多くのコンテンツを平行して実施するためには現行3教室では足りない。したがって、第4の教室を用意する必要がある。
- (b) ほとんど受講生が初級者講習を希望した場合、実際上は現行カリキュラムとなんら変わらない状態になる。
- (c) 初級者講習のみで現行の3教室を総て使用した場合、ごく少数の中・上級者が選択する前半6日間のコンテンツを実施するための教室は1つとなり、この場合は中・上級者全員に対して共通(1つのコンテンツ)の講義を実施することになる。これはコンテンツの選択肢を狭めることになる。
- (d) 各コンテンツ間で極端な希望者数のばらつきが生じた場合、人数調整の必要が出てくる。

5-4 工学部

5-4-1 教育目標・理念

情報関連科目の教育目標は、最終目標をどこに置くかによって以下の2つに分けて考えることができる。

- (a) 情報化社会の一員としての最低限の情報リテラシー(アプリケーションソフトの使用法等)を身に付ける。
 - (b) 工学各分野の研究を推進する上での基礎(プログラミング、数値計算等)を身に付ける。
- 前者が工学部に限らずどの学部でも共通の教育目標であるのに対し、後者は主に理系の学部で求められる目標である。

工学部では、基本的に後者を教育目標にすべきと考えられるが、目標の高さは学科によってかなり異なるため、前者を全学科共通の目標とし、後者については各学科に選択の余地を与えるのが妥当と思われる。

5-4-2 現状の講義レベルの分析

現在、工学部学生向けに開講されている講義(留学生向けを除く)を内容別に分類すると以下の3つとなる。

クラス	前提とする知識	対応する講義の数
A	なし	3
B	アプリケーションソフトの使用法	7
C	プログラミング言語に関する知識	2

各クラスの講義内容は以下の通りである。

- ① クラスA：OSやアプリケーションソフトの使用法
- ② クラスB：プログラミング言語の文法、簡単なプログラム作成
- ③ クラスC：より高度なプログラミング手法

現在、工学部における情報処理関連科目の講義内容は学科により様々であり、学生に期待する習得レベルも異なる。例えば、上述したクラスの区分に関して言えば、クラスCに分類される講義を開講している学科と開講していない学科が存在する。語学や情報処理関連科目の場合、入学時の学生の能力にばらつきがあることが習熟度別クラス導入の意図と思われるが、工学部の入学生が多いことや、来年度から改革案を実施することを考慮すると、現状では以下に述べるような部分的改定が適当であると考えられる。

高校で「情報」を既に履修した学生が入学してくる平成18年度以降については、先に述べた情報リテラシーを身に付けさせることを目標とする教育は現実的ではなくなるので、1, 2年以内にその対応を検討する必要がある。

5-4-3 改革案と実施方法

15年度からの実施方法を従来の実施方法と比較して以下の表に記す。

	従 来	15年度改革後
他学科講義の受講	講義担当教官と当該学科長の許可が必要	内容の異なる他学科の講義の受講を積極的に認める
TAの活用	通常の講義と同じ教授法	受講生の習熟度をより意識した教授法に活用する
各種情報処理関連資格の単位認定	単位認定しない	あらかじめ定めた資格に関しては単位を認定する

また15年度、改革案実施までに検討すべき課題として

- (a) TAの予算の確保
- (b) 情報処理関連資格の単位認定基準の作成がある。

5-5 農学部

5-5-1 現状と改革の方向

- (a) 高校レベルで情報教育が実施されていない現段階では、学生の能力別・習熟度別クラス編成の必要性はそれほど高くはない。現在、農学部では生物系、化学系、環境系でクラスが編成されており、情報リテラシーの教育には好都合なクラス振り分けになっている。
- (b) 現在の情報教育のシラバスは基本ソフトの習得が中心になっている。しかし、実際には電子計算機の操作実習が中心の授業になりがちである。したがって、農学部では基本的にはシラバスの再検討が急務であり、例えば「プログラミング入門」、「インターネット入門」、「ワープロソフト」、「電子メールソフト」、「表計算」、「マルチメディア」等の講義を実習とは区別して導入し、その内容をシラバスに明記する。

5-5-2 改革の方法

学科毎のクラス編成の利点を生かすため、15年度は習熟度別クラス編成は実施せず、次年度以降の検討課題とする。

現在の授業は計算機の操作実習が中心になっているので、基本ソフトも十分習得できるように授業の内容を改革する。したがって、シラバスの内容も再検討する。

6. おわりに

情報関連科目専門部会では、出来るところから、平成15年度から改革するという視点で改革案をまとめた。人文学部と教育学部では習熟度別クラスを導入し、理学部ではアラカルト別というコンテンツ別のクラスを導入することになった。準備期間が少なかったにも関わらず、これら3学部では当初の目的に合う改革案が出来たと考えている。

工学部では、JABEEに対応するカリキュラムを編成するという大きな課題がある。各学科はこの観点から情報教育の改革に取り組んでおり、今回の改革は小幅

なものとなった。また農学部では、現状の反省から、実習よりも講義の内容をより充実する方向で改革することになった。

平成18年度からは中学、高校で必修科目として情報教育を受けた学生が入学してくるので、抜本的に改革する必要がある。

最後に、本報告は工学部から選出された情報関連科目専門部会長と各学部から選出された情報関連科目専門部会委員によって検討された報告書を取りまとめたものであることを明記し、委員名を下記に示す。

情報関連科目専門部会

部会長	鶴田 浩一
委員 人文学部	佐藤 英一
委員 教育学部	野崎 英明
委員 理学部	岡田 誠
委員 工学部	出崎 善久
委員 農学部	中村耕二郎

大学評価・学位授与機構「教養教育」点検評価について

University Evaluation on the General Education in Ibaraki University conducted by NIAD(National Institution for Academic Degrees)

田切美智雄 (副学長)・横山 功一 (副センター長)

Michio TAGIRI (Vice President)・Koichi YOKOYAMA

1. はじめに

教養教育の点検評価については、平成10年度に大規模な自己点検評価を行って教養教育の改善に努めてきたが、この度、大学評価・学位授与機構（以下機構）による点検評価を受けた。これは、大学が独自に行う自己点検評価でも、大学の外部に評価をお願いする外部評価でもなく、言ってみれば第3者評価である。

機構による大学評価は、平成10年10月の大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について」<http://www.monbu.go.jp/singi/daigaku/00000302/>により、大学評価のための第三者機関の設置が提言されたことを受け、国立学校設置法等関係法令の整備が行われ、平成12年4月に大学評価・学位授与機構が発足しました。この機構は、これまでの学位授与に関する事業に加え、新たに大学等の評価に関する事業を実施する機関として改組されたものである。

機構が行う評価には全学テーマ別評価と分野別教育評価があり、全学テーマ別評価の項目は以下のようになっている。

「国際的な連携及び交流活動」(平成14年度着手)

「研究活動面における社会との連携及び協力」(平成13年度着手)

「教育サービス面における社会貢献」(平成12年度着手)

「教養教育」(平成12年度着手)

また、「教養教育」の評価のテーマ概要は以下の通りである。

<http://www.niad.ac.jp/hyouka/keikaku/12/03/zengaku-theme-.pdf>

「大学における教養教育については、平成3年の大学措置基準の大綱化（一般教育科目、専門教育科目等の

科目区分の廃止）に伴い、各大学において、その教育理念に基づく教育課程の編成、教育方法及び履修指導など、主体的にその工夫・改善の努力がなされている。また、社会が高度化・複雑化する中で、社会全体としても教養及び基礎的な学力の重要性が改めて指摘されており、大学における新たな教養教育の在り方を考慮した教育の推進が求められている。これらのニーズや大学におけるこれまでの取組を踏まえ、平成12年度は「教養、教育」というテーマとして取り上げ、大学の考え方やそれを実現するための取組、工夫・改善のためのシステム等について評価を実施する。

なおこのテーマについてはその内容が幅広いこと及び大学審議会等においても現在、その改善の基本的な方向性について審議されていることを考慮して、2年計画で実施することとし、1年目はこれまでの取組実績等を各大学において自己点検・評価したものを整理・公表し、2年目は1年目に提出された資料等に基づき、各大学の目的・目標に沿って、その取組状況や工夫・改善のためのシステム等について評価を実施する。」

今回の点検評価については、別途に茨城大学として詳細な報告書がまとめられているので、ここでは教養教育を担当している大学教育研究開発センターとして、今回の点検評価をどのように受け止め、また今後に生かしていけばよいかを考える参考になるようにとりまとめた。

2. 点検評価の進め方

実施方法は以下の通りである。

機構による評価の実施方法（図1）としては、大学関係者及び大学外の有識者からなる大学評価委員会及び専門委員会において、事業の実施方針や具体的な実施

評価のプロセス

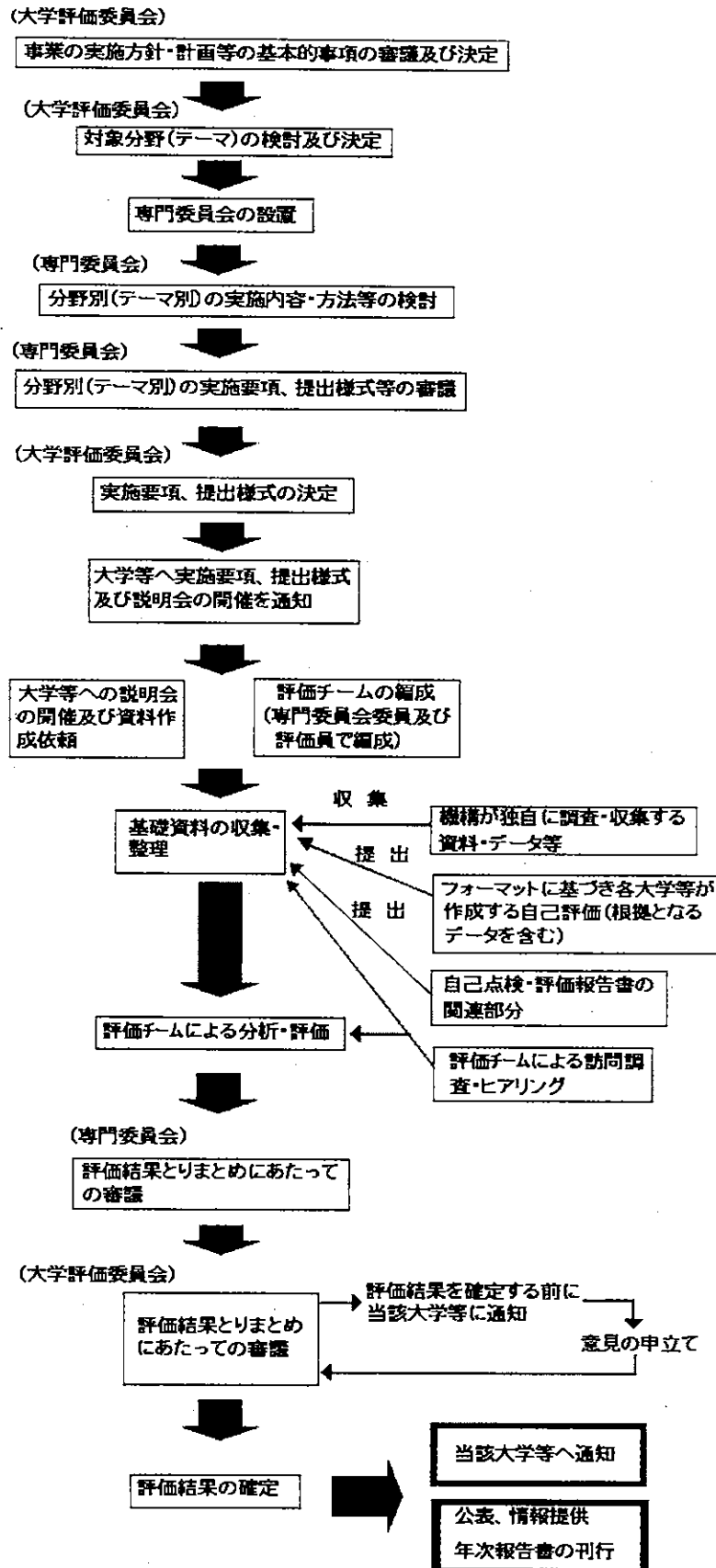


図1 評価のプロセス <http://www.niad.ac.jp/hyouka/keikaku/houkoku/02/contents.htm>

要項等を決定した後に、各大学等が実施している自己点検・評価報告書や、大学評価・学位授与機構の示すフォーマットに基づき各大学等が行う自己評価（根拠となるデータを含む。）、大学評価・学位授与機構が独自に調査・収集する資料・データ等に基づき、大学評価委員会の専門委員会の委員及び評価員による訪問調査またはヒアリングを行う。

これらの過程における各大学等からの資料等の提出については、電子化やネットワークを利用する。

さらに、大学評価委員会において審議を行い（その中で専門的事項については専門委員会によるピア・レビュー（対象分野の専門家による評価）を実施）、評価対象ごとに記述式の評価結果をとりまとめる。

評価結果を確定する前に当該大学等に通知し、これに対する意見の申立ての機会を設け、それを踏まえて大学評価委員会において再度審議を行った上で最終的な評価結果を評価報告書としてとりまとめ、意見の申立てとあわせて公表する。

「教養教育」に関する点検評価のタイムスケジュールは以下の通りである（図2）。

- 1) 大学における自己評価
- 2) H14. 7. 31：自己点検評価書を提出

- 3) H14. 11. 8：機構より評価案と質問項目が提示
- 4) H14. 11. 22：回答書を提出
- 5) H14. 11. 27：ヒアリングにより、質問と回答の内容確認
- 6) H15. 1：最終評価書案に対する意見照会
- 7) H15. 3：最終評価書を提示

これに対して、大学では点検評価委員会が対応することとし、作業の担当をするWGが構成された。WGメンバーは、委員会メンバーから選出され、以下の通りである。

平成13年度	平成14年度
委員長 田村 武夫 (～H14. 8)	委員長 田村 武夫 (～H14. 8)
大教副センター長 阿久津克己	田切美智雄 (H14. 9～)
人文学部 松井 陽通	大教副センター長 横山 功一
理学部 山田 満	人文学部 松井 陽通
農学部 塩 光輝	理学部 田切美智雄
	農学部 足立 吉数

なお、WGのメンバーは途中で交代しているが、作業の継続性を考えると、点検評価委員を交代するのはやむを得ないが、WGの作業は終了する（あるいは区切りがつく）まで継続した方がよいのではないかと反省が残る。機械的に交代するのは、負荷を均すメリットよりも全体としてのロスが大きくなる。

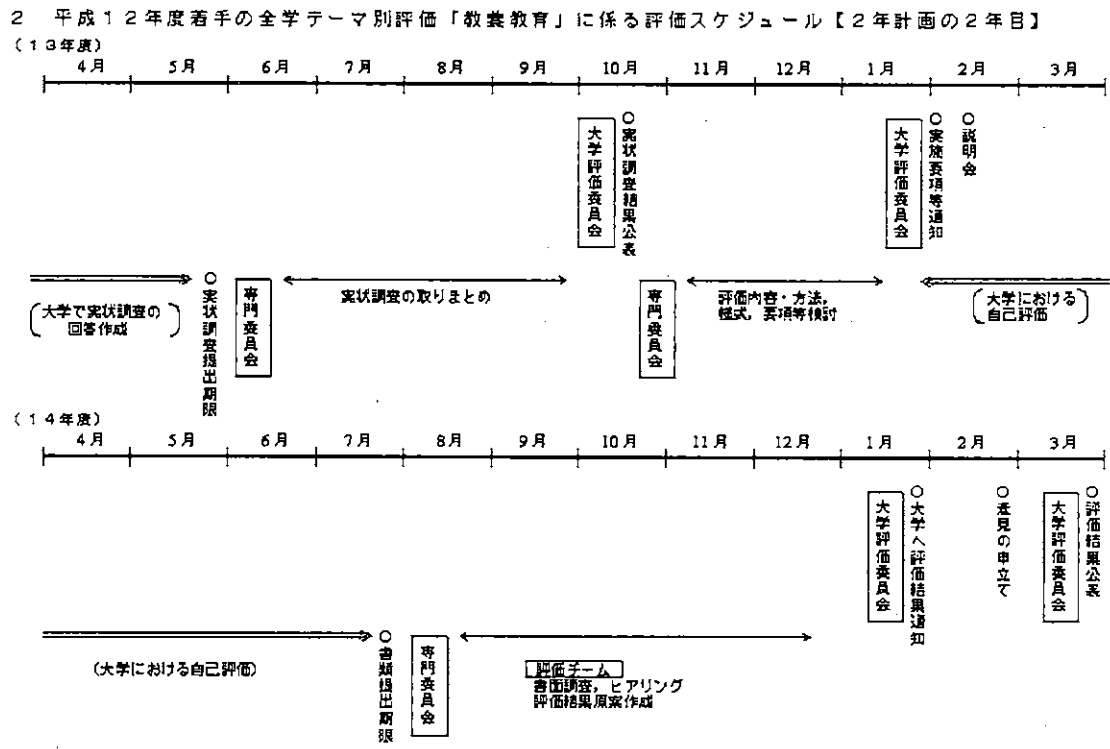


図2 実施スケジュール <http://www.niad.ac.jp/hyouka/keikaku/13/05/contents.htm>

3. 点検評価書の作成

点検評価書の書式は、機構から指定されており、その中に評価項目が定められている（資料1）。

評価項目は次の4大分類であり、

- 1) 実施体制、
- 2) 教育課程の編成、
- 3) 教育方法、
- 4) 教育の効果

となっており、評価項目ごとの評価書式構成を以下に示す。すなわち、それぞれの評価項目に対し、評価要素が規定され、さらに要素ごとに観点を規定する。評価は、観点ごとに行い、それらをまとめて要素が評価項目に対してどの程度貢献しているかを示す。それらの要素ごとの評価をまとめて評価項目の評価水準、特に優れている点および改善点を示す。

表 1

評価項目 X X X
(1) 要素ごとの評価
(要素 1) x x x x x x x x
○観点ごとの評価結果
○要素 1 の貢献の程度
(要素 2)
(要素 3)
(2) X X X の水準
(3) 特に優れた点及び改善点等
評価項目 X X X の自己評価

表 2 評価項目の構成

1 実施体制
(要素 1) 教養教育の実施組織に関する状況
(要素 2) 目的及び目標の周知・公開に関する状況
(要素 3) 教養教育の改善のための取組状況
2 教育課程の編成
(要素 1) 教育課程の編成に関する状況
(要素 2) 授業科目の内容に関する状況
3 教育方法
(要素 1) 授業形態及び学習指導法等に関する取組状況
(要素 2) 学習環境(施設・設備等)に関する取組状況
(要素 3) 成績評価法に関する取組状況
4 教育の効果
(要素 1) 履修状況や学生による授業評価結果から判断した教育の実績や効果の状況
(要素 2) 専門教育履修段階や卒業後の状況等から判断した教育の実績や効果の状況

WGにおける自己点検書の作成は、資料の収集、素案の作成、最終原案の作成の手順で委員が分担して行った。

自己点検書作成時の問題点としては、

- (1) データ、情報がないものがある。特に、卒業生による教養教育の評価については新たにアンケート調査を実施してデータを作成した。
- (2) データあるいは情報が分散している、あるいは所在が不明。(教養教育の主たる責任組織は大学教育研究開発センターであるが、これを全学の組織が支えている。このため、関連の資料を収集しなければならない。)
- (3) データあるいは情報が電子媒体となっていないため、作業に手間取る。
- (4) 評価に役立つようにデータあるいは情報が取りまとめられていない。(今回の点検評価は自己評価書を茨城大学自身が作成し、その評価をもとに機構が評価する方法を採っている。従って、大学自身としての評価を常々行っておけばとりまとめが容易になる。)

が挙げられ、今後このような点検評価が定期的に行われることを考えると情報収集と蓄積については抜本的な改善が必要である。

4. ヒアリング

平成14年7月末に提出した自己点検評価書に対して、11月初旬に書面調査段階での評価案と質問が寄せられた。これに対して、11月22日に大学より回答と補足資料を提出した。その後、11月27日にはヒアリングが実施されたが、この位置づけは書面調査の補足調査であり、確認事項等に基づく質問に対し説明を行った。ヒアリングの実施状況は以下の通りである。

日時：平成14年11月27日（水）13：00～14：30
場所：大学評価・学位授与機構（東京都千代田区竹橋）

◎評価委員
 チーフ：川口昭彦 大学評価・学位授与機構教授
 内藤久夫 東京電力㈱取締役労務人事部担当
 新村昭雄 北九州市立大学文学部教授
◎本学側出席者

委員長：田切美智雄

教養教育WG：横山功一，松井陽通

総務部長：藤井陽光

大学改革推進室係長：田中祐二

ヒアリングの内容については，資料2に報告を記載した。また，その中で「教育方法」については，特に詳しい記録と分析がなされており，資料3に示した。

冒頭に川口チーフから，評価の目的等についての説明があったので以下に特記しておく。

「評価の目的の一つは大学の教養教育の取組を，多面的あるいは多元的に評価して，その結果を当該大学にフィードバックして改善に役立てる。もう一つは，大学で行われている活動の状況や経過を広く社会に公表し理解を得ること。」

「確認事項等について，全大学にかなり大量なデータを提出願ったが，今後法人化されると，中期計画の達成状況を評価する際にも同じような作業が考えられるので，今回の負担に対してはご理解いただきたい。」

「書面調査段階での評価案は，かなり厳しいものになっていると思うが，これはデータが確認できなかったことによる。印象としては，かなり充実した資料を頂いたと認識している。」

5. 今回の点検評価からのフィードバック

今回の点検評価を通じて得られた反省点や指摘事項などについては今後改善に向けてフィードバックしていくことが大切である。ここでは，まず書面調査で問い合わせがあった事項，特に教養教育の効果について，問い合わせの文章を示す。これは，どのような観点で教養教育の評価を見ているかの参考になろう。次に，点検評価作業を通じてWGメンバーが考えた今後の参考となる項目を取りまとめた。

5-1 書面調査段階での教育効果に関係する問い合わせ項目

(1) 履修状況から見た教育の実績

「総合科目」の修得率が高いのは，複数の教員による成績評価の方法によるものではないのか検証を要する。一人のコーディネーターが他の複数の教員の評価

を纏めると，評価が甘くなりがちである。どのような評価方法を取っているのか？

個々の学生の登録状況，単位修得状況（成績状況を含む）等が分かるものについて根拠資料・データを確認したい。（学生一人当たりの科目区分ごとの授業科目の登録数・取得単位数・成績状況等の分布等）

「社会分野」で単位修得率が低いのは問題である。

(2) 学生の授業評価から見た教育の効果

自然分野の評価が低い。また，理系の学生は，社会分野の理解度が低い。

数学，物理学，統計学など自然分野の評価が低いのは，「教員の授業への取り組み姿勢に満足できたとしても，受講生の内容の完全理解が難しいためである」と述べているが，これを改善するために，授業の科目名と内容の工夫が必要である。

(3) H8改革後の新体制への教員の評価

4年一貫教育と選択履修の多様化は教員から理解されている。しかし，教養科目の構成・区分，性格や位置づけ，カリキュラムについては，まだ問題がある。

新体制に移行したあとの，学生の変化をどう捉えているか，教育の効果という面から見てほしかった。

(4) 卒業生アンケートにみる教養教育の効果

「異なる分野・価値観にふれ，広い視野を身につけることができた」，「パソコンは役に立った」とある反面では，「外国語は選択の幅を狭くし，社会で役に立つ授業をしてほしい」とある。外国語教育への不満が強い。

5-2 点検評価作業からの参考事項

まず，点検評価書を取りまとめる際に必要なデータ並びに情報が速やかに入手できることが大切である。これについては，既に指摘したところであるが，教養教育に限った問題ではない。点検評価委員会では，この点について検討すべく情報システムWGを立ち上げ，対応を図るようにしている。教養教育に限れば，大学教育研究開発センターが責任主体であるので，センターとして情報とデータの収集・蓄積を図ってきており比較的問題は少ない。今後，中期計画に対する評価も同じような方式で行われることが考えられるので，定期的に点検評価を受けることを前提としたデー

タ収集管理方法を確かなものにする必要がある。今回の評価項目とそこに必要なデータ・情報源を表3にまとめたので、今後の参考とするのがよい。

次に、全体として継続的に改善を図るシステムが欠けていることが問題となろう。自己評価書では以下のように記述した。

○ 観点B 点検評価および改善を行うシステム

授業の具体的な点検は、平成8年度から学生や教員によるアンケートで行われている。また、平成10年度には自己点検評価を行い、改善の方向性をとりまとめている。その評価やそれにもとづく改善案の検討とその実施は概ね「センター」が行うことになっているが学部毎の評価もまとめられている。しかし、これらが個別教員の授業までの点検評価システムとして確立するためにはかなり改善の余地がある。すなわち、「フィードバック」にまでつながるシステム（「点検→評価→改善」の流れ）を、定着させることが求められる。

現在までも点検評価を続けてきているが、その結果を改善に結びつけ、その後の経過をフォローし評価するシステムが必要であるが、必ずしもそのような体制が整備されてはいない。教養教育に関しては、大学教育研究開発センター運営委員会で計画、実施について審議され実施状況も定期的に報告され、適宜必要な改善変更が行われている。しかし、点検評価改善を行う組織は明確にされておらず、センター内にその役割を担う機構を備える必要があろう。このためのシステムの見直しが重要である。

最後に、今回の自己評価で取りまとめた中で不十分と自己評価した項目については速やかに改善を図らなければならない。評価項目毎に以下のような項目が挙げられる。

1) 実施体制

- ・ 4年一貫カリキュラムにおける具体的な教養教育の目的目標をより一層明確にする。
- ・ フィードバックまで見通した点検評価システムを構築する。
- ・ 各授業の内容、成績評価結果等の品質保証的なシステムを構築する。
- ・ 「学生の多様化」への対応システムを構築する。
- ・ 教養教育の効果的な編成、運営、改善にあたる「センター」の法制化を図り、その位置づけをより確実なものにし、スタッフも充実させる。

2) 教育課程の編成

- ・ 教養教育の各授業科目を教育課程に基づいてその性格や役割を教員が共有し、その上で各学部の4年一貫カリキュラムとの連携を図ることが求められている。

3) 教育方法

- ・ 各分野において、同一目的・目標の授業科目内で一貫した成績評価が行えるシステムを構築する。
- ・ 教養教育用図書を継続的に拡充する。
- ・ 3キャンパスの自主学習のための施設・設備を拡充する。

4) 教育の効果

- ・ 授業アンケートのフィードバックを特に評価の低い授業に重点的に行い、授業の改善と教育効果の向上をめざすシステムの構築が必要である。
- ・ 教育の目的・目標の達成度を検定するシステムが必要である。
- ・ 受講生の知識レベルや情報機器・ソフトへの習熟度に個人差のでる外国語や情報関連科目では、全学的な習熟度別クラス分けを徹底し、一層の教養教育の効果の向上を図る必要がある。

6. おわりに

全学テーマ「教養教育」の評価は初めて行われた。本テーマについての評価作業は、一定のサイクルで今後続くものと予想される。大学及び大学教育研究開発センターは、常にこのことを念頭において、改善を行うことと同時に、評価のためのデータの収集整理を行うことが重要である。このためには、教養教育「アクレディテーション」のための「アセスメント・プラン」を常に所有していることが必要である（参考:「大学・カレッジ教育評価(実例ハンドブック)」アメリカ北中部地区基準協会、大学基準協会・企画、早田幸政訳、エイデル研究所、2002年）。プランの大きな柱は二つであろう。一つは、実施体制・実施方法のためのプラン、一つは教育効果の測定のためのプランである。特に大学教育研究開発センターでは、この機会に、上記プランを策定し、日常的に点検していくことが求められて

いる。学部の専門教育は学部の責任でおこなわれるが、教養教育については大学が共同責任として負っており、大学教育研究開発センターの役割と責任は極めて大きい。茨城大学は法人化を目前にして大学教育研究開発センターの役割と責任を明確にし、教養教育の一層の充実に努めるべきである。

資料－１：自己評価書の記述項目

I 対象機関の概要

- 1 機関名：
- 2 所在地：
- 3 学部・研究科構成
(学部)
(研究科)
- 4 学生総数及び教員総数
 - ①学生総数 名(うち学部学生数 名)
 - ②教員総数 名

5 特徴

II 教養教育に関する考え方

III 教養教育に関する目的及び目標

IV 評価項目ごとの自己評価結果

1 実施体制

(1)要素ごとの評価

(要素1) 教養教育の実施組織に関する状況

(要素2) 目的及び目標の周知・公開に関する状況

(要素3) 教養教育の改善のための取組状況

(2)実施体制の水準

(3)特に優れた点及び改善点等

2 教育課程の編成

(1)要素ごとの評価

(要素1) 教育課程の編成に関する状況

(要素2) 授業科目の内容に関する状況

(2)教育課程の編成の水準

(3)特に優れた点及び改善点等

3 教育方法

(1)要素ごとの評価

(要素1) 授業形態及び学習指導法等に関する取組状況

(要素2) 学習環境(施設・設備等)に関する取

組状況

(要素3) 成績評価法に関する取組状況

(2)教育方法の水準

(3)特に優れた点及び改善点等

4 教育の効果

(1)要素ごとの評価

(要素1) 履修状況や学生による授業評価結果から判断した教育の実績や効果の状況

(要素2) 専門教育履修段階や卒業後の状況等から判断した教育の実績や効果の状況

(2)教育の効果の水準

(3)特に優れた点及び改善点等

V 特記事項

資料－２：「全学テーマ別評価(教養教育)に関するヒアリング」報告

日時：平成14年11月27日(水) 13:00～14:30

場所：大学評価・学位授与機構(東京都千代田区竹橋)

◎評価委員

チーフ：川口昭彦 大学評価・学位授与機構教授

内藤久夫 東京電力㈱取締役労務人事部担当

新村昭雄 北九州市立大学文学部教授

◎本学側出席者

委員長：田切美智雄

教養教育WG：横山功一、松井陽通

総務部長：藤井陽光

大学改革推進室係長：田中祐二

<ヒアリングの概要>

7月末に提出した自己点検評価書に対して、11月初旬に書面調査段階での評価案と質問が寄せられ、11月22日に大学より回答と補足資料を提出した。今回のヒアリングは、書面調査の補足調査であり、確認事項等に基づく質問に対し説明を行った。

はじめ

冒頭に川口チーフから、評価の目的等についての説明があった。

「一つは大学の教養教育の取組を、多面的あるいは多角的に評価して、その結果を当該大学にフィードバックして改善に役立てる。もう一つは、大学で行われている活動の状況や経過を広く社会に公表し理解を得ること。」

「確認事項等について、全大学にかなり大量なデータを提出願ったが、法人化されると、中期計画の達成状況を評価する際にも同じような作業が考えられる。」

「確認事項の評価結果は、かなり厳しいものになっていると思うが、これはデータが確認できなかったことによる。印象としては、かなり充実した資料を頂いたと認識している。」

2. 質疑 & 説明

引き続き、新村委員より確認事項等の回答及び補足資料を基に、二重線を引いたところを中心に順をおって質問及び説明があった。

Q 2 頁の「教養教育責任部局」は、言葉で馴染みがなかったので質問した。

A 協力部局は責任部局に協力する部局で、役割としては協力部局と責任部局は多少違う。

Q 4 ページの教員体制で、1点だけ、補足資料3の中に任意開講という教養科目があるが、これはどういうシステムで選ばれているのか。

A 任意開講科目というのは、当初、基本計画、実施計画の段階で開講本数を決定するが、その分では一定程度足りない可能性がある。任意開講科目としてその分を、先生方や各センター（生涯学習教育研究センター、地域総合研究所や広域水圏環境科学教育研究センターなど）にお願いしている。

Q 何年かやるとほとんど全教官が必ず教養教育科目をやっているという状況なのか。

A 必ずしも、何年かに渡って全員ということにはならない。教官数が多い学部では全員に回るということは起こりにくい。比較的少ない学部は、ほとんど全員が受け持つ。

Q 5 頁で、教養教育担当者の数が学部間でかなり差がある、不公平感の要因にもなっているということについて、明確な回答があるが、具体的にはどういうことか。教員の配置に対する不平なのか。

A 具体的にいうと、教養部改組時に、教養部の教員は各学部へ分属したが、その数が学部によって非常に大きな偏りが生じた。ただ、本学は分属した教員のみが教養教育を担当することにはしなかったもので、学部の教員が均等に担当するという建前で行われている。不公平感というのはいろいろあり、多数の教養教育の教員が分属したところは、教養科目を多数やらなければならないという逆の不公平感と、あそここの学部は教養教育の教員を多数持っていたのではないかという不公平感と、両方ある。

Q 非常勤講師率ですが、これはどこでも同じですが、外国語科目の非常勤講師の率が70%と高い。これは、少人数教育のクラス編成が原因か。

A 改組後、少人数で語学教育をやることになりクラス数が増えた。全学の非常勤講師時間の配分の大枠は大学教育研究開発センターで行っている。

Q 6 頁の学生支援の体制ですが、そちらから事務体制の縮小については自己評価書に書かれていないとある。一般的に国立大学が教養部を廃止した時には、縮小したという経緯が多く、茨城大学の場合にもそうだろうと考えて書いたが、実はこれは違うということですね。

A 必ずしも大きな縮小はない。現状でも、大学教育研究開発センターの教養教育の係は2係あり、職員数は非常勤を含めて、教養教育係は6人、教養管理係は3人です。人数からいくと必ずしも縮小というべきではない。

C (川口) 伺っていると、評価すべき点があると思う。茨城大学の場合は、大学教育研究開発センターで一元的にその事務をやっているのも、むしろ、優れていると思う。

Q 留学生のチューター学生は何人ぐらいで、学修上の支援はチューターはしないのか。

A 留学生1人当たり1人。レポート作成とか実習に関する相談はチューターも受けている。一緒に授業に出るチューターは非常に少ない。

C 7 頁の教養教育の目的・目標についての、直接的な周知の方法を把握できる根拠は、やはりないようだが、間接的な形で周知されているということは分かった。

Q 8 頁の学生アンケートですが、依然としてフィードバック後の各教官の授業の改善までは、システム化されているか良く分からない。教員に自己点検の結果を渡していることだけか。

A 14年度前半までは渡しているだけという認識だった。後期は推奨授業に伴って授業の公開を行っており、実際に推奨された授業については、授業モデルの実施という形で、フィードバックしている。個別の教官の段階ではフィードバックの中で改善するという視点になっていないと認識している。

Q 渡したデータを、翌年度チェックしているのか。

A 不十分であると認識している。

Q 8 頁の下段、「当該科目の相対評価が可能である。」というのは、相対評価をしているということではないのか。

A 科目区分毎に、アンケートの項目の中で項目ごとに重み付けをした分布を出しているので自分がどこに分布しているかが分かる。それで改善につなげる。また専門部会によっては、部会長が各担当の先生に聞いているところもある。

C 9 頁の推奨授業は非常にすばらしい取組だと高く評価している。

Q 点検・評価及び改善を行うシステムで、手探りの状態であるというのはどういうことか。

A 効果と改善については、いろいろな部門で局部的にやっているが、それを教養教育システムの中で統一してやるという方針が、決まっていない状態である。

Q 推奨授業について、学生による授業評価も取り入れていると書かれているが、どのような形で取り入れているのか。

A 授業アンケートの結果を資料としている。例えば、質問事項の中で授業の理解度とか授業方法についてアンケートの結果の良い所を参照する。

Q FDについて、1点だけ。習熟度別英語教育について、これは何の尺度でランク付けをして、成績の評価はそのクラスの中でどのように行われるのか。上級クラスでDだとしても、次の劣ったクラスのAよりはいいのではないかなど、議論があるのではないか。

A 習熟度別クラスの分け方は、入学当初に市販の試験をして、行う。前期が終わって後期に入る時に再度

習熟度別のテストをして、再度クラス分けを行う。レベルごとの成績の評価は、レベルごとにつける。現在、英語Ⅰ、Ⅱ、Ⅲという形で開かれているので、それぞれの中の評価となる。

Q 11 頁の接続教育について。接続教育をどのようにとらえているのか。具体的には、単位になるのか。

A 接続教育はシステマチックな形にはつくりされていない。学部ごとに一定程度行われている。接続教育の重要性は理系の学部強く、特に工学部の教養の1年次クラスで、接続教育という観点を入れて授業の内容を決定している。これを進めて、大学全体として必要な科目について接続教育を進めたいというのが検討中のことである。接続教育のとらえ方として、専門までつなげるための基礎と考えている。

Q 高校で、物理や生物を取ってこなかった学生に対してどう対応するか考えているか。

A 接続教育としてはシステマチックな取組はなく、各学部が対応している。工学部ではミニマム的な物理学を決め、工学部の1・2年生用にミニマムレベル学修のための物理学という教科書を作成して、接続教育に臨んでいる。

Q 高校等から痛烈な意見をいただきと書いてあるが、どういう意見か。

A 代表的な意見は、入試に物理がないのに入学したら物理を取らなければならないというのは大学の勝手だ、それだったら入試科目に物理を入れなさいとか。そういうことをしているようでは高校での教育が困る。大学と高校の間でもっとうまく連携をとって、進学の時点での指導と、大学に入学してからの指導の両面から考えて欲しい。大学の先生方は、高校の実際の教育の実情を知らないのではないかとか、というような批判を頂いた。

Q 12 頁の分離キャンパスで問題になっているのは、外国語と情報関連の年次配当が崩れているという理解でよいか。主題別ゼミナールは導入教育としても価値あるものと高く評価する。一部の学部で2、3年次になっているのは、主に分離キャンパスの問題があると思うが、学部が意図的にされている理由は何か。

A 分離キャンパスは一つの原因であるが、専門の導入とすると1年生入学時にすぐ行うのを不適当とする

学部がある。そのような学部は一定程度の基礎知識を持たせた上で行いたいと思っている。

Q13頁の教育課程の一貫性について。一つは自己評価書(30-31頁)で、科目の性格と位置付けについての教員アンケートで、かなりの教員が不十分であると考えている。もう一つは、自己評価書(27-28頁)で、自然について理解度が極端に悪くなっている。この科目の位置付けが、この分野別科目(数学、物理学、経営学など)について不十分なのではないか。理系離れも含めて、その点についての分析やご意見があれば伺いたい。それから、自己評価書(15頁)で総合科目は特色ある取組であると書かれているが、この総合科目についての学生の評価があったらいただきたい。

A 本学の自然系の科目は、普通の教養科目の位置づけと違う設定である。例えば、理学部の場合現在教養としての自然科目はない。したがって自然の科目は、理学部以外の学部について、教養の自然であるとされている。工、農学部は、また異なる位置づけをしており、教養の数学とか教養の物理ではあるが、工学部のニーズに合った専門基礎の数学、物理を含んだ形になっている。総合科目のアンケート結果は平成13年度教養教育に関する基礎調査報告書の32-35頁に載っている。生データはCD-ROMで別に送ります。

Q17頁の成績評価の一貫性については、説明を受けたが、習熟度別英語で外部評価教材を導入されているというのは、G-TELPの部分か。

A G-TELPの総合評価の時のもので、クラス分けする時もこれに似たものを使う。CALL自習の時も外部の教材である。

Q成績評価の厳格性については、成績評価の厳格性なしにGPAの導入はありえないと思うが、その辺の取組はどうなっているか。

A GPAの導入はまだできていない。6段階評価はすでに行っている。GPAの導入そのものは決定されているが、開始年度が決定されていない。いろいろ検討しなければならない問題があり、実際に15年度からできるかどうか検討をしている。6段階評価は、単なるA、B、C、Dという付け方でなくて、評点を

付して成績評価をする。

Q18頁で総合科目の分析をお願いしたが、回答のところで、評価Aは32%に対して単独教官が43%ということで、非常に評価が高い。どのように解析したのか。

A全体でみると、教官グループのほうが厳しい評価をしていると見える。

Q自己評価書の25頁に単位の修得率があるが、全体から見ると社会と自然が極端に悪い。その分析について、社会については、工学部と理学部が途中でドロップアウトするのが多いのでそうなるのは分かった。単位は自由に取れるのか。履修登録単位の制限はないのか。

A分離キャンパスのため、1年生のうちに教養科目を履修しておく必要があり、多めに登録するためである。学部の問題ではなくて、個人の問題に関わってくる。

Qそれに関連して、19頁では自然分野への学生の評価が低いということ、26-27頁のグラフでは、全く理解できない、一部理解というのが非常に多い。この問題はどのように分析されているか。それなのに、数学だけが2年連続で推奨授業になっているのはなぜか。

A自然の物理に関しては、FDも通して、物理を担当する先生に検討をお願いしている。責任部局は理学部だが、その辺のところは十分改善されていないと自覚している。数学の推奨授業は、これは工学部を対象にした数学で、学部としてのこの科目への熱意の高さが反映されている。

Q19頁の教員評価と学生アンケートに見る教養教育の効果での、教員評価では、非常勤の20%が全く不十分であると答えている。非常勤の評価は、外部評価に近い。この教員評価は、教養のとらえ方としてどのように考えているのか。卒業生のアンケートも、アンケートまでされている大学は、実は少ない。この辺は非常に高く評価できると思う。外国語については、どこの大学でも役に立つ外国語をという意見が出ている。一応これは低い評価である。

A非常勤の教員評価については、非常勤講師の多数は外国語の教員であり、外国語に対する評価が厳しいと理解している。そのことは、卒業生のアンケート

のとおりだと我々も思っている。

Q ITの端末室が行列になっているというのは、どういう改善を考えているか。

A 行列が出来るのは水戸地区で、1年生が全員おり学生数が多いためである。水戸地区に増設をしたいと考えている。行列ができるのは、学生が利用しやすい図書館の中にあるIT端末で、ここは場所柄やむを得ない。

Q 卒業生アンケートの対象は、どういう年代か。何う理由は、特に教養教育については、専門の学生には大体評判が悪いが、卒業生となって年が経つと教養教育の評価が良くなるというような感覚的な問題があるのか。

A 平成12年度卒業生で、卒業して1年経っている。

3. 全般

茨城大学コメント

○今回の作業を振り返ってみると、対象期間に幅があって、その間にずいぶん変わってきている。平成10年度に自己評価をしたが、かなり厳しい評価になっている。いろいろ資料を出したが、年次を追ってみてみると、変化の状況が分かると思う。

機構側コメント

○平成3年に大綱化が行われ、その時に数も規模もかなり大幅な改革が行われた。現在はその反省期なのだろう。しかし、平成10年度頃からは積極的に改革が行われ始めた。

4. 今後の予定（川口チーフ）

本日のヒアリングの結果を踏まえて、評価結果を取りまとめる。今後専門委員会に持ち帰り、さらに大学評価委員会に諮る。その審議の後、機構から各大学に評価結果案を1月下旬頃に通知して、それに対する意見をいただき、さらにその対応を審議した上で、3月に最終の評価結果を公表する。

資料－3：「教養教育」の点検評価－教育方法－

田切美智雄 副学長（学術担当）

ヒアリングの時点で評価者から良い評価を得たものをまず挙げたい。

【要素1】授業形態及び学習指導法等に関する取組状況
クラスサイズと授業形態；

少人数クラスの「外国語」、「健康スポーツ科目」、「主題別ゼミナール」と、多様な授業形態の「総合科目」について高い評価であった。その中でも、双方向の授業について特に評価がよかった。

導入教育・動機付けと学力の多様化に即した対応；

導入教育としての「主題別ゼミナール」や能力別クラス編成の「工学部英語教育」と「健康スポーツ科目」について、優れているとの評価であった。

良い評価を得たのは10の観点の内の2点のみではあるが、教養教育の改革改善結果が評価されたものと思う。

残り8点は自己点検評価での評価よりも悪く、いずれも問題のある評価結果となっている。こちら側からのデータ不足や説明不足があったための暫定的判断もあるが、いくつかの観点については、本質的問題である。観点順に評価と本学の回答と感想・意見を紹介する。

学習指導法について（以下原文のまま掲載）

評；「センター発足時から市民教授による講義など学習指導法の検討が継続的になされている。しかし、双方向的指導は十分ではない。平成13年度、推奨授業として6分野から6つの授業を選定し、授業を公開して多くの教員の共有財産とする取組を始めた」との記述があるが、これらの内容は授業指導の観点に含め評価している。この観点では、授業時間外の学習指導について分析する必要がある。この点から手作りの教科書作成は活用すべき取組であるが、他の活動状況が不明である。一部問題があるが普通である（分析不能）。授業時間外の学習指導法について、その状況などが把握できるもの（例えば、オフィス・アワー、チューター教育の導入、TAの活用など）を提示せよ。

評価では、授業そのものの方法だけでなく、単位授与基準に関わる授業時間外の自学自習をどのように授業の中に取り入れているかが問われた。授業アンケートには学生の授業時間外の学習についての項目があり、ほとんどの授業で学生は自習をしておらず、実態については批判を受け入れざるを得ないところである。特に、自習時間は外国語が最も多く、分野別科目はいずれも惨憺たるさま

であることは、単位授与基準（外国語は自習を単位計算に入れないため半期1コマで1単位なのに対し、分野別科目は自習を前提とするため半期1コマで2単位の基準となっている）からしても、問題ありと自認せざるを得ない。しかし、ただ手をこまねいていたわけではなく、最近になって一定の改善に臨んでいることを表明した。

答：「オフィスアワーについては、平成13年度から設置を奨励してきたが、平成14年度からはシラバスに記入し、設置を義務づけた。オフィスアワーの学生の活用はまだ低調であるが、確実に実行されるよう、点検が必要と考えている。チューターは留学生には全員につけているが、一般学生には適用していない。TAは情報関連科目には全ての授業クラスに1人以上をつけており、自習時間にはプログラム相談に応じている。習熟度英語の授業にはすべてのCALL自習クラスにTAを配置し、指導に当たらせている。主題別ゼミナールは各学部で実施しているため、実数を把握できていないが、実験実習にはTAを配置しているところもある。（補足資料11：平成14年度ティーチング・アシスタント任用計画調書（前学期・後学期））各学年のクラス毎にクラス担任を配置し、履修相談や生活相談等に当たっている。授業時間外の学習指導については、平成11年度のFD研修会の分科会で集中的に討議され、具体例も含めて対応策が提案されている。」

シラバスの内容と使用方法

評：シラバスの内容は、授業のねらい、概要、授業計画、成績評価方法と履修上の注意、教科書と参考書、等である。しかし、学生はあまりシラバスを活用していない。シラバスの導入は10年と長く、内容も妥当だと思われるが、教員の意図と学生のシラバス活用には大きな隔たりがある。シラバスの授業科目当たりの頁数や記述内容をサンプル等で確認したい。一部問題はあるが普通である。学生のシラバス活用が低いことが改善点とされたが、近年のシラバスの改善が功を奏し、内容についての評価は普通であった。今後はシラバスの活用を高める方策を検討する必要がある。対学生の問題であり、シラバスの内容として、学生がどう

しても見ざるを得ないようなしかけが必要なのかもしれない。

答：「茨城大学のホームページから教養教育のシラバスの平成14年度版が確認できます。サンプルとして分野別科目：自然科目と総合科目の2点を添付します。（補足資料12：教養科目シラバス（分野別科目：自然科目、総合科目））冊子は、1頁に2件表示で、共通基礎科目・外国語科目 約226頁、健康・スポーツ科目 約50頁、情報関連科目 約18頁、主題別科目・人文の分野 約32頁、社会の分野 約30頁、自然の分野 約34頁、総合科目 約30頁、主題別ゼミナール 約40頁となっています。」

【要素2】学習環境（施設・設備等）に関する取組状況 授業に必要な施設・設備

この観点については、普通であるとの評価であった。特に問題とされた点はなかった。しかし、以下に続く観点と関係させると、更なる改善が求められる可能性が高い。

自主学習のための施設・設備

評：講堂ロビー、総合情報センター、学生会館、図書館に自主学習室があるとされるが、具体的な記述について不明である。一部問題はあるが普通である（分析不能）。施設の自主学習室の具体的な広さや席数等の利用実績が分らないので、判断できないため、それらが把握できるものを提示せよ。

具体的な広さや利用実績を求められた。広さや席数はわかるものの、利用実績のデータはなく、例えデータがあったとしても、利用実績に問題があるところもあり、今後同じような点検評価を想定した対策が必要と判断される。以下のように回答し、今後の課題とした。大学教育研究開発センターばかりでなく、各学部においても、1～3年次生のための自主学習室の絶対的な不足を解消することが今後の課題である。

答：「講堂ロビーには186席、総合情報処理センター（日立）には68席、学生会館には92席、図書館には200席（閲覧室を除く）設置されている。学生会館はほぼ毎日満席の状態であるが、その他の施設では、期末試験の時期は満席となるものの、日常的には

50%程度の利用率である。ただし、利用実績の調査はしておらず、管理部局係員の日常的観察にもとづいている。」

学習に必要な図書・資料

評；教養養育のために年250万円を予算化し、また、教養教育用図書室を用意している。教養教育のための特別な取り組みはない(書かれてない)。図書館の整備状況、その利用実績などの資料が把握できる資料・データを確認したい。普通である。

評価者には、250万円の図書費は少ないと映ったようである。今後、教養教育図書費をどのように充実するかは、大学全体としても議論しなければならない問題となろう。ここでも利用実績を問われたが、その把握はしていなかった。部分的に利用実績をとることは不可能なので、図書館として利用実績を整理しておくことが、今後求められるだろう。

答；「教養教育図書に限っての整備状況は、記述したとおりである。選書については、大学教育研究開発センターの科目毎の専門部会が中心となり、授業担当教員に希望を提出させて選書している。図書は全て中央図書館の教養教育用図書室に配架している。この部屋の閲覧用席は32であるが、中央図書館の閲覧室と連続しており、不足はない。利用実績の把握はしていないが、常に一定程度の学生が利用している。」

IT学習環境

評；205台のPCを用意し、全学生に利用を義務づけている。情報の授業にはTAを配置し、7つの教室にネット端末を設置している。TAの配置は優れた取り組みだが、ネット端末の設置してある教室が7つは少なく、教養教育の目標で掲げた「国際化・情報化の社会に主体的に対応できる能力」を形成するには不十分であろう。学習環境における、整備状況、その利用実績などの根拠資料・データを確認したい。普通である。

共通教育棟の講義室においてネット端末の設置が少なくと判断されたが、その理由の一つに、評価者は情報教育をこれらの教室で行っていると解釈したようである。ヒアリング時にはこれらの点を修正した。しかし、ネット端末利用の実績を求め

られ、今後の課題となった。また、学生が授業時間外に利用できるネット端末の充実が緊急に必要となろう。情報処理センターにおいて、自習の実績把握を行う必要がある。

答；「共通教育棟の一般講義室についての視聴覚機器設置一覧では2教室が機器の故障のため使用不可であったので7教室となっていた。現在既に使用可となっているので、9室ある。水戸地区では各学部の講義室は全て共用することになっており、各学部にはネット端末を有する講義室が多数存在する。情報関連科目はネット端末を設備した専用の実習室を使用しており、水戸地区に3室、工学部に2室、農学部2室ある。自習での利用実績などの根拠データはないが、一部の端末室では待ち行列ができることがあり、不足していることは認めている。」

【要素3】成績評価法に関する取組状況

成績評価の一貫性

評；各分野で統一的評価基準を作成するよう提言がなされ、取り組みつつある。英語の一部で、習熟度別クラス編成と成績評価の一貫性を導入している。取り組み始めたばかりで、具体的な方法が提示されていないが、英語の評価の一貫性が、習熟度別クラス編成とどうからむのか、習熟度別クラスにおけるその具体的な評価方法等を示す根拠資料・データを確認したい。一部問題はあるが普通である。

評価結果は、自己点検をしたWG側からみると、かなり好意的なものである。実際のところ、各科目間での成績評価の一貫性はほとんど取り組まれておらず、平成14年度から試行された習熟度英語を前面に出して、防戦をしたところである。評価者はそのような取組の姿勢を評価したのではないだろうか。この観点は次の観点と密接に関わっており、次回の点検評価では最も重要な観点になっていくものと予想される。教養教育の全ての科目ばかりでなく、学部の専門科目についてもこの観点から点検評価されることは自明のように思える。「教育の質の保証」や「卒業生の質の保証」を常に求められるようになると予想され、そのため

にはこの観点に対する取組は喫緊の課題である。

答；「現在人文学部社会科学科の1年生（220名）を対象に実施されている習熟度別英語パイロット授業の後期の評価方法である。クラスのレベル別到達目標を補足資料13に示す。成績評価基準は、まだ、不確定なところがある。どの程度が最適か試行段階である。後期は、以下の判断基準で評価を試みる。英語能力試験がどのくらい授業を通して得た英語能力（achievement）を反映できるかが今1つ明確でないため、実験段階である。なお、下記の出席は、ただ単に出席しているだけでなくclass performanceを含んでいる。

	評価割合
出席	15%
テスト総合評価	50%
G-TELP（1/30実施結果）	10%
ラボおよび宿題、授業への貢献度、インタビュー、クイズ等	25%

成績評価の厳格性

評；4段階評価を6段階評価へと改めた。さらに、履修単位の上限設定とGPAの導入が決定された。6段階評価はGPAの導入に向けて評価できるが、まだ実施されていないので、評価できない。一部問題はありますが普通である（分析不能）。

6段階評価とGPA導入の関係を評価者に十分伝えられなかった。しかし、GPAの導入へ向けた取組については良い評価であった。評価者もGPAの導入については各種の問題を認識しており、ヒアリング時に意見を交換した。そのためにも、前の観点の「成績評価の一貫性」を改めて課題としなければならないし、本学としては早急なGPA導入が必要であろう。次回には必ず評価される点である。

答；「6段階評価は平成14年度入学生から適用しており、前期の成績評価は6段階評価で実施された。2年次以上の学生の成績評価はまだ4段階評価であるが、今年度前期から成績評価報告書には評価のABCDだけではなく、評点を記入させることとした。（補足資料14：学則（抜粋）・第26条の5

授業科目の成績)」

ヒアリングを終えて

全学テーマ「教養教育」の評価は初めて行われた。本テーマについての評価作業は、一定のサイクルで今後続くものと予想される。大学及び大学教育研究開発センターは、常にこのことを念頭において、改善を行うことと同時に、評価のためのデータの収集整理を行うことが重要である。このためには、教養教育「アクレディテーション」のための「アセスメント・プラン」を常に所有していることが必要である（参考資料）。プランの大きな柱は二つであろう。一つは、実施体制・実施方法のためのプラン、一つは教育効果の測定のためのプランである。特に大学教育研究開発センターでは、この機会に、上記プランを策定し、日常的に点検していくことが求められている。学部専門教育は学部の責任でおこなわれるが、教養教育については大学が共同責任として負っており、大学教育研究開発センターの役割と責任は極めて大きい。茨城大学は法人化を目前にして大学教育研究開発センターの役割と責任を明確にし、教養教育の一層の充実に努めるべきである。

参考資料

「大学・カレッジ教育評価（実例ハンドブック）」
アメリカ北中部地区基準協会、大学基準協会・企画、
早田幸政訳、エイデル研究所、2002年。

茨	茨	H	茨	茨	評	予	將	將
---	---	---	---	---	---	---	---	---

[illegible]

「教養ある人間」と「よき職業人」の育成 —今後の教養教育のあり方について—

Bringing up 'a cultured person' and 'a good professional person' —About the future way the general education should be carried on—

池谷 文夫 (副学長)

IKEYA Fumio (Vice president)

はじめに 大学教育のニーズ

本学における教養教育改革の志向は、これを大きく取り巻く社会の状況の中に確として位置づけて考える必要がある。

現在、大学に求められているのは、地域と社会のニーズに応じて、新しい時代をリードする創造力豊かな人間を育成することである。そのことは必ずしも18歳人口だけに対応するものではない。

平成11 (1999) 年に行われたドイツでのケルン・サミットでは、サミット史上初めて、教育が主要テーマとして取り上げられた。そこでは、すべての国の市民は、伝統的な工業化社会から知識社会に移行する中で、変化に対応するため、生涯学習により、経済・社会の発展の基礎を築き、発展に貢献し、その発展から利益を得るための能力を培うことができるという趣旨の憲章が採択された。生涯学習の意義が世界共通の認識とされたのである。

生涯学習とも緊密に関連する大学教育とは何かを考察しつつ、社会人職業人を含む国民全体に対応するために、大学教育の本質に基づいた一層の取り組みが求められている。そこで、本論稿では、全体情勢の中に本学の教育改革を置いて考察してみる。

I. 学生中心の大学への転換

1. 大学設置基準の改定

近年指摘されているのが「教養教育の軽視」の傾向である。平成3 (1991) 年に改正された大学設置基準は、それまで一般教養科目、外国語科目、専門科目に分けていた教育課程の編成方法を、区分けをせずに、必修科目、選択科目、自由科目に分けた。それ以前から一般教養とは何かについては議論がなされてきた

が、共通の理解は得られているとは言い難く、各大学の「教養部」の位置づけや教育内容の吟味については個別的な取り組みに終始していた。

大学設置基準の改正に対して、大学側からは教養科目を軽視するものだという議論があったが、結局は専門科目の充実、教養部教員の専門学部への分属、教養教育の実施体制の見直し (例えば全学出動体制)、卒業要件となる単位として認められる教養科目の単位の減少など、教養部の改組にともなう教養カリキュラムの改編という、かなり後退し限定されたものとなったことは明らかであった。「教養軽視・専門重視」は、社会生活に役立つ実践的な科目を求める社会の要請及び学生の傾向とも無縁ではなかった。

大学設置基準は、昭和23 (1948) 年に制定されたものが基本となっているが、平成3年に大幅な改正が行われた。そこにおいて教育課程の編成替えと共に画期的だったのは、教育研究活動について自己点検・自己評価制度を義務づけたことである。

これまでは外部の目を特には意識することなく、ある意味で微温的で自己満足的なレベルで考えてきた教育研究活動の状況を、自ら活動状況の点検・評価を行うと同時に、外部に向けて公表しなければならなくなった。とは言うものの、大学が始めた自己点検・自己評価作業は、その結果として自己弁護的かつ身の回りのものになっていた。

教育については、設置基準の改正に従って、カリキュラムを見直したり、単位の取り方を変えたり、教員の「持ちゴマ負担」の軽減、研究費の増額、教育設備の充実などへの指摘が主たるものであった。授業の実施に関わって重要なFD (ファカルティ・ディベロップメント) は取り組みは、それが各大学でなされてはいて

も未だ充実しているとは言い難い状況である。

平成12年4月に、大学の客観的評価を行う新しい組織として『大学評価・学位授与機構』が発足した。評価項目は、教育研究内容、施設・設備環境、研究業績など、大学の業務全般にわたるものであり、法人化を機に大学が本当の意味で社会的評価を得るためには、第三者機関の評価に耐えうる内容の充実と「個性」の発揮を継続して心がけ、実践していくことが今後求められる。

2. 大学審議会の2つの答申

平成12(2000)年6月に、文部省(当時)の調査研究協力者会議から『大学における学生生活の充実方策について』という報告書が出された。それによると、「最近のキャンパスは、様々なタイプの学生であふれている。しかし、将来の職業や具体的な学習内容について、明確な自覚を持っている学生は、以前と比べると減っているように思われる。むしろ、そのような自覚を持たないまま、いわば『自分探し』をするために大学に入学してくる学生が増えていると考えられる」のであり、「インターネットや電子メールなどの情報手段が日常化し、質の高い情報にアクセスしやすくなったことにより、所属する大学や地域を越え、国内はもとより諸外国の学生と幅広く交流をしたり、相互のコミュニケーションを深めることも可能になっている。その一方で、学生が大学で直接、教員や他の学生とふれあう必要性が薄れてきている」という事態の深刻さが述べられている。

同報告書は更に、平成10(1998)年に大学審議会が答申した『21世紀の大学像と今後の改革方策について』を引用しつつ、「これからの大学は学生が在学中に身につけた能力や、自立心ある人間としての成長が大学の評価基準の一つとなっていく」といい、従って、「今後は、総体として研究に重点を多く教員中心の大学から、多様な学生に対するきめ細かな教育・指導に重点をおく『学生中心の大学』へと、視点の転換を図ることが重要である」としている。

昭和62(1987)年に設置された大学審議会は、当時の文部大臣から、「大学等における教育研究の高度化、個性化及び活性化等のための具体的方策について」の

諮問を受け、順次答申を行ってきた。それら答申は、大学教育をはじめとする高等教育の改善策、その将来構想、求められる大学像、大学改革の方策、といった全体的な論の他、大学教員採用の仕組みの改善、教員の任期制、大学運営の円滑化などの具体的な論に及ぶ、多岐にわたる答申であった(増栄論『これまでの大学これからの大学』大学教育研究所、2002年)。

平成10(1998)年に大学審議会は答申『21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—』を、そして平成12(2000)年11月には答申『グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について』を出している。前者は、21世紀初頭の社会状況を展望し、新世紀にふさわしい高等教育の役割とその改革要点を指摘したものである。とりわけ、『知』の再構築を目指し、「個性が輝く大学」づくりを強調している点が重要である。

すなわち、展望された社会状況においては、

- ①一層流動的で複雑化した不透明な時代
- ②地球規模での協調・共生と一方では国際競争力が強く求められる時代
- ③少子高齢化の進行による生産年齢人口の大幅減少と産業構造や雇用形態等の大きな変化
- ④職業人の再学習など生涯学習需要の増大
- ⑤豊かな未来を拓く学術研究の進展、学際化、総合化の必要性

というような事態であり、

これらを踏まえつつ、大学改革の方策として次の4つの具体的項目を挙げている。

- (Ⅰ)課題探求能力の育成を目指した教育研究の質の向上
- (Ⅱ)教育研究システムの柔構造化による大学の自律性の確保
- (Ⅲ)責任ある意思決定と実行を目指した組織運営体制の整備
- (Ⅳ)多元的な評価システムの確立による大学の個性化と教育研究の不断の改善

要するに、大学は(1)教育研究の質を高め、教育研究の成果が上がるよう弾力的にカリキュラムを編成して卒業時の質と国際的通用性を確保し、(2)自らの意志に基づいて大学を管理運営することをめざし、(3)自己点

検や自己評価によって絶えず改善を加えながら、社会へ積極的に情報を提供し、最終的には、(4)教養教育を重視する大学、専門的な職業能力養成大学、地域社会への生涯学習提供大学、最先端の研究志向大学、大学院中心の大学など、それぞれめざす方向の中で多様化し、個性化を図りながら発展することが重要だというのである。

もう一つの大学審議会答申『グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について』は、上の「答申の基本理念を踏まえつつ」、「グローバリズム」を念頭に置いて、国際的な通用性・共通性の向上と国際競争力の強化を図るための視点の下での改革を提言している。

それらは次の事柄である。

①グローバル化時代を担う人材の質の向上に向けた教育の充実

1. 高い倫理性と責任感を持った行動力、外国語によるコミュニケーション能力の育成、情報リテラシーや科学リテラシーの向上など、グローバル化時代に求められる教養的資質を重点的に養成すること（グローバル化時代に求められる教養を重視した教育の改善充実）
2. 進路選択の幅の拡大や教育プログラムの充実を通して、広い視野を持った人材の育成をめざすこと
3. 学習指導・履修指導体制の充実、実体験や職業観の涵養を重視すること
4. 実践的能力を重視した教員資格の見直しや多元的な教育評価・認定法を採用することにより、教育の質的向上を図ること

②科学技術の革新と社会、経済の変化に対応した高度で多様な教育研究の展開

1. 教育研究拠点の再評価による資源の再配分、専門大学院の充実などを通じ、教育の国際的な競争力を向上させること（学部段階における幅広い教養教育を基礎とした専門大学院の充実による高度な職業人の養成）
2. 学部や研究科の弾力化、企業と大学の共同研究などにより、社会の要請に応えた柔軟な教育を展開すること

3. 社会人の学習環境の充実、パートタイム学生の受け入れの検討など、生涯学習のニーズに対応すること

③情報通信技術の活用

1. インターネットを活用した「遠隔授業」による単位修得を拡充し、通信制では卒業に必要な単位をすべて修得可能となるよう見直すこと
2. 通信教育によって得た外国の大学の単位や学位についても単位を認定し、大学院入学資格を認めること

④学生、教員等の国際的流動性の向上

1. 日本人学生、若手教員等の海外派遣を推進すること
2. 留学生受け入れのプログラムの開発・入学選考手続きの改善を通して留学生受け入れを推進すること
3. UMAP（アジア太平洋大学交流機構）の活動支援、コンソーシアム方式による海外大学との連携など、大学間交流の推進
*UMAP: University Mobility in Asia and the Pacific（アジア太平洋地域の大学間交流、特に学部学生交流・短期留学の推進を目的として、平成3年に発足した、各国・地域の大学協会を主たるメンバーとする国際機関）
4. 開発途上国の援助事業への大学教員参加の推進など、国際教育協力を推進すること

⑤最先端の教育研究の推進に向けた高等教育機関の組織運営体制の改善と財政基盤の確保

1. 大学の組織運営の再検討、教員の流動性、講座等の組織編成の弾力化など、大学の組織運営体制を改善すること
2. 欧米並みの公的支出の確保、私学助成の推進等を通して、高等教育機関の財政基盤を確保すること

ここにおいては、(1)グローバル化時代に求められる教養を重視しながら、(2)広い視野を持った人材の育成をめざす柔軟な教育システムを構築すると共に、(3)ファカルティ・ディベロップメントの実際効果を図り、(4)国際的に優れた教育研究を推進して、(5)生涯学習のニーズにも対応することを挙げている。

3. 教育改革国民会議の提言

総理大臣の諮問機関として設置された『教育改革国民会議』は、平成12（2000）年12月に教育を改革するための17の提案を行った（『新しい大学・大学院システム』）。その中では次の10項目が大学・大学院における教育研究にかかわる重要性を持っている。

- ①大学の18歳の入学年齢制限を撤廃する。
- ②大学の9月入学を推進する。
- ③大学の学部では、教養教育と専門基礎を中心に教育する。
- ④ダブルメジャー（複数の分野を専攻する）制度を導入する。
- ⑤成績評価の厳格化を図るための制度の導入など、学習を促す取り組みを進める。
- ⑥大学院へは優秀な学生が学部の3年修了から進学することを大幅に促進し、このようなことがごく普通に見られるようにする。
- ⑦学部で卒業する者は、4年でさらに専門的な教育を行う。
- ⑧大学院の入学試験は完全に開かれたものにする。
- ⑨プロフェッショナル・スクールでは、経営管理、法律実務、金融、教育、公共政策など多様な分野の専門家を養成する。
- ⑩社会人が大学・大学院に入学して学ぶ機会を拡大する。

これらの提言は極めて重要なものと受け止められるべきである。

その他にも社会からは大学の改革への提言も相次いでなされている（増栄論前掲書『これまでの大学からの大学』2002年）。(1)カリキュラムに対しては、多様化・個性化に対応する「多くの峰を持つ」体系の構築、編入枠や単位互換制度の拡充。(2)入学試験制度の改革、入試成績評価に関しては、学生の思考力を含めた学力・関心・素質などの複眼的評価。(3)授業シラバスの厳密な作成充実、(4)学生による授業評価制度の導入などが要請される。

更に加えて大学に対して(5)産業界との連携が大きく求められるようになっている。(6)学部における高度職業人養成のための実践的教育の推進や、(7)国際社会に

通用する人格を備えた人材育成のために、一層の「リベラル・アーツ」教育に取り組むことの要請も強いのである。

II. 教養教育に関する茨城大学の取り組み

前述の1999年のケルン憲章は、前文で次のように述べている。「すべての国が直面する課題は、どのようにして学習する社会となり、来世紀に必要とされる知識、技能、資格を市民が身につけることを確保するかである。経済や社会はますます知識に基づくものとなっている。教育と技能は、経済的成功、社会における責任、社会的一体感を実現するうえで必要不可欠である。来世紀は柔軟性と変化の世紀と定義されるであろう。すなわち、流動性への要請がかつてないほどに高まるだろう。今日パスポートとチケットにより人々は世界中どこへでも旅することができる。将来には、流動性のためのパスポートは、教育と生涯学習となるであろう。この流動性のためのパスポートは、すべての人々に提供されなければならない。」

まさに、金と人と時間を必要とし、遠大で遠回りに思えるが、「知の再構築」や「教育内容の真の確立」こそが、次代を担う人材の育成への確実な近道だと宣言しているのである。本学では、こうした上記の情勢の中で、自主的自立的な改善改革努力を続けているが、教養教育についても、大学教育の基本の柱として位置づけ、充実を志向している。

1. 教養教育等分科会等の答申について

茨城大学（以下「本学」と略記）では平成13年1月の全学教務委員会で、成績評価と授業の在り方に関する2つの答申内容を基に、平成14年度からこれらを実施することが了承され、具体的な実施に向けて検討する「授業の在り方に関する実施小委員会」が教務委員会の下に発足した。

同小委員会は平成14年1月に「成績評価基準及び授業の改善について」（第1次答申）を教務委員会に答申し、同委員会で審議の結果承認され、評議会において学則改正が行われた。

一方、平成13（2001）年9月の将来構想委員会で、教養教育等の改善について検討することが了承され、

11月に同委員会の下にこれらを検討する教養教育等分科会が発足し、次の検討事項について答申することとされた。

1. 語学教育の充実方策及び情報教育の在り方について
2. 高等学校と大学との接続教育について
3. 専門基礎教育と教養教育の関連について
4. その他、教養教育を充実するための実施体制について

その後、同分科会は検討を加え、中央教育審議会による『新しい時代における教養教育の在り方について』の答申（平成14年2月）を踏まえて将来構想委員会での審議と学内合意形成を求めつつ、最終答申を14（2002）年3月に行い、将来構想委員会で審議の結果、答申が承認された。

この答申は、それぞれの項目についての具体的な提言を含み、①習熟度別英語教育の実施、②情報教育（教養教育）の改革、③接続教育について、④学部専門教育での専門基礎教育重視と教養科目区分の見直しについて、⑤大学教育研究開発センターの組織強化を内容としている。

将来構想委員会（現在は総合計画委員会）より、あらたに全学教務委員会に対して平成14年5月に諮問された「教養教育等分科会答申に基づく検討について」に関して、同月の教務委員会は、答申の項目「3. 接続教育について」と「4. 学部専門教育での専門基礎教育重視と教養科目区分の見直しについて」の2つの課題を「授業の在り方に関する実施小委員会」で検討することとした。同小委員会での検討の結果、平成14年11月に中間報告案が教務委員会に挙げられ、その後も検討が続いている。

他方、答申の項目「5. 大学教育研究開発センターの組織強化について」は同じく同月総合計画委員会の下での教養教育等小委員会が検討依頼を受けて審議した。これについても平成14年10月に中間報告案が親委員会に挙げられ、各学部等の意見聴取が行われた後、平成15年1月に同小委からの最終答申「大学教育研究開発センターに関する改革」が親委員会に提出・受領され、今後、本学の中期計画や教育研究組織の改革を考える際に活用されることとなった。

このように、それぞれの小委員会においては、親委員会の諮問に応えるべく、それぞれ、授業の実施及びセンターの拡充強化の方向において審議を積み重ねてきた。それぞれの親委員会に中間報告を提出し、親委員会では各学部等の意見を聴取する作業が行われた後に最終答申がまとめられている。

2. 教養教育、専門教育におけるカリキュラム改革について

大学教育において、厳格な成績評価や、卒業時の質の確保等、社会から求められる諸要請に対応して行くためには、当然、大学及び教員の日ごろの努力はもとより、充実した教育指導・学習指導システムの改善・改革は必要不可欠である。学生の多様化に対応したカリキュラムは、特に重要な問題であり、早急に改革する必要がある。

本学の教養科目及び専門科目の授業内容については、授業担当教員の自主・自律と責任において実施されているが、質の確保をめざす教育指導システムの改革をするために、そしてまた、教養教育と専門教育の一貫性を確実なものにするために、各授業科目が持つ意義や内容について明確なガイドラインを設定し、各学部がめざす教育目標を達成することが重要である。一口に四年一貫カリキュラムの確立といっても、複雑な要素が緊密に連携したシステムの構築だと理解すべきである。

厳格な成績評価（本学の場合、6段階評価を導入しており、A⁺、A、B、C、Dまでを5、4、3、2、1という評点とする。Eは不合格）を支えるのは、各授業科目においてシラバスを厳格に作成することである。その授業科目のねらい、到達目標、授業の概要、毎回の授業計画、履修上の注意、成績評価の方法、教科書・参考書等の提示、当然ながら、出席、小テスト等の毎回の課題、期末試験やレポート、実験や実技、演習等であれば、それらの参加状況、ディスカッションや実践の状況等、かなり総合的に成績評価を行うことになる。

教員の授業に関する事前・授業中・事後の指導はもちろん、当該学生への適宜指導や助言等、学生の勉学・学習支援へのこれまで以上の取り組みが求められる。

そして、教員毎の成績評価のばらつき等に関することも含めて、授業評価（学生によるものも含めて）を各自の授業に生かすこと、そしてファカルティ・ディベロップメントが必要となる。

専門教育と教養教育は役割を区分しつつ、相互に関連する。学部の四年一貫カリキュラムが、両教育の相互補完・接続関係をまさに生かすものでありたい。教養科目は、1, 2年にのみ配当される授業科目ではない。教養科目にはスキルを育成する面もあり、同時に「高度な専門的職業人」の「教養」を育成する中核となる面もある。また、社会人の生涯学習に貢献する面も有している。最近「文理融合」ということがよく言われるが、教養教育にはその役割を果たす面があることも押さえておきたい。

学生が時間割表をひたすら埋めることを排除する事は、予習復習を含めた学生の勉学時間を保証することである。それは同時に、教員の授業のための準備時間を保証することでもある。当該学生が1年間に履修できる単位の上制限とは、そうしたシステムなのである。カリキュラム編成に負うところ大であるが、結果的に教員の開講する授業のコマ数は、教員・学生双方の事情からも精選されざるを得ないだろう。授業の精選が今後強く促進される。

もちろん、学生の教育カリキュラムにおける各授業科目の綿密な検討、それが学部、学科、コース毎であれば、従来のごとく、開講授業科目数は非常に多いけれども、並べてみれば、相互に内容的連関が乏しく、その授業科目自体の完結性がないといった状況、はたまた教員が自分の専門研究の余滴を披露するだけのような授業内容などは、自ずと排除・改善されるであろう。学生の視点に立った「説明できる」カリキュラム、納得が得られる授業が実施されるべきである。

専門教育におけるカリキュラム、例えば、学生のための複数かつ有効なコース・カリキュラムの編成（例えばダブル・メジャー制度などを含む）を促したい。教員個々人のレベルではなく、講座・学科等のメンバーの緊密な相互検討の上に立ち、社会的要請にも充分応え、外部評価にも耐えられるものを編成することが必要である。卒業時における質の確保はこうして保証される。本学においては、もちろん「絵に描いた餅」で

はなく、真に実効あるカリキュラム編成を望みたい。

ところで、既にGPA（Grade Point Average）制度の導入に踏み切った大学でも、そのための条件整備を行っているとは言えない状況である。ハード面での施設整備（図書の充実、自習室の整備、授業の効果的実施のための、例えばIT基盤整備や語学学習の設備充実等）はもちろんのこと、必要なソフト面のシステムの整備が十分にはなされていないのが実情であろう。

本学では教官のオフィスアワー制度が軌道に乗っているが、まだ完全ではない。学生へのきめ細かな学習指導・学習支援・進路相談等に統合的かつ恒常的に取り組む仕組が未整備である。成績不振者への指導支援だけではなく、従来充分ではなかった、成績優秀者に対する支援にも積極的に取り組む必要がある。

学部における専門教育が何を目標にするのか、すなわち、中核となる専門基礎科目が何をねらいとし、到達目標が何かを明確化したうえで、教養教育・教養科目を的確に位置づけた上で、専門教育カリキュラムが編成される必要がある。

3. 大学教育研究開発センターの拡充強化について

現在本学では、大学教育研究開発センターを中心に、教養教育の改善策が実施されている。習熟度別英語教育、同じく習熟度別情報教育等がそれである。接続教育については、授業の実施に関する在り方小委員会での検討がなされており、教養教育の全体カリキュラムの中で改善方策が実施をめざして中間報告が出されている。

ただし、各学部等の反応は、親委員会、その下の小委員会による検討・審議の目的・経過に対して、これらを十分に理解しているとは言い難い議論も一部では行われているように思われる。小委員会への諮問の基礎となった、平成14年3月の全学将来構想委員会で承認された答申を否定する方向性までも見られるようである。

前述の「大学教育研究開発センターに関する改革」（答申）は、今後の本学における教養教育だけではなく、専門教育についても企画調整、研究開発と点検評価が行える実践と研究の機関の重要性を現実のものと

する必要性を提示していると思われる。

教養部改組以来、本学の教養教育は確かに全学出動体制で営まれてきた。しかし、それを更に充実すべく、教養教育においても授業科目の精選、社会ニーズに応える教養科目の提供、適切な自己点検・自己評価、そのフィードバック、FDの一層の展開という役割を担う組織として、同センターの拡充、いわば「省令化」組織への改組拡充が今後の本学の教育重視の目標を実現する有効な施策と考えられる。

現に、幾つかの大学では、大学教育研究開発センターに類する組織を学内措置ないし省令化しつつ、専任の教員を配置し、また将来的には専任教員の倍増を視野に入れた取り組みをしているところもある。ヴァーチャルな教養教育担当教員組織と、それを統括する権限を有する機構構想を推進している大学がある現状である。

4. 大学を取り巻く状況と「教養ある人間」と「よき職業人」の育成

全国の国立大学で作る国立大学協会では、入学試験の改善について第二常置委員会で検討していたが、2000年9月に一つの結論に達した。すなわち、大学入学生の学力低下に「カンフル剤」を打つために、国立大学受験者には原則として、大学入試センター試験で「五教科七科目以上」を義務づけるというものであり、それが「大学入試の大衆化」を迎えて国立大学の責務であるというのであった（古沢由紀子『大学サバイバル』集英社新書、2001年）。

大学入試で受験生の負担を軽くしてきたのは、私立大学だけではなく、国立大学もこの10年ほどは、入試科目を減らしてきた。国立大学協会の説明も、学力の低下や、教科による学力のアンバランスが起こっており、国民にとっても、好ましくない。今後の日本にとって何が一番重要か、国立大学は考えねばいけない時期に来ている、というのである。「五教科七科目」を義務づけることは、その後、国立大学協会全体の正式方針としてまとめられ、8割を越える国立大学が受験生のための準備期間を設けた上で、2004年度からの「五教科七科目」の実施に踏み切ることとなっている。

1999年の暮れに、「日本の高等教育を考える会」（代

表：西澤潤一岩手県立大学長；元東北大学総長）が、当時の中曽根弘文文部大臣に、「教養大学」の創設を求める提言書を提出した。「教養大学」は、専門にとられない幅広い基礎学力の充実と人間形成を重視するとしており、現在の大学の在り方を、「専門教育を重視するあまり、旧制高校で成果をあげたような個性豊かな人間教育を置き去りにしている」と批判した（古沢前掲書『大学サバイバル』2001年）。文部省側は、これに対して、少子化が進み既存の大学の経営も難しくなっている折り、「新たな大学を創設するのは国として難しい」とコメントした。

大学で学ぶ上で基礎となるはずの学力は、低下しつつあるのか。2001年8－9月に、読売新聞社が、全国の国公私立670大学の学長宛にアンケート調査を行った（読売新聞大阪本社編『潰れる大学、潰れない大学』中公新書ラクレ、2002年；以下の数値は同書に拠る）。

学長もしくは副学長が記入したアンケートの回答（有効回答479大学、71.5%の回収率、国立93大学93.9%、公立65大学87.8%、私立331大学64.6%）によると、学生の学力低下については、全大学の半数余りが運営上最大の課題ととらえ、事態が一段と深刻化していることが明らかになった。250校（52%）が「学力低下」を挙げ、次いで深刻とされたのは「コミュニケーション能力の低い学生が多い」（27%）であった。

学力のどんな点が低下しているのかという具体的内容は、「積極的に課題を見つけ、解決しようとする意欲が乏しい」（66%）「物事を論理的に考え、表現する能力が低い」（66%）「読解力や記述力など日本語の能力が低い」（62%）「社会や理科の未履修科目が増えた」（31%）との指摘が多かった。

中学や高校で学ぶ教科内容が更に削減された新学習指導要領で学んだ世代が大学に入学する平成18(2006)年度以降は、学力への更なる影響が心配され、「2006年度問題」と呼ばれている。これには、75校（19%）が「非常に深刻な影響がある」と予想し、「少し悪い影響がある」も235校（60%）で、将来を憂慮する声が八割を占めた。

学力向上の対策で最も多かったのは、「各教員が工夫し、わかりやすく教える」（78%）「少人数クラスの授業を増やす」（62%）「大学院生をティーチング・アシ

スタントとし、きめ細かく教える」(43%)等であった。

改革のうちで今後最も重視したいものは「授業の方法・内容の改革」がトップであり(39%)、ただし、教員の教育能力(34%)や教員の改革に対する消極性(33%)を問題視する学長らも多かった。

特に私立大学については、学生の確保のためにどんな対策をとろうとしているかという点、「入学後のきめ細かな教育と生活指導」である(281大学88%)。教育面では「カリキュラムの多様化」(61%)、学生への経済面での対策として「成績優秀な学生への学費免除などの優遇措置の導入」が62%にのぼっている。

つまり、教育指導を柱とするきめ細かな学生支援が、今後の大学の未来を決めることとなろう。教養教育にしっかりとした理念を確立し、全学で確認しつつ、どれだけ手当をできるかが、問われているのである。

おわりに 大学の使命について

今から70年以上も前に、スペインの思想家オルテガ・イ・ガセットが『大学の使命』という著書の中で、「最近の大学改革は、『大学は何のために存在するのか』という問いを真正面から提起せずして、逃げ道をつくり、最も安易な、最も非生産的なことをやってきた」(オルテガ『大学の使命』井上正訳、玉川大学出版部、1996年)として、当時のヨーロッパのエリート主義的な大学観を真っ向から批判した。

「大衆社会」の到来を『大衆の反逆』で予見したオルテガは、前掲書で、これからの大学は「まず第一に、平均人が受けるべき大衆高等教育」として存在すべきだと主張する。彼が予見した大衆の支配による野蛮性や文化破壊の危険性の増大に対応するためには、大学は従来の研究優位主義から、教養(文化)の伝達を中心に据えた、大衆の「教養ある人間」と「よき職業人」の育成、つまりは、研究者や教師本位の研究機関から、学生や学習者本位の教育機関に転換すべきだと主張したのである(喜多村和之『大学は生まれ変わるか』中公新書2002年)。何十年も前の論とは思えぬ新鮮な同時代性を持っている。

このように、21世紀の我が国の教育を取り巻く状況は切迫しており、大学教育の改革を含めて、生涯学習、

リベラル・アーツの一層の充実が要請されている。知識や技術の上に、更に学問知識を身につけた心の豊かさを築くことが、教養の目指すものであろう。大学における教養教育は多様な面を持っている。学生にとって、それがわかりやすく、身につけやすく、一生かけて充実でき、身に付けたものを的確に適用した結果を評価されることが重要である。教養教育を考えることは大学教育を考えることであり、かつ、それは大学と社会を含む生涯学習を考えることである。いずれにおいても大学は使命を担い、責任を負うのである。

参照・参考文献等

- ・各種審議会答申・報告
- ・山本 眞一『大学の構造転換と戦略』ジアース教育新社 2002年
- ・喜多村和之『大学は生まれ変わるか』中公新書 2002年
- ・読売新聞大阪本社編『潰れる大学、潰れない大学』中公新書ラクレ 2002年
- ・増栄 諭『これまでの大学 これからの大学』大学教育研究所 2002年
- ・古沢由紀子『大学サバイバル』集英社新書 2001年
- ・大学問題研究会『大予測10年後の大学』東洋経済新報社 2001年

ニュースレター「ローザ・プルムラ」の軌跡

No. 8 (平成10年4月)～No.12(平成11年4月)

Rosa Pumula

ローザ・ブルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター №8

目次

巻頭言	1
はじめまして、 「大学教育研究開発センター」です	1
私たちががんばっています — 専門部会便り —	2
キャンパス情報	5
新入生へ愛をこめて … 先輩からの言葉	7
Voice — 主題別ゼミナールについて —	9
教養教育古今東西	10
掲示板コーナー	11
教養教育NOW	12

(平成10年4月発行)

「いかに美しいことか、山々を行き巡り、良い知らせを伝える者の足は。」(バイブル、イザヤ書)。良い知らせを伝えるため山々をかけ巡る人の足音は明るい希望に満ちた響きを持って伝わってきます。ローザ・ブルムラは野いばらのようにみずみずしく成長するフレッシュマン向けのニュースレターです。年4回発行されていますが、これが喜ばしいよい知らせを満載し、若者に心地よく伝わるようにと企画されています。1月のテレビ番組で、ある司会者が今は二つの「コ」、すなわち「弧」と「個」の時代であることを若者に語っていましたが、若者の顔がどうやったらいいのかわからない様子になっていたのが印象的でした。岩は堅固なものや強いものの例えにつかわれます。岩の基本構造はSiを中心にしてそのまわりにOが4個配置しているSiO₄四面体構造ですが、この4つの酸素原子すべてが他の四面体を共有して連なり三次元骨格構造になっています。これで風雪の厳しい自然環境に耐えることができるのです。ここで「共有」という語が非常に重要で、これがないと岩は崩れてしまいます。ローザ・ブルムラにはたくさんの「共有」なるものが載っています。「弧」や「個」に悩むとき、ローザ・ブルムラを開いて、お互い同志、分かち合えるものを見だし、がっしりした骨組み構造を築き上げていこうではありませんか。

(百瀬)

はじめまして、！「大学教育研究開発センター」です

新入生のみなさん入学おめでとう。

大学はまことに多くの分野の専門家が集まっている機関です。美術、音楽の専門家から、法律、行政の専門家、また、アシナガバチ、草原の専門家から、宇宙のブラックホールまで実に多種多様な専門家がいます。もちろん、フランス文学、国文学、数学、都市計画、超精密工学、分子生物学等々の専門家もいます。かぞえ始めると切りがないほどになります。茨城大学には、500名を越える専門家、研究者がいます。まさに森羅万象を研究教育する機関、University（総合大学）と云えます。

みなさんは、各々専門的な知識、学問を修得すべく

各専門学部に入りました。これから4年間を通して専門的な教育を受けることになります。また、同時に各専門分野の社会人たる教養的素養も身につけることになります。社会、科学などの発展により、一つ一つの仕事の内容の変化が素早くなり、仕事に関連する事項は多岐にわたるようになっていきます。これに応じて人とのつながりも広範囲になっています。これまでは、一つの専門的職業に専念することで済んでいたことが、これからは関連する周囲の状況に応じて切り開いていく対応能力が求められます。これらの能力は、関連する広い範囲の基本的知識と人と社会システムに対する総合的判断力の蓄積によって育成されるものです。

まず、大学では、各分野で蓄積され体系化された知識の基本的素養を修得することが必要です。また、国際化、情報化社会での基本的素養としての語学力、情報処理能力を修得することも必要です。人は体力があってこそ、楽しみ仕事もできることから、身体運動の体験学習をとおして心身の調和と健康管理の基本的技術や知識を修得することも必要でしょう。

これらこれからの社会人として有益となる教養教育は、当「大学教育研究開発センター」が全学の教官の協力を得て担当します。先にも述べましたように、実に広範囲の専門家が多数参加し授業が行われます。教養教育では、入学した学部専門教官のみならず、茨城大学各学部の教官からその分野の基本的な知識と考え方を学ぶことができます。大学教官は各分野の専門家であることから、授業は厳格に行われ近寄り難い雰囲気をもっていますが、授業の終わった後などに話しかけてみてください。本来話好きですから、喜んで相

手になってくれるでしょう。教養科目の受講の機会に他分野の教官を知るのも悪くありませんよ。また、教養教育では受講科目の選択の幅を広くするためにバンド制を設けています。一つのクラスに人文、教育、理工、農の学生がいり混じって受講することがあります。大学生にもなると専門の志向に応じてそれなり特有の雰囲気を持ち始めます。他学部の学生を知るのも悪くありません。

大学教育研究開発センターでは本誌の発行をはじめ、教養科目の履修案内、履修登録、履修相談などを行っています。分からないこと、不明な点があったときには気軽に教養教育係に相談してください。教養教育係は、共通教育棟1号館1階にあります。また、ここには、工学部、農学部教官の控室があり、工・農学部の学生向けの学生相談室が設置されています。ここも気軽に利用してください。

(横沢)

私たちががんばっています — 専門部会だより —

外国語科目専門部会

教養教育をめぐる

専門部会の紹介というよりも、外国語を含む一般教養、殊に人文主義的教養について書いてみたい。

日本の大学は欧米の大学をまねて作られてきたが、両者の実態は相当に違うようである。大きな相違のひとつは、欧米の伝統ある大学では、ギリシア・ローマの古典を中心とする人文主義的教育が、昔ほどではないとしても、依然として相当重視されているのに対して、日本の大学では、当初から、国家や社会の要請に直接応える専門の技術的教育が大きな比重を持ってきたことであろう。

これにはやむを得ない事情もあった。明治政府は、日本の被植民地化を避けるために、「富国強兵」「殖産興業」をスローガンとして掲げ、大学も、全体としては、そういった国家的要請に応えることに努め、科

学技術を取り入れることは盛んに行われてきたが、西欧精神の根源にまでさかのぼって深く学ぶことはごく片隅でしか行われてこなかった。当時あっては当の西洋文明自体が実証主義に支配されていたという事情もこの傾向に拍車をかけた。こうして、目で見、手で触れることのできる世界が真実の世界であり、科学的真理こそが真理であって、科学技術が人類の進歩と幸福を約束するといった考え方が日本の大学に深く根を下ろすこととなり、今日に至っていると言ってよい。

専門の技術的教育は勿論大切である。しかし、いずれの専門に進むにせよ、人文主義的素養を欠いてはならないだろう。ソクラテスは、魂（人間の中核的部分である知的・倫理的人格）をできるだけ善いものにすることが大切だと説いた。それは、この世で金銭その他のものが人間のために善いものとなるのは魂の善さによるからだというだけのことではないだろう。魂が不死であるとすれば、死んで肉体が減じた時に人間が

かの世に携えて行くことができるのは自分自身の教育された魂だけであるからでもあるだろう。人文主義的素養はこの世の事柄を永遠の相の下に見ることをも教えるだろう。(高橋)

健康・スポーツ科目専門部会

平成9年度の健康・スポーツ科目専門部会は、日下(部会長)、大畠(人文学部)、勝本(教育学部)、折山(理学部)、小檜山(工学部)、佐合(農学部)のメンバーで構成されている。

健康・スポーツ科目のカリキュラムは、従来より、目的、単位数、履修方法・内容・構成などの基本的枠組みが定まっており、その理念に沿って運営されている。したがって、今年度の大きな課題は、時代に応じた新しい教科書づくり、より良い授業のための点検評価、そして体育施設・設備の管理体制の充実がその主なものであった。

教科書づくりは、授業に携わる全ての専任教員の協力で、現在、その構成ができ上がり、平成10年度の夏には完成する予定である。授業の点検評価は、従来通り、各授業の最後の時間に学生に細部に至る評価を行ってもらい、その都度、授業改善の重要な資料にしている。また、施設・設備の管理体制の問題は、特に、工学部や農学部の状況把握と改善のための方法を模索しているが、タコ足大学の予算配分の問題もあり、全学的な合理的な管理・運営体制の確立を強く要望しているところである。

………学生の健康と豊かなスポーツ生活を願って。
(日下)

情報関連科目専門部会

コンピュータに興味がありますか？

本学では、情報処理の技術をすべての人に修得してもらおうと情報関連科目を必修にして3年目になりま

した。Windows 95 の操作や電子メールのやりとり、ホームページの作成などが授業で講義されるようになってきています。皆さんがネットワークの世界にどんどんはいついていけるようになっているのです。また、授業中に発生するコンピュータトラブルや皆さんの質問に、数名の大学院生がすぐに対応してくれるので、初心者にも安心です。このような環境を情報関連専門部会が支えています。また、アンケート調査などで皆さんの声を聞こうと耳をすませています。

1年次に情報関連科目が開講されていない学部の皆さんで、早くコンピュータに親しみたいとうずうずしている人や、コンピュータに少し自信があるんだと思っている人はいませんか？ご安心ください。夏休みに(9月下旬予定)に集中講義が開講されます。基礎からインターネットの仕組み、電子メールの仕組み、フリーソフトのインストールなど、ちょっと詳しい解説までが講義されます。

これらの講義がより進んだ情報処理技術を身につけるきっかけになればと願っています。(仙波)

人文科目専門部会

「教養教育なんて、なにか役にたつのかな……。専門教育なら将来の仕事にいかせるのかわかるけど……」なんて、考える人もいるかもしれません。でも教養教育があるからこそ大学です。すぐに役立たないかもしれないけども、今までとは異なる考え方に触れ、ものを考える視野を広げてゆくのが教養教育です。特に、人文科目の多くは、速効性のある薬のように効くものではありません。ずっと「服用」していると、じわじわ効いてきて、ある時、効いてきたかなと思わせるような、そんな学問です。人文科目のなかには、高校まででなじみのある歴史や文学、また、どのように研究しているのかと期待をいだかせる心理学やコミュニケーション論などがあります。でもなじみのあるものもないものも、覚えることに意味があったこれまでの学び方とは違って、これからは、なぜそうなるのか、

どのように考えて行くべきかということに、時間をかけて大いに悩んで下さい。

また、教養教育は1年次で終わるものではありません。専門以外のことにも目を向ける姿勢をずっともって、チャレンジしてみてください。工学部・農学部の学生のために、2年次以降も人文科目が履修できるよう、計画を進めています。人文科目を学ぶことを通じて、今まで教えられた「常識」を疑い、新たな視点を見いだしてくれたらと願っています。(植野)

社会科目専門部会

新入生諸君、入学おめでとう。諸君は、20世紀にこの茨城大学に入学し、21世紀に卒業するはずである。いわゆる「世紀末」を在学中に経験することになったわけである。21世紀をそれぞれの分野で担うことになる諸君にとって、これから始まる大学生活はその下準備の時間といってもよいであろう。そして、不透明の時代といわれる、この時期、社会の分野の授業は、諸君の思想形成や、はたまた人生設計になんらかの指針を提供してくれるであろう。専門科目のハードな時間に飛び込む前に、ほんのチョットの時間、自分を取り巻く「社会」の姿を見つめてみようではないか。

- ◇ 金融ビッグバンの意味を知りたい君(きみ)は、経済学の教室のドアをたたけ。
- ◇ 迫りくる高齢化社会や地域社会の在り方に興味のある君、社会学や人文地理学の講義に耳を傾けよ。
- ◇ 政・官・財癒着に憤る君、政治学の講義がそのしきみを解明してくれるだろう。
- ◇ 日本的経営や商品流通の現在を知りたい君、経営学の講義がそれに役立つだろう。
- ◇ 国家の在り方や人権侵害に疑問をもっている君には、日本国憲法・法学の講義がヒントを与えてくれるに違いない。
- ◇ 社会思想史の講義は、歴史的パースペクティブで社会の見方の変遷を説き明かしてくれるであろう。

扉を開けなければ新しい世界には入れない。では、教室でお会いしましょう。(飯塚)

自然科目専門部会

自然科目には、主として高校で勉強した数学、理科に関連する科目が含まれています。

文系に数学は要らないと考えている人が、以前見受けられました。将来の可能性をみずから放棄しているようなものです。これからの時代には、微分積分などの知識をもつ文系の卒業生が活躍するかもしれません。

入試制度の改革により、理工系でも理科1科目の選択で、大学に入学できることになりました。ただし、現在の科学技術を、理科1科目の知識で理解できるわけではありません。例えば、生物系でも、物理や化学で学習するエネルギーやエントロピーの概念などは、基礎知識といえます。数百年にわたる自然科学の集大成の扉を開くためにも、基礎的で広範囲にわたる自然科目の学習が必要となります。

大学で勉強する内容は、高校生の時のイメージとかなり異なっています。私自身の経験では、化学は原子レベルから論理的に学ぶと、物理と違いのない学問である点、高校の数学は直感的で、 ε 、 δ で初めて数学らしさにふれることができた点などが、印象として残っています。

自然系の科目は、積み重ねの要素が特に必要となります。講義時間中に、高校生の時ほど十分な演習時間を設定できないかもしれません。講義時間外で、自ら進んで演習問題にチャレンジして下さい。ほとんどの場合、問題が解けないかもしれません。解けなくてもかまいません。大切なのは、この時、どこまでわかり、どこがわからないかを、はっきりさせておくことです。この作業の繰り返しで、自分で考え理解できる力が養われます。(佐久間)

総合科目専門部会

総合科目の新しい試みとして、平成9年度後学期に「放送大学」の映像教材を導入した授業「マルチメディアと現代」を開講しました。茨城大学では、おそらく最初の実験的な授業であり、授業改善、教育方法の開発を目的とした取り組みです。

導入した「放送大学」の教材は、学習院大学の藤竹暁教授が出演した「マスメディアと現代」(全15巻)です。この映像資料とそれに対応したテキスト『マスメディアと現代』(日本放送出版協会、1992年)を中心に授業をすすめ、随時、担当教官(教育学部:松井宗彦、関友作)が作成した補助教材を用いることにしました。また、一回当たりの所要時間が45分ですので補助教材を使わない日の残りの時間は、自主学習の時間に充当させました。毎回、受講生には小レポー

トを作成してもらい、一週間後に提出してもらいます。

小レポートの課題は、①本日の講義の要点を5行にまとめなさい ②講義の中で用いられた「用語/キーワード」を摘出し、その意味を解説しなさい ③講義に関連した文献(参考書)を調べ、書名、著者名、出版社名、刊行年を書きなさい ④関連文献の一冊を読んで、その内容を簡潔に紹介しなさい ⑤本日の講義で疑問に思ったこと、感想などを書きなさい ⑥本日の「補助映像資料」の要点を7~8行にまとめなさい……などです。

50名の受講生も非常に熱心で、この実験授業に参加してくれました。最後の授業時に、アンケート調査を行いました。その結果は、いずれ集計し解析して報告するとともに、これからの総合科目の授業の開発に生かしていきたいと考えています。(松井)

キャンパス情報

人文学部から

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。これから4年間、人文学部で充実した大学生活を過ごしてください。

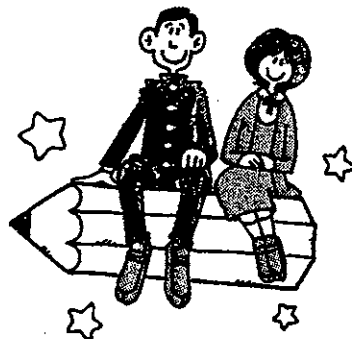
4月9日の午前中の入学式に引き続き、同日の午後及び10日の2日間にわたって各学科別に新入生履修ガイダンスが行われます。このガイダンスでは、教養科目と専門科目の履修方法について詳しい説明が行われます。特に必修科目の履修については、この単位を落とすと卒業出来なくなるので、十分注意してください。翌週の4月13日から早速授業が始まりますが、4月20日から24日までの5日間、履修相談室が開設されますから、おおいに利用してください。

高校とは違って、大学では学生への連絡はすべて所定の掲示板を通じて行われますので、大学に来たら、必ず掲示板を見ておいて下さい。掲示板を見ないで生じた個人的不利益の責任は全て学生諸君自身が負わな

ければなりませんので、十分注意して下さい。

さて、人文学科では6月に募集単位別のガイダンスを行いますので、興味のある分野のものには出席して下さい。

コミュニケーション学科では、昨年に引き続き8月から9月の6週間、カナダのマギル大学で英語の夏期集中講座を開きます。その参加申込みを4月中に予定していますので、コミュニケーション学科の2年次生及び3年次生の関心のある学生は掲示に注意してください。(伏見)



教育学部から

入学おめでとうございます。しかし、大学に入学したことがよかったのかどうか決めるのはあなた自身。教育学部では、2年生になると教職に必要な授業でびっしり埋まるので、1年生のうちは、あなたの興味関心を広げられる授業を自由に選択してください。

最近、内分泌かく乱物質（環境ホルモン）が細胞や遺伝子を傷つけることなく、微量で生殖機能や免疫系、神経系に影響を及ぼす新しい汚染物質として注目されています。この他にも、ダイオキシンを含んだ空気や水、農薬漬けの野菜、食品添加物、プラスチック、合成洗剤など有害かもしれない物質が複雑に私たちの生活に入り込んできています。これらの合成化学物質

は私たちの生活を便利に豊かなものにするものとして、作られ、使われ始めてから人間や環境への影響が問題とされるようになったものです。これらの問題に対応するために、製品の市場導入から廃棄までを一つのサイクル（ライフサイクル）として 捉え、その全過程にわたり、環境にどのような影響を与えているのか評価し、環境保全のための対策を考える手法としてLCA（Life Cycle Assessment）が提案されています。そこでは国際、学際的な対応、研究が求められています。環境問題など現代社会の諸問題に関心を持ったとき、人文、社会、自然、情報、総合科学と幅広く行われる教育学部の授業は興味深いものになると思います。

（吉田）

理学部から

新入生の皆さん入学おめでとう。よく遊び、よく学び、充実した大学生活を送って下さい。さて、皆さんがまずしなければならないことは履修申告ですが、これは自分の考えと責任です。高校のときのように手取り足取りというわけにはいきません。各学科の新入生ガイダンスで説明されることですが、以下に一般的な注意事項を書いてみましょう。

- (1) 履修申告は毎年半期ごとにしますが、場当たりのでなく、ある程度は自分の進路を考えそれに沿って履修計画を立てましょう。しかし、あまり難しく考える必要ありません。
- (2) 1年次は教養科目が多いのですが、他に理学部の共通科目（専門基礎科目）、専門科目を組み合わせ履修することになります。教養科目 38 単位と理学

部共通科目 20 単位が卒業に必要ですが、2 年次終了までに取り終えるのが標準です。

- (3) 理学部の 3 学科と高校の教科「数・物・化・生・地」との対応は、複合的で少し判りにくいかも知れません。しかし、自分の適性に合わせて分野を選択できますし、複合領域・境界領域に積極的に進むことも可能な編成になっています。自学科の専門科目のしぼりは 30 単位だけですから、自学科だけに閉じないで履修計画を立てることも考えてよいでしょう。
- (4) 教養科目のうち外国語科目は 6 単位必修ですが、数理科学科では必修外国語（通常は英語以外の外国語）4 単位以上を含むことが必要です。
- (5) 1 週間分の時間割を無理に全部埋める必要はありません。無理にたくさん申告して消化不良になるより、必要なだけを厳選して集中する方が賢明でしょう。

（日合）

工学部から

新入生の皆さん入学おめでとうございます。これからの 4 年間の大学生活に対し期待で胸がいっぱいのことと思います。

日立キャンパスでは情報工学科およびベンチャービジネスラボラトリーの新棟も竣工し、いよいよ新しい環境

での教育、研究がスタートします。情報工学科棟は展望エレベータ式の 8 階建ての最新の建物です。建物内部はインテリジェント性をもたせた設計となっており、棟内のネットワークも高速なギガビットイーサネットにより学内 LAN に接続されます。また、講義室、端末室、実験室には AV システムが設置され、マルチメディアに対応した教育が可能な環境になっています。

ベンチャービジネスラボラトリーでは、新しい産業の萌芽となる研究開発とその人材育成を目的として、主に複雑機能ロボットに関する研究開発が進められます。更に総合情報処理センターの設置により、情報集

約と発信の拠点として、工学部は新しい一步を踏み出すこととなります。皆さん、是非一度日立キャンパスを訪れてみて下さい。きっと新鮮な情報と新しい技術の息吹を感じることでしょう。(小林)

農 学 部 か ら

1年生は、受験が終わりほっとし、大学という新しい環境で学ぶことに対して、期待と不安を持っていることでしょう。2年生以上は学年が進行し、新たな気持ち(?)になっていることと思います。

ところで、農学部では、とても水はけの良かったグラウンドに新しい校舎が建てられたので、今あるグラウンドは古い校舎を壊した跡地を整地し、砂を敷いただけのものです。そんなわけで、ひとたび雨が降るとたちまち水浸しになってしまい、地面が乾ききらないうちにまた雨が降るといった悪循環で、とても使える状態ではありません。ですから、身体活動(体育)の授業

は、阿見町のグラウンドや体育館などを借りて行っており、受講生は車や自転車などでその場所に出かけなければならず、大変不便です。また、サッカー部などのクラブ活動も、近くの小学校のグラウンドを借りて練習をするといった状況です。そのような中で、昨年11月から待ちに待ったグラウンドの整備が始まり、この4月からようやく皆さんが使えるようになります。新しいグラウンドは、水がすぐはけるよう工事され、さらに全面芝がはられて、とても快適なものになりそうです。これからは、身体活動やクラブ活動のみならず、各自どんどん使って健全な体を作って下さい。後は、体育館さえ出来れば、雨が降っているときでもOKです。一刻も早く建設してほしいものですね。(中石)

新入生へ愛をこめて……先輩からの言葉

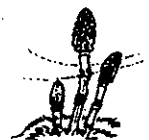
下 田 将 久 (理学部2年)

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。皆さんが入学して最初に労を要するであろう時間割の作成について、簡単に述べてみます。

茨城大学の教育課程は教養科目と専門科目から構成されています。教養科目の方はなるべく1年次のうちに単位を全部取ってしまおう。そして、幅広く浅く学ぶように心がけましょう。興味のある授業だけを履修するのも良いが、まったく興味のない授業も履修しよう。そうすることで、自分の新たな発見もあろうし、物事を幅広い視野で見ることができるよう、結論的に、社会に出たとき必要である。専門科目の方も、1年のうちは幅広く学んでおいて、後々の自分の専攻科目を選ぶのに役立てよう。対話ゼミナールはそれを選ぶのに参考になるし、単位も他の授業と比べて取りやすい。授業を選ぶのに参考になるシラバスをよく読

んで、また、学生の間での評判なども考慮して時間割を作ろう。もし、同じ時間帯に複数受けたい授業があるときは、初回はたいていガイダンスをやっているから全部受けにいった決めれば良い。サークルやバイトなどを考慮すると、前期は16コマ前後、後期は14コマ前後がいいんじゃないですか。(これ以上入れる人もたくさんいる。)

最後に、大学生活をするにあたって、自分から積極的に働きかけていくことが大切です。失敗したとしてもあれこれと思い悩まず、また最初からやり直せばいいのです。失敗を恐れず、いろいろなことに挑戦して楽しい大学生活を過ごしましょう。



石川 秀之（工学部2年）

茨城大学に入学されたみなさん、おめでとうございます。

まず大学に入学したら、自分の学科のことをたくさん学べると思うかもしれませんが、1年生のときは、教養科目のことを多く、勉強します。早く専門的な事を学びたいと思うかもしれませんが、教養科目もとても大事です。それに、この単位を落とすと、工学部の人には、2年生から日立に行くので、水戸でしかとれない単位もあるので、できるだけ落とさないようにしたほうがよいです。とくに必修の単位を落としてしまうと、2年生になってから、日立から水戸に通わなければならない、大変です。

工学部の人には、日立に行ってしまうと、寂しく何もないところなので、水戸にいる1年間のうちに、たくさん自分のことを学んだり、サークル活動をしたり、自分から進んでいろいろの事をして、充実した1年をすごしてください。

河村 忍（工学部Bコース2年）

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。受験を乗り越えて、「やっと一息」ついたところで、大学に入ったという実感を感じられている頃かも知れませんね。

さて、入学して一番先に考えてほしいことは履修についてです。一年生のうちは、教養科目の割合が高く、それ以降は専門の科目を多く履修します。詳しいことは入学時に配布される履修要項を見て欲しいのですが、卒業までに必要な単位数を無理なく、組み込んでいくようにしたいものです。ガイダンスの時の案内をよく聞くようにして下さい。学科によっては、「事実上の必修科目」なども存在するようなので注意して下さい。

また、休業期には集中講義があったり、教職を取得したい人なども、掲示板に貼り出される情報に注目して下さい。

私はBコースの学生なので、あまりサークル活動などはしていませんが、大学内では、いろいろな活動をしている先輩たちがいるので、興味を持った方は気軽に声をかけてもよいと思います。工学部はAコースは2年次から、Bコースの人には1年次から日立に行くことを考えて、サークル活動等を選ぶとよいでしょう。

夏期休業の頃ぐらいまでは、慣れない生活で疲れてしまうかも知れませんが（特に1人生活してる人）毎日、大学に行く習慣だけは身に付けて下さい。日立キャンパスには、社会人で昼間、働いてから学校に来られる方々もおられます。

私も含め、皆さんが卒業されるのは21世紀になります。その時、日本を支える一社会人になることを日々意識して生活して下さい。四年後に「一回り大きな人間」となって、卒業されることを期待しております。

杉浦 愛子（農学部2年）

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。待ちに待った大学生生活にゆめ膨らませている人も多いと思いますが、なにせここは、茨城県。現実とはこういうものだと感じることも多々あるでしょう。それでもめげずに楽しい生活を送ってください。

さて、大学生になってまず困ることと言ったら授業の取り方でしょうが、それは誰しも同じこと。ガイダンスをよく聞けばそのうち分かるでしょう。ただ、先生の話をもるまる鵜呑みにすると後で大変なことになるかも。特に農工学部生は、1年生のうちに可能な限り教養の授業を取っておいた方がよいでしょう。取りすぎもよくありませんが、「通い」だけは何としても避けたいものです。必要数ギリギリしか取っていないと、2・3年になってからもハードな時間割をこなさないとけなくなってしまうので注意しましょう。ラクな授業が知りたいという人は、各サークルの甘いお誘いについて行くといろいろ教えてもらえるはずですよ。

私も入学当時はあれこれやりたいことがあったのですが、結局この一年、授業以外にやったことと言ったらバイトぐらいなものでした。バイトのやりすぎには注意しましょう。休みなく働いていると、お金はどんどん入りますが、それを使って遊ぶ暇が無くなってしまいます。疲れてしまって朝起きられない、授業に出るのも面倒ということもしばしば。そうならないように気を付けましょう。

最後に、是非いい友人を見つけてください。特に初めが肝心です。「入学当時の友人」がやはり「大学時代の友人」として後々まで付き合いが続くと思うので、細心の注意を払って人選をしてください。

それでは、楽しく有意義な大学生生活を。

V o i c e — 主題別ゼミナールについて —

山 崎 康 夫 (人文学部2年)

主題別ゼミナールは、もっとも大学らしい授業といえる。というのも、自分の興味関心にあったゼミを選ぶことができ、少人数で授業が進められているからである。同じゼミに属している人は自分に近い興味関心を持っているから、お互いにいろいろな意見を交換することができるだろうし、授業への取り組みも真剣になる。また他の授業とは異なり少人数であることから、教官との距離が近く自分の疑問・質問・意見に対して答えてもらえることが多い。授業の進め方としては、自分が興味を持ったことについてのレポートを作成し、授業のなかでそれを教官や同じゼミの学生達の前で発表する。この発表に対して学生どうしで質問や意見を交換し、教官からの意見や指摘を交えることによって、レポートのテーマに関する理解を深めていく。では、このことにどのような利点があるのか。まず発表する人は自分が考えていたことをみんなに聞いてもらうことができ、まわりから意見を出してもらうことで異なる側面の存在に気づくことができる。また発表を聞く側は、レポートのテーマに関する自分の意見と発表者の意見を比較することができ、両者に共通していえることだが、教官からの助言や意見・指摘などから考え方の幅を広げることができる。

主題別ゼミナールでもっとも大切なことは、大学は自分で学ぶところだということを意識しておくことである。どのゼミを選択するか、どのようなテーマを設定するか、レポートに必要な参考資料は何か、予想される反論に対してどのように回答していくかなど。またレポートに関することは自分で考え、自分で見つけていく。授業に臨んでは、自分の意見と相手の意見を比較し、疑問に思うところや自分の考えを理論的に相手に伝えなくてはならない。主題別ゼミナールでもう一つ大切なことは、自分の興味をはっきりさせ、同時に他の人の興味を知ろうとする好奇心を持つことだ。

鈴 木 千 春 (教育学部2年)

大学の授業は、一人の教授に対し、多くの学生が講義を受けるというイメージがあるだろう。しかし、主題別ゼミナールはそんなイメージを打ち消すものだった。

私がとった主題別ゼミは、社会コースならではの「まちの風景」というテーマで、主に茨城県を中心に講義が進められた。教育学部の場合、各コースごとに講義が設定されているので、同じコースの人と親交を深める場にもなった。講義内容としては、石岡の都市景観の変容、江戸時代と今の水戸城付近の違いのように、身近な話題を取り上げ、その際、地図の見方や参考文献の利用法なども教授してくださった。また、実際に大学付近を歩いた。その際、先生が、その場その場でみられる特徴から、以前はどのように利用されていたかを説明してくださった。最終講義のときは、忠北大学の方と一緒にうけ、分からないところを私たちが説明するはずだった。余裕だろうと高を括っていたが、相手を納得させるような説明ができなく、恥ずかしい思いをした。このゼミは、レポートによる評価で、7月上旬に行った水戸城跡、弘道館等から自分でテーマを設定して書いた。この自分でテーマを設定するやり方は自分を表現できるという意味で大変やりがいがあった。しかも、先生がレポートの書き方を説明してくださったので、とてもやりやすかった。

主題別ゼミナールは、少人数制であるので、先生と身近に接することができ、内容も他の講義ではできないようなものだった。また、今後の大学で何を、どのように学ぶべきかを考える機会にもなった。そして、私自身このゼミを通して、何事においても視点を変えて観るということを学んだと思う。

教養教育古今東西

— 教養教育の現在的意義 —

昨年3月より今年の1月まで、アメリカのマサチューセッツ州立大学アマーフト校において、現代英語の派生形態論の研究にたずさわってきた。4月からは妻と3人の子供（高1、小6、小4）も合流し、地元の学校に通ったので、アメリカの小学校と高校についてもいくつか興味深い経験をした。大学についてではないが、参考までに少し述べてみたい。

まず意外だったのは、小学校より高校のほうが、始業の時刻が1時間ほど早かったことである。アマーフトは人口が3万数千人の小さな大学町で、治安が良く外国人に対するサービスが行き届いた、大変住みやすい所であったが、高校の始業は午前7時40分、小学校の始業は8時40分であり、それぞれの20分程前にスクールバスが回ってきた。下校も高校の方が早くて午後2時20分、小学校は3時5分であった。さらに驚いたのは、小学校も高校も、特別な会議などがなければ、生徒が帰ると先生も帰宅することが多いということであった。スポーツクラブの土、日の活動は、先生ではなく親たち（父親だけでなく母親も）のボランティアによっていた。また、よく知られていると思うが、小学校の1クラスの生徒数は20～25人であった。日本のような塾はない。先生にとっても生徒にとっても、負担が少なくゆとりがあると思った。

また、アマーフトの町の住人であれば、地元の小学校から高校までは学費が取られず（アメリカでは高校までが義務教育とのことだが、費用は税金で賄われる）、我家の3人の子供たちもその恩恵に浴した。

もちろん、外国と日本の違いを指摘するだけで日本の教育の問題を解決できるわけではない。しかし、小学校から高校・大学までの教育の様々な問題点について考えるとき、本当のゆとり（先生と生徒と親にとっての）とは何かということをもう一度考え直す必要があるのではないかと思う。 並木 崇康（教育学部）

大学における教養教育は、大学初年級において専門科目以外に学ぶ「教養科目」の教育という形で行われている。

私が卒業した筑波大学では、教養科目は「関連科目」という形で開講されていた。この関連科目は、自分が所属する学部（筑波大学では学類という）とそれ以外の学部で開講されている科目の中から比較的自由に選択することができた。他の学部の講義を聞くことができるというのはとても魅力的なことであった。その講義により何か学んだというより、自分の知っている世界とは異なる世界を見ることができ、さまざまなものの見方、考え方があることを知ったことが良かったように思う。

さまざまな情報があふれる現在では、学生をとりまく環境は昔とは大きく異なり、また専門教育を充実させる必要性などを考えると、こういった教養科目の教育にどれだけ力を注ぐべきかは難しいところであろう。しかし、そのような現在だからこそ、多角的にものごとを見ることが重要であり、そのような機会を与える余裕は大学に欲しいと思う。

ここ数年「複雑系の科学」とよばれる生命や社会などの複雑な現象の進化・発展のメカニズムなどを問題とする学問分野が興りつつある。そこでは、研究対象も従来の科学のように固定された枠に収まることなく、生命、物理などの自然科学から情報科学、また政治、経済などの社会科学まで広範な分野におよんでいる。このような状況は、「複雑系の科学」にとどまらず、新しい分野が生まれ開拓されていくような場面においていろいろな所でおきてくると考えられる。そのようなとき求められるのは、従来の枠にとらわれない柔軟で多角的なものの見方であると考えられる。

このように、現代における教養教育は、ますます多様化する学問や社会に対応できる人材に求められる柔軟で多角的なものの見方を養うという役割をもっているのではなかろうか。 斎藤 健（工学部）

掲 示 板 コ ー ナ ー

奨 学 金 制 度

「奨学金についての問い合わせは、学生部厚生課へ」

☎ 2 2 8 - 8 0 5 9

奨学金制度として、1)日本育英会、2)地方公共団体・民間団体の奨学金制度がありますが、いずれも人物・学業とも優秀で経済的理由により、学資の支弁が困難と認められる者に貸与されるものです。

1) 日本育英会

【奨学金の種類及び貸与月額】

第一種奨学金 無利子貸与
第二種奨学金 有利子(年3%)貸与
併用貸与 第一種奨学金の貸与を受けても経済的に著しい困難があると認められる者については、第二種奨学金を併せて受けることができます。

(注)大学院博士後期課程の場合は、第一種奨学金のみです。

入学年度		平成 7～8年度	平成 9年度～
学 部 専攻科	自 宅 通 学	38,000	40,000
	自 宅 外 通 学	44,000	46,000
大学院	修士・博士前期	81,000	83,000
	博 士 後 期	112,000	115,000

【出願資格】

第一種奨学生 …… 人物・学業ともに特に優れ、経済的理由により著しく修学困難な者

第二種奨学生 …… 人物・学業ともに優れ、経済的理由により著しく修学困難な者

【出願方法】

1年次(1次募集) }
2年次以上 } 掲示を見てください。
大 学 院 生 }
専 攻 科 生 …… 入学手続の際、お知らせします。

1年次 (2次募集) } 7月中旬、掲示により
2年次以上(補充採用) } お知らせします。

※ 主たる家計支持者の失職、死亡又は災害等による家計急変のため、緊急に奨学金の貸与が必要になった場合は、随時出願できます。

【奨学金受領資格の確認】

奨学金の適正な交付を行うため、年2回、奨学生の受領資格及び異動事項等について確認を行います。確認期間中に手続きを怠った者については、奨学金の振込保留、廃止等の処置をとりますので、必ず確認を受けてください。

受領資格確認の期間

期 間 : 5月上旬 } 詳細は掲示により
10月上旬 } お知らせします。

【在 学 届】

次に該当する者は、速やかに在学届を提出してください。

在学届を提出することにより、本学在学中は、奨学金の返還が猶予されます。

- ・高等学校で日本育英会の奨学生であった者
- ・貸与終了者で、大学又は大学院に留年している者

【進 学 届】

高等学校在学中に、平成10年度大学第一種奨学生採用候補者に決定されている者は、4月17日(金)までに進学届を提出してください。

進学届を提出した者は、在学届を提出する必要はありません。

2) 地方公共団体等

本学に募集の案内があったものについては、その都度掲示によりお知らせします。

本学に募集要項を送付してくる団体はごく一部です。希望する学生は、各自、奨学関係団体(県の教育委員会など)に直接照会してください。

《平成9年度本学へ募集案内のあった団体》

茨城県 財宮崎県奨学会
岐阜県 財川口育英会
宮崎県 財電通育英会
石川県 財大阪府育英会
新潟県 財中村積善会
富山県 財山口県奨学会
福島県
鹿嶋市

教 養 教 育 N O W

教養教育の全国的動向の一端

「全国国立大学教養教育実施組織代表者会議」という長い名前の会議が昨年5月にあり、教養教育の現状と問題点を話し合う機会を与えられた。そこで話の一端を紹介したい。

教養部改革においては、東京医科歯科大学以外は平成9年度中に教養部が廃止されている。まず、ほとんどの大学において、大学全体の予算の何割が教養教育に与えられているかということが大きな関心事であった。本学とほぼ同じ規模の大学で教養教育に対する予算は8,000万円～1億円といったところが実状であった。

昨年11月、本学の教養教育セミナーにおいて、千葉大学、野口副学長に全国で初めて行われた千葉大学の教養教育に関する外部点検評価について概要を紹介していただいた。千葉大学では3～4年目に入った時点で外部評価を受けている。その結果によると、運営方針よりもカリキュラム内容に対して批判が大きかったという。また、4年一貫教育における教養教育のあり方についてカリキュラムまたは履修の指導の仕方等に工夫を求める意見が出されたという。しかし、学部開放科目が150科目も用意されている点は特徴であり、高学年での教養教育という位置づけともなっている。

熊本大学では、基礎セミナー（本学の主題別ゼミナール）について、1年次2,000人を100クラスに、わずか1日でクラス分けを実施しているとのことであった。

文部省の専門官から指摘されたことは、学生の能力・適性が多様化していることに伴い、教育内容・方法を改善することが重要であるとのことであった。すなわち、これにより教官グループの教授能力の向上が必要となるので、大学としてはFD（Faculty Development）への一層の取り組みが要求されていることになる。

最後に非常勤講師について、外部に沢山依頼している割に他大学で非常勤講師として教養教育を行っている教官がいるのを問題にしている大学があったのは印象に残った。

（奥 達雄）

「大学教育研究開発センター年報第2号」及び「教養教育に関する調査報告書」の発刊

今年度の年報が、近日発刊されます。今回の内容は、①昨年11月末に実施された「教養教育に関するシンポジウム」の報告、②大学教育の考え方、教育方法、点検評価のあり方についての論文・研究ノート、授業実践報告等、③「大学教育研究開発センター」の年間活動記録の3部門で構成されています。

特に、新設された主題別ゼミナールの授業については、必ずしも円滑に展開されていない声が聞こえてきます。この授業の実践報告も掲載されますので是非ご一読ください。

また、「教養教育に関する調査報告書」も同時に発刊されます。この報告書は、教養科目の授業についての学生の満足度や関心度のアンケート、教養教育に関する教官へのアンケート等をまとめたものです。今後の大学教育の点検評価についての一つの資料となることを期待しています。

アンケート等にご協力いただいた学生及び教職員に深く感謝しています。と同時に、この小冊子が、みなさまに何等かのご活用いただけることを願います。

（巽 申直）

つ ぶ や き

全国各地、世界各国から新入生を迎え、キャンパスにも活力がみなぎってまいりました。大学教育研究開発センターは、大学における教育、とりわけ教養教育の要であり、新入生の皆さんとは“とても”の関係。茨城大学の校章は野いばら“Rosa Multiflora”ですが、このセンターのニュースレター「ローザ・ブルムラ」はラテン語“Rosa Plumula「薔薇の若芽」”の意。若芽のごとく無限の可能性を秘めた皆さんが茨城大学という土壌でどのように枝を伸ばし、花を咲かせるのか。「学生諸氏と教職員相互のインターフェース」をモットーに編集されている「ローザ・ブルムラ」を多に活用頂ければと願っております。皆さんからの発信情報（読後感想、寄稿、提案、等々）を共通教育棟一階廊下の「教養教育Q&A」ボックスへ気軽に郵送下さい。

（H. O）

発行日 平成10年4月
 発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
 水戸市文京2-1-1
 029(228)8416〔企画室教養教育係〕

Rosa Formula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター No. 9

学生がもっと情報共有者に

目次

巻頭言	1
初めての試験にあたって	1
キャンパス情報	2
大学に入学して思ったこと	4
再度一年からやり直すとすれば ...	5
Voice ー 試験なんかこわくない!? ー ...	6
教養教育古今東西	7
掲示板コーナー	8
教養教育NOW	9
教養教育こぼれ話	10

(平成10年7月発行)

アメリカ連邦議会下院の政府活動委員会編集『情報自由法とプライバシー法を利用するための市民の手引書』(1977年刊)の冒頭に、第4代大統領ジェームズ・マジソンのつぎのような言葉が掲載されている。

「民衆に情報を与えず (without popular information)、あるいは情報を得る手段を与えないでいる人民の政府などというものは、茶番劇の序幕か、悲劇の序幕にすぎない」

「みずから統治者 (their own governors) であろうとする人民は、知識が与える力をもって自らを武装しなければならない」

ここには明らかに、政府情報の公開が「人民の統治 (政府)」「人民主権」の原理、すなわちデモクラシーにとって不可欠のものとしてあることを示している。近代のこのような「人民の情報」という考え方は、同時期のフランス人権宣言 (1789年) の第15条、「社会は、すべての公の職員に、その行政に関する報告を求める権利を有する」という規定にもみることができる。まさに、それは近代国家を通じて共通の認識であったといえよう。

ところで、昨今の大学改革は、「上からの」カリキュラムあるいは組織の改革といった性格をもち、「学生が加わらない改革」「学生から見たカリキュラムの分かり難さ」が問題となっている。四半世紀前の「大学紛争」が学生を中心とした「下から」の動きであったのと対照的で、隔世の感がする。だが、はたしてそれでよいのかといえば、決してそうではないはずだ。学生自身に大学運営の当事者責任を自覚してもらっても、情報請求権の保障をふくむ情報提供の多様な方法を模索しなければならないのではないのか。大学版の情報公開制度を考えてもよいのではないだろうか。

(田村)

初めての試験にあたって

今年は例年にもまして4月、5月と雨の日が多く、梅雨の前触れが早かった。4月に入学した皆さん、大学での生活にも慣れたでしょう。授業では、これぞ大学と感銘を受けましたか。さて、7月21日から期末試験が始まりますが、じっくりと取り組んで頂きたいものです。皆さんを脅すつもりはないのですが、大学での試験結果の評価を厳格にすべきであるとの意見が強まりつつあります。大学に対する社会の期待が高まり、大学では大いに教育し、安易に進級・卒業をさせるべきでないとの意見です。確かにこれまでは、大学の教育に対する期待感はさほど強いものとはいえない状況がありました。しかし、これからは、創造力ある社会に転身させるために、また、個々人が責任を担える社会にするために個々人の能力の高さが競われる機会が

多くなるでしょう。大学4年間は自由な時間が最も多くある時代です。これぞと思える学問に大いに心血を注いでいただきたいものです。

大学の授業では、系統性のある学問分野ほど古典を重視します。この分野は、遥か昔に確立した内容で一見つまらなく感じるものです。しかし、古典を体得せずに現代に力を発揮できないのは明白です。大学では、おおいに古典に親しんでいただきたいものです。卒業後は君達が社会、学問の進歩の担い手となります。現在の社会の変化、科学の進歩には目覚ましいものがあります。ここ数年で人類が見える宇宙の深さは2倍になりました。21世紀に卒業する君達が、大学で大いに勉強し、鋭気を養われることを期待します。

(横沢)

キャンパス情報

人文学部から

入学して3か月が過ぎたわけですが、大学生としての生活はどうでしょうか。受験の頃より楽だという感想を持つ人もいるかもしれません。しかし、どこにおいても、無制限な自由というものはありません。現に、試験・レポートがまもなくあります。かなりの数の科目で前期試験があると思いますが、早めから準備しておくことが大切です。ノートや参考文献を利用して勉強し、納得のいく答案を書いてください。

8月から9月にかけて6週間カナダのモントリオールにあるマギル大学で英語の夏季集中講座が開かれる予定です。1年生がこの夏季集中講座を受講した場合教養英語のEnglish I とEnglish II として単位が認定さ

れます。

試験が終われば約2か月の夏休み！旅行、運転免許取得など、決まった計画をもっている人も多いことでしょう。何かないかと探している人に提案したいのは、長篇小説に挑戦することです。たとえば『アンナ・カレーニナ』などはいかがですか。これでも、他の小説でも結構ですが、とにかくまず1篇読了してみてください。いままでとまったく違う世界に触れることができると思います。若者の文学離れが言われていますが、文学には、他のものからは得ることのできない貴重な財宝が詰まっています。しかも若いうちに触れないと分からないことも多いのです。次々と古典を読破することをおすすめします。

(渡邊)

教育学部から — いっしょに教育学部をつくりませんか —

教育学部では、再度の改革と教育免許法の改正に対応するためのカリキュラムの改編作業が始まろうとしています。そこでは、これまでの大学改革の中で蓄積されてきた様々な試みを土台に、さらに学生主体の大学教育が目指されていくことになるはずです。

その一つの例として、昨年度から教育学部では「教員養成フレンドシップ事業」に取り組んでいます。これは、各附属学校・園や公立学校の教育活動に学生がボランティアとして参加するというものです。私も自分で担当している専門の講義やゼミをこの事業と連携させて行っています。これまでも様々な講義の改善を試みてきましたが、その仕上げとして、ほんものの

「教育実践への参加」を位置づけたのです。

私はこの学生ボランティアを、自主的な参加による「教員養成におけるインターンシップ」としていきたいと考えています。現在も数十名の学生が継続的に学校で様々な体験をしています。これをさらに発展させ、充実させていくのは、学生のみなさんにかかっています。与えられた機会だけではなく、自分たちでネットワークをつくり、企画を立てるという方向に進めたいのです。それは、学生と教員とが共同で新しい教育学部をつくる作業になるはずで、いっしょにやってみませんか？

(新井)

理学部から — 履修状況の再チェックを —

理学部の3学科は従来の5教科の複合したものになっていますので、履修計画作成に苦労したのではないのでしょうか。3つの学科間でも履修基準が微妙に異なり、間違いが生じやすくなっています。語学の履修に

ついては特に注意してください。また、各学科では、3年生修了時点で教養科目の履修が修了していないと、卒業研究につけなくなり、自動的に留年となってしまいます。理学部3年生はカリキュラムが密で、教養科

目を履修すると専門科目が取りにくくなりますので、1・2年生のうちにしっかり履修してください。

理学部では学科構成の特徴から入学した学科と自分の希望とが合わなかった場合のために転学科の機会を与えています。転学科は2・3年生を対象としますが、

高学年から低学年へ転学科した例もあります。いずれにしても、よく勉強して、じっくり考えた人が対象です。夏休み中、自分の進む方向を考えてください。

履修相談、進路相談はいつでもOKです。

(田切)

工 学 部 か ら

キャンパスのあちこちで、捨ててあるのか置いてあるのかわからないまま多くの歩行者の通行を妨げていた自転車が、関係教職員のご尽力と学生諸君の協力により整理され、見違えるほど歩きやすいキャンパスになりました。工学部の1年生の皆さんがこちらに移ってくる頃までこの様でいてほしいものです。

工学部キャンパスに、システム工学科塔(棟)につづく2本目のタワーができたことは、すでにいろいろなところに書かれているので知っている人も多いと思います。情報工学科が使うこの建物は、引越しの時期もとうに過ぎ、もうずっと前からそこにあったかのようにしてそこにあります。エレベーターが外から見えるようになっていて、となりの講義棟では4階から吊

されたフーコーの振り子が自然の法則にしたがって規則正しく動いているのと対照的に、不特定多数の人々に駆動された垂直方向の非線形不規則振動が観察されます。2本のタワーは遠くからもよく見えます。木々の緑に囲まれているところはなかなか良い眺めです。

タワーは互に同じ色をしています。最近できたほかの建物も同じ色をしています。これは偶然ではなく、工学部の色なのだそうです。前からある建物のいくつかもその色に塗りがえられました。また、工学部のシンボルマークというのが最近制定されました。どちらも色と形に関係することで、緑色の紙に書かれた黒文字で説明するのは難しいので、説明しません。見て気に入ってもらえることを願います。

(山中)

農 学 部 か ら

茨城大学へ入学して1カ月余りたちましたが、大学生活は如何でしょうか。大型連休も終わり、これからが本格的な大学生活になります。勉強は無論大切ですが、友人との語らいを大切に、一生を通じて楽しめる趣味を是非持っていただきたいと思います。

農学部では、2年生のカリキュラム選択も終わり、各自専門の勉強に本格的に取り組んでいます。

さて、前号でも紹介しましたグラウンドの整備が終了しました。排水工事も行っておりますので、快適な使用ができるものと期待しています。全面芝生です。現在は芝生の養生を行っているため使用できませんが、

後期(10月)からは使用できる予定です。健康・スポーツの時間やクラブ活動あるいは各自大いに利用し、健康な体力作りを行っていただきたいと願っています。1年生の皆さんは「使い初め」というわけには行かないでしょうが、来年4月からは大いに活用して下さい。しかし、芝生は大切に管理しながら使用していただきたいものと念じています。

次に、農学部の前庭は今(5月)新緑で、池では噴水が舞い、見本田は田植えも終わりました。芝生はきれいに刈られて美しく、学生は三々五々に集まり、芝生で語らい、食事をする姿は、授業や忙しい研究の合間の楽しい団らんの一時となっています。

(月橋)

大学に入学して思ったこと

八木 理充（人文学部1年）

大学というものに入って、何よりもまず感じたことは「人が多い」ということだ。入学式以来、毎日知らない人と会う。知り合いのいない大学に来たのだから当たり前のことだが、「知らない人としか会わない」という気分になるほどだ。孤独という状況の中で、授業・友人等、様々な不安は大きい。

授業は、一時限90分と、高校の時に比べて一時限の授業時間が25分長い。中学から高校に進んだ時、15分の授業時間長化に苦しんだ私は、昨年度2月に自宅学習になって以来の授業ということもあり、集中力が続かない。しかも、教科書がなく、先生が話し続ける授業もある。黒板複写が染みついているためか、先生の言葉に要点を探してメモをとることが難しい。とにかく、先生の話聴くことに集中する。慣れるまではこれしかないだろうと思う。

話は変わって、私は、大学生は自由だと聞いていた。高校時代に比べて、現在、確かに「学校」に拘束される時間が減った。だが、それ以上に、私生活でいろいろなことをしなければならない。「平日の時間は増えたが、休日の時間は減った」。一人暮らしを始めた私は、掃除、洗濯、炊事、今まで親に任せていた事をすべて自分でしなければならない。ついでに、先日私は風邪をひいた。それでも家事はしなければならない。自分の看病もしなければならない。今後、体調を崩さないように、家事を手際よくできるようになりたい。

大変なことも多いが、やはり自由だ、とは思う。やりたい事はある。これからの4年間で、それを思う存分やりたいものだ。



高橋 陽（工学部Bコース1年）

何故、私に執筆依頼が?と思いましたが、担任曰く「出来れば社会人・・・」とのお話ですので、社会人の新入学生として述べさせていただきます。

皆さん御承知の様にシステム工学科Bコースは社会人にも門戸が開かれた学部であります。今年は約85名中5、6人が社会人の様ですが、社会人同士で話をしてみると、皆共通して、自分をとりまく環境（家庭、仕事、大学等）の両立に苦勞しながらも、若い仲間たちとの新たな大学生活を楽しもうと努力しています。かく言う私も、昼は企業人、夜は学生、家に帰れば父親なのですが、授業の始まった最初の1週間はなれない新生活ベースもあり、非常に疲れたのが実感です。

さて、多くの方々は「社会人になってまで大学まで行かなくても」と思われるでしょう。確かに、入学金、授業料は自払、残業は無くなるので収入も激減（でも仕事量は減らない）とデメリットは大きいのですが、社会人の各人は、自分自身に対するそれ以上のものを求めて入学してきています。（企業内には、「私もチャレンジしてみたい」という人が非常に多い）

世間が不況と言われている中、社会では自己啓発という言葉で、各人のレベルアップが求められており、又、定年退職後の方々の中には刺激を求めて公開講座等への参加意欲が強いようです。今後、大学側のアピールや社会人向け制度等が更に充実されれば入学希望者・受講者はもっと増えることでしょう。

授業が始まり約1ヶ月が経過しましたが、徐々に難しくなっていく内容に、基礎力不足を痛感しています。会社では技術系開発を担当していますが、実践が主である世界と異なり、学問としてそれを学ぶにはまず基礎力と理論からということをあらためて感じており、今は、「少しでも時間を作って基礎力をつけ、授業についていけるよう努力しなければ……」と思っています。

再度一年からやり直すとすれば

永長みどり（教育学研究科 2 年）

再度大学 1 年からやり直すとすれば……、私は何を
するだろう？「学生はいいねえ。」ずいぶん前から
いろんな人に言われ続けてきた言葉。なんとなく適当
に聞き流してきた言葉。最近では、今となっては社会
人である同級生にまでも言われる。私の学生生活も残
すところ 11 ヶ月、追いつめられて見えてくるものがある。

「どこにしようと、何をしようとは時は世界中全
ての人に同じように流れる。そしてそれは決して戻り
はしない。」当たり前のことであるかもしれないが、
これが大学 4 年間で振り返って私がいえることである。
大学生の時は、自分で自由になる時間も多く、ただな
んとか過ごしていたことが多かった。このままずっと
こんな生活が続くのだろう、そう思っていた。しか
しあっという間に月日は流れ、気付いてみれば袴姿で
卒業証書を握っていた。そんな時私は考えた、一体私
は大学で何をしてきたんだろう、今の私に何が残って

いるんだろう、と。確かに大学 4 年間、人生を左右さ
せられるような人との出会いや体験もし、4 年間を通
して価値観や考え方など、自分もずいぶん変わった
と思う。しかし、もっとああすればよかった、こうす
ればよかった、と思うことが次から次へと浮か
び上がってきた。もっと早くこれに気付いていれば、
とどれだけ悔やんだことかわからない。

ある人からこんな話を聞いたことがある。「何もせ
ずに過ごしていれば、時は流れ去っていくだけだ。で
も毎日を充実させていけば、時というものは自分の中
で積み重ねられ残っていくものだ。」私は貴重な学生
時代という時間を少なからず流し去ってしまったいた
のかもしれない。

再度大学 1 年からやり直すとすれば……。私は時を
積み重ねたい。時の積み重ね方は人それぞれ違うだろ
う。だから私はあれをしろ、これをしろとはアドバイ
スすることはできないが、いろんなことにチャレンジ
することをおすすめする。おもいがけず新たな道が開
けるかもしれないから。どうぞ限りある学生生活を大
切に！

小林ひろみ（農学部 4 年）

改めて考えてみると私はもう大学 4 年で、残りの大
学生生活は 1 年を切ってしまった。入学した当初は 4 年
間は長いなあと思っていたが、いざ 4 年になってみる
と時間の過ぎてゆくのは早い。高校の 3 年間と今まで
過ごした大学 3 年間で比べると、格段に大学 3 年間の
方が短く感じている。あっという間とはこのことかと
思う今日このごろである。

高校時代は受験ひとすじで、大学に行ったら今まで
出来なかったいろんなことするんだと夢を膨らませて
いた。しかし、現実はそのようには行かなかった。も
っと幅広く教養をとっておくべきだったとか、もっと
バイトをしておくべきだったとか、ああすれば良かつ
た、こうすれば良かったの後悔ばかりである。苦手だ
からといって数学の教養をとらなかったこともあった

し、サークル活動に一生懸命になっていてバイトもあ
まりしなかった。気がつくと水戸での 1 年間は終わり、
阿見に引っ越していた。今思うと 1 年次は一人暮らし
に、2 年次は水戸から阿見にという環境の変化に、3
年次はほとんど毎日の実験に慣れるので精一杯だった
ようにも思われる。

再度 1 年からやり直すとすれば、一人暮らしとかサ
ークル活動などの大学生活というものに早めに慣れて、
大学生活を満喫したい。様々な学問や人間、社会に学
生の間にたくさんふれておきたい。得手不得手だけで
教養の履修をきめたり、面倒だからといってバイトは
しないということはないようにしたい。大学時代にし
かできないことは必ずあるから。

残り 1 年弱の大学生活、後悔しないようにいろんな
ことを学ぼうと思う。

V o i c e

前期試験に向けて

竹沢 得治 (人文学部2年)

1年生の時は、大学へ入ったばかりで、すべての科目で良い成績をとろうとしてがんばった。授業の方はどの科目も欠席することなく、真面目に受けた。でも、前期試験を受けて分かった事は、大学の試験は今まで受けたものとは違うという事だった。特にレポートなどは、授業で習った事とはあまり関係のない事柄であり、授業にでていようが、出てまいが関係ないものもあった。また、自分で考え、考え抜いて書いたものが、本からまる写ししたものに負けてしまうという事もあった。

この事から、後期試験では、いかに要領よく良い成績をとるかという事を考えるようになった。真面目に授業を受けても良い成績をとれなかったら意味がないと思い、出席をとるような授業はしっかり出席し、そうではない授業は休む事もしばしばあった。また、授業に出て友達としゃべっているだけという事もあった。試験もいいかげんに受けてしまった。

1年生が終わり、中国へ留学することに決めた。1年生の時に中国語の授業をとっていたが、一生懸命勉強することもなかったので、向こうで面接の試験を受けた時には、自分の名前すら中国語で言う事ができなかった。半年経ち、やはりほとんど中国語を話す事も聞きとることもできなかった。中国語を話せばいい

なぐらいの漠然とした目標だけで中国へ行ったために、中国語力が上がらなかったのである。残りの半年は、何のために中国語を話せるようになりたいかを考え、朝から晩まで勉強した。それまでとは違い、授業以外の時間は、ほとんど中国人の友達と行動を共にした。そのため、1年が終わる頃には、クラスで教えてくれる先生が話す内容のうち80%ぐらいを聞きとる事ができるようになった。もちろん話す事も行った時とは比べようにならないほど話せるようになった。なぜこのように勉強するようになったかということ、中国人学生への勉強に対する姿勢を見たからである。外国語大学という事もあり、みんな目標をしっかりとち、朝、授業が始まる前から外で声を出して本を読み、夜遅くまで授業を受け、授業後も、冷暖房のない部屋で自学をしているのである。

日本へ帰り、茨大に戻って来て、自分もあの学生たちには負けられないと思い勉強することにした。授業も単位や必修科目の関係から自分の興味がない部分も勉強しなくてはならない。しかし、自分が考えた事は、全ての科目をこなすのは無理だから、自分が本当に勉強したいと思う授業を大切にしようという事だ。今は自分の目標があり、自分にはどんな授業が大切かわかる。それに向けてがんばろうと思う。試験に関しても、その自分が心に決めた授業の試験を大切にしていきたいと思う。授業も試験のためだけではないのだ。

十人十色の教官像

三原田賢一 (理学部2年)

蟬の聲がやかましくなり、半袖でも蒸し暑く感じる頃、生協の一階はコピーを待つ人々でごった返します。大学では前期末、後期末の2回しか試験がないため、一回の試験範囲はそのぶん長くなるのです。そのため、少々さぼり気味の人は直前でこんな目に……。

初めての試験をうまく乗り越えるにはどうすればいいのでしょうか。僕の昨年を振り返って書いてみたいと思います。

まず、大学では講義同様、試験も担当の教官によって大きく異なります。試験そのものを行わない教官やレポートを課す教官、どちらも課すというなんともありがたい(?)教官までいます。更に、講義の内容から出題される場合や、それをふまえた上で自分の意見を書かせる場合など、多種多様なのです。その情報を集めることも重要なポイントではないでしょうか。教官本人が講義でばろっと言うときもあれば、サークルの先輩が教えてくれることもあります。僕は昨年、教

養の『科学技術文明論』の試験に、万全の体制で臨んだのですが、試験は「講義の感想を書いてください。」こんな目に遭わないために、情報収集をお忘れなく。

次に、だいたいどの講義でも共通して言えるのは、論述が多いという事と、教科書はあまりあてにならない、という事です。あくまで講義が中心なので、そのなかで言った些細な一言が大切だったりします。そしてやはりただの知識の詰め込みでは、書いていて苦しくなってくる、ということがあります。因果関係や相関関係、反応過程など、流れを聞かれるとただ単語を知っていても無惨な答案ができるだけです。

理学部に関しては、やはり自分の専門分野をアピールされる教官が多いです。仲良くなって、専門分野の話などを聞かせていただくと良いかもしれませんが、大学では、教官は3・4年次になるまでは遠い存在のように感じられるかもしれませんが、1・2年次でも、こちらの意欲次第で様々なことを教えてください。せっかく大学に入ったのですから、色々なことを吸収した方が得だと思いませんか？

なんだか説教くさくなってしまいましたが、今までの講義を振り返って、それが無駄にならぬように情報を集めて、試験に臨んでください。復習していて「あ

試験なんかこわくない!?

片岡将之 (工学部2年)

テスト勉強はどのようにやっているのかと聞かれると、たいていの人は一夜漬けと答える。だが、一夜漬けだけで試験を切り抜けようと考えている人は、少なくとも講義には出席しておくべきだと思う。

それに大学の講義は、高校で習った事は理解しているとみなされてすすむので、もし忘れていようなら、その分勉強するのに時間がかかる事を頭に入れておかなければならない。大学は、出席日数が足りていればテストを受けられるため、学生は休みがちになってしまう。出席をとらない講義では、まったく出席しない学生もいるだろう。

教養科目は、講義に出席していればある程度はテストのヤマをはれるし、事前にテスト問題が教えられていれば、講義の内容を思い出すことにより勉強しやすくなる。後で図書館で調べれば講義など出席しなくて

れ?この日はノートが抜けてる」というかた。仕方ありません。今回は生協コピーのお世話になりましょう。そしてみなさん、楽しい夏休みを過ごしてください。

もよいだろうと思っている人はいるかもしれないが、なるべく講義の内容を基に調べた方が得策である。

なぜなら、ほとんどの科目は答案用紙を返してくれないため、何を基準にして成績がつけられているのかわからず、思ったよりも評価されないことがあるからだ。テスト対策としては、毎日復習する事が望ましいが、大学1年目は、受験から解放された反動で、遊びたい気持ちが強くでしてしまう。そのため、大教室で教官がマイクを使ってしゃべりまくる講義や、板書しない講義は、要点がわからなくてただぼう然と聞き流したり眠ったりしてしまう人もいる。こんな講義が、今後何の役に立つのかと思う時があるかもしれないが、人の話を聞く練習になると思えば、ただ聞いているよりは講義に集中できるだろう。

意識的に教官の話で大事だと思う事をメモする等、いかにして講義を聞いているかが、試験を受ける時に、余裕が持てるかどうかの分かれ目だと思う。

教養教育古今東西 — 海外における教養教育 —

リンダ・ガン (人文学部)

日本の学生がカナダの学部へ留学すると、大きな違いを体験することになります。

カナダでは、教養教育に相当するのは学部の学位で、普通は文学学士か理学学士です。学部は日本では4年ですが、カナダでは3年です。カナダの学生は1学期に5つのクラスしか取りません。しかし普通は1つのクラスは3コマあるので、週に合計15コマあります。理科では、実験クラスは、日本と同様、2-4時間あります。だから理科学部の学生は、週25時間あります。日本では学生は週18コマまで取ることができ、そして週一回しかないのがここが大きく違う点です。(理科実験のクラスはもっと長いかもしれませんが。)

カナダの大学は普通は多くの勉強と宿題を課します。普通は中間と期末試験があり、クラスの課題図書が多くあり、少なくとも1回(A4で)最低10枚のレポートがあります。タイプしてないとまず受け取ってもらえません。成績の付け方は違います。Aが80-100、Bが70-80、Cが60-70、Dが50-60、そして50以下は不可です。出席も重視され、30%以上休んだら不可です。

日本では大学入試や編入試験がありますが、カナダでは大学入学は高校の成績で決まり、編入試験なしで他の学科に移れます。編入は基本的には空きがあるかどうかで決まります。ただし映画作成の学科は面接がありますが、個々の大学や大学院への入学試験はありません。願書の受付は大概郵便です。普通は推薦状が要求されます。この結果、やり直しがきかないので、学生はいい成績を取るために高校や大学では一生懸命勉強します。つまり、もし大学で成績が悪くて、大学院へ行きたいとすれば、入試のために勉強することはできません。入試はそもそもないからです。ここでも可否は成績と推薦状で決まります。

日本では学生は最終学年に就職活動を始めます。そして、企業の主な関心事はその学生が卒業することです。成績にはあまり関心がありません。カナダではほとんどの会社はまだ卒業していない学生とは面接はしません。そして成績のいい学生を欲しがります。さらに、ほとんどの会社は学生の専門分野でしか採用しません。銀行で働きたければ、金融関係の専攻が必要ですし、広告なら市場やグラフィックデザインの知識が必要です。先生になりたければ、教育学士が必要で、これには最低6週間の実習を含め4年かかります。

日本のシステムは日本に合っています。採用した会社が責任を取るからです。日本では大学に入るのに相当な競争があるので、会社は大学に入って卒業した人は優秀だと考えます。会社は自社で教育できる優秀な人がほしいのです。北米の会社はこうした責任はまず負いません。これは北米が学ぶべきことでしょう。会

社で教育を受けた人は、大学で特定の分野で理論的な訓練を受けた人よりは幅広い知識があります。理論と実践は得てして違うものです。また、大学での成績は良くなくても、大学院のために入試の勉強を一生懸命することは可能です。こうしたシステムはやり直しのチャンスを与えてくれます。

王 俊柱（理工学部研究科）

教養教育に対する考え方は、国情の相違によって異なると思う。中国では80年代に、大学教育を計画経済の発展に適応させるために、元ソ連の教育体制を参照にして独特な教養教育体制を立てた。しかし、近年來の中国の改革・開放および計画経済から市場経済への転換に伴い、中国の教育体制、特に教養教育が大きく変わってきた。

1960年ごろ、中国の専門技術人材は不足していた。そこで、国家の建設の需要を満たすため、当時の総合大学から学部、系を独立させ、近辺の専門や学科を合併して、多くの専門大学である学院が設立された。たとえば、鋼鉄学院、農学院、電力学院などがこれにあたる。これが大学教育歴史における第1回院校調整とされている。その時期には、卒業した学生が身に付けた知識を生産などの実践作業ですぐ使えるようにする必要があった。このために、大学では学科・専門科目が細かく設置されており、専門教育に必要な教養科目しか開講していなかった。この教育体制が80年代末ま

で続いた。

90年代に入って、総合科学技術の用途の拡大および中国の経済体制の転換がなされるようになった。これに伴い、専門大学から卒業した学生は知識の領域が限られており、社会の需求との格差が大きくなってくると認識されるようになる。これを境にして、大学教育体制がもう一度深く改革された。まず、基礎課程の教育を強化するために、専門大学（学院）を合併し、新たな総合大学が設立された。これは第2回院校調整と言われている。これによって、学生は教養科目を選修する自由度が大きくなった。さらに他の大学の教養科目の講義を受けた場合でも、選修必要単位数として承認された。現在、中国の工科大学では哲学、美術、音楽、道徳、古今文学などの科目を通常教養教育として開講している。日本の大学と比べて教養教育の科目が多く開講されているが科目毎の単位数が少なく、教養科目が卒業必要単位に占める割合が低いという特徴がある。

掲 示 板 コ ー ナ ー

企 画 室 か ら

1 学生証の再発行

前学期の定期試験が7月21日（火）から始まります。受験上の注意として、学生証のない学生は受験できないこともありますので受験に際しては忘れないようにしてください。紛失等により再発行を申請する場合は学生センター証明書関係窓口に申し出て下さい。

2 履修登録の確認

前学期の履修登録確認を5月7日（木）から実施しましたが未確認の学生が多くみうけられました。履修登録の確認は受講者名簿や成績報告書の基礎となる重要な手続きです。確認をおこたったために単位を取得できないという大変困った事態に陥ったり、不利になったりする場合が発生しますので必ず確認して下さい。

3 成績通知書の交付

前学期に履修した授業科目の成績通知書を1年次は9月24日（月）から教養教育係で交付します。2年次以上の学生は所属学部で交付しますので、掲示に注意して下さい。

4 予備届選考結果の発表

6月に実施しました予備届の選考結果は9月21日（月）に発表します。後学期開始までに選考結果を確認して下さい。受講可能者名簿に掲載された学生で、第一回目の授業に欠席した場合は受講の意志がないものとみなされますので注意して下さい。また、受講を取止める場合は、授業担当教官にその旨必ず連絡して下さい。

教 養 教 育 N O W

教養教育に関するアンケート結果

平成9年度後期に開講された教養科目の授業及び履修方法について、学生がどの程度満足しているかを調査したものが、『教養教育に関する調査報告書』にまとめられています。主な集計結果をみると、「クラス分けの満足度」では、自然の分野と総合科目では、前期同様、後期においてもそれぞれ20%、24%の学生が希望通りのクラスに入れない状態でした。「授業内容の理解度」をみると、英語では、約半数の学生が「理解できた」と回答しているが、「やや簡単」と「非常に難解」と回答した学生がそれぞれ21%、14%あり、学生間に理解度の偏りがあるようです。また、未修外国語では、「非常に難解」とする割合が本年は35%という高い値を示していました。

また、今回の調査では授業内容に対する満足度を知る目的から、新たに二つの質問項目が設けられています。「授業に興味をもてたか」の質問項目では、「持てた」もしくは「大いに持てた」と回答した割合が80%を超えた科目は、健康・スポーツ(89%)、情報(85%)、総合科目(81%)でした。一方、未修外国語、自然の分野および社会の分野では61~66%の学生が授業に興味を持てたとしています。社会の分野と自然の分野において $\frac{1}{2}$ 以上の学生が「持てなかった」と回答しており、今後何らかの対策が必要と思われます。「授業の進め方」についてみると、健康・スポーツは9割近くの学生が「普通」もしくはそれ以上に評価しているようです。また、人文の分野、社会の分野、情報関連、総合科目は評価パターンが類似しています。一方、英語、未修外国語、主題別ゼミナールは、「普通」とする割合が50%を下回り、「非常に悪い」もしくは「悪い」とする回答と「まあ良い」もしくは「非常に良い」とする回答の割合がほぼ同率でした。これらの3科目は、受講学生間の能力や感じ方にばらつきがあるようです。

今後、カリキュラムの内容を検討する上で、これらの学生の意識を参考にしたいものです。

同様に、この報告書には、本学の専任教員の教養教育についてのアンケート結果がまとめられています。質問項目は二つに分類されます。すなわち、クラスサイズ、設備および学生の受講態度など教養教育の実施に関する内容と、4年一貫教育体制や大学教育開発センターのあり方など教養教育に関する一般的な質問の2種類です。主な集計結果を示すと以下の通りでした。

1. 講義のクラスサイズとしては30~60人が適当と答えている教官が最も多く38%でした。
2. 教室の設備等で不足しているという回答が51%で、半数の教官が設備等の充足を希望しているようです。
3. 学生の予習および復習に対し、「不十分」もしくは「わからない」を併せると61%になり、学生の勉強不足を懸念している教官が多いことが推察できます。
4. 学生が授業内容をどの程度理解しているかという問いについては、「よく理解している」もしくは「普通」の回答を併せると86%になり、教官側ではポジティブに受け止めているようです。
5. 4年一貫教育体制の中で教養教育は期待どおりに進んでいるかという問いには、「進んでいない」もしくは「どちらともいえない」を併せると85%にもなり、教官の多くは疑問を持っていることが推察されます。
6. 教養科目の総単位数に対しては、現状でよいという回答が60%になっていました。
7. 教官一人あたりの教養科目の担当本数は現状でよいが55%でしたが、一方、多すぎるが32%もあり、今後の検討課題のようです。
8. 大学教育研究開発センターの運営状況に対しては、「まあまあ」であるが40%でしたが、「機能していない」及び「わからない」を併せると51%にもなり、半数の教官が運営状況に対して問題点を持っているようです。

今回の教官に対する基本調査は、初めての試みでした。特に4年一貫教育の実施や大学教育研究開発センターのあり方に関しての結果は点検すべき課題として取り上げる必要があるように思います。

(巽)

教養教育こぼれ話

保健管理センターから

保健管理センターといえば健康診断を受けるところ、といった認識の学生が大部分だと思います。もちろん健康診断は保健管理センターの最大・最重要な業務です。スタッフの払う労力も、また学生の払う犠牲(?)もとても大きいものです。茨城大学に保健管理センターが設置されてから25年経ちますが、センタースタッフは健康診断を保健管理センターの原点と位置づけ、病気の早期発見と治療、各個人への具体的な健康教育、自己管理のためのデータの提供、健康診断書の発行等を、試行錯誤を繰り返しながらも徐々に改善して現在にいたりました(学生にはまだまだ不満も多いでしょうが、スタッフは今では自己満足に浸りたい心境でもあるのです)。……

ところで、学生のみなさんは保健管理センターを利用していますか?センターでは健康診断以外に、風邪やけがに対する応急処置、種々の健康相談・精神衛生

相談、栄養士による栄養指導、看護婦による保健相談なども行っているのです。ご存知でしたか?

また今年度は、センターにも遅れ馳せながら情報化の大波が押し寄せ、健康診断のデータなどがコンピュータ入力されて学生に提供されることとなりました。

(現在は入力作業の最中で夏休み前ごろから利用可能となります)。学生は保健管理センターのロビーに設置されたコンピュータを操作することで、健康診断の結果や、過去にさかのぼっての自己の健康情報を容易に得ることが出来るようになります。

また、保健管理センターでもホームページを開設いたしました。

URLは<http://www.health.ibaraki.ac.jp/>です。

まだまだ未完成な部分が多々ありますが、センター利用案内や健康診断のお知らせ、教官の勤務予定などが提供されています。徐々に充実させていきますのでご期待ください。(保健管理センター看護婦)

つ ぶ や き

新入生のみなさん、大学生活にはもう慣れましたか?みなさんが入学してもはや3ヶ月、友達をたくさんつくり、充実したキャンパスライフを送っていることでしょう。もう少しで、待ちに待った初めての夏休みです。しかし、その前に初めての試験があることをお忘れなく!大学の試験は高校と違って出題範囲が広く、戸惑う学生も少なくありません。しっかり勉強して乗り切ってください。

大学教育研究開発センターの設立とともにローザブルムラが誕生し、はや2年が過ぎました。次号で10号となります。毎回、皆様の期待に応えるべく楽しく面白い企画を考えているのですが、最近はマンネリ化している!?こんな企画が面白いという意見があれば、遠慮なく共通教育棟一階廊下の「教養教育Q&A」ボックスへお寄せ下さい。

(S. N)

発行日 平成10年7月
発行 者 茨城大学
大学教育研究開発センター
水戸市文京2-1-1
029(228)8416 [企画室教養教育係]

Rosa Plunula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター No. 10

目次

巻頭言	1
教養教育ってなんだろう?	1
キャンパス情報	2
茨苑祭へ行こう	4
聞いてほしい私の意見	5
Voice	5
教養教育古今東西	7
掲示板コーナー	8

(平成10年10月発行)

教育とは教師の教育活動だと思ふのは皮相的である。教師のそれと学生の学習活動とが調和して両者の間に「いい関係」が成立したとき、そこに「いい教育」が展開することになるのである。だから、「いい教育」が行われるためには「いい教師」と「いい学生」とがまず存在しなければならないし、双方が「いい関係」を目指して努力しなければならない。

とすれば、毎日の授業において面白くないからといって居眠りをしたり私語をしたりするということは、「いい教育」のための責任を教師だけに求めるということであり、「いい教育」のための学生の側の努力を放棄するということの意味してしまう。あるいは、面白くもない授業に出席して、教師を責めながらひたすら終了のベルを待つというのは全くもって時間の浪費だ。

面白くもない授業を教師と学生との間の「いい関係」へと作り替えていくための、学生の側の最も簡単な秘訣を教えてあげよう(私の経験を踏まえて)。それは授業中に教師に対して質問をすることである。授業を中断させるような質問のしかたが結構効果的である。

その時「前に説明したろう」とか「こんな簡単なことが」といって怒り出す教師は多くの場合、「いい関係」を作り出す責任や努力を放棄しているのだから、その授業を捨ててしまおうか、あるいはAをねらわずに単位が取れる程度に付き合っていくしかない。それとも、「いい学生」になるための別の努力を捜すか。

(江幡)

教養教育ってなんだろう?

2カ月におよぶ大学の夏休み後は皆不思議と大学生らしくなる。今年の4月に入学した者が。さて半年間の大学生活を経て大学での目標は定まっただろうか。教養科目を半年間履修し、その学修意義・目的は分かっただろうか。教養科目の履修基準が細かに定められており、必要な単位をそろえなければならない。個々の科目名は高等学校とさほど変わらず、特別の意義は見いだされないものなのだろうか。しかし、大学での授業は既に経験されたように、選択できる幅が大きい。自らが勉学に対する課題意識をもたずに臨めば得られる成果も乏しくなる。この辺で、半年の経験をふまえて、教養科目を履修する意義・目標を再度考えてみませんか。

現在日本の経済は不況で、4年次の先輩は苦しい就職活動を強いられましたし、更に今も強いられています。小子化が進行する中で、これからの年金制度を担

う皆さんが将来に不安を抱くこともあるでしょう。明治維新以来築き上げてきた日本の近代化が一定の到達点に達し、現在新たな展開を求められています。この他にも一人の力では解決できない多くの問題があることを御存知でしょう。これらの問題を理解し、一步前進するためには、社会科学、経済学、政治学等の知識を必要とします。これから、社会の各分野で専門的職業に就かれる皆さんが、これらの問題についての基本的知識と理解力をもつことが、社会的前進をもたらし、その知的レベルが社会のレベルを決めることは明白です。何度でも云うようですが、大学の4年間は時間的にも年齢的にもこれらの知的素養を獲得する上でまたとない貴重な時期です。社会科学に限らず、人文・自然科学等を含めて、各自の課題意識を鋭敏にし、知的専門家としての素養を高めて頂きたいものです。

(横沢)

キャンパス情報

人文学部から

長い夏休みが終わって「学問の秋」が来ました。休みでなまった心と体を鍛えて下さい。

社会科学科では、後学期に1年次向けの「主題別ゼミナール」が開講されます。まだどのゼミナールを受講するか決まっていない人は、第1回目のゼミナールに出席して、担当教官から受講許可を受けて下さい。

人文学科では11月に、2年次以降の専攻コース所属

決定に向けた説明会を予定しています。そののち、実際に所属決定の作業に入っていきます。自分はどの分野に関心があるか、適性からいってどうか、よく考えておいて下さい。

人文学部では3学科とも若干名の転学部・転学科を認めます。希望する人は人文学部学務係に問い合わせして下さい。

(渡邊)

教育学部から — 新しい教員免許法に基づいたカリキュラムへ —

教育職員養成審議会の答申を受けて、教育職員免許法の一部を改正する法律等が今年の6月に公布されました。その結果、いわゆる教員免許を得ようとする人を対象とするカリキュラムを、遅くとも平成12年4月1日から、早ければ平成11年4月1日から、実施しなければならなくなりました。

茨城大学教育学部は、来年度に学部改組を予定し、現在概算要求を出していることもあり、積極的に来年度から新しいカリキュラムで教育を行うことに決定しました。そのために、5月からカリキュラムガイドライン検討委員会を設け、2ヶ月かけてガイドラインを決め、その後は新カリキュラム作成委員会において夏

休み返上の体制で、来年度の新入生に適用される新しいカリキュラムを作っている最中です。その中には、以下のような教育職員養成審議会の提言を具体化する授業科目が含まれる予定です。

- (1) 使命感、得意分野、個性を持ち、現場の課題に適切に対応できる、力量ある教員の養成をねらいとする。
- (2) 大学が、教員養成に対する社会的要請を踏まえ、主体的にカリキュラム編成を工夫できるよう、教員養成カリキュラムを大幅に弾力化する。
- (3) 教職に関する科目を格段に充実させる。

(竝木)

理学部から — これから成績評価は厳しくなるかも —

理学部では7月と8月に入学試験がありました。一つは3年生への編入学試験で、主に高等専門学校からの編入学者を対象に行いました。定員10名のところへ75名の受験希望者があり、48名が合格しました。この方達は来年4月から3年生として入学してきます。仲よく勉強してください。8月には理工学研究科前期課程(修士)の推薦入試がありました。これには各3専

攻10名の定員のところ合わせて80名の受験者がおり、73名が合格しました。推薦入試では学部時代の成績によって推薦の基準を考える傾向が強く、特にDや欠試が多いと推薦の障害になることが予想されます。大学院で奨学金を申請する際も同様です。新聞紙上でも見ているでしょうが、大学審議会というところで成績を厳しく付けるよう求めており、今後は極端に甘い成績

を付ける先生は減少するものと思います。カリキュラムの履修計画も必要にして十分なものを選び、余裕を

もった計画を建てることを勧めます。

(田切)

工 学 部 か ら

みなさんは茨城大学に夜間コースがあることを知っていますか？工学部システム工学科には夜間に授業を行うBコースがあります。Bコースは主として勤労学生および社会人を対象として設けられたものです。授業時間は、午後5時35分から午後8時40分までですが、実験授業の場合には9時を越えることもあるようです。日立キャンパスではBコースの授業時間に合わせて事務部はもちろん生協および図書館も夜遅くまで業務を行っています。もっとも工学部では深夜まで実験を行うことは日常茶飯事ですのでBコース以外の学生にとっても好都合です。

Bコースは社会人でも効率的な学習ができるようにカリキュラムが組んであり、基本的に昼間のコースと

同様の知識を身につけることができます。しかしながら、夜間に授業を行うため授業本数が少ないという問題があります。このため、Bコース学生は単位を落とさないように努力しています。

また、先に述べたようにBコースには社会人から勤労学生に至るまで様々な学生が集まっています。それぞれの立場が異なる学生全員に知的な満足感を与えるということは教官にとって非常にやりがいがあることですが、一方では非常に困難な作業でもあります。

Bコースに関する質問や意見があれば工学部教官にいつでも声をかけてください。

(西野)

農 学 部 か ら

前期の試験も終わり、ホッと一息入れている諸君も多いのではないのでしょうか。農学部では、7月27日(月)に試験が終わり、恒例になっている生協学生会主催のビアガーデンが夕方6時から行われました。午前中には一時強いにわか雨もあり、美しい前庭での開催も心配されましたが、午後からは幸い雨も降らず、暑さも加わって絶好の夕べとなりました。研究室ごとに先生も加わってグループをつくり、あるいは友達同士で集まって談笑し盛会でした。折しも8月1・2日に行われる「まい・あみ・まつり」の花火大会の試射も隣接する農学部の農場で行われ、ビアガーデンの盛り上がり花を添えました。

阿見町の大きなイベントの一つである「まい・あみ・まつり」は農学部の甲・乙地区を区切って走る通称「茨大通り」を中心に、多彩な催しが計画されていますが、学生用の駐車場には仮設の舞台も設営されます。農学部からも何人かの学生・教職員が実行委員と

して参画し、頑張っています。

前号でお知らせしましたグラウンドは、今年度中は使用せず芝生の養生を行うそうです。従って来年度から使用するという事ですので、1年生の諸君も新しい新緑のグラウンドを使用できます。来年を楽しみにして下さい。

(月橋)



茨 苑 祭 へ 行 こ う !

第 49 回

茨 苑 祭

” 秋 “到来、お祭りの季節です。今年の茨苑祭は、11月21日(土)～22日(日)の2日間で開催します。本部企画としては、参加団体、お客さんが一体となり楽しんでもらえるよう、盛り沢山の企画を実行委員一同、日々検討をしています。

茨大なりの「お祭り」(茨苑祭)の楽しさを十分味わってもらうためにも、皆さん(学生、教職員あるいはそのご家族等)多くのご来場をお待ちします。

第48回(平成9年度)



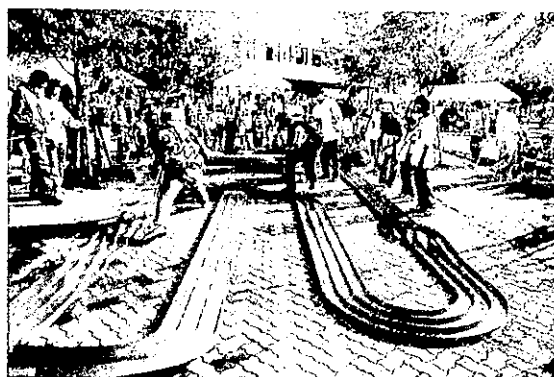
茨苑祭スナップ

[茨苑祭実行委員会]

また、農学部(阿見キャンパス)でも、恒例の“鋤耕祭”が10月23日(金)～25日(日)の3日間の予定で開催されますので、お時間のある方(無い方も)是非参加してみてください。



鋤 耕 祭
スナップ



聞 い て ほ し い 私 の 意 見

斉須真紀子 (人文学部1年)

私がこの大学に入学して一番おもしろかった授業は、増田教授の心理学です。なぜなら、私は以前から心理学に興味を持っていたが、高校では学ぶことのできない分野だったからだ。また、心理学という枠を越えて、増田教授ご自身の恋愛体験談などは、大変興味深く、このような、バラエティーに富んだ内容の講義が受け

られるのも、大学の一つの魅力であると思います。

講義の中でも一番おもしろかったのは、「心理ゲーム」です。ゲーム感覚でできる実践的な授業は、お昼ごはんを食べた後の眠い時間帯であってもやる気がおきました。この授業の題目は、「他人を知る、自分を知る」というものだったのですが、文字通り、自分の内にひそむ心理に気付いた18才の夏。

佐藤 映美 (理学部2年)

私は演劇研究会に所属しています。今は8月公演に向けて毎日練習をしています。夏休みに入ったため、朝から晩までやっています。練習は、基礎練習として柔軟、筋トレ、発声などをしたあと、会話の練習や、感情解放といったような演技に必要な練習をいろいろやります。こういった基礎さえできていれば、ある程度いい役者といえます。私はというと、上手いものもあれば、下手なものもあり、完璧にできるわけではありません。演劇において、完璧というものはないので、常に上を目指して頑張ります。どんなにいい演技が出来てもそこで満足せず、もっといい演技をするにはどうしたらいいかと考えるのです。

演劇は、日常生活をそのまま舞台にあげて人に見せるものです。だから、舞台上で起こっていることを直接観客に伝えることになります。確かに初めから台本があって、台本通りに話は進みますが、実際舞台上に

いる役者の気持ちは、今日の前で起こっている本当のものです。観客も役者に感情移入して一緒に笑ったり泣いたりします。役者として、自分とは違う人物になることができ、観客の反応がそのまま返ってくるのは最高の気分です。そして、最後に拍手をもらう時は本当に幸せなのです。

この拍手をもらうために、2・3ヶ月前から練習をします。それは、決して楽しいだけのものではありません。時には泣いたり怒ったりしながら、皆よりよいものをつくろうと必死に頑張ります。そんな極限状態を一緒にのりこえた仲間は最高の仲間です。私は今、この大学で、普通に過ごしていたら学べないことを学んでいます。この4年間は絶対に忘れられないものになるはず。3、4年生になれば嫌でも勉強重視になってきます。それまであと少し、この幸せな時間をみんなで過ごしたいと思います。もちろんそれまでも勉強はやるし、バイトも一生懸命やるつもりです。

V o i c e

教養？ 専門？ 私はこう考える

岡田 仁美 (教育学部3年)

教養と専門、両者には、長所と短所が存在する。まず、教養であるが、長所は内容が学部・学科の枠

に縛られることなく、幅広いことだ。授業も多種多様に存在するので、自分の興味あるものを十分に選択で

きる。また、自分が苦手だったり、学んだことのないような分野の授業でも気軽に挑戦することができる。それから全学部を対象とした授業が多いので、他学部の学生との交流ができることも長所の1つだろう。

しかし、逆に考えてみると短所もでてくる。内容が広いと、時間の都合上、浅くしか入りこめない。特に自然の分野は、主に理科や数学を基礎としているので授業によっては高校の時にある程度まで学んでいないと、ついていけないこともよくある。しかし、だからといって基礎からじっくりと学ぶ時間的余裕もない。それから、授業が全学部に開放されているために、人

気のある授業は定員オーバーになってしまい、自分の希望する授業がとれないこともよくある。

次に専門であるが、これは内容がかなり狭くなるが自分のやりたいことを徹底的に追究することができる。私の所属する理科コースを例にすると、理科コースは1、2年で物化生地の基礎的なことを、じっくり学んでから、3年生で、物化生地そして理科教育の5分野の研究室に分かれる。研究室に分かれる前に2年間も理科の勉強ができるので、自分の本当にやりたいことを時間をかけて、見つけることができた。

教養科目はいらない？

須藤 克之（工学部2年）

この原稿が人目に触れる頃には前期試験、夏季休暇も終わり、いよいよ後期が始まろうとしている頃だと思っています。1年生の方々はもうそろそろ大学生活に慣れて来たのではないのでしょうか？

さて、1年生の頃、「何故私は文系なのに数学をやらなければいけないのか？」とか「理系だから文系の科目は必要ない」などと思ったことは、もしくは今思っていますか？（いや、思っていないというその君、少し真面目すぎるぞ）確かに自分と関係ない分野は必要ないかもしれません。しかし、2年、3年とな

って専門科目ばかりやる様になると、他の分野（特に文系の人にとっての理系の分野、理系の人にとっての文系の分野）には目がいけない様になります。そうなってくると物事を自分の専門分野からしか見れなくなってしまいます。そんな時、専門外の知識、考え方が少しでもあれば、又違った角度からの見方が出来るのではないのでしょうか？教養科目というのはその微かな知識、考え方を学べる唯一の機会だと思います。又、それをきっかけに、幅広い見方、考え方を身につけることも大切な事です。

教養教育とは？

天野 克紀（農学部3年）

教養教育とは専門教育を受けるうえで基本となるものであると私は考える。中には教養教育は必要ない、専門教育だけ受けていればよいのだと考える人もいる。かく言い私も水戸で教養教育を受けていたころは同じ意見であった。入学当初はなぜ大学教育には教養教育というものがあるのだろうかとか否定的な考え方をしていた。しかし、阿見に来て専門教育（農学）を受けるようになり専門教育にとって教養教育がいかに重要なものなのか私は気付くようになった。農学とは自然科学であり人間科学でもあるトータルな学問であるといわれる。農学は人文科学や社会科学、自然科学といった教養教育があって初めて完成するということになる。

言いかえれば、教養教育とはあらゆる専門教育を受

けることになってもその分野で活躍できるトータルな視点をもった人間を育成するところにその意義があるように思われる。特に、いわゆる理科系の人間は自分の専門分野に固執してトータルな視点に欠けると批判されることもあって、改めて教養教育の重要性を認識する必要があると思われる。



教 養 教 育 古 今 東 西

豊かな人間性を形成していくことは大学教育の大きな目的の一つだろう。そのためには知的な面のみではなく、道徳的にも芸術的にも、あらゆる面の調和のとれた発展が求められる。だが、具体的には教養を身につけるとはどのようなことなのだろうか。私の知っているある学生は、哲学や社会学・心理学など多様な分野に精通している。それどころか量子力学から映画やアニメのことまで、彼に聞いてわからないことはないほどである。彼はいわゆる「教養」豊かな人物である。だが、彼と話していても、どうも私は彼を教養のある人物とは思えないのである。いったいなぜであろうか。

それは彼にとって知識はいつも自分を守る砦にすぎないからである。知識(情報)は、ときに、他者と出会う際のクッション、他者と直接触れあうことを避ける道具となりうるのである。彼の場合も、知識を媒介することで始めて、他者とコミュニケーションをとることが可能となる。そして生身の自分をその場にさらけ出さなですむのである。クマが冬眠に備えて餌を詰め込むかのように、彼は、これでもかこれでもかと知識を着込んでいく。

だが本来教養が目指していることは、まったく反対のことではないだろうか。その意味で「教養を身につける」という言い方は誤解を生みやすいように思う。教養はプロセスなのであり、結果が大事なのではない。教養とはこれまで人間が創出してきたものと出会うことにより、それまでの狭い自己を壊し、新しい自己を

形成するという主体の再形成の過程なのである。

したがって教養形成のためには自己を解体することが求められる。身についた教養は結果にすぎない。教養を身につけるということは知識を着込むことではなく、知識が自分のなかに侵入し、自己を犯し解体することを勇気をもって許すことである。裸の自己をさらすことであり、むしろ安定した自己という地盤を揺るがすことを楽しむことである。さあ、どうにでもしてくれと、自己を開いてみせることである。この意味で先の学生は教養を身につけることを避けるために知識を獲得しているにすぎない。

教養を身につけることは自己と出会うことである。守られていない自己と向き合うことを求められるからである。ときにはあまりに薄っぺらな自分に打ちのめされることにもなるのである。だが一方では、自己と出会うことは新しい自分へと変わっていく喜びも与えてくれるはずである。

こう考えると、大学という空間は教養を身につけるにはふさわしい空間であるように思われてくる。ときには落ち込み停滞したり、さらにはわかっていると思っていたことが何が何だかわからなくなるといった逆戻りを味わったりすることが許される空間だからである。停滞や退行は自己形成にとって必要である。是非、勇気をもって教養形成に挑戦して欲しい。

生越 達(教育学部)

教養の意義とその獲得目標

教養というものを雑多な学識として捉えている方々がいるようだが、私は、「雑多な学識」そのものではなくてむしろ「広範な学識を経験することによって培われる高度な精神的装置」が教養ではないかと考えている。言い換えると単なる博識や物知りが教養ではなく、人間の高度な判断能力を構成する主要なものが教養なのではないかと思う。そう考えると教養は人間に

とって一番大切なものであるといえる。教養は何も大学だけで身につけるものではないが、大学はそれぞれの分野の権威が揃っている「最高の学問の場」であるから、やはり大学で行う教養教育は掛け替えのないものであろう。

人間には種々の才能が潜在能力として備えられている。個人の潜在能力を社会の枠組みのなかで才能とし

て開花させるためには、無方向性に発散させるのではなく、ある方向に収束させ、しかも社会と調和のとれた形にすることが望ましい。そのためには、自分と周囲との関係や現在と過去との関係を認識すること、さらに認識の仕方を身につけることが重要となってくる。その際まず、事実とその解釈とを厳密に区別することに注意を払わなければいけない。全ての伝達される事柄が大学での講義を含めて、それを伝える人間の恣意を多かれ少なかれ含んでいるものである。その中から、どこまでが事実でどこからが伝達者の意見であるかを区別しなければならぬ。特に事実は自分の価値観を創造するための出発材料として大切に扱う必要がある。つぎに事実の解釈（意見）の妥当性・適切性

だが、一貫性・整合性の有無を重要な判断基準とすべきである。転々とする意見は、他の事実・解釈との整合性を欠くために転々とせざるを得ないわけであるから、自らその不備を示しているようなものである。最後に、優れた教養人になるためには理系の方は文系の、文系の方は理系の講義を積極的に受け、色々なものの見方・考え方を知り、それらを吟味すべきである。日本の方々を例えばアメリカの方々と比べると、科学的なものの見方、物事の意義付け、論理性、表現力のいずれもまだ改善の余地を残しているように思う。特に将来社会の主軸として活躍する学生諸君、頑張ってください。

金澤 卓弥（農学部）

掲 示 板 コ ー ナ ー

「教養教育シンポジウム」の開催

大学教育研究開発センターでは、今年度も教養教育シンポジウムを開催します。

今年は、分野別科目（人文・社会・自然）について、授業内容や教育方法に関するシンポジウムを企画しております。

教職員や学生の皆さんの積極的な参加をお願いいたします。プログラム等詳細は、後日掲示によりお知らせいたします。

開催日 平成10年12月2日(木)

時 間 13時～17時20分

場 所 茨苑会館2F（第7・8・9集会室）

なお、終了後、懇談会を開催する予定です。

「教養教育点検・評価」の実施

従来、大学教育研究開発センターでは、授業等についてのアンケートを実施していますが、今年度は、平成8年度改革の検証を目的とする点検・評価を実施します。

このローザ・プルムラ第10号が発行される頃には、既にアンケート等の実施が行われているかとは思いますが、教職員、学生の皆様方にはご協力方よろしくお願いいたします。

「ローザ・プルムラ」への投稿

大学教育研究開発センター発行のニュース・レター「ローザ・プルムラ」も、このたび第10号を数えました。

自由投稿を歓迎しますので、教職員・学生の皆さんの投稿をお待ちしております。

投稿先

庶務部企画室教養教育係

つ ぶ や き

みなさん、楽しかった夏休みはあっという間に過ぎてしまいました。いよいよ後学期開始です！ローザ・プルムラ第10号です！ご賞味下さい……。今号では、学問の秋を迎えるみなさんに「教養教育とは何か？」という難しいテーマに取り組んでいただきました。学生の立場からの貴重な意見を聞くことができ、教官にとっても大変参考となるでしょう。「私はこう考える」というみなさん、自由投稿を大歓迎します。その他にも、特別企画の「茨苑祭へいこう」をはじめとして、学生の声をこのローザ・プルムラにどんどん反映させようと考えています。「みんなのローザ・プルムラ」となるように、学生ならびに教職員の皆様の投稿を心からお待ちしております。

(S. N)

発行日 平成10年10月

発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
水戸市文京2-1-1
029(228)8416〔企画室教養教育係〕

Rosa Pluma

ローザ・ブルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター No.11

目次

巻頭言	1
しし座流星雨への願いごと	1
キャンパス情報	2
学園際特集	
—学園祭の今、これから—	4
聞いてほしい私の意見	
—一年を振り返って—	5
Voice	
—読んだ、思ったローザ・ブルムラ—	7
教養教育古今東西	8
掲示板コーナー	10

(平成11年1月発行)

自分の大学時代を自分の将来のために活用しよう。過去から自分を解放し、現在を認識して将来を考えよう。世界のボーダレス化が進んでいるので、地球規模の視点で考えることが必要だ。

多様化する将来の社会の中で、自分はどのようなポジションを占めたいのだろうか。自分の好きなことや得意なことは何か、それらと将来の社会との接点は何か。その結論を出すために幅広い学習が役立つだろう。

ターゲットが決まったら、そこに到達するためにすべきことの順序を考えよう。将来の自分のために、今やっておかなければならないことは何か。地球規模の将来の社会は流動的であるから、時代の変化に対して柔軟に対応できるよう、可能な限り基礎的な知識や総合的な判断力を培っておくのが良い。もちろん、ターゲットへの着実な歩みとなる専門力の醸成は不可欠だ。

非情に聞こえるかも知れないが、事に臨んで最後に頼りになるのは自分である。大学時代を活用して、頼れる自分を創っておきたい。

(宮田)

しし座流星雨への願いごと

しし座流星雨が近づいた昨年の11月中旬頃、学生から質問された。「先生は、ノストラダムスの大予言を信じますか?」「1999年に大きな隕石が地球に落ちてくると云われますが、本当ですか?」先の問には数百年も前にたてられた予言など信じられないと即答できるが、後の問と結び付かれると答えに窮することになる。20世紀の最後の年への感慨は、社会、宗教、人々によってかなり異なったものがあるようである。云々ゆる世紀末に近づいた昨今、日本でもノストラダムスに関連した出版物も多くなり、'96、'97年には各13冊、'98年には20冊との情報がある。なぜにこの予言に関心が高まるのだろうか。ミカエル・ノストラダムスの四行詩で該当する箇所には、次のように書かれているのみである。「1999年の7の月 驚くべき偉大な王がやってくるだろう アンゴルモアの偉大な王がや

ってくる前に その前後、火星は幸福の名において支配するだろう」確かに謎めいた言葉が入っているので予言には適した文章なのかもしれない。しかし、どうしてこの四行詩が先の学生の後の問に結びつけられて語られることになるのだろうか。巨大隕石の地球への衝突による恐竜絶滅説が認識されるようになったのは、1980年代からである。ノストラダムスの予言が日本で最初に話題になったのは、オイル・ショックのときのこと。昨今も長引く不況で就職もままならない状況がある。落ち込む気分も分からないわけではないが、このようなときであるからこそ真実を見極める洞察力を磨き、状況を打開する力を養って頂きたい。次のしし座流星雨の大出現は33年後に期待される。このときに、たくさんの楽しい願いごとができるように今を頑張りたいものである。

(横沢)

キャンパス情報

人文学部から

あけましておめでとうございます。後学期も残り少なくなり、まもなく後学期試験が始まります。前学期試験の時よりははるかに多くの科目の試験・レポートがあることでしょうか、計画的に勉強し、1年間の総決算として、是非がんばってください。これから3月までは卒業予定者や教官にとっては1番忙しい時期で、卒業や入学、大学院の修了や入学にかかわった仕事でスケジュールが埋まっています。それはそれとし

て、1年生諸君にとっては試験後は長い春休みですから、ふだんできない様々な活動に励んでください。

人文学科の1年生でまだ専攻所属が決定していない人にとっては、落ち着かない時期でしょうが、もう少しお待ちください。

この1年間は案外早く過ぎたのではないかと思います。われわれからみて、学生諸君が1年生から2年生、さらに3年生になるにつれて成長する姿が楽しみです。よく学びよく遊んで下さい。

(渡邊)

教育学部から — 教育実習で学ぶこと —

教員免許を取得するためには、あるいは教育学部の学校教育教員養成課程を卒業するためには、教育実習の単位を取らなければなりません。普通の大学授業とは違って教育実習には、当然ながら実習校の児童生徒と先生方という相手があります。これらの人とよい関係が結べないと教育実習はうまく行きません。これらの人は、学校という組織の中で行動しています。ですから、実習生の個人的な考えや価値観は種々あるでしょうが、まず学校と言う組織の中で先生方や児童生徒の考えや行動を理解し、教育技術も含めて教師としての考えや行動を積極的に学んでほしいと思います。

教育は熱意や善意が大事という精神論だけでも、教

え方の技術・法則があり、その教育技術を身につけるのが大事という技術論だけでも、うまくいきません。両方が大事であり、しかもどちらも相手があることを忘れてはいけないと思います。一方的に熱意や善意を発揮されては迷惑そのものでしょうし、児童生徒の反応に無頓着に教育技術を発揮したら逆効果になってしまいます。しかしそれだからといって、教師が消極的になったら児童生徒も暗くなって元気が出ません。

教育実習では、まず自分と立場、年齢等が違う児童生徒や先生方を理解し、どのように行動すればよい関係や教育機能の発揮になるのかを学んで下さい。

(金子)

理学部から — 理学部での転学部・転学科希望者へ —

理学部では、学科構成が複雑で、一つの分野が2学科以上にわたっていることもあり、入学後に自分の勉強したいことと所属する学科の内容が違っていると感じる学生が少なからず発生します。このような学生に対しては、1月に3年生への転学科試験を実施しています。真剣に、転学科して勉強したいと考えている学生は、理学部学務係で募集要項を請求してください。また、茨城大学に入学したけれどやっぱり理学部で勉強した

いと思っている学生に対しては、同時に転学部試験を実施しています。

どちらの場合も、次の年度の4月から3年生として受入れることになります。勉強の意欲が強固で、やりたいことがはっきりしていることが必要です。今いる学科で単位が取れそうもないから転学科してみようなどという人には勧めません。たぶん、試験にも合格しないでしょう。当然のことですが、教養科目を必要十

分な位履修していないと、せっかく3年生になっても

専門の勉強ができないことになります。

— 地球生命環境科学科の学生へ —

この学科では、3年生に進級するときに所属講座を決定します。2年生の1月末までには講座希望調査が行われ、所属講座が決定されます。3年進級後は、各講座のゼミなどに参加することができます。転学部転

学科の学生については、試験時に希望の講座を調査します。試験時に希望の講座が決まっていないうですと、よい印象を与えないかも知れません。

(田切)

工 学 部 か ら

「先生こんなのやって何になるの?」とはよくある質問のひとつです。ちなみに前の「の」は学問の意です念のため。この間にいきなり「黙れたわけ者」となることはまずありえないことで、それぞれに誠意ある答が返ってくることでしょう。私だったら、それを尋ねる前に学問そのもののおもしろさを発見する努力をせよと言いたいところですが、目的意識をもって勉強することもまた大事なことであると思います。

何の役に立つかわかりながら勉強したい学生にはうってつけの授業科目が今度工学部にできました。企業などの研究所や工場で一定期間実習を行うと単位がもらえるというものです。実習というかわりに就業

体験などともいい、あたかも社会にでてそこで働いているかのような感覚または錯覚のなかで学習できるというのがひとつの目玉でしょうか。ほかの科目に対する学習意欲にも良い影響が期待されるところです。

このように、学生に就業体験をともなった学習の機会を与える制度をインターンシップ制度といいます。本学工学部では平成10年度からこの制度を導入しました。全国の国立大学にさがけてとまではいえませんが、早いほうではないかと思います。この制度による授業科目を開講する学科は、来年度は本年度と同じ電気電子工学科とメディア通信工学科の2学科ですが、その後はさらに増えて行く予定です。新しい刺激を求めて挑戦してみたいはいかがですか? (山中)

農 学 部 か ら

新年明けましておめでとうございます。1年生の皆さんは、受験から解放され、今までよりかなり自由度の大きい大学生活を始めてからもうすぐ1年になりますが、高校までとは違ったものが何かつかめたでしょうか。昨年の10月22日～25日の4日間、阿見キャンパスでは鍬耕祭が開催されました。最終日を除き、天気には恵まれませんでした。2年生を中心に3、4年生や大学院生も参加し、盛況のうちに終了しました。1年生も鍬耕祭の時の研究室訪問やコンパなどを通じて、農学部が少し身近なものになったのではないのでしょうか。11月11日には、農学部の各大講座の教務委員が水戸に出向いて、1年生の皆さんに対して、2年生から所属するカリキュラムの説明と予備的な希望調査

を行いました。例年のことですが、各カリキュラムへの所属希望人数がばらつきました。入学時にはっきりと方向性を決めていた人もいれば、調査の時まだ決めかねている人もいたようです。4月になれば、皆さんは水戸から阿見のキャンパスに移り、各カリキュラムに属して、いよいよ本格的な専門の勉強を始めることになります。カリキュラム配属の最終決定は4月でまだ先ですが、この1年間の体験なども参考にして自分のやりたいことをもう一度じっくりと考えてみるには今が一番いい時だと思います。1年生の皆さんが全員、生き生きとした顔で水戸から阿見キャンパスに移動してくることを楽しみにしています。

(白岩)

学園祭特集 — 学園祭の今、これから —

未来への提言、そして理想像

第49回茨苑祭も無事終わり、ほっとしている人も多いでしょう。今回の茨苑祭は寒さに見舞われながらも大勢の学生、一般客が見物に訪れておりそのひとりに感想を尋ねたところ「活気があって良いね」と言っており、参加している一学生として嬉しく思いました。しかし、その活気を利益中心の模擬店だけに費やして良いのでしょうか。もちろん、音楽・文科系サークルの活動は非利益なのに大変な活気がありました。しかし、なにか足りないものが有るのではないのでしょうか。

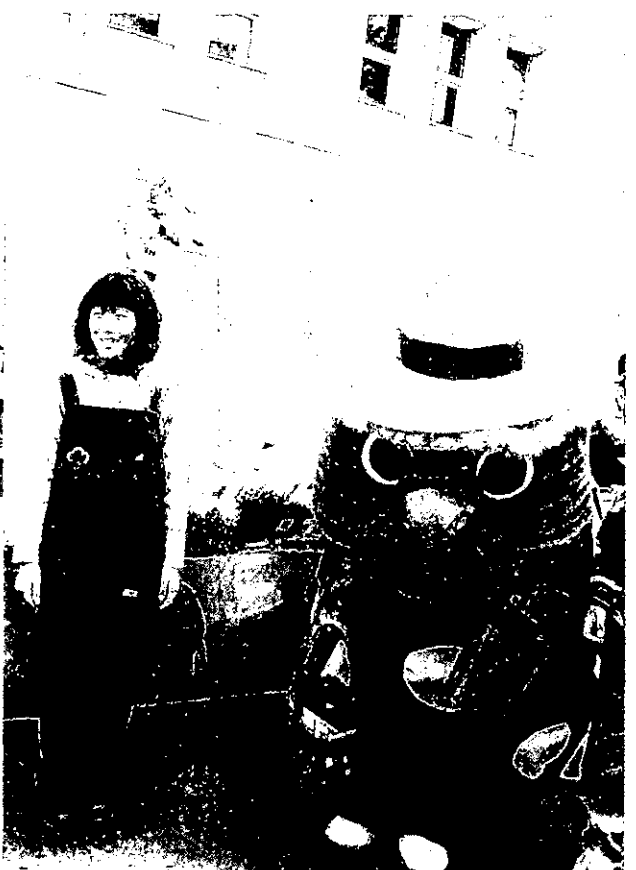
学園祭は学生の日頃の学問や研究、課外活動を学外の方に見てもらうのにも絶好の場所であると思います。また、生産性を伴うものでないといけないとも思います。残念ながら二つとも利益中心の活動におおされてしまい、それが見られません。本学のみでなく、これからの学園祭を考えていくうえで、この二つのことは大きなキーワードになるでしょう。

その二つをリンクして未来への提言を。まず、利益を追求させない為に、サークルの人数ひとりあたりの適当な利益を事前に算出し、過剰な利益は特別な場合をのぞき実行委員会に寄付します。その上で、実行委

員会は利益を学外に還元します。例えば、聾学校に学習用具を送るとか、海外の恵まれない子ども達に寄付するとか。また、茨苑祭で研究発表する団体や学生に援助金を出して、本学の研究活動や奉仕活動に貢献することもできます。

欧米の大学同様、本学も社会に対してその、存在価値をアピールすることが大切です。時代の流れと共に、学園祭もその姿を変えてきました。それが本学にも求められています。もちろん、これまで挙げたことは理想論に過ぎません。しかし、試行錯誤の結果、未来の学園祭の理想像が見えてくることは間違いないでしょう。

(学生新聞部 編集部編集長 田村淳一郎)



鋤耕祭をおえて

鋤耕祭をおえてまず最初に思ったことは、「とりあえず終わらすことができた。」です。4月に前実行委員の先輩から引きつぎ、手探りで準備を始めていきました。私達は鋤耕祭の前に1年生の歓迎コンパを企画し水戸で行いました。それからとても長くつらい、しかし充実した鋤耕祭までの日々がスタートしました。スポンサー集めからステージ企画について考えたり、土浦駅から学校までの仮装パレードを提案したり、1つのことを考えてそれを行い、無事に終了させる。そのむずかしさをこの鋤耕祭実行委員の仕事をとおして実感させられました。実行委員の中で話しあって決まったことを掲示板などで学生に伝えようとしても、なかなか伝わらず代表者会議のときに集まっていない人たちもいました。私達の連絡方法に問題があったという

所もあると思いますが、学生のみなさんの参加意識も少し低迷してきているのかもしれませんが。これは実行委員の私達にとっては悲しいことですが、一生懸命参加している学生達がいる限り文化祭はなくさない方がいいと思います。その文化祭を成功させるために頑張っている実行委員もいるのですから。

(鋤耕祭実行委員長 原田 隆志)

聞いてほしい私の意見 - 1年を振り返って -

浦上 育子 (人文学部2年)

今日もまた電車に揺られ、ある時は本を広げ、音楽に耳を傾け、またある時には心地よい眠りに誘われながら、私は片道2時間の道のりを通い来る。

忙しい生活を送ろうと思えば忙しく、自由気ままにと望めば自由に、のんびりと過ごしたいならのんびりと過ごせる大学での生活は、自分のペースを見つけたなら、理不尽に崩されることがない素晴らしいものだが、同時に自分自身の責任で管理していかなければならないものでもある。昨年は勝手が分からずに周囲を気にして、あっという間に終わってしまったが、要領が分かってきたからなのだろう、つい怠けがちになる自分を叱咤しつつの毎日だ。

対人関係で苦勞したくないという思いを胸に抱えたまま始まった大学生活だが、人間関係から逃れようと思えば容易く逃れられるのが逆に寂しく、やたら必死になって学友との親交を深めていた昨年。自分で自分の意図を見失い、精神的に疲れて沈みがちになること

もしばしばだった。マイペースが一番と悟り、気楽にのんびり行こうと決めた今年は、本格的に専門科目を履修し授業自体の大変さは増したが、精神的に大きなゆとりを持って生活できたと思う。

精神的な安定をもたらしてくれる愛すべき友人達に恵まれ、私の大学での生活は益々充実している。彼らと語らいながら日が暮れ、また空が白むのを眺め、猛暑に汗でシャツが背に張りつくのを感じ、極寒の中手先がかじかむのを必死で暖める。そんな平和な日常が少しでも長く続いて欲しいと願うのは、いつか終わりが来ることを知っているからなのかもしれない。しかし、だからこそ大切にしたいと思うのかもしれない。最近私はよくそんなことを考えては物思いにふけっているのである。

加野 幸恵（工学部2年）

先生から、この原稿を書くようにと言われ、1年間を振り返ってみた。そこではじめて、1年の目標を何も決めていなかったことに気がついた。

そういえば、1998年は今まで以上に友達と遊びまくっていた気がする。けれども、はたからは怠惰な生活をおくっていたように見えるかもしれないが、私自身は、心に余裕を持って生活することが出来た、いい年だったと思う。

ところで、大学時代には、ある程度自由な時間をまとめて多く持てる。だから、人生の中でも、新しいことに、特にチャレンジしやすい時代だとおもう。1年の時は、大学のシステムに慣れるのに精一杯であった。

理崎 一成（工学部Bコース2年）

大学生活も2年目をむかえて、様々な面で余裕ができました。Bコースであるので、高校生の時とは違った時間に慣れなければなりません。私は、昼にアルバイトをして夜に授業を受けています。1年生の時はどうしても朝起きるのが遅くなったり、授業中眠かったりしましたが、今年はそのようなこともなくなってきました。一人で生活することもだいたい慣れて、勉強する時間と遊ぶ時間の作り方もだんだんできるようになりました。特に勉強する時間を作るのには苦労しました。1年生の時には、すこしぐらい夜遅くなってもやっていけると思いましたが、昼にアルバイトをすることを毎日続けるときつくなります。そのようなことを考えて、自分の生活リズムができたのも最近のことです。生活の面ではこのような所が印象に残っています。

授業については、次のようなことが言えます。まず一つとして、電子と機械の2つのコースのどちらかを選択する形があることです。1年生の時には、数学や物理学などの科目を与えられたとおりに受けていればよかったのですが、今年からは違いました。自分のやりたいコースを選択して、科目を選択しなければなりません。Bコースなので、選択できる科目は限られています。選択するとすれば、与えられた、2科目から

それ以前までは日々の生活に精一杯で、自分から何かに取り組むということにあまり熱心でなかった。しかし1998年は、気持ちに余裕が出来たため、積極的に自分から行動を起こしていこうと言う気持ちになることができた。また事実そうしていた。

まだまだやりたいこともあるし、これからもっといろいろなことにチャレンジしていくつもりであるが、1998年は、そう思うことができた、という意味でとても有意義な年であった。行動を起こすための導入の年であった。

1998年は、1年の目標がなく、目標を達成することも、もちろんできなかったけれども、今後の私を決めるためのとても重要な年であった。

一つを選択するようなものです。しかし、どちらを選択するかはあまり悩みませんでした。大学入学前に、このような制度でやっていることは知っていたので、どちらを選択するかは最初から決めていました。実際に選択したのは電子のコースです。これから、どのような授業があり、どのようなことをするのかは当然よくはわかりません。周りの人の話を聞けば、機械のコースのほうがいいという人もいます。しかし、大事なのは、自分が何をやりたいかということだと思っています。このコースを選んだから、このような仕事につかなければならないというわけではないので、これから授業を受けながら、将来、つまり卒業してからやりたいことを決めたいと思っています。

今年一年を振り返ると、自分の将来について考えることができた一年であったと思います。



Voice - 読んだ、思ったローザ・ブルムラ -

大津 正一 (教育学部3年)

ローザ・ブルムラが存在していたことは1年の時から知っていました。でも、2年になると共通教育棟にはあまりいかないのでお目にかかること少なく、ちょっと忘れられた存在になってしまいました。しかし、あらためて読んでみると、結構いいことが書いてあるではないですか。先号(10号)を読んでみて共感した記事が2つありました。

1つは教育学部の江幡先生が書かれた記事です。この記事は私も同感で教育というものは教師と学生による相互教育活動であると思います。相互の協力なくては教育は成り立ちません。しかし、学生の自発的な学習がなくても困ります。そういった意味で、大学は「学校」とは違います。学校というところは勉強するところ。 (漢字から「つとめることを強いる」と解釈できます) 一方、大学は強いられて勉強するところではなく、自ら学を問う、つまり学問を行なうところ。それゆえ、学生の積極的な努力なくては大学の意味がありません。

もう1つは、生越先生の記事です。大学教育の目的

の1つは豊かな人間性の形成です。

人間性を形成していくところとして大学は適しています。場としての「大学」には2つあります。それは学問の場と出会いの場です。学問の場の意味では前の通りです。出会いの場としての大学には教官との出会い、他の学生との出会いがあります。教官と出会うことで高度な知識を得ることができ、また礼儀も知ることができます。学生との出会いでは他学部との交流や意見の交換などでこれまでの自己よりも広がった新しい自己へと出会うことができます。これは単に知識の蓄積だけでは経験できません。他人とのコミュニケーションによって経験できます。そう考えれば、教養科目の履修は講義を聴くためだけのものではなく、人との交流の機会を得ることも目的の1つになりえます。

以上のことから、教養を身につけることは大切であり、大学というものの存在がいかに大きいかわかります。そんなことをこのローザ・ブルムラを通して考えさせられました。皆さん方は大学というものをどう考えているでしょうか。

皆藤 由美 (理学部2年)

私は今回、この原稿を書くことになってはじめて、「ローザ・ブルムラ」を読む機会を得ました。それまでは、あまり気にとめていなかったもので、手にとって読んでみようと思ったことはありませんでした。

しかし、今回初めて読んでみて、ローザ・ブルムラには意外にも読んでみておもしろい話やためになる話がいくつか載っていました。どんなものでも読んでみないと、おもしろいかどうかなんて分からないものだと思います。

ローザ・ブルムラは主に、教官や学校関連のページと、学生のページの2つに分かれています。教官や学校関連のページには、各教官の考え方や日立・阿見キャンパスの状況が載っていて、大学に対する視野が広がりました。

さらに学生のページには、大げさかもしれませんが、

私にとって教訓になるような話が載っていました。その話を読んで、今までの自分の大学生生活に対する意識が、「あそび」から「何事もチャレンジ」へと変わりました。そして、過ぎ去った過去は戻らないのだと改めて考えたとき、もう二度と取り戻すことのできない「今」という時間をもっと大切に過ごそうと思いました。

今回、ローザ・ブルムラを読んで、多くの人の考え方などを知ることができ、私の視野はいろいろな方向に広がった気がします。だから、ローザ・ブルムラをまだ一度も読んだことのないたくさんの方に読んでもらいたいと思います。

廊下に置いてあるという程度しか知らなかったローザ・ブルムラは、今回の原稿を書き上げた私にとって、多くの人の声を聞くことができ、自分の視野を広げ、新たな自分を発見するきっかけを与えてくれる身近な存在になりました。

教 養 教 育 古 今 東 西

教養とは、中途半端な専門より役に立つ場合がある。必要なときに役立てられるように身に付いている広い知識が教養といえるのではないかと私は考える。それらは、自分で経験によって学ぶより、専門に学んだ先生から教養科目として教育される方が遥かに効率よく知識を吸収でき、多くを学ぶことができる。そして教養を身につけていれば、物事を広い視野から見ることができ、先を見る判断を誤ることも少なくなるであろう。

これから世の中がどういう方向に進んでいくか、また、どういう方向に進めなければならないかは、大学教育を受けた程度の人間なら、誰でも関心を持ち、正しい方向へリードして行けるのが望ましい。日本はバブル期に、判断を誤り、土地や株の値上がりが続くものと思い、無駄な方面に投資を続けた者が多かった。バブルの崩壊とともに、事業に失敗し、借金の返済ができなくなってしまった例がある。こうした失敗は真に教養のある人間は避けられたと言えないだろうか。

専門の研究に行き詰まったとき、一時、専門以外の勉強をしてみると、本来の研究が飛躍的に進んだという話を聞いたことがある。それは、専門以外の知識が直接役立つこともあるが、その知識を得る課程で何か

ヒントが得られたということもあると思う。物理の研究をしている者に一時、生物の研究をさせたところ、本来の物理の研究を進めることができたという。日本人の米国皮膚科学研究所所長の講演会での話である。脳は全体を使わねばならない。一カ所だけを使っているのは、働きが鈍るというのである。この研究所では老化の研究もしているという。体の使わない部分は退化する。脳も若いときから全体を使い続けなければいけないということであった。

大学生は専門の勉強をするが、その専門は高校生の時に選んだものである。その選択が必ずしも、自分に向いているとは限らない。自分の本当の適性を知るにも、知った後の進路変更にも、また単なる生き甲斐や楽しみのためにも教養教育が役立つことがある。世の中が複雑になれば、尚一層教養となる学際的な学問が必要である。景気が低迷している現在、大学で専門性ばかりに力を入れてもその専門を生かせる職業に就くのは難しい。柔軟性ある幅広い人物になるため、大学での教養教育は大切と考える。そして、広い教養の上に、特に他より秀でた専門性を身につけた人間になるのが望ましいと思う。

江口 美佳（物質工学科）

モントリオールでの一夏

モントリオールに着いてすぐ、そのヨーロッパ風の街並みにすっかり魅了されてしまった。日本に帰る頃には、「もう帰っちゃうの？もっとここにいたい」と思うほどこの街が気に入っていた。モントリオールは、「人種のモザイク」と言われるほど様々な国の人が集まっている街だ。人々は、常に「他者」と接して暮しているためか、お互いに協調して生活していく術を十分に心得ている様に思えた。異文化に対する豊かな理解力を持ち、優れた国際感覚を身につけた真の国際人が住む街、それがモントリオールだ。

モントリオールは「バイリンガルの街」である。ケベック州では人々は皆英語とフランス語を話すという



Rosa Plunula

ローザ・プルムラ

●茨城大学・大学教育研究開発センター



ニュースレター No.12

目次

巻頭言	1
ようこそ！ 「大学教育研究開発センター」です	1
私たちががんばっています —専門部会便り—	2
キャンパス情報	4
新入生のみなさんへ一言 —私からのアドバイス—	6
Voice —私のイチオシ授業—	7
教養教育古今東西	9
教養教育NOW	10
新入生の授業を担当して	12

(平成11年4月発行)

本学は今年、創立50周年を迎え、21世紀に向けて魅力ある大学として成長していくことが、いっそう期待されている。

昨秋に実施された教養教育の現状把握のための学生アンケート調査をみると、とくに自由記述欄には、授業の内容、教育の方法、教官の授業態度に対する率直な意見が多数寄せられており、考えさせられるものがある。

どれだけ興味のある講義を提供されるかが、学生諸君にとっては、充実した大学かどうかの基準となることは、十分理解できる。しかし大学を支えるのは、半分は学生諸君自身である。

何のために、何を学びにきているのか、いま一度考えてほしい。そのためには自分とこれまでの過去との関係、家族、小・中・高校、先生、地域社会、国家等との関係をあらためて思い返してほしい。他者と自分との関係を知ることがすべての出発点である。大学とは「自分とは何か」を考える場である。そして自分の本心を再確認し、罪をたたいてほしい。

大学は諸君と教官との共同体である。

(金原)

ようこそ！「大学教育研究開発センター」です

新入生のみなさん入学おめでとう。

茨城大学は人文、教育、理、工、農の5学部から成る総合大学です。これらの学部には500名を超える専門家、研究者がおり、文学、芸術から精密工学にいたるまで実に多くの分野で優れた研究がなされています。これらの多様なスタッフが参加し授業を行うのが教養科目の教育です。大学教育研究開発センターはこれらの授業が学生のみなさんに受け入れられ大いに勉学に励んでいただけるよう計画、実施すると共に教養教育をはじめとする大学教育の研究開発を行っています。

“蝶はもぐらではない。でも、そのことを残念がる蝶はいないだろう。”

このことばは、ユーモアがあり人に暖かなまなざしを絶やすことのなかったアルバート・アインシュタインが人生について語った一節です。大学は学問への出会いの場であると共に人への出会いの場でもあります。また、夏休み、春休みをはじめおそらく人生のなかで自由な時間が最も多くとれる時期でもあります。多くの経験と学問への取り組みにより、これから君たちが生きていく価値観を確固たるものにしていただきたいと希望します。このセンターのある共通教育棟は、多くの教官、学生に出会える場でもあります。一言声を掛けて、君たちの大学4年間に有意義で実りのあるものになるよう心がけて下さい。

(横沢)

私たちががんばっています — 専門部会便り —

外国語科目専門部会

大学教育研究開発センターには、既に新入生諸君の手元にある「教養科目履修案内」にあるように、教養科目を構成している7つの科目に対応させてそれぞれ専門部会がありますが、外国語科目専門部会はその内の一つです。この部会は、名前が示しているように外国語科目についての仕事をするとところですが、もう少し具体的に云いますと、毎年の仕事として、この科目の履修希望者のクラス分けをしたり、外国語科目の時間割を作ったり、担当の先生を決めたり、非常勤講師の手配をしたり、シラバスを編集したりしています。部会のメンバーは、部会長と各学部から1名の教官の総勢6名で、部会長はこの科目の責任部局である文学部のコミュニケーション学科の教官になります。今年度は、先に挙げたルーティンワークに加えて、外国語科目の抜本的改革のための検討がこの部会の大きな仕事となります。(鈴木)

健康・スポーツ科目専門部会

2年間かけて取り組んできた健康・スポーツ科目の教科書が、この3月にやっとのことで出版できた。タイトルは「健康スポーツの科学」(健康スポーツ教育研究会編、大修館書店、B5版、定価(2300円)である。「健康・スポーツ」ではなく、「健康スポーツ」とひとつのタームでいいきたのには理由がある。それは、人間のライフ(いのち・生活・人生)をより豊かにするための総合的な概念として、また、「保健・健康科学」と「体育・スポーツ科学」という、従来ともすると分離しがちであった学問領域を、「人間の運動」(human movement)という共通項を設けることによって融合させ、それを、「健康」「運動」「スポーツ」といった3つの軸を中心に多次元的にとらえたいと考えたからである。

健康・スポーツ科目は、茨城大学教育学部の保健体

育、スポーツコース、健康コースのすべての教官が一致団結して担当している。その教官たちが、総力を結集して、学生に分かりやすく、また、生涯にわたって役に立つ内容を厳選し、事典的にこの教科書をつくった。教科書の作成は今回で2回目である。実技の内容と、その基礎理論である教科書が「健康スポーツ」の名のもとに有機的に結びつくよう、今後の授業をより充実したものにする必要がある。(日下)

情報関連科目専門部会

— コンピュータと仲良く付き合おう —

新入生の皆さん、入学おめでとう。本学では平成8年から、情報関連科目が教養科目の中の必修となりました。1年次または2年次で、必ずコンピュータの授業を修得する必要があります。単位を取得するだけでなく、積極的にコンピュータと付き合ってください。

今日ではコンピュータを使わないと、全く仕事が出来ない時代になりました。コンピュータは計算する道具としてよりも、文房具や通信手段として重要性が増しています。これからの社会生活では、コンピュータが使えないと知識人としては認知されません。幸い本学では、4月から情報処理センターが総合情報処理センターに格上げになり、処理能力やパソコン台数が倍増され、水戸地区には新しい建屋も建ちます。皆さんが自由に使える時間も飛躍的に増えるでしょう。

最初のうちは、コンピュータに慣れることが苦手な方も多いと思います。でも十分に使えるようになると楽しい世界が待っています。インターネットを通じて、他の大学の友人とメールを交換したり、いろいろなホームページを訪問したり、お絵描きソフトで年賀状やコンバの案内を作ったり。これには授業を機会に勉強し、コンピュータと親しく付き合う必要があります。授業の合間などにコンピュータルームで自習することを強くお勧めします。若い君たちは、すぐに私たちを追い抜くでしょう。でも、ルールだけは守ってください。コンピュータシステムを変えようとしたり、よそのコ

予備知識はもっていたが、実際に生活してみて初めて、「バイリンガル」とはどういうものを体験的に理解することができた。パンフレットやレストランのメニューはすべてフランス語と英語で書いてある。道で見かける看板はたいていフランス語、お店のレジ係の人は私がフランス語を話せないにも関わらず、平気で「Bonjour!」なんて話かけてくるのだ(もっとも、私も帰る頃には「Merci」くらいは言えるようになってはいたが)。また、私は複数のカナダ人と友達になることができたが、彼等の友人のバースデーパーティーに招かれたとき、彼等の会話が英語からフランス語へ、またフランス語から英語へと自在に変化するのを目の当たりにして、「これがバイリンガルなんだ!」と感激したことを覚えている。



McGill大学では、週5日、ネイティブの先生の授業を受けた。教室内では「英語で話す」が原則で、日本語での会話は禁じられていた。そして、「とにかく自

分の意見を英語で表現してみる、誰かが発言しているときはしっかり聞いて理解してあげる」という暗黙のルールができあがっていた。まず始めにRとLの発音を習った。先生と同じ口の形をつくって発音してみるのだが、これが意外に難しい。文法中心の日本の英語の授業がうらめしく思ったものだ。でも講座が終わる頃には、なんとかRとLの違いを区別できるようになっていた。授業は、発音の基礎の練習の他にも、ロールプレイやディスカッション、プレゼンテーションなど会話重視の授業であった。また、授業はクラスの中だけにとどまらず、美術館見学やハイキングなどの課外活動もあった。先生はとても活動的な女性で、生活に関する情報をたくさん与えてくれた。たまにランチを一緒に食べることもあった。私達と彼女は互いにファーストネームで呼び合った。彼女は私達の良き先生であり、かつ親しい友であった。

McGill大学での授業を通して、「自分の意見を英語で伝える」ことの重要性を改めて考えた。道具としての英語を身につけるためには、まず相手が納得するような英語を話せなければいけない。しかし、私は実践が足りないせいか、どうしてもうまく自分を表現することのできないもどかしさを感じた。今回「McGill大学夏季英語集中講座」に参加し、使える英語の重要性を改めて認識し、かつ異文化の中で生活することの楽しさを体験した。この貴重な経験をこれからの学習の糧にしていきたいと思う。

山崎 綾乃(人文学部2年)

掲 示 板 コ ー ナ ー

放送大学茨城学習センターだより

大学の皆さん、茨城大学のキャンパス内に放送大学の茨城学習センターが設置されているのをご存じでしょうか? 講堂の近く、地域総合研究所の隣にあるのが学習センターです。

放送大学は社会人の生涯学習の場としてつくられたものですが、18才以上ならば誰でも入学できます。在

学生は、主として大学卒業の資格を目指す方や、何らかの資格取得のため必要な科目を修得することを目的とする方、資格とは関係なく、じっくりと系統的に勉強したいと思って、放送大学に入学される方などです。

近く茨城大学と放送大学の間で単位互換協定が締結される予定になっています。これが成立した場合、勿

論ある制約のもとに茨城大学の在学生在が放送大学の単位を取得すると、それが大学の卒業単位になる道が開かれることになるでしょう。そうすると、たとえば、工学部や農学部に在籍している学生が、放送大学の教養科目が修得する上で大変便利になると思います。また、現在放送大学では、300科目以上の授業科目が開講されていますので、大学で開講していない科目で学生が興味を持っている授業も多いかと思います。

放送大学に入学しますと、教材が送られてきます。これとテレビやラジオを併用して、学習することにな

ります。学期中頃に通信指導（レポート提出）があって、学期末に単位認定試験が行われ、これにパスするとその科目の単位が与えられるようなシステムになっています。興味をお持ちの方は、センターの事務室までおいでください。センターの見学も歓迎です。

以上、放送大学のPRを若干させて頂きましたが、当センターはこの地域の生涯教育の拠点の一つとして、今後とも努力を積み重ねていきますので、引き続き大学のご援助とご理解をお願いする次第です。

（栗村芳實）

FD（ファカルティ・ディベロップメント）研修会の開催について

新しい教養教育理念のもとに、平成8年度より開始された4年一貫教育体系を追求するカリキュラムの実績を点検・評価し、教養教育の抱える問題点について検討するとともに、学生の多様化に伴い教育内容・方法等の研究・開発を行うFD（ファカルティ・ディベロップメント）活動への認識が高まりつつあることか

ら、FDの概念と実際について講演会を開催し、今後の教養教育カリキュラムの改善に向けて研修会を下記のとおり開催いたします。

1. 開催日 平成11年3月8日(月)～9日(火)
2. 場 所 国民宿舎【水郷】（土浦市大岩田255）

企画室から

1. 教養科目後学期定期試験について

教養科目の後学期定期試験が2月4日(木)～10日(水)に実施されます。定期試験の時間割は試験日の1週間前に掲示されますので、各自確認の上、受験上の心得に則り学生証を持参し、受験してください。

なお、学生証紛失等により再発行を希望する場合は、学生センター証明書関係窓口（学務企画）に申し出てください。

2. 後学期成績通知書の交付について

後学期に履修した教養科目の成績通知書は、4月初旬各自の所属学部において、交付されますので、所属学部の掲示板に注意しておいてください。

3. 講義棟における盗難について

最近講義棟等における盗難事件が多発しています。講義室及び更衣室等には荷物等を放置しないよう各自注意してください。

つぶやき

みなさん！あけましておめでとうございます！！

お正月は楽しく過ごせましたか。今年度もみなさんにとって良い年となるように願っています。ところで、みなさんにとって去年は充実した年であったでしょうか。自問してみてください。いつの間にか時間が過ぎていたという人が多いのではないのでしょうか。勉強でも課外活動でも何でもいいんです。「私は〇〇〇に全力投球した」といえるように、有意義な学生生活を送ってください。あつという間の4年間ですから…。

さて、今号も盛りだくさんの内容となっています。特集記事の「学園祭の今、そして未来への提言」では、実行する側と参加する側の本音が聞けます。「ローザ・ブルムラを読んで」には、われわれ編集委員も勇気づけられました。そのほかにも、「一年を振り返って」や「教養教育古今東西」など、どの記事も興味深い内容ですので是非目をとおしてみてください。というわけで、今年も「読みやすい、おもしろい、役に立つ」ローザ・ブルムラを目指していきたいと思っています。みなさんのご愛読をお願いいたします。

（S.N）

発行日 平成11年1月

発行者 茨城大学 大学教育研究開発センター
水戸市文京2-1-1

029(228)8416〔企画室教養教育係〕

ンピュータに不法に侵入することは、絶対にしないで下さい。ルールを守り、楽しくコンピュータと付き合しましょう。(岡田)

人文学部専門部会

「教養教育なんて、なにか役にたつのかな……。専門教育なら将来の仕事にいかせるのわかるけど……」なんて、考える人もいるかもしれません。でも教養教育があるからこそ大学です。すぐに役立たないかもしれないけれども、今までとは異なる考え方に触れ、ものを考える視野を拓けてゆくのが教養教育です。特に、人文科目の多くは、速効性のある薬のように効くものではありません。ずっと「服用」していると、じわじわ効いてきて、ある時、効いてきたかなと思わせるような、そんな学問です。人文科目のなかには、高校まででなじみのある歴史や文学、また、どのように研究しているのかと期待をいだかせる心理学やコミュニケーション論などがあります。でもなじみのあるものもないものも、覚えることに意味があったこれまでの学び方とは違って、これからは、なぜそうなるのか、どのように考えて行くべきかということに、時間をかけて大いに悩んで下さい。

また、教養教育は1年次で終わるものではありません。専門以外のことにも目を向ける姿勢をずっともって、チャレンジしてみてください。工学部・農学部の学生も、2年次以降もそれぞれのキャンパスで人文科目が履修できるようになりました。人文科目を学ぶことを通じて、今まで教えられてきた「常識」を疑い、新たな視点を見いだしてくれたらと願っています。

(植野)

社会科学部専門部会

— 専門用語は正確に —

社会科学の用語に限ったことではない。すべての学問上の用語は、その内容を正しく理解し、正しく書かなければならない。どのような学問領域であれ、その内容を説明する専門用語を用いている。広辞苑によれば、用語とは、「使用する言語・語句。特定の部門や

人に特に使われることば」とある。筆者などは、最近のワープロの流行で、正しい用語を忘れがちである。老人力も身につくつあるからなおさら大変だ。文章を書くときは、頭のなかの記憶装置は弱っても、ワープロの記憶装置が覚えていてくれるから、変換さえ間違わなければ、正しい用語の使いかたができることになる。

学生諸君の試験の答えは、まだまだ手書き。頭のなかの記憶装置にしっかりと覚えさせて、ペンをとらなければならぬ。筆者は、「法学」の授業を担当しているが、試験の採点時の楽しみの一つは、新しい「用語」を創造してくれる答案を読むことである。「法学」答案上で一番多い新用語の創造は、「当時者」である。裁判や事件に関係する人が「当事者」であるから、事件「当時」の関係者と言って見逃すわけにはゆかない。「紛争解決」も多い。争いを粉々にしてはまとまるものもまとまらない。「紛争解決」が正しい。「損害賠償」は、常に2倍の損害を「賠償」するわけではない。法律用語ではないが、問いに答えて、「検当する」というのもよく見かける。これは、「検討する」というべきであるから「見当」違いというものである。

最後に、クイズ。正しくは、「 」と書くべきところを「裁判所」というのも用語の創造として多い。数年前の人気コミックで『家裁の人』というのがあったためだけではないでしょう(鶴太郎主演でテレビドラマにもなりました)。さて、この「 」のなかに入る正しい言葉はなんでしょう。

「法学」(前期開講)の授業でお会いしましょう。

(飯塚)

自然科学部専門部会

自然科学には、主として高校で勉強した数学、理科に関連する科目が含まれています。入試制度の改革により、理科1科目の選択でほとんどの大学に入学できることになりました。ただし、現在の科学技術を、理科1科目の知識で理解できるわけではありません。例えば、生物系でも、物理や化学で学習するエネルギーやエントロピーの概念などが必要となります。文系でも、卒業後には数学、統計学などの知識が要求される

かもしれません。基礎的で広範囲にわたる自然科目の学習に取り組んで下さい。

大学で勉強する自然科目の内容は、高校生の時のイメージとかなり異なっています。私自身の経験では、暗記の必要な分野と考えていた化学は、原子レベルから論理的に学べば物理学と違いのない学問であること等が、印象として残っています。場合によっては、転学部、転学科の制度を利用して、専門分野を変更することも可能です。

自然系の科目は、積み重ねの勉強が特に重要となります。後期開講の科目を理解するには、前期開講科目の知識が必要となったり、また教養科目が専門を学ぶための基礎科目の役割を果たす場合などがあります。高校生の時ほど十分な演習時間を設定できないかもしれません。講義時間外で、自ら進んで演習問題にチャレンジして下さい。(佐久間)

総合科目専門部会

さあ新学期になりました。例年のごとく例年の作業が始まったとも思えますが、やはり何か真新しいことが始まるのだと思うべきでしょう。

実は、当たり前のように見える授業の裏には、いろいろな努力があるのです。たくさんの授業の担当者を決め、シラバスをそろえ、印刷物を作り、授業開始となるまでには、多くの人手がかかっています。この作業は毎年同じという訳にはいかず、年ごとに行わなくてはなりません。新学期になって無事授業が始まると何かホッとした気持ちになります。

こういう作業の他に、総合科目では独自の特徴を出す工夫をしています。その一つを紹介します。総合科目の特色は、特定分野に限定されず広く話題を取り上げるところにあります。その具体化として、学外講師を輪番的に迎え、何か魅力的なトピックの授業を用意しようとしています。例えば、今年度分であれば、「隣接県域比較史論」、「現代まちづくり群像」、「文化の創造と水戸芸術館」、「社会人入門特別講義」、「研究する喜びⅡ」等です。これらの授業には、学外講師との調整などいろいろと労力がかかっています。内容の企画もなかなかたいへんです。それだけに、その評判が気になり、特別なアンケート調査なども行っています。(概ねいい結果を得ています。)

今年度は、総合科目の様々な情報が引き出せる検索システムの設置を予定しています。(曽我)

キャンパス情報

人文学部から

新入生のみなさん入学おめでとうございます。これからの4年間が充実した日々になるようにがんばってください。

4月9日午前中の入学式に引き続き、9日午後と、次の10日土曜日にかけて各学科別に新入生履修ガイダンスが行われます。このガイダンスでは、教養科目と専門科目の履修方法について詳しい説明があります。大学生は自分で履修する科目を選ばなければなりません。その選び方の基本を教えますので、よく聞いて、分らない点は必ず質問してください。12日月曜日から早速授業です。12日から16日金曜日までの間、共通教育棟第一会議室でお昼休み(12:00~12:40)に履修相談室を開設しますので、不明な点や確認したいこと

があれば、遠慮なく利用してください。

人文学科では6月に募集単位別ガイダンスを行います。2年次からの専攻決定のための情報提供ですので、興味のある分野のものにはできるだけ多く出席してください。

コミュニケーション学科では8月から9月までの6週間、カナダのマギル大学で英語の夏期集中講座を開きます。参加申し込みを4月中に予定していますので、関心のある人は掲示に注意してください。(渡邊)

教育学部から

— 介護等体験について —

平成9年に「小学校及び中学校の教諭の普通免許状授与に係る教育職員免許法の特例等に関する法律」、

いわゆる「介護等体験特例法」が公布された。これにより、「義務教育に従事する教員が個人の尊厳及び社会連帯の理念に関する認識を深めることの重要性にかんがみ、教員としての資質の向上を図り、義務教育の一層の充実を期する観点」から、小中学校の教諭および養護教諭の免許状を取得しようとする者に、「障害者、高齢者等に対する介護、介助、これらの者との交流等の体験」を行うことが義務づけられた。

その体験は原則として社会福祉施設または老人保健施設で5日間、特殊教育諸学校で2日間、合計7日間以上行う必要がある。

茨城大学では、教育学部は2年次に、人文学部、理学部、農学部は3年次に行く。

この体験を通じて、人間の尊さや人権について理解を深めるとともに、諸施設やそこで働いている人々について理解することを目指している。

前学年の12月～1月に「介護等体験オリエンテーション」が実施される予定であるので、各学部の掲示板に注意し、見落としのないようにして下さい。

(加納)

理学部から

－ 離学・好学のすすめ －

理学部へ入学したあなたは、「数学だけが好きだ」、「生物学だけが好きだ」と思っていないですか。しかも、私はかなり数学のセンスがある、生物学のセンスがあると思っています。大学に入学したからには、数学一筋、生物学命などと張りきっていると思います。そして、あなたの回りにはなんとなく理学部へ入学したと言う人も沢山いるでしょう。大学4年間の勉学の後、ではあなた達はどうなっているでしょう。社会へ出て数学や生物学だけをひけらかして活躍できる場所はほとんどありません。大学院へ進学し研究者になったとしても、はたまた中学・高校の教師になったとしても、自分の専門として勉学したことを生かせる部分は少しかありません。社会はあなた達に総合的な知識と豊かな社会性と新しいアイデアのもとに、これからの日本そして世界を拓いて欲しいと願っているのです。

4年間を始めるにあたり、かつて、「ピッカピッカの1年生」と言われた時と同じ初心に戻ることを勧めます。高校までの科目から離れて、「自分の好きなことは何か」、「自分のセンスを磨くためには何をしたらいいか」を真剣に考える時に来たことを自覚して下さい。社会は競争の世界です。挫折もあれば栄進もあります。でもどんな時でも、このことを自覚していれば、道も開けますし、やり直しもOKです。理学部でのこの4年間に、あなた達の身にそのような局面が何度も現れるでしょう。

(田切)

工学部から

－ 幻のエスカレーター －

世間では、大学に合格した若者に「君もやっとエスカレーターに乗ったね」と言って受験勉強の労をねぎらうことがあります。ねぎらってくれた人に悪意はないでしょう。でも、その言葉を真に受けてはいけません。なぜって、大学教育にエスカレーターはないからです。

大学の教育は、旧式のリフトに似ています。現在の大規模スキー場には、風雪を避けるゴンドラからスキーを付けてL型の椅子に座っていると頂上まで運んでくれるリフトまで立派な施設があります。これらは乗客の力に頼らない点でエスカレーターに似ています。一方、小規模スキー場には、滑走式リフト（ロープトウ）があります。

30年くらい前までは、ロープトウが主流でした。初心者はスキーを滑らせる原理を教わったら、つぎにロープトウの乗り方を練習しました。常時動いている鋼索につかまって高みに向かってスキーを滑らせていく作業はかなりの腕力と熟練を必要とするもので、手を放せば後戻りしてしまいます。

必修科目を落として青い顔の学生を見ると、ロープトウから手を放してしまった初心者を連想します。エスカレーターはありません。高校時代の受験勉強は役立ちません。手を抜かず、初年度に大学の勉強法をしっかり身につけて下さい。初めに転ぶと挽回は容易ではありません。

ちなみに、最近5年間の工学部卒業率（卒業人数／（入学者数＋編入者数））は平均91%で推移していま

す。

(野北)

農 学 部 か ら

新入生の皆さん入学おめでとうございます。今まで受験というしばかりの中で、窮屈な思いをしてきた皆さんにとって、かなり自由度の大きい大学生活が始まります。この自由をどのように受け止め、そしてどのように行動するかによって大学にきた価値が大きく違ってくと思います。

長い人生の中で、貴重で短いこの「自由時間」を大いなる好奇心と自主性をもって有意義に使ってください。

さて、農学部がある阿見キャンパスでは、今年度、福利厚生施設（食堂、売店など）が建設されています。講義棟・研究棟など主要な建物が整備されて数年が経

ち、待ちに待った学生・職員みんなの生活を支える重要な施設がようやくできることになりました。今までの施設は、開店時間が短く（売店－9時～3時、食堂－11時半～3時）、食堂のメニュー数も少ないため、昼時間に出遅れると、メニューがなくなっていてやむを得ず大学外に食べに行くこともあります。当然夕食は、自炊か外食ということになります。昼食と夕食が、身近で安く食べられることは大変重要なことです。今度できる施設では、夕食も食べられるような計画を進めていますし、皆さんがくつろぎながら語れるラウンジや様々な目的に使用できる研修室も設置される予定になっています。来春、今の意欲ある新鮮な気持ちを持ち続けて阿見に移動してくるであろう新入生の皆さんをこのような施設が歓迎してくれることでしょう。

(白岩)

新入生のみなさんへ一言 一私からのアドバイスー

大藏 夏志（人文学部2年）

大学に入ったとき、私は3つの目標を立てました。1つは勉強。やはり学生の本分は学ぶことなので、卒業するまでに、いろいろ学習しないとイケないでしょう。ですが、興味や意欲がわからない学習を続けても挫折するだけなので、私は、英語にしました。英語を卒業するまでに話せるようになりたいのです。これから、英語は絶対役立つはずですし、会話の場もずっと増します。しかし、1年間を振り返ってみると、高校の頃と比べて、勉強時間が減ってしまっていました。大学は自由が高校よりもずっと多くあるため、気をぬくとすぐ自分を甘やかしてしまいます。学校にも慣れたことなので今年はちゃんと勉強をしたいと思っています。

もう1つの目標は運動です。そしてあと1つは、友人。何もしないと体はすぐなまってしまい、また、友達のいない学校生活は非常に淋しいものでしょう。この2つの目標を達成するためには、やはりサークルに入るのが1番と考えて、運動部に入部しました。練習はときどききつく感じるときもありますが、体力がつか

いていくのも分かりますし、友達もできました。ただ、帰るのが少し遅くなってしまうことが多く、部活以外のことがあまりできなくなるのが少し残念です。

まだまだいろいろなやってみたいことがあるので、アルバイトや旅行など、今年はいろいろやってみたいと思っています。後悔しない、楽しかったといえるような大学生活を送りたいと思っています。

蜷川 雅晴（理学部 3年）

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。これから皆さんは楽しい大学生活を送ることになるわけですが、さまざまな不安を持っていることでしょう。皆さんの中には地方出身であるため（と言っても水戸も地方なのですが）友達がいない人もいると思います。大学は友達をつくりやすいのか、心配している人もいますが、そのような心配は全くいりません。私は福岡出身で大学に入学したときには、友達は一人もいなかったのですが、そのような地方出身の人はけっこうたくさんいるようです。友達がいない人はたくさんいるのですから、まずはいろんな人に声をかけて

みるといいでしょう。そうすると、きっと声をかけられた人も喜ぶだろうし、すぐに友達になれると思います。また、サークル活動をする、趣味のあう仲間が集まるので、友達も増え、大学生生活も充実することでしょう。

また、勉強のことで不安を感じている人も多いと思いますが、これも全く心配いりません。ただ、授業をサボったり、レポートを提出しなかったら、授業もわからなくなり、成績もわるくなるでしょう。大学の成績は就職や大学院進学のための重要な資料にもなりますので、言わば、あなたの将来を左右するものなのです。大学での勉強があなたの将来を決めることもあるわけですから、勉強はおろそかにしないでいきましょう。

皆さんは全国の大学の中から茨城大学を選んで入学されたわけです。そんな茨城大学ですから、皆さんの期待に充分にこたえてくれることでしょう。茨城大学を十分に満喫してください。

加藤 猛 (農学部 3年)

新入生のみなん、ご入学おめでとうございます。長かった受験がようやく終わり、ほっと一息というところでしょうか。今、みなさんは、これから始まる大学生活に期待や不安で満ちていることでしょう。私も、みなさんと同じ心境であったことを昨日のことのよう鮮明に覚えています。それも早、2年前の話。時の経過をとっても早く感じる今日この頃でございます。

ところで、みなさんはこれからの4年間に何を期待していますか？学問、サークル、友人、遊び、一人暮らし…、とりあえず、大学では今までと違った生活を送ることができることは確かです。充実できるかどうかは、みなさん次第。でも、誰にとってもこれからの4年間は、人生の中でもかなり重要な時間になるはず

です。

さて、新入生へのアドバイスというテーマで原稿を依頼されたわけですが、何をアドバイスしましょう？とにかく、この2年間で振り返っても、私の大学生活はごく平凡なものでしたから。まあ、強いて言えば、この2年間は意識的にいろいろな分野の講義を履修してきたことでしょうか。友人には「オマエ何でそんなに授業とってんの？」と呆れたように言われています。確かに、自分でも履修しすぎたかな、と思うこともありましたが、でも、できるだけ多くの分野を学ぶことを目標にして大学にきたんですよ。一つ一つの分野を完全には消化できないかもしれないけど、少しでも視野を広めておきたいなと思って。

私がとても不安だったことは、大学の講義についていけるかということでした。それは、私が農業高校の出身だったからです。講義内容が高校教養の延長のとき、頭の中は？？？。普通高校出身の友人には、幾度かお世話になっています。得意分野の農学では、逆の立場ですけど、まあ、それぞれに得手、不得手な分野があるので、助け合ってなんとかやっています。テスト前に集まって勉強すると効率が良いのですが、なぜか勉強会が飲み会になっていることもありました。

(強い意志を持ちましょう)

また、大学生のうちにいくつか資格を取得しておこうと思っているのですが、未だに一つしかゲットしていません。トホホ…。今年は、がんばるぞ!!

どうやら、こんな私ではあまり良いお手本にならないようです。でも、これだけは言っておきたい。何か目標となるものを自分の中に作ろう。そして、いろいろなことに挑戦して下さい。私も残る2年間、君たちに負けられないような有意義な大学生活を送ろうと思います。

Voice — 私のイチオシ授業 —

加藤 幹子 (教育学部 4年)

茨大の授業…おもしろい授業があるようでない、だがないようにみえて結構あったりもする。

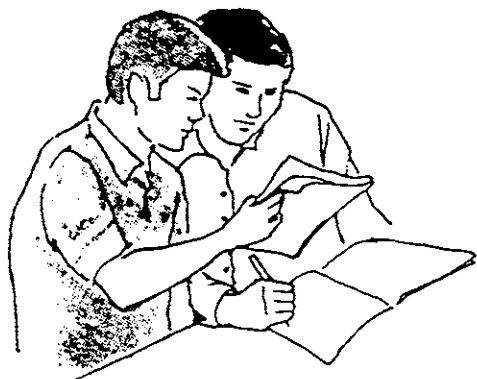
私のオススメの授業は一般教養科目にある「異文化としての日本」という授業だ。これは留学生と日本人学生がグループに分かれてお互いの国の生活や文化について理解・再認識するという趣旨の授業である。立

派なことがシラバスに書かれてはいるが授業を聞いたからといって国際的視野が身につくとか、国際交流の第一歩だとか大げさなことになるとは思わない。要はここで留学生の友達をつくれということだ。皆さんは茨城大学に現在どのくらいの留学生が在籍しているかご存じだろうか？大学院生を含めると200名近くいるという。しかし、自分のまわりに留学生の友人がいるといえる人は案外少ないのではないか。知り合いはいっても友達とよべる関係ではないとか、知り合う機会がないといったところだろう。日本人は親密な関係を避けるようだ、とある留学生が言っていたが、授業を通して留学生の友達がつくれてしまうなんて素敵ではないだろうか。

また、意外なところでは「窯芸」なんていう授業もある。タダで陶芸を体験できるうえに自分の陶器が焼けるなんてお得な授業だ。その他にも雑誌をつくって発行するとか、絵本をつくるというようなおもしろい授業も結構あって、要は探し方しだいなのである。

(しかし、学科指定や人数制限もあるので注意が必要)

大学の授業は、与えられることを期待してはダメだと思う。学生が教官に何も求めない以上、教官からは何も得られないのである。また、講義中心の授業はどうしても受け身の一方通行でしかないの、教官が学生に何も求めないように学生も教官に何も期待しなくなる。もし大学に何かを求めたいと思うなら自分から教官に自分を売り込むなど積極的なアプローチが必要だ。



中山 健一 (工学部 3年)

今日の情報化社会において、特に情報通信機能の分野は急激に進歩し、今では誰もが色々な情報を瞬時にそして簡単に得られるようになりました。最近では、携帯電話やPHSの普及率は高まり、いつでも、そして、何処にいても通信可能という特性のおかげで、私たちの生活形態は、昔と比べると大きく変化しました。現代では、情報通信機能は必要不可欠なものとなっていますが、私の学ぶメディア通信工学科では、その最先端の情報通信技術を幅広く学習しています。

1年次や2年次のうちにはいろいろな分野の基礎を学ぶので、全く関連のないように感じる授業ですが、だんだん学年を重ねるごとにその授業の内容は、1つまた1つと結びついてくるので、新しい発見が次々と生まれ、興味や関心は、今まで以上に深まります。私が興味を持った1つに通信方式という専門科目があります。通信方式と聞いて、まず私が思い浮かぶのは、デジタル通信、アナログ通信、光通信などでした。しかしこの授業にあたって、これらの用語ぐらいしか知らず、具体的なことは、殆ど知らなかったのととても不安でした。ところが、この授業では、他の科目で習ったことがでてきたり、先端の研究機関から来られた教官が、実践的な話をわかりやすくしてくださったので私にとって大変興味深いものとなりました。なかでも、ファックスの原理や雑音の話はとても面白かったです。そしてデジタル通信方式の基礎原理なども実体験などの話を交えた講義は、私には、とても新鮮でした。

日頃身近に使用しているものを、具体的に学ぶ事は大変面白いことです。しかしそれを学ぶためには、基礎となる知識をまず身につけていなければならないと私は考えます。そのためにも、多くの授業を履修した方がいいと思います。最後に、すばらしい教官に恵まれ、そしてすばらしい研究環境で勉学ができる私は幸せだと実感しています。

教 養 教 育 古 今 東 西

所変われば品変わる

私の研究室にケンブリッジ大学の卒業生が在籍している。彼からの聞きとりをもとに、イギリスの一大学であるケンブリッジ大学を例に、外国の大学の教養教育について紹介したい。

ケンブリッジ大学の学部は3年間で終了する（最近、4年コースも設けられたようである）。ここでは自然科学のコースを例にとってみたい。このコースの1年次には10科目(biology of cells, biology of organisms, chemistry, geology, material and mineral sciences, physics, physiology, mathematics, quantitative, biology, elementary, mathematics for biologists) が用意されている。基本的にはこの中から3科目を選択することになる。自然科学の分野で幅広い勉強をするためだという。2年生になると1年生のカリキュラムより細分化された20科目が用意されている。この中から自分の専門分野に関わる3科目を選択するのである。1年次に比べるとより専門性が強まってくる。ここまでの2年間の教育は教科書に書かれている内容が中心である。3年生になると、特定の1科目に絞って教育がなされる。ここでの内容は極めて専門性が強く、その分野の最先端に焦点が絞られている。茨城大学に比べると科目数は極端に少ないが、講義と実習を組み合わせた極めて厳しい指導がなされているようである。少し油断をすれば、簡単に落伍してしまうとのことである。こう見てくるとケンブリッジ大学には、日本の大学で設けられているような教養科目は無いことになる。あえて言うならば、ケンブリッジ大学の自然科学専攻学生に対する「教養教育」とは、自分の専門とする分野と異なった1, 2の分野の内容を、自分の専門分野同様に深く理解させることらしい。

日本の大学の教養教育と比較してみると、その基本的な姿勢は逆の方向を向いている。日本の大学では、自然科学専攻の学生でも自分の専門とは直接関係のない体育・語学・社会科学・人文科学等にわたる科目をばば広くとることが要求されている。イギリスでは、

自然科学専攻の学生に対するこのような分野の教育は、大学入学前に終えており大学教育においては必要のないものと考えているようである。

これからの日本の大学教育は、グローバルスタンダードに基づいて評価されなければならないといった意見がマスコミを中心に始めている。それでは、教養教育についてのグローバルスタンダードとは何であるか？ 教官も学生も真剣に考える必要があろう。教育においても国ごとに伝統があり、一方、スタンダードなるものも社会環境の変化とともに変わらざるを得ないことは確かである。

天野 一男 (地球生命環境科学科)

~~~~~

私が今まで滞在していたシンガポールのことを少し紹介します。シンガポールは、昔イギリスの植民地の歴史から完全に英国の教育制度を取り入れています。また、その制度から大きな恩恵を受けています。

中学校(Secondary School)を卒業すると、O (Ordinary) レベル試験、高校(Junior College)から出ると、A (Advanced) レベル試験があります。試験は、すべてCambridge大学で作った試験問題を使い、成績は、英連邦諸国から認められます。したがって、自分がとった点数によっては、国内に限らず、イギリスやオーストラリアなどの大学も自由に選ぶことができます。また、大学はいつでも見合った成績を持つ学生を受け入れてくれますので、自分の(目標、経済など)状況に応じて、入りたいところへ、入りたい時期に入学することができます。ここしか入れないからと、入学するという日本の現状とはだいぶ違います。

教養は、よく人格や思想を形成、発展の意味合いで用いられています。日本では教養部廃止などの改革が行われているに対して、シンガポールでは、学生のリーダーシップや創造性の養成に力を注いでいます。荒波の世の中に送り出しても自力で生きていけるスキルと精神を植え付ける一方、真剣に“Creativity”を教えることができるかを議論しています。日本の大学で

は、長閑な学園と厳しい世間の環境の落差に気づいている学生がどれほどいて、また卒業までの間に心身の準備ができた学生がどれほどいるのでしょうか。ドリンク剤のコマーシャルに出てくるような世界を相手に戦えるBusinessmanにするには、学生諸君自身のさらなる奮起と高等教育の改革を期待したいと思います。

ところが、面白いことに教育と教養は必ずしも関連しないことです。シンガポールでは、総じて中国系（華人）の学生が一生懸命勉強してよい成績をとっています。また大学への進学率も高いのです。それに対して、マレー系の学生が午後の体育授業中に日陰（シンガポールは実に暑い）で昼寝をしたりします。

また社会に出ても一生懸命に働いて出世するのがたいてい中国系の人です。シンガポールでは、“Kyasu

（負けず嫌い）”という流行語があるほどです。ところが、道を聞くときにもっとも親切に教えてくれるのがマレー系の人です。

家を捨てて東南アジアへ出稼ぎに行った華人の先祖は、一生懸命働く以外に活路はありませんでした。人一倍苦労しましたが、金銭欲、出世欲も人一倍に強く見えるのは、それしか頼れるものがなかったからです。それに対して物産が豊富なマレーシアでは、生きていだけなら全く苦労しません。人はいつも陽気で、包容のある振る舞いをしています。さて、どのような人生を歩み、それが果たして許されるのかをいつも深く考えられるものです。

周 立波（システム工学科）

## 教養教育NOW — 教養教育に関する点検評価 —

教養教育に高い満足度！ これは意外？ or 当然？

— 学生2,396名の回答から —

昨年の11月初旬におこなわれた「教養教育システム及び教養授業についての学生アンケート」結果は、本学の教養教育の現状に対する学生の考えあるいは評価を興味深く示している。以下データを交えながら特徴的と思われる点を掲げてみる。

今回の調査は、平成8年度教養教育改革の検証という主旨で、該改革の直接の受け手となった3年次生までの学生を対象とした。

### 1. 現在の教養教育の仕組みについて

#### ①教養38単位制

教養科目の最低修得単位数38単位（教育学部は別枠）のしほりについて「現状でよい」（69.9%）が、「減らす」（22.5%）を圧倒している。「旧カリキュラムでは24単位だが38単位ぐらいでいいと思う」（95T70）という記述を例として、専門科目の履修中の3年次生も概して現行枠を肯定している。その理由としては後にみる授業満足度の高い水準と無関係ではないであろう。「もっと増やす」（6.1%）との意見も考慮する

と、38単位制は当面変更する必要がないということになる。それより、「単位数の問題ではない」（96L10）という指摘こそが重要なのである。

#### ②教養科目区分及び必修制

共通基礎科目（外国語科目、健康・スポーツ科目、情報関連科目）及び主題別科目（分野別科目、総合科目、主題別ゼミナール）という教養科目区分について「現状のままでよい」とする割合が65.4%に上る。「変更の必要がある」（8.4%）という回答より、科目区分について「わからない」（24.9%）という回答の方が3倍も高いのは、科目区分の意味と必要性をより明確にすることが求められているといえよう。

「変更の必要がある」と答えたものに、具体的な変更記述を求めたところ、多くが「分野別科目と総合科目の内容の区分がはっきりしていない」（98A10）という回答を記している。この回答をみると「変更の必要がある」と答えた者も基本的には、「わからない」とする回答グループと同様に、科目区分の意味や必要性が不明瞭なものと感じているのではなからうか。

他方、全科目必修制については、やはり「現状のままでよい」とする割合が61.4%に上る。

以上から既にわかるように、6割強の学生はおしな

べて現状肯定の回答を寄せている。したがって、敢えていえば、残り4割のものの意見に注意を払って、必要な見直しと改善をおこなえば学生にとって教養教育はより満足のいくものとなる。

全科目必修制について、「変更の必要がある」(18.5%)と回答したものに、具体的な変更内容の記述を求めたところ、必修制をはずせとする単純な意見より、「主題別ゼミナールのみ必修制でのこりは自由に」(96T40)「分野別科目は各分野で何単位ずつでなく、全分野で何単位という形が望ましい」(98L10)などの傾聴すべき提案の方が多く寄せられている。

### ③センターの情報提供

教養授業の履修に必要な情報が大学教育研究開発センターから提供されているかとの質問では、「まだまだ不十分」(46.8%)「まったく不十分」(17.4%)の合計が6割強と手厳しい回答割合になっており、改善の余地が大いにありそうだ。揭示・説明の在り方、情報提供・情報アクセスの方法など技術的改善で相当に克服できるものがある。直ちに対処したいと思う。

## 2. 教養授業の満足度について

### ①教養教育目標との適合性

本学では教養教育の目標として、「幅広く深い教養を身につける」「総合的な判断力の形成」「豊かな人間性の形成」を掲げている。この目標に照らして受講した授業はどうであったか。「満足」(2.5%)「ある程度満足」(57.3%)でやはり評価は6割。しかし、「すこし不満」(28%)「まったく不満」(10.2%)という辛口のはっきりした評価も4割に上り、他の説明でわからないといった保留の高い割合とは明確に異なる回答態度が看取される。不満の理由について記述を求めたところ、怒りとため息とあきらめの入り交じった多種多様な文章が出された。

「科目によって目的がわからないまま半年過ぎてしまい、単位云々になってしまい目標どころではなくなっている。所詮は単位のためになるので、出席(代返、代筆)、テスト(カンペ、過去問)に重きを置いて内容はそっちのけとなる」(96T40)

「教える教官がそのような目標を意識しているようには感じられないから」(98L10)

「幅広いはずなのに、内容が専門すぎて、よくわからない講義が結構あった」(97P10)

かような不満は、個別の授業科目についての質問領域にはいると格段に具体的かつ詳細になるのであるが割愛せざるをえない。

### ②各教養科目授業の満足度

各教養科目の授業に対する満足度の分布一覧を掲げてみよう。

各教養科目の授業満足度一覧 (%)

|         | 外国語  | 健康スポーツ | 情報関連 | 分野別科目 | 総合科目 | 主題別ゼミ |
|---------|------|--------|------|-------|------|-------|
| 十分に満足   | 17.9 | 44.6   | 16.7 | 9.5   | 13.9 | 19.5  |
| ある程度満足  | 49.5 | 38.4   | 34.8 | 54.3  | 51.1 | 35.5  |
| あまり満足せず | 21.0 | 8.4    | 21.5 | 26.0  | 24.3 | 13.3  |
| まったく不満  | 6.0  | 2.4    | 7.3  | 3.7   | 4.2  | 4.8   |
| その他     | 0.04 | 0.2    | 0.04 | 0.04  | 0.2  | 0.2   |
| 無記入     | 5.5  | 0.6    | 19.7 | 6.5   | 6.3  | 26.6  |

\*情報関連科目と主題別ゼミナールは1年次生が未履修で無記入割合が高くなった。

各科目の授業の満足度は、最も高い健康スポーツの83%と最も低い分野別科目の63.8%の間にあり、各々30%程度の不満に照らして、教養授業には総じて肯定的な評価が与えられているといえる。しかし、工農の学生の回答に多数みられる「水戸と不公平だ」「学生の移動コストより教官個人の移動コストの方が安いはずだ」「農学部では2年以上だと教養授業の履修は絶望的」などの記述は、本学の教養教育におお多くの改善改革の課題があることを示唆して余りあるように思われる。(田村武夫)

## 新入生の授業を担当して

ここ数年間1年生の数学を担当しているが、授業法については、相手の反応を見ながら方法を考えなければいけないと今年度は特に強く感じた。授業を始めて2, 3回目に学生に、授業を含めて何でもいいから感想を書いてほしいと頼んだ。聞いた本人としては授業の進み具合について意見を聞きたいと思っていたのであるが、ミニテストと同時に実施したので、大部分は授業の進み方は今のままがよいとか、よく理解できるなどと言った、それまでの2, 3回の授業を容認するような内容が多かった。しかし、中には、教養の授業は概して面白くないとか、もっと詳しく説明してほしいという要望もあった。正直なところを言えば、今年度は、昨年度までとは違って格別丁寧にゆっくり進めていた。丁寧に説明していたことが原因かどうかは不明だが、今年度は私語が少なく比較的快適に授業を進

めることができた。大半の学生は今のままでよいという状態であったので、進度を気にしながらも結局ゆっくり進めることにした。さて中間試験をやってみたところ、なんと、予想していたほどよくできていないという結果になった。これは、学生自身も、中間試験の答案に感想を書いていたが、要するに、手を動かして、演習をやっていないことによるもので、理解したつもりになっていながら、実は問題を解くところまではいっていないと言うことの結果であった。このことを知って先へ進むよりも少しでも理解してもらうことに重点を置き、最後まで通したが、果たしてこれでよかったのかどうか。疑問は残る。次年度は理解力を落とさずに工夫をしたいと思いつつ今年度の授業を終えた。

(奥 達雄)

### つ ぶ や き

教養教育の要となる大学教育研究開発センターがニュースレター「ローザ・ブルムラ」を刊行して3年になろうとしています。今年も初々しい新入生を迎える春がやってきました。新入生のみなさんは初めての大学生活への期待と不安を胸に、この冊子を握りしめていることでしょう。「ローザ・ブルムラ」はラテン語“Rosa Plumura”「薔薇の若芽」を意味しており、そのイメージからニュースレターの紙の色は「もえぎ色」となりました。このニュースレターは、無限の可能性を秘めた若芽（みなさんです！）が茨城大学という土壌で育っていくための支えとなるでしょう。年に4回発行しています（1月、4月、7月、10月）ので是非ご覧になってください。編集に当たっては、「読みやすい」「読んで面白い」そして「役に立つ」をモットーに、「一年次学生と教職員を念頭に置いたセンターからの情報発信チャンネル」を目指しています。ただし一方通行とならないように、みなさんの声をできるだけ多くの人に伝えようと努力しています。学生ならびに教職員のみなさまからの投稿を心からお待ちしております（企画室教養教育係まで）。（S. N）

発行日 平成11年4月

発行者 茨城大学

大学教育研究開発センター

水戸市文京2-1-1

029(228)8416(企画室教養教育係)

## 平成14年度大学教育研究開発センター活動内容

## 平成14年度 大学教育研究開発センター活動内容

## 大学教育研究開発センター活動の経過

| 月 日                      | 事 項                                                                                                                                                                       | 備 考     |
|--------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------|
| 14. 4. 25 (木)            | 大学教育研究開発センター運営委員会拡大委員会 (第1回)<br>・平成14年度非常勤講師 (センター保留分) 時間配分について<br>・大学教育研究開発センター推奨授業について<br>・平成14年度教育改善推進費 (学長裁量経費) 教育基盤設備充実経費について<br>・大クラス教室におけるマーク・カード方式による出席管理について     |         |
| 13. 5. 8 (木)             | 平成13年度前学期大学教育研究開発センター推奨授業表彰式<br>英 語 I (ロバート・ベッツ氏)<br>バドミントン (勝本 真氏)<br>情報処理概論 (速水智子氏)<br>政 治 学 (中田 潤氏)<br>数 学 (岡 裕和氏)<br>日本語文化論 (橋浦洋志氏)<br>平成13年度後学期大学教育研究開発センター推奨授業選定委員会 |         |
| 13. 5. 22 (水)            | 第38回12大学教養教育実施組織代表者会議・事務協議会<br>・教養教育における教育活動の評価について<br>・教養教育実施体制のあり方 について<br>・大学評価・学位授与機構による教養教育評価への対応について                                                                | 主催：静岡大学 |
| 13. 5. 23 (木)<br>～24 (金) | 平成14年度全国国立大学教養教育実施組織代表者会議及び事務協議会<br>・遠隔授業の実施及び活用方法について<br>・外国語教育の目標と内容及びその実施について<br>・体験的課題追求型授業の導入<br>・2006年度からの初年度教育                                                     | 主催：神戸大学 |
| 13. 5. 30 (木)            | 平成13年度後学期大学教育研究開発センター推奨授業選定委員会<br><br>大学教育研究開発センター運営委員会拡大委員会 (第2回)<br>・将来構想委員会教養教育等分科会最終答申について<br>・接続教育の検討について<br>・既修得単位認定 (成績評価) について<br>・平成14年度非常勤講師時間の配分について           |         |
| 13. 6. 20 (水)            | 平成13年度後学期大学教育研究開発センター推奨授業選定委員会                                                                                                                                            |         |

| 月 日            | 事 項                                                                                                                                                                                                                                                             | 備 考 |
|----------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----|
| 14. 6. 27 (木)  | 大学教育研究開発センター運営委員会拡大委員会 (第3回)<br>・習熟度別英語教育の実施について<br>・情報教育(教養教育)の改革について<br>・平成15年度教養教育基本計画(案)について<br>・平成13後学期推奨授業の選定について<br>・平成14年度前学期授業アンケートの実施について<br>・教養科目の公開講座化について<br>・平成14年度大学教育研究開発センター予算(案)について                                                          |     |
| 14. 8. 8 (木)   | 大学教育研究開発センター運営委員会拡大委員会 (第4回)<br>・「茨城大学の教養教育等の実施に関する規則」の一部改正について<br>・習熟度別英語教育の実施について<br>・情報教育(教養教育)の改革について<br>・平成15年度教養教育本計画(案)について<br>・教養科目の公開講座化について<br>・平成14年度前学期授業アンケートの整理方法について<br>・平成14年度FD研究会及び教養教育シンポジウム実施計画について<br>・平成15年度学年暦(案)及び新入生オリエンテーション日程(案)について |     |
| 14. 9. 12 (月)  | 大学教育研究開発センター運営委員会 (第5回)<br>・情報教育(教養教育)の改革について<br>・平成15年度教養教育基本計画(案)について<br>・平成15年度学年暦(案)及び新入生オリエンテーション日程(案)について<br>・推奨授業の公開について                                                                                                                                 |     |
| 14. 10. 17 (木) | 大学教育研究開発センター運営委員会 (第6回)<br>・平成15年度FD等の実施について<br>・大学教育研究開発センターの組織強化について<br>・茨城大学における中期目標(素案1)について<br>・平成14年度後学期教養科目任意開講科目(案)について<br>・平成15年度教養科目シラバスについて<br>・平成15年度非常勤講師時間配分(案)について<br>・平成15年度教養教育実施計画(案)について                                                     |     |
| 14. 11. 14 (木) | 大学教育研究開発センター運営委員会 (第7回)<br>・平成15年度教養教育実施計画(案)について<br>・平成15年度教養科目履修案内(案)について<br>・平成15年度教養科目シラバス(案)について<br>・平成14年度大学教育研究開発センター年報目次(案)について                                                                                                                         |     |
| 14. 11. 28 (木) | 平成14年度前学期大学教育研究開発センター推奨授業選定委員会                                                                                                                                                                                                                                  |     |
| 14. 12. 12 (木) | 平成14年度前学期大学教育研究開発センター推奨授業選定委員会                                                                                                                                                                                                                                  |     |
| 14. 12. 24 (木) | 平成14年度前学期大学教育研究開発センター推奨授業選定委員会                                                                                                                                                                                                                                  |     |

| 月 日                       | 事 項                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 備 考               |
|---------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------|
|                           | 大学教育研究開発センター運営委員会 (第8回)<br>・平成16年度教養教育基本方針 (案) について<br>・習熟度別英語教育導入によるプロジェクトの検討について<br>・平成14年度教養教育シンポジウム (案) 及びFD研究会について<br>・教養科目の公開講座化について<br>・後学期試験とスキー集中授業との重複問題の対応について                                                                                                                                                                                                                                                |                   |
| 15. 2. 5 (水)              | 大学教育研究開発センター推奨授業選定委員会<br>・推奨授業選定手順について                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |                   |
| 15. 2. 6 (木)              | 大学教育研究開発センター運営委員会 (第9回)<br>・平成16年度教養教育基本方針 (案) について<br>・平成14年度FD研究会開催 (案) について<br>・平成14年度前学期推奨授業の選定について<br>・推奨授業の選定手順について<br>・既修得単位認定 (成績評価) について<br>・教養科目の公開講座化について                                                                                                                                                                                                                                                     |                   |
| 15. 3. 6 (木)<br>～3. 7 (金) | 平成14年度教養教育FD研究会<br>(司会進行) 併任教官 足立農学部教授<br>・主催者挨拶 曾我センター長<br>・歓迎挨拶 松田農学部長<br>・学長挨拶 宮田学長<br>・話題提供<br>(1)FDに期待すること 横山副センター長<br>(2)茨城大学教養教育の課題確認 曾我センター長<br>(3)専門教育のFD 木村教育学部教授 前川工学部教授<br>黒田農学部助教授<br>・分科会<br>①専門部会におけるFDのあり方 (責任者・曾我センター長)<br>②授業評価アンケートの効果と教官へのフィードバック<br>(責任者・併任教官 増澤工学部教授)<br>③成績評価のあり方 (責任者・山根教育学部教授)<br>④すばらしい授業とは? (責任者・永井副センター長)<br>・特別講演「FDの進め方」 西頭徳三愛媛大学副学長<br>・全体討論会 (分科会報告、総合討論)<br>・閉会挨拶 池谷副学長 | 会場：農学部「こぶし<br>会館」 |
| 15. 3. 13 (木)             | 大学教育研究開発センター運営委員会 (第10回)<br>・平成15年度教養教育ガイダンス実施要領について<br>・平成15年度非常勤講師時間学長留置き分の配分について<br>・平成14年度後学期推奨授業の推薦について<br>・教養教育の改善改革について<br>・平成16年度教養教育基本方針 (案) について<br>・平成15年度教養教育に関する運営費 (案) について<br>・大学以外の教育施設等における単位の認定について                                                                                                                                                                                                    |                   |

# 大学教育研究開発センター関係委員名簿

【運営委員会委員】

- ◎ センター長 曾 我 日出夫（教育学部）
- 副センター長 永 井 典 子（人文学部）
- 副センター長 横 山 功 一（工学部）

| 区分           | 人文学部 | 教育学部  | 理学部  | 工学部            | 農学部     |
|--------------|------|-------|------|----------------|---------|
| 学部選出<br>併任教官 | 佐藤和夫 | 小野寺 淳 | 高野勝男 | 増澤 徹夫<br>堀井 龍夫 | 足立吉数    |
| 学部<br>教務委員長  | 飯塚和之 | 橋浦洋志  | 石塚俊久 | 岸 義 樹          | 小杉山 基 昭 |

【実施調整部教養科目専門部会委員】

- ◎ 実施調整部長 永 井 典 子

| 部会名       | 責任部局選出<br>併任教官 | 学部選出専門部会委員 |       |       |       |       |         |
|-----------|----------------|------------|-------|-------|-------|-------|---------|
|           |                | 人文学部       | 教育学部  | 理学部   | 工学部   | 農学部   | 留学生センター |
| 外国語科目     | ※糟谷 政和         | 西山 國雄      | 君塚 淳一 | 坪井 昌人 | 金野 満  | 白岩 雅和 | 石橋 玲子   |
| 健康・スポーツ科目 | ※加藤 敏弘         | 伊藤 哲司      | 勝本 真  | 遠藤 泰彦 | 戸恒 明  | 安江 健  |         |
| 情報関連科目    | ※鶴田 浩一         | 佐藤 英一      | 野崎 英明 | 岡田 誠  | 出崎 善久 | 中村耕二郎 |         |
| 人文科目      | ※植野 弘子         | 西野由希子      | 向野 康江 | 竹内 護  | 辻 龍介  | 久保山 勉 |         |
| 社会科目      | ※斎藤 義則         | 金 光男       | 大槻 功  | 吉田 龍生 | 小峯 秀雄 | 柏 雅之  |         |
| 自然科学科目    | ※井村 久則         | 鄭 基成       | 稲葉 健五 | 横沢 正芳 | 高橋 東之 | 戸嶋 浩明 |         |
| 総合科目      | ※木村 競          | 中田 潤       | 乾 康代  | 鈴木 博  | 太田 弘道 | 清水 浩  |         |

（注）※印は、当該専門部会の部会長を示す。

【研究開発部専門部会委員】

- ◎ 研究開発部長 横 山 功 一

| 人文学部 | 教育学部  | 理学部  | 工学部            | 農学部  |
|------|-------|------|----------------|------|
| 佐藤和夫 | 小野寺 淳 | 高野勝男 | 増澤 徹夫<br>堀井 龍夫 | 足立吉数 |

平成14年度大学教育研究開発センター年報 編集委員

増 澤 徹 (工 学 部・併任教官)  
植 野 弘 子 (人文学部・併任教官)  
曾 我 日出夫 (教育学部・センター長)  
永 井 典 子 (人文学部・副センター長)  
○横 山 功 一 (工 学 部・副センター長)

○印は、委員長を示す

|       |                      |
|-------|----------------------|
| 発刊年・月 | 2003年3月              |
| 発 刊   | 茨城大学大学教育研究開発センター     |
| 住 所   | 〒310-8512 水戸市文京2-1-1 |
| 電 話   | 029-228-8414         |
| F A X | 029-228-8499         |
| 印 刷 所 | いばらき印刷株式会社           |

Annual Review of  
the Center for Research and Development  
in University Education

No.7

2003 · March

IBARAKI UNIVERSITY

Center for Research and Development in University Education